新譯梵文佛典

金剛般若波羅蜜經

वज्रच्छेदिका

（四）

說　明

一、諸譯部共收集梵本及二十一種譯本。各個譯本皆由梵文直接翻譯而成。其中包括：新譯二種(意譯及直譯)；古漢譯七種；藏譯一種；日譯七種；英譯二種；法、德譯各一種。

二、梵本及各種譯本，統一依據昭明太子的分法分為三十二分，各分再依梵本文意分段，以便對照。

三、凡有歸敬偈者，一律置於第一分之前。

四、漢譯・笈多譯的譯法係依梵本原文的語順翻譯而成，故今依梵文文法加以標點，與中文語法有所不同，敬請注意。

五、將 Müller 譯本和 Harlez 譯本中梵文長音、反舌音、摩擦音的符號一律改成與梵本相同。

六、Conze 譯本未標出梵文長音、反舌音、摩擦音的符號。此處仿原書，不作更改。

七、日譯本中關於漢字部分，有時用新漢字取代舊漢字。阿滿得壽譯本中之片假名皆改為平假名。

八、所用梵本及各種譯本之版本、出處列記如下：

〔梵本〕

根據 Max Müller 編，*Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra*（Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, vol. I, part 1, 1881, pp. 19-46）羅馬字化而成，如實佛學研究室，1995。

〔新譯〕

許洋主譯：根據上列梵本作成意譯與直譯兩種，如實出版社，1995。

〔漢譯〕

1. 姚秦・羅什譯：大正藏第八册、頁七四八～七五二。
2. 元魏・流支譯：大正藏第八册、頁七五二～七五七。
3. 元魏・留支譯：大正藏第八册、頁七五七～七六一。
4. 陳・真諦譯：大正藏第八册、頁七六二～七六六。
5. 隋・笈多譯：大正藏第八册、頁七六六～七七一。
6. 唐・玄奘譯：《大般若波羅蜜多經》第五百七十七卷＜第九能斷金剛分＞大正藏第七册、頁九八〇～九八五。
7. 唐・義淨譯：大正藏第八册、頁七七一～七七五。

〔藏譯〕

智軍等譯：台北版西藏大藏經，No. 16。

〔日譯〕

1. 南條譯：《梵文金剛經講義》，東京：光融館，1909。
2. 阿滿譯：《梵文和譯能斷金剛般若波羅蜜多經》，京都：光壽會，1933。
3. 渡邊譯：＜金剛般若經＞，連載於《在家佛教》第三十號～第三十六號，1956 - 1957。
4. 宇井譯：＜金剛般若經和訳＞，《名古屋大學文學部研究論集》XXI，1958，pp. 1-55。
5. 長尾舊譯：＜金剛般若經＞，收錄於「大乘佛典」1《般若部經典》中，東京：中央公論社，1973，pp. 5 -71。
6. 中村譯：＜金剛般若經＞，收錄於《般若心經・金剛般若經》，東京：岩波書店，1993 年第 48 刷（1960 年第 1 刷），pp. 39-127。
7. 長尾新譯：＜金剛般若經＞，收錄於「世界の名著」2《大乘佛典》，東京：中央公論社，1993 年第 5 版（1978 年初版），pp. 67-82。

〔英譯〕

1. Müller 譯：*Buddhist Mahāyāna Sūtras*, SBE, vol. 49, pf. 2, 1894, pp. 111-144.
2. Conze 譯：*Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, Serie Orientale Roma XIII Roma, Is, M. E. O., 1957.

〔法譯〕

Harlez 譯：*Journal Asiatique*, 8 item serie, tome 18, 1891, pp. 440-509.

〔德譯〕

Walleser 譯：*Prajñāpāramitā*, Die Volkommenheit der Erkenntnis, 1914, S. 140-158.

目　錄

五、日譯

南條文雄譯 1

阿滿得壽譯 57

渡邊照宏譯 113

宇井伯壽譯 179

長尾雅人舊譯 245

中村元譯 315

長尾雅人新譯 381

六、英譯

Müller 譯 421

Conze 譯 487

七、法譯

Harlez 譯 551

八、德譯

Walleser 譯 619

能く金剛を断ずる

(般若波羅密多の法門を説ける経) は (下の如し)。

南條文雄　譯

１９０９

具福智なる聖智成満に帰命す

法會因由分第一

１－１
是の如く我に由りて聞かれたり。一時世尊は室羅伐悉底（国）の逝多の林、無主摶食施与者の園に於て、苾芻の大衆、（即ち）千二百五十の苾芻と、及び衆多の大覚有情と倶に住したまひき。

１－２
其時世尊は午前の分時に著衣して、鉢と上絡衣とを持ち、摶食を得ん為めに室羅伐悉底大城に入りたまひき。

１－３
其時世尊は摶食を得ん為めに室羅伐悉底大城に行きて、食事を作したまひき、（即ち）行乞より還りて飯食の後、鉢と上絡衣とを収め、両足を洗ひ、実に施設せられたる座に跏趺を結び、端身正念に住して坐したまひき。

１－４
其時、衆多の苾芻は世尊の在します所に詣りき。到り了りて世尊の両足を頂礼し、世尊を右遶三匝して、一面に坐しき。

善現起請分第二

２－１
其時又具寿なる須菩提は其会に来りて坐したりき。

２－２
其時具寿なる須菩提は座より起ち、一肩へ上著衣を置き、右膝輪を地に著け、世尊の在します所へ合掌を向けて、世尊に白して言さく。

２－３
希有なり世尊、最勝希有なり善逝、乃至実に如来応供正等覚者は最勝なる摂受を以て諸大覚有情を摂受したまへり。

２－４
希有なり世尊、乃至実に如来応供正等覚者は最勝なる付嘱を以て諸大覚有情に付嘱したまへり。

２－５
世尊よ、覚有情乗に発趣したる善家男子或は善家女子は云何に住し、云何に修行し、云何に心を摂すべきや。

２－６
是の如く言へる時、世尊は具寿なる須菩提に告げて言はく、善哉、善哉、須菩提よ、此は是の如し、須菩提よ、此は是の如し、汝の言ふが如し。如来は最勝なる摂受を以て諸大覚有情を摂受したまへ

り、如来は最勝なる付嘱を以て諸大覚有情に付嘱したまへり。

２－７

故に、須菩提よ、善く諦かに聴き、思念せよ。我は汝の為めに、覚有情乗に発趣したる者に由りて是の如く住し、是の如く修行し、是の如く心を摂伏すべきことを説くべし。

２－８

世尊よ、是の如くあれと具寿なる須菩提は世尊へ対したてまつりき。

大乘正宗分第三

３－１

世尊は彼に告げて言はく。須菩提よ、こゝに覚有情乗に発趣したる者は是の如く発心すべきなり、須菩提よ、有情界に於て有情摂に摂せられたる有らゆる諸有情は、若は卵生、若は胎生、若は湿生、若は化生、若は有色、若は無色、若は有想、若は無想、若は非想非非想、乃至施設せられつゝある或る有情界の施設せられんに、我は一切彼等を無餘依滅度界に滅度せしむべきなり（と）。

３－２

是の如く無量の諸有情をも滅度せしめて、滅度せしめられたる一有情も有ること無し。

３－３

其故は、須菩提よ、若し覚有情に有情想転起せば、彼は覚有情と名づくべからざればなり。

３－４

其故は、須菩提よ、有情想転起し、或は寿者想、或は士夫想転起する所の彼は覚有情と名づくべからざればなり。

妙行無住分第四

４－１
然れども時に又、須菩提よ、覚有情は事に住して布施を行ずべからず、或る処に住して布施を行ずべからず、色に住して布施を行ずべからず、声香味触法に住して布施を行ずべからず。

４－２
須菩提よ、大覚有情は、相の想にも住せざる如く、是の如く実に布施を行ずべきなり。

４－３
其故は、須菩提よ、住する所なき所の覚有情が布施を行ずるならば、須菩提よ、彼（菩薩）の福聚の量を取ることは作し易からざるなり。

４－４
須菩提、汝は云何に思ふや、東方の虚空の量を取ることは作し易きや。

４－５
須菩提言さく、世尊、此れ実に否なり。

４－６
世尊言はく、是の如く南西北上下順方不正方の十方の虚空の量を取ることは作し易きや。

４－７

須菩提言さく、世尊、此れ実に否なり。

４－８

世尊は言はく、是の如く実に、須菩提よ、住する所なき所の覚有情が布施を行ずるならば、須菩提よ、彼の福聚の量を取ることは作し易からざるなり。

４－９

須菩提よ、覚有情乗に発趣したる者は、相の想にも住せざる如く、是の如く実に布施を行ずべきなり。

如理實見分第五

５－１

須菩提、汝は云何に思ふや、相具足を以て如来を見るべきや。

５－２

須菩提言さく、世尊、此れ実に否なり、相具足を以て如来を見るべからず、其故は、世尊、如来の相具足と説きたまふ所の者は非相具足なればなり。

５－３

是の如く言へる時、世尊は具寿なる須菩提に告げて言はく、須菩提、有らゆる相具足は有らゆる虚空なり、有らゆる非相具足は有らゆる非虚妄なりと、実に相非相を以て如来を見るべきなり。

正信希有分第六

６－１

是の如く言へる時、具寿なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊、実に未来世、後分、後時、後百歳、正法破滅の時の転起せんに、此等所説の諸経典の句に於て、実の想を生ずべき諸有情あるべきや。

６－２

世尊言はく、須菩提、汝是の如く言ふこと勿れ、実に未来世、後分、後時、後五百歳、正法破滅の転起せんに、此等所説の諸経典の句に於て、実の想を生ずべき諸有情あるべきや（と）。

６－３

然れども、須菩提、未来世、後分、後時、後五百歳、正法破滅の転起せんに、此等所説の諸経典の句に於て、実の想を生ずべき、徳と戒と慧とを具せる諸大覚あるべきなり。

６－４

又、須菩提、彼諸大覚情は一仏に親近したる者にも、一仏の所に於て善根を種植したる者にも非ざるべし、然れども、須菩提、彼諸覚有情は非一百千仏親近したる者、非一百千仏の所に於て善根を種植したる者にして、此等所説の諸経典の句に於て、一念の浄信をも得べきなり。

６－５

須菩提よ、如来は仏智を以て彼等を知る。須菩提よ、如来は仏眼を

以て彼等を見る。須菩提よ、如来は彼等を覚とる。

６－６
須菩提よ、一切彼等は無量無数の福聚を生じ、之を取るべし。

６－７
其故は、須菩提よ、彼諸大覚有情には、我想転ずる無く、有情想、寿者想、人想転ずる無く、

６－８
須菩提よ、彼諸大覚有情には亦法想転ずる無く、是の如く非法想も無く、須菩提よ、彼等には亦想も非想も転ずる無ければなり。

６－９
其故は、須菩提よ、若し彼諸大覚有情に法想転起せば、彼等に実に我執あるべく、有情執、寿者執、人執あるべし。

６－１０
若し非法想転起せば、彼等に実に我執、有情執、寿者執人執あるべしとなり。

６－１１
其故は、時に又、須菩提よ、大覚有情は法非法を取るべからざればなり。

６－１２
其故に、如来は密意を以て此説を説く。筏喩法門を知る者は諸法をも捨つべし、況んや実に諸非法をやとなり。

無得無説分第七

７－１

復た次に、世尊は、具寿なる須菩提に告げて言はく、須菩提、汝は云何に思ふや、如来所証の無上正等覚なる一法、或は如来所説の一法ありや。

７－２

是の如く言へる時、具寿なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊、我が世尊所説の義を解する如きは、如来所証の無上正等覚なる一法あらず、如来所説の一法あらず。

７－３

其故は、如来所証或は所説の法は不可取不可説なればなり。彼は法にも非ず、非法にも非ず。

７－４

其故は、諸聖人は実に無為所顕現なればなり。

依法出生分第八

８－１
世尊は言いき、須菩提、汝は云何に思ふや、若し善家男子或は善家女子ありて、此三千大千世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せんに、須菩提、其善家男子或は善家女子は此の因縁に由りて多く福聚を生ぜんか。

８－２
須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、其善家男子或は善家女子は此の因縁に由りて福聚を生ぜん。

８－３
其故は、世尊、如来所説の福聚は、如来所説の非福聚なればなり。是故に如来は福聚、福聚と説きたまふ。

８－４
世尊は言ひき、時に復た須菩提、若し善家男子或は善家女子ありて、此三千大千世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せん、又、人ありて、此法門より乃至四句の伽陀をも取りて広く他人に宣説開示せんに、此（後なる）人は実に此因縁に由りて尚多く無量無数の福聚を生ぜん。

８－５
其故は、須菩提、諸如来応供正等覚者の無上正等覚は此より生じ、又諸覚者世尊も此れより生ずればなり。

８－６

其故は、須菩提、諸覚者法、諸覚者法とは、実に如来所説の諸非覚者法なればなり。是故に諸覚者法と名づくるなり。

一相無相分第九

9－1
須菩提、汝は云何に思ふや、時に亦預流者には、我れ預流果を得たりと云ふが如き（念）ありや。

9－2
須菩提言さく、世尊、此れ実に然らず。預流者には、我れ預流果を得たりと云ふが如き（念）あること無し。其故は、世尊、彼は実に或る（一）法へも入りたること無ければなり。其故に預流者と名づくるなり。色声香味触法へも入りたること無し。是故に預流者と名づくるなり。

9－3
世尊、若し預流者に、我れ預流果を得たりと云ふが如き（念）あらば、彼に実に我執、有情執、寿執、人執あるべければなりと。

9－4
世尊言はく、須菩提、汝は云何に思うふや、時に亦一來者には、我れ一來果を得たりと云ふが如き（念）ありや。

9－5
須菩提言さく、世尊、此れ實に然らず、一來者には、我れ一來果を得たりと云ふが如き（念）あること無し。其故は、一來性へ入りたりとする或る（一）法も無ければなり。是故に一來者と名づくるなり。

９－６

世尊言はく、須菩提、汝は云何に思ふや、時に亦不還者には、我れ不還果を得たりと云ふが如き（念）ありや。

９－７

須菩提言さく、世尊、此れ實に、然らず、不還者には、我れ不還果を得たりと云ふが如き（念）あること無し。其故は、世尊、不還性へ入りたりとする或る（一）法も無ければなり。是故に不還者と名づくるなり。

９－８

世尊言はく、須菩提、汝は云何に思ふや、時に亦阿羅漢には我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）ありや。

９－９

須菩提言さく、世尊、此れ實に然らず、阿羅漢には、我阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あること無し。其故は、阿羅漢と名くる或は（一）法も無ければなり。是故に阿羅漢と名くるなり。

９－１０

世尊、若し阿羅漢に、我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あらば、彼に、實に我執、有情執、壽執、人執あるべければなり。

９－１１

其故は、世尊、如来応供正等覺は、我を諸無諍住者中の最勝者なりと説きたまへり。

９－１２

世尊、我は阿羅漢なり、離欲者なり。世尊、我には、我は阿羅漢な

り、離欲者なりと云ふが如き（念）あることなし。世尊、若し我に、我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あらば、如来は、善家男子須菩提は諸無諍住者中最勝なる者にして、何の處にも住せず、是故に無諍住者、無諍住者と名づくると、我に授記したまはざるべければなり。

莊嚴淨土分第十

１０－１

世尊言はく、須菩提、汝は云何に思ふや、如来が、然燈如来応供正等覺者の所より取りたる所の或る（一）法ありや。

１０－２

須菩提言さく、世尊、此れは實に然らず、如来が、然燈如来応供正等覺者の所より取りたまひたる所の或る（一）法もあることなし。

１０－３

世尊言はく、須菩提、若し覺有情ありて、我は國土の莊嚴を成就すべしと言はゞ、彼は非實なることを言ふなり。其故は、須菩提、國土の莊嚴、國土の莊嚴とは、如来は非莊嚴と説けばなり、是の故に國土の莊嚴と説かるゝなり。

１０－４

須菩提、是故に今大覺情は或る處にも色にも聲香味觸法にも住することなくして心を生ずべきが如く、是の如く住する所なくして心を生ずべきなり。

１０－５

須菩提、若し大身を具する人ありて、其自體は妙高山王の如き者あらば、須菩提、汝は云何に思ふや、自體亦實に大なりとせんや。

１０－６

須菩提言さく、世尊、彼は大なり、善逝、彼自體は大なるべし。其故は、世尊、自體、自體とは如来は非體と説きたまへばなり。是の故に自體と説かるゝなり。世尊、彼は実に體に非ず、非體に非ざればなり。是の故に自體と説かるゝなり。

無為福勝分第十一

１１－１
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、諸恒伽大河に在る所の沙の如き諸恒伽あらんに、其（河）中に（在る所の）沙は多かるべきや。

１１－２
須菩提言さく、世尊、其有らゆる諸恒伽河は實に多し、況んや其諸恒伽河中の沙をや。

１１－３
世尊は言はく、須菩提、我汝に告げ、我汝に開覺す、若し女子或は男子ありて、諸恒伽河中の沙の如きあらゆる世界に七宝を、充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せんに、須菩提、云何に汝は思ふや、其女子或は男子は此の因縁に由りて多く福聚を生ずべきや。

１１－１４
須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、其女或は男は此の因縁に由りて無量無数の福聚を生ぜん。

１１－５
世尊言はく、時に復た、須菩提、若し女或は男ありて、あらゆる世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せん、又若し善家男子或は善家女子ありて、此法門より乃至四句の伽陀をもとりて、他人に宣説開示せんに、此（後なる人）は實に此因縁に由りて尚多く無量無数の福聚を生ぜん。

尊重正教分第十二

１２－１

然れども時に又、須菩提、其地方に於て、此法門より乃至四句の伽陀を取りて、説話或は広説せんに、其地方は天人阿修羅の世間の為めの真の霊廟なり、何んぞ況んや、彼等は此具足せる法門を受持読誦し、又他人の為めに宣説するに於てをや。須菩提、彼等は最勝希有を具足すべし。

１２－２

又須菩提、其地方に於て師は住し、或は次第せる賢師の住處（と云ふべき）なり。

如法受持分第十三

１３－１
是の如く言へる時、具壽なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊、此法門の名は如何、又如何に此を持つべきや。

１３－２
是の如く言へる時、世尊は具壽なる須菩提に告げて言はく、須菩提、此法門は智成満と名く、是の如く又此を持つべし、

１３－３
其故は、如来所説の智成満は如来所説の非智成満なればなり、是故に智成満と説かるゝなり。

１３－４
須菩提、汝は云何思ふや、時に亦如来所説の一法ありや。

１３－５
須菩提言さく、否、世尊、如來所説の一法あるなし。

１３－６
世尊は言ひき、須菩提、云何に汝は思ふや、乃至三千大千世界に於ける地塵は其時多かるべきや。

１３－７
須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、地塵はあるべし、其故は、世

尊、如来所説の地塵は、世尊、如来所説の非塵なればなり、此故に地塵と説かるゝなり、

１３－８
如来所説の世界も亦如来所説の非界なり、是故に世界と説かるゝなり。

１３－９
世尊は言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来応供正等覚者は三十二大人相を以て見るべきや。

１３－１０
須菩提言さく、否、世尊、如来応供正等覚者は三十二大人相を以て見るべからず、

１３－１１
其故は、世尊、如来所説の三十二大人相は、世尊、如来所説の非相なればなり、是故に三十二大人相と説かるゝなり。

１３－１２
世尊は云ひき、須菩提、或は男子或は女子ありて、日々恒伽沙に等しき自我の身体を捨てん、是の如く捨てつゝ、恒伽沙に等しき劫波の間だ、其自我の身体を捨つる者あらん、又此法門より乃至四句の伽陀をも受けて、他人の為めに宣説開示するものあらん、此後なるものは此因縁によりて尚多く無量無数の福聚を生ぜん。

離相寂滅分第十四

１４－１
其時具壽なる須菩提は法の威力に由りて涙を灑ぎき、彼は涙を拭ひて、世尊に白して言さく、

１４－２
希有なり世尊、最勝希有なり善逝、此の世尊所説の法門は最上乗最勝乗に発趣したる諸有情の為めなり、世尊、我が智は此れより生ぜり、

１４－３
世尊、我は曾て是の如き法門を聞きたること無し。最勝希有を具足せる諸覺有情は所説の経を聞きて實想を生ずべし、

１４－４
其故は、世尊、實想は實に非實想なればなり、是故に如来は實想、實想と説きたまふ。

１４－５
世尊、我れ此所説の法門を受持信解する時、我に就て希有なること無し。

１４－６
世尊、亦未来世、後分、後時、後五百歳正法破滅の時の転起せんに、世尊、此法門を受持読誦し、又広く他人の為めに宣説する所の諸有

情あらば、彼等は最勝希有を具足すべし。

１４－７

然れども、世尊、彼等の我想は転ずべからず、有情想も壽者想も人想も転ずべからず、彼等の想も非想も転ぜざるなり。

１４－８

其故は、世尊、我想は實に非想なり、有情想、壽者想、人想も實に非想なればなり。

１４－９

其故は、諸覺者世尊は一切想を遠離したればなり。

１４－１０

是の如き言へる時、世尊は具壽なる須菩提に告げて言はく、須菩提、此は是の如し、此は是の如し、須菩提、此經の説かれたる時、驚かず、怖れず、畏れざる所の彼諸有情は最勝の希有を具足すべし、其故は、須菩提、如来所説の最勝成満は亦非成満なり、又須菩提、如来所説の最勝成満は彼無量の諸覺者世尊の所説なればなり、是故に最勝希有と説かるゝなり。

１４－１１

然れども復た、須菩提、如来の忍辱成満は實に非成満なり、

１４－１２

其故は、順菩提、歌林我王我が支體の肉を割截せし時、其時我に我想、有情想、壽者想、人想も或る想も非想も有らざりき、

１４－１３

其故は、須菩提、若し其時我に我想ありしならば、瞋恨想も亦有りしならん、若し有情想、壽者想、人想ありしならば、我に瞋恨想もありしならんなればなり。

１４－１４

其故は、須菩提、我れ過去世五百生の間忍語仙人たりし時、我に我想、有情想、壽者想、人想なかりしことを念知すればなり。是故に今、須菩提、大覺有情は一切を捨離して、無上正等覚に発心すべし、色に住して、発心すべからず、聲香味觸法に住して発心すべからず、法に住して発心すべからず、非法に住して発心すべからず。或る處に住して発心すべからず。

１４－１５

其故は、所住は、實に非所住なればなり。是故に如来は説きたまふ、覺有情は無住にして布施を行ずべし、色聲香味觸法に住せずして布施を行ずべし（と）。

１４－１６

然れども復た、須菩提、覺有情は一切有情の義利の為めに是の如き施捨を作すべきなり。其故は、須菩提、有情想は非想なればなり。是の如く如来所説の一切有情は非有情なり。

１４－１７

其故は、須菩提、如来は真語者なり、諦語者なり、如語者なり。如来は不異語者にして、不如語者に非ざればなり。

１４－１８

然れども復た、須菩提、如来所証所説所思惟の法は實に非ず、虚に

非ず、

１４－１９

須菩提、譬へば闇に入りたる人の何物をも見ざるが如く、事に堕して布施を行する覺有情も亦是の如し、

須菩提、譬へば明かにして太陽の昇りたる時は、具眼の人は種々の色を見ることを得るが如く、事に堕せずして布施を行ずる覺有情も亦是の如し。

１４－２０

然れども復た、須菩提、此の法門を受持読誦し、及び他人の為めに広く分別解説する所の諸善家男子、或は諸善家女子あらんに、須菩提、如来は覺者智を以て彼等を知りたまひ、須菩提、如来は覺者眼を以て彼等を見たまひ、如来は彼等を知りたまふ。須菩提、彼等一切有情は無量無数の福聚を生じ且つ受持すべし。

持經功德分第十五

１５－１

時に復た、須菩提、或は女或は丈夫ありて、午前の分時に恒伽河沙に等しき自我の身体を捨てん、是の如く日中の分時にも恒伽河沙に等しき自我の身体を捨てん、午後の分時にも恒伽河沙に等しき自我の身体を捨てん、此縁に由りて百千億尼由他劫波の間だに、多き自我の身体を捨てん、又此法門を聞きて捨てざる者あらん、此の後なる者は此の因縁に由りて尚多く無量無数の福聚を生ぜん、何に況んや之を書き写して受持読誦し、又他人の為めに広く開示せん者に於てをや。

１５－２

然れども復た、須菩提、此法門は不可思議なり、無比なり、又、須菩提、如来は最上乗に発趣したる諸有情の義利の為め、最勝乗に発趣したる諸有情の義利の為めに此法門を説きたまひき。此法門を受持読誦し、又他人の為めに広く開示する彼等を、須菩提、如来は覺者智を以て知りたまひ、須菩提、如来は覺者眼を見たまひ、如来は彼等を知りたまふなり。須菩提、彼一切有情は無量の福聚を具足し、不可思議無比不可量不可計の福聚を具足すべし。

１５－３

須菩提、彼一切有情は等分に覺を持ち読誦すべし、其故は、須菩提、小信解の有情、我見者、有情見者、壽者見者、人見者は此の門を聞くこと能はず、覺有情智無き有情は此法門を聞き、或は受持読誦すること能はず、此の理は知られざればなり。

１５－４

然れども、須菩提、此の経の開示せらるゝ地方あらば、其地方は天人阿修羅を有せる世間に供養せられ、其地方は礼拝せられ、又右繞せられ、其地方は霊廟の如くなるべし。

能淨業障分第十六

１６－１

然れども、須菩提、或は諸善家男子、或は諸善家女子ありて、是の如き諸経典を受持読誦し、全く之を念し、又他人の為めに広く開示すべきも、彼等は軽賤せられ、極めて軽賤せらるゝこと有るべし、

１６－２

其故は、須菩提、彼等の悪趣に堕すべき前生の所作なる不善の諸業あらんに、現前法に於て、此軽賤を以て其前生の不善の諸業を消滅し、又仏道を随得すべければなり。

１６－３

須菩提、我は記憶す、過去世無数尚無数劫に燈作如来応供正等覚者の後尚後に、八十四百千億尼由他の諸覺者ましましき、我は其覺者を楽ましめき、已に楽しましめて、勃らざりき。

１６－４

若し又、須菩提、我は其諸覺者世尊を楽しましめき、已に楽しましめて、勃らざりき、（然るに）若し又後分、後時、後五百歳正法破滅時転起せんに、此等の是の如き諸経典を受持読誦し、又他人の為めに広く開示せん者あらんに、其時又須菩提、彼の前者の福聚は此（後者）の福聚の近く第一百分にも、第一千分にも、第百千分、第一億分にも、第百億分にも、第百千億分にも、第百千億尼由他分にも達せず、数にも、計にも、算にも、喩にも、近にも、乃至、譬喩にも及ばざるなり。

１６－５

若し又、須菩提、我れ彼等諸善家男子或は諸善家女子の福聚と、乃至其諸善家男子、或は諸善家女子が其時生じ且つ持つべき福聚とを説かば、諸有情は狂乱を得て、我は心散乱に達すべきなり。

１６－６

然れども又、須菩提、此如来所説の法門は不可思議無比なり、其異熟（果）も亦不可思議なりと観察すべきなり。

究竟無我分第十七

１７－１
其時具壽なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊よ、覺有情乘に発趣したる者は云何に住し、云何に修行し、云何に発心すべきや。

１７－２
世尊言はく、須菩提よ、こゝに覺有情乘に発趣したる者は是の如く発心すべきなり、我は一切有情を無餘依滅度界に於て滅度せしむべきなり（と）。

１７－３
又是の如く諸有情を滅度せしめて、滅度せしめられたる一有情も有ることなし。

１７－４
其故は、須菩提よ、若し覺有情に有情想転起せば、彼は覺有情と名づくべからず、或は壽者想、乃至、或は人想転起せば彼は覺有情と名づくべからざればなり。

１７－５
其故は、須菩提よ、覺有情に発趣したると名づくる所の一法も有ること無ければなり。

１７－６
須菩提、云何に汝は思ふや、如来が燈作如来の所より無上なる正等

覚を証得せる一法ありや。

１７－７

是の如く言へる時、具壽なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊、我が如来所説の義を知るが如きは、世尊、如来が燈作如来応供正等覚者の所より無上なる正等覚を証得したまへる一法も有ること無し。

１７－８

是の如く言へる時、世尊は具壽なる須菩提に告げて言はく、須菩提、此は是の如し、此は是の如し、須菩提、如来が燈作如来応供正等覚者の所より無上なる正等覚を証得せる一法も有ること無し。

１７－９

須菩提、若し復た如来所証の一法ありしならば、証作如来は、汝行者よ、未来世に釋迦牟尼と名づくる如来応供正等覚者たるべしと、我に授記したまはざりしなるべし。

１７－１０

須菩提、今如来応供正等覚者が無上なる正等覚を証得せる一法も有ること無きが故に、我は燈作如来に由りて、汝行者よ、未来世に釋迦牟尼と名づくる如来応供正等覚者たるべしと授記せられたり。

１７－１１

其故は、須菩提、如来とは、此は真如性の義なり、須菩提、如来とは、此は無生法性の義なり、須菩提、如来とは、此は法断の義なり、須菩提、如来とは畢竟不生の義なればなり。其故は、須菩提、此不生は最勝義なればなり、

１７－１２
須菩提、若し是の如く如来応供正等覚者は無上なる正等覚を証得すと言ふ者あらば、須菩提、彼は不如實を言ひ、彼は不實執を以て我を謗る者なり、

１７－１３
其故は、須菩提、如来が無上なる正等覚を証得せる一法も有ること無ければなり、

１７－１４
須菩提、如来の所証或は所説の法は、其中に實なし虚なし。是故に如来は一切諸法を諸覺法なりと説く。

１７－１５
其故は、須菩提、一切諸法とは如来所説の諸非法なればなり、是故に一切諸法をば諸覺者法と名づくるなり。

１７－１６
須菩提、譬へば具身大身なる人あらんが如し、

１７－１７
具壽なる須菩提言さく、世尊、如来所説の具身大身者なる人は、世尊、如来所説の非身者なればなり、是故に具身大身者と名づくるなり。

１７－１８
世尊言はく、此れは是の如し、須菩提、我は諸有情を滅度せしむべしと言ふ所の覺有情あらば、彼は覺有情とは言ふべからず、其故は、須菩提、覺有情と名づくる所の或る法はありや、

１７－１９

須菩提言さく、此は實に否なり、世尊、覺有情と名づくる所の或る法はあらざるなり、

１７－２０

世尊言はく、須菩提、諸有情、諸有情とは、如来所説の諸非有情なり、是故に諸有情と名づくるなり。是故に如来は一切諸法は非我なり、非壽者なり、非長養なり、一切諸法は非人なりと説きたまふ。

１７－２１

須菩提、我は諸国土莊嚴を成就すべしと言ふ所の覺有情あらば、彼は虚を言ふものなり、其故は、須菩提、諸国土莊嚴、諸国土莊嚴とは、如来所説の諸非莊嚴なればなり、是故に諸国土莊嚴と名づくるなり。

１７－２２

須菩提、諸法無我、諸法無我と信解する所の覺有情は如来応供正等覚者所説の大覺有情なり。

一體同觀分第十八

１８－１
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来に肉眼ありや、

１８－２
須菩提言さく、是の如し、世尊、如来に肉眼あり、

１８－３
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来に天眼ありや、

１８－４
須菩提言さく、是の如し、世尊、如来に天眼あり、

１８－５
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来に慧眼ありや、

１８－６
須菩提言さく、是の如し、世尊、如来に慧眼あり。

１８－７
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来に法眼ありや、

１８－８
須菩提言さく、是の如し、世尊、如来に法眼あり。

１８－９
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、如来に覺者眼ありや、

１８－１０
須菩提言さく、是の如し、世尊、如来に覺者眼あり。

１８－１１
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、恒伽大河に彼の如き多くの沙あるも、如来は之を沙なりと説きたまふや、

１８－１２
須菩提言さく、是の如し、世尊、是の如し、善逝、如来は之を沙なりと説きたまふ、

１８－１３
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、恒伽大河に彼の如き多くの沙あり、其の如き多くの恒伽河あらん、其中にも彼の如き多くの沙あらん、而して其の如き多くの世界あらん、其等の世界は云何に多かるべきや、

１８－１４
須菩提言さく、是の如し、世尊、是の如し、善逝、其等の世界は多かるべきなり、

１８－１５
世尊言はく、須菩提、其等の世界に於て、其等の如き諸有情あらんに、我は彼等の種々の心の流注を知る、

１８－１６
其故は、須菩提、心の流注、心の流注とは、如来所説の非流注なれ

ばなり。是故に心の流注と名づくるなり。

１８－１７

其故は、須菩提、過去の心は得られず、未来の心は得られず、現在の心は得られざればなり。

法界通化分第十九

１９－１

須菩提、云何に汝は思ふや、若し善家男子或は善家女子ありて、此三千大千世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せんに、實に亦其善家男子或は善家女子は此の因縁に由りて多く福聚を生ぜんか、

１９－２

須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、

１９－３

世尊言はく、此れは是の如し、須菩提、此れは是の如し、其善家男子或は善家女子は此の因縁に由りて多く無量無数の福聚を生ぜん、

１９－４

其故は、須菩提、福聚、福聚とは、如来所説の非（福）聚なればなり、是故に福聚と名づくるなり、

１９－５

須菩提、若し復た福聚ありしならば、如来は福聚福聚とは説きたまはざりしなるべし。

離色離相分第二十

２０－１
須菩提、云何に汝は思ふや、色身成就を以て如来を見るべきや、

２０－２
須菩提言さく、世尊、此れ實に否なり、色身成就を以て如来を見るべからず、

２０－３
其故は、世尊、色身成就、色身成就とは如来所説の非成就なればなり、是故に色身成就と名づくるなり。

２０－４
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、相具足を以て如来を見るべきや、

２０－５
須菩提言さく、此れ實に否なり、世尊、相具足を以て如来を見るべからず、

２０－６
其故は、世尊、如来所説の相具足は如来所説の非相具足なればなり、是故に相具足と名づくるなり。

非説所説分第二十一

２１－１
世尊言はく、須菩提、云何に汝は思ふや、實に亦如来は、我れ法を説くと云ふが如き（念）ありや、

２１－２
須菩提言さく、此れは實に否なり、世尊、如来は我れ法を説くと云ふが如き（念）あらざるなり、

２１－３
世尊言はく、須菩提、如来は法を説くと云ふが如く言ふ者あらば、須菩提、彼は不如實を言ひ、不實執を以て我を謗る者なり、

２１－４
其故は、須菩提、法説、法説とは法説と名づけて得べき或る（一）法あらざればなり。

２１－５
是の如く言へる時、具壽なる須菩提は世尊に白して言さく、世尊、實に未来世、後分、後時、後五百歳、正法破滅の時の転起せんに、此等の諸法を聞きて信ずべき諸有情あるべきや。

２１－６
世尊言はく、須菩提、彼等は有情にも非ず、非有情にも非ざるなり、

２１－７

其故は、須菩提、諸有情、諸有情とは、須菩提、一切彼等は如来所説の諸非有情なればなり。是故に諸有情と名づくなり。

無法可得分第二十二

２２－１

須菩提、云何に汝は思ふや、亦實に如来所証の無上なる正等覚たる或る（一）法ありや、

２２－２

具壽なる須菩提言さく、此れは實に否なり、世尊、如来所証の無上なる正等覚たる或る（一）法あらざるなり、

２２－３

世尊言はく、是の如し、是の如し、須菩提、亦知るべく得べき少法無きなり、是故に無上なる正等覚と名づくるなり。

淨心行善分第二十三

２３－１

時に復た、須菩提、法は平等なり、其中に或る不平等なし、是故に無上なる正等覚と名づくるなり、

２３－２

其無上なる正等覚は無我性、無有情性、無壽者性、無人性と平等なり、一切諸善法を以て証得するなり、

２３－３

其故は、須菩提、諸善法、諸善法とは實に如来所説の諸非法なり、是故に諸善法と名づくるなり。

福智無比分第二十四

２４－１

若し又、須菩提、若しは女、若しは男ありて、三千大千世界の諸妙高山王の如き七宝の諸聚を持ちて諸如来応供正等覚者に布施せん（然るに）若し又若しは善家男子、若しは善家女子ありて、智成満法門より少なくとも四句の頌を取りて、他人の為めに説示せんに、須菩提、彼の前者の福聚は此（後者）の福聚の第一百分にも達せず、乃至近（分）にも及ばるなり。

化無所化分第二十五

２５－１
須菩提、云何に汝は思ふや、實に亦如来は我れ諸有情を解脱せしむと云ふが如き（念）ありや、

２５－２
時に又、須菩提、是の如く見ること勿れ、其故は、須菩提、如来所解脱の一有情もあること無ければなり、

２５－３
若し又、須菩提、如来所解脱の一有情も有りしならば、如来に我執ありしなるべし、有情執、壽者執、人執ありしなるべし、

２５－４
須菩提、我執とは如来所説の非執なり、而して諸小児異生の所執なり、

２５－５
須菩提、諸小児異生は如来所説の諸非生なり、是故に諸小児異生と説かるゝなり。

法身非相分第二十六

２６－１
須菩提、云何に汝は思ふや、相具足を以て如来を見るべきや、

２６－２
須菩提言さく、此れは實に否なり、世尊、我が世尊所説の義を知るが如きは、相具足を以て如来を見るべからざるなり、

２６－３
世尊言はく、善哉、善哉、須菩提、是の如し、須菩提、是の如し、汝の言ふが如し、相具足を以て如来を見るべからず、

２６－４
其故は、須菩提、若し復た相具足を以て如来を見るべきことありしならば、転輪王も亦如来たりしなるべければなり、是故に相具足を以て如来を見るべからざるなり、

２６－５
具壽なる須菩提は世尊に白して言さく、我が世尊所説の義を知るが如きは、相具足を以て如来を見るべからざるなり。

２６－６
其時世尊二頌を説きたまはく。

若しは色を以て我を見しか、
若しは音声を以て我を求めし、
彼等邪断を行ずる諸人は
我を見ざるべきなり。　　右第一頌。

法に由りて覺者を見るべし、
諸導師は實に法身なればなり、
而して其法性は知るべからず、
又知らしむること能はず。　　右第二頌。

無斷無滅分第二十七

２７－１

須菩提、云何に汝は思ふや、相具足を以て如来は無上なる正等覚を証得したまひたるや、

２７－２

時に又、須菩提、汝是の如く見ること勿れ、其故は、須菩提、相具足を以て如来は無上なる正等覚を証得したまひ得ざればなり、

２７－３

時に又、須菩提、誰か汝に、諸の覺有情乘に発趣したる者は或る法の破滅或は斷を施設すと云ふが如く言はんか、

２７－４

時に復た、須菩提、汝是の如く見ること勿れ、其故は、諸の覺有情乘に発趣したる者は或る法の破滅或は斷を施設せざればなり。

不受不貪分第二十八

２８－１

若し又、須菩提、善家男子或は善家女子ありて、恒伽河沙に等しき諸世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せん、(然るに)若し又覺有情ありて、無我不生の諸法に於て忍を得んに、此（覺有情）は此の因縁に由りて尚多き無量無数の福聚を生ぜん、時に又、須菩提、大覺有情は福聚を摂受せざるべきなり、

２８－２

具壽なる須菩提言さく、世尊、覺有情は福聚を摂受せざるべきか、

２８－３

世尊言はく、須菩提、摂受すべく、摂受せざるべきなり、是故に摂受すべしと名づくるなり。

威儀寂靜分第二十九

２９－１

然れども、須菩提、若し人ありて如来は或は行き、或は来り、或は住し、或は如法に臥床に在りと言はゞ、須菩提、彼は我が所説の義を知らざるなり、

２９－２

其故は、須菩提、如来とは何處へ行きしとも無く何處より来りしとも無しと説かるればなり。是故に如来応供正等覚者と名づくるなり。

一合離相分第三十

３０－１

又、須菩提、善家男子或は善家女子ありて、三千大千世界に彼の如き諸の地塵あり、其（地塵）の如き諸世界を乃至無数の精進（力）を以て極微聚の如き墨粉に作さんに、須菩提、云何に汝は思ふや、其極微聚は亦實に多かるべきや、

３０－２

須菩提言さく、是の如し、世尊、是の如く、善逝、其極微聚は多かるべきなり、其故は、世尊、若し極微聚は多かりしならば、世尊は極微聚とは説きたまはざりしなるべければなり、

３０－３

其故は、世尊、如来所説の極微聚は、即ち如来所説の非聚なり、是故に極微聚と名づくるなり。

３０－４

又如来所説の三千大千世界とは、如来所説の非界なり、是故に三千大千世界と名づくるなり、

３０－５

其故は、世尊、世界は有りしならば其（世界）は摶執たりしなるべし、如来所説の摶執は、如来所説の非執なればなり、是故に摶執と名づくるなり、

３０－６

世尊言はく、須菩提、摶執は實に不可戯論、不可言説なり、法に非ず、非法に非ず、而して諸の小児異生の所執なり。

知見不生分第三十一

３１－１

其故は、須菩提、若し人ありて、如来我見を説き、如来、有情見、壽者見、人見を説くと言はんに、彼は實に正しく言説すとせんや、

３１－２

須菩提言さく、此は實に否なり、世尊、此は實に否なり、善逝、彼は正しく言説せざるなり、其故は、世尊、如来所説の我見は、如来所説の非見なればなり、是故に我見と名づくるなり。

３１－３

世尊言はく、須菩提、覺有情乘に発趣したる者は是の如く實に知見信解すべきなり、

３１－４

かく知見信解するが如く、法想非法想にも住すべからず、其故は、須菩提、法想、法想とは如来所説の非想なればなり、是故に法想と名づくるなり。

應化非眞分第三十二

３２－１

若し又、須菩提、大覺有情ありて、無量なる諸世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施せん、（然るに）若し又善家男子或は善家女子ありて、此の智成満法門より乃至四句の頌を取りて、持説読誦し、又他人の為めに広く開示せん者あらんに、此（後者）は實に此の因縁に由りて尚多き無量無数の福聚を生ぜん

３２－２

又云何に開示せん歟、譬へば虚空に於ける

星と翳と燈と幻と
露と泡と夢と電と雲との如く
（一切）有為（法）をば
是の如く観るべきなり。

是の如く開示すべし、是故に彼は開示せんと説かるゝなり。

３２－３

歓喜の意ある世尊は之を説きたまひき、長老須菩提と諸の苾芻と苾芻尼と鄔波索迦と鄔波期迦と諸の覺有情と及び天と人と阿修羅と乾闥婆とを有せる世間は世尊の所説を歓喜しきと（云へり）。

３２－４

能く金剛を断ずる具福智なる聖智成満（即ち般若波羅蜜多の法門を説げる経）は終る。

能断金剛般若波羅蜜多経

阿滿得壽　譯

１９３３

福徳ある聖般若波羅蜜多に帰命す

法會因由分第一

１－１
是の如くに我れ聞けり。一時世尊は舎衛国に於て、怙恃なきものに摶飯を給するものゝ遊園、祇陀林に苾芻の大衆一千二百五十人及び数多の菩薩摩訶薩と倶に遊行したひき。

１－２
爾の時に、世尊は午前の分時に着衣して、鉢と上絡衣を取り舎衛国大城へ摶食を得んが為めに入りたまひき。

１－３
爾の時に、世尊は舎衛大城へ摶食のために往きて、食事をなしたまひて後、行乞より還りて鉢と上絡衣を収め両足を洗ひ、實に設けられたる座に跏趺を結び、正面に端身憶念に住して座したまひき。

１－４
爾の時に、衆くの苾芻は世尊の居ます所に近づき集り到りぬ、到りて世尊の両足を頂礼し、世尊を右繞三匝して一面に座しき。

善現起請分第二

２－１
爾の時に、具壽須菩提はその集会に来りて座したりき。

２－２
爾の時に、具壽須菩提は座より起ちて、一肩へ上衣を着け、右膝輪を地に着け、世尊の居ます所へ合掌恭敬して、世尊に次の如く白して言さく、

２－３
未曾有なり世尊、最勝希有なり善逝、實に善く如来応供正等覚者は諸大菩薩摩訶薩を最勝摂受を以て摂受したまへり。

２－４
未曾有なり世尊、實に善く如来応供正等覚者は諸大菩薩摩訶薩を最勝なる付嘱を以て委任したまへり。

２－５
世尊、善男子或は善女子は菩薩乗に発趣したることによりて云何に住し、云何に修行し、云何に心を摂伏すべきや。

２－６
是の如く言へる時、世尊は具壽須菩提に告げて曰く、善哉、善哉、須菩提、これは是の如し、須菩提、これは是の如し、汝が語るが如し。如来は諸大菩薩摩訶薩を最勝なる摂受を以て摂受したまへり、

如来は諸大菩薩摩訶薩を最勝なる付囑を以て委任したまへり。

２－７

是故に、須菩提、諦かに聴き、而して仔細に心に念ぜよ、我は汝のために菩薩乗に発趣したるものによりて是の如く住し、是の如く修行し、是の如く心を摂伏すべきやを語るべし。

２－８

世尊、是の如くあれと、具壽須菩提は世尊へ約束したてまつりき。

大乘正宗分第三

３－１

世尊は彼に次の如く告げたまひき、須菩提、茲に菩薩乗に発趣したるものによりて是の如く心を発起すべきなり。須菩提、有情界に於て、有情の類聚の中に収められたる如何程の有情、若は卵生、若は胎生、若は湿生、若は化生、若は有色、若は無色、若は有想、若は無想、若は非有想、若は非無想、乃至知れ渡れる或る有情界の知られんに、総て彼等は我によりて無餘依涅槃界に滅度せしめらるべきなりと。

３－２

是の如く無量の諸有情をも滅度せしめせて、滅度せしめられたる或る有情もあることなし。

３－３

その故は、須菩提、若し菩薩に有情想転起せば彼は菩薩と云はるべからざればなり。

３－４

その故は、須菩提、有情想転起し、或は命者想或は士夫想転起するところの彼は菩薩と云はれざればなり。

妙行無住分第四

４－１
復次に、須菩提、菩薩は事に住して布施を行ずべからず、如何なる処にも住して布施を行ずべからず、色に住して布施を行ずべからず、声香味触法に住して布施を行ずべからず。

４－２
須菩提、菩薩摩訶薩は相の想にも住せざる如く、実に是の如く布施を行ずべきなり。

４－３
その故は、須菩提、住する所なき菩薩布施を行ぜば、須菩提、彼の福聚の量を執ることは容易にあらざればなり。

４－４
須菩提、汝云何にか思惟する、東方に於ける虚空の量を執ることは容易なりや、

４－５
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり。

４－６
世尊曰く、是の如く南西北方四維上下の普く十方の虚空の量を執ることは容易なりや、

４－７
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、

４－８
世尊曰く、是の如く実に、須菩提、住せずして布施を行ずるところの菩薩は、須菩提、彼の福聚の量を執ることは容易にあらざるなり、

４－９
須菩提、菩薩乗に発趣したるものは相の想にも住せざる如く、実に是の如く布施を行ずべきなり。

如理實見分第五

5－1
須菩提、汝云何にか思惟する、相具足を以て如来は見らるべきや、

5－2
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、相具足を以て如来は見られざるべし。その故は、世尊、如来の説きたまへる相具足こそ非相具足なれ、

5－3
是の如く言へる時、世尊は具寿須菩提に次の如く告げて曰く、須菩提、有らゆる相具足は有らゆる虚妄なり、有らゆる非相具足はあらゆる非虚妄なり、実に相非相より如来は見らるべきなり。

正信希有分第六

６－１

是の如く曰へる時、具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、世尊、未来世、後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進しつゝある時に、此等所説の諸経典の句に於て、実の想を生ずべき或る諸有情あるべきや。

６－２

世尊曰く、須菩提、汝是の如く言ふなかれ、実に未来世、後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進しつゝある時に、此等諸経典の句に於て、実の想を生ずべき或る諸有情あるべきやと。

６－３

復次に、須菩提、未来世、後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進しつゝある時に、此等諸経典の句に於て、実の想を生ずべき、具徳、具戒、具慧の諸大菩薩摩訶薩あるべきなり。

６－４

復次に、須菩提、かの諸大菩薩摩訶薩は一仏に奉仕したるものにも、一仏のみもとにて善根を種植したるものにもあらざるべし、復次に、須菩提、かの諸大菩薩摩訶薩は非一百千仏に奉仕したるもの、非一百千仏のみもとにて善根を種植したるものにして、此等諸経典の句の説かれつゝある時に、一念の浄信をも獲得すべきなり。

６－５
須菩提、如来は仏智を以て彼等を知りたまふ、須菩提、如来は仏眼を以て彼等を見たまふ、須菩提、如来は彼等を覚りたまふ。

６－６
須菩提、一切彼等は無量無数の福聚を当に生じ、当に之を摂すべし。

６－７
その故は、須菩提、実にかの諸大菩薩摩訶薩には我想転ずるなく、有情想、命者想、士夫想転ずるなく、

６－８
須菩提、かの諸大菩薩摩訶薩には法想転ずるなく、是の如く非法想もなく、須菩提、また彼等には想も非想も転ずるなければなり。

６－９
その故は、須菩提、若しかの諸大菩薩摩訶薩に法想転ぜば彼等こそ我執あるべけれ、有情執、命者執、士夫執あるべけれ、

６－１０
若し非法想転起せば彼等こそ我執、有情執、命者執あるべけれと、

６－１１
その故は、復次に、須菩提、菩薩摩訶薩によりて法は執られざるべく、非法も執られざるべければなり。

６－１２
この故に、如来は密意を以てこの説を説きたまひき、筏喩の法門を

知るものは諸法をこそ捨つるなれ、何に況んや、諸非法をやとなり。

無得無説分第七

７－１
復次に、世尊は具寿須菩提に次の如く曰へり、須菩提、汝云何にか思惟する、如来の証得したまへる無上正等覚なる一法、或は如来の説きたまへる一法ありや。

７－２
是の如く曰へる時、具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、我れ世尊所説の意義を解する如きは、如来の証得したまへる無上正等覚なる一法あらず、

７－３
その故は、如来の証得したまへる、或は説きたまへるかの法は不可取、不可宣説なればなり、かれは法にもあらず、非法にもあらず、

７－４
その故は、諸聖人は実に無為によりて顕現すればなり。

依法出生分第八

８－１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、善男子或は善女子をして、この三千大千世界に七寶を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施を行ぜしめよ、時にまたその善男子或は善女子はこの因縁によりて多く福聚を生じ得べきや。

８－２
須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、その善男子或は善女子はこの因縁によりて福聚を生ずべし、

８－３
その故は、世尊、如来所説の福聚はこれ、如来所説の非聚なればなり、この故に、如来は福聚、福聚と説きたまふ。

８－４
世尊曰く、復次に、須菩提、善男子或は善女子をして、この三千大千世界に七寶を充満せしめして、諸如来応供正等覚者に布施を行ぜしめよ、又人ありてこの法門より乃至四句の伽陀をも取りて、他人に詳細に宣説開示せしめよ、この人こそ、この因縁によりて尚多く無量無数の福聚を生ずべけれ。

８－５
その故は、須菩提、諸如来応供正等覚者の無上正等覚はこれより生じ、また、諸仏世尊もこれより生ずればなり、

８－６

その故は、須菩提、諸仏法、諸仏法とは、実にまた、如来所説の諸非仏法なればなり、この故に、諸仏法と名けらるゝなり。

一相無相分第九

９－１

須菩提、汝云何にか思惟する、時にまた、流入者には我れ流入果を得たりと云ふが如き（念）ありや。

９－２

須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、流入者には我れ流入果を得たりと云ふが如き（念）あることなし、その故は、世尊、かれは実に或る法へも入りたることなければなり、この故に、流入者と名けらるゝなり。色へ入りたることなく、声香味触法へも入りたることなし、この故に、流入者と名けらるゝなり。

９－３

世尊、若し流入者には我れ流入果を得たりと云ふが如き（念）あらば、これ実に、かれには我執あるべく、有情執、命者執、士夫執あるべしと。

９－４

世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、時にまた、一来者には我れ一来果を得たりと云ふが如き（念）ありや、

９－５

須菩提言さく、実に、これ否なり、一来者には我れ一来果を得たりと云ふが如き（念）あることなし、その故は、実にこれ、一来性へ入りたりとする或る法もなければなり、この故に、一来者と名けらるゝなり。

９－６
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、時にまた、不来者には我れ不来果を得たりと云ふが如き（念）ありや、

９－７
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、不来者には我れ不来果を得たりと云ふが如き（念）あることなし、その故は、世尊、実にこれ、不来性を得たりとする或る法もなければなり、この故に、不来者と名けらるゝなり。

９－８
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、また、阿羅漢には我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）ありや、

９－９
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、阿羅漢には我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あることなし、その故は、世尊、実にこれ、阿羅漢と名くる或る法なければなり、この故に、阿羅漢と名けらるゝなり。

９－１０
世尊、若し阿羅漢には我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あらば、これ実に、かれには我執あるべく、有情執、命者執、士夫執あるべし。

９－１１
その故は、世尊、如来応供正等覚者は我を諸無諍遊行者中の最勝者なりと説きたまへり、

９－１２

世尊、我は阿羅漢なり、離欲者なり、而して世尊、我に我は阿羅漢なり、離欲者なりと云ふが如き（念）あることなし、世尊、若し我に我れ阿羅漢性を得たりと云ふが如き（念）あらば善男子須菩提は無諍遊行者中の最勝者にして、何処にも遊行せず、この故に、無諍遊行者、無諍遊行者と名くると、如来は我に授記したまはざるべければなり。

莊嚴淨土分第十

１０－１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来は燈作如来応供正等覚者の所より取りたまひたるところの或る法ありや、

１０－２
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、如来は燈作如来応供正等覚者の所より取りたまひたるところの或る法あることなし。

１０－３
世尊曰く、須菩提、或る菩薩は是の如く我は諸国土の荘厳を成就すべしと言はゞ、彼は非実を語るべし、その故は、須菩提、諸国土荘厳、諸国土荘厳とは、如来は諸非荘厳と説きたまへばなり、この故に、諸国土荘厳と説かるゝなり。

10－４
須菩提、この故に、今、菩薩摩訶薩は如何なる処にも、色にも、声香味触法にも住せずして、心を生ずべきが如く、是の如く住するところなくして心を生ずべきなり。

１０－５
思ふに、須菩提、譬へば自体が須彌山王の如くあり得るところの大身を具する人あるべし、須菩提、汝云何にか思惟する、時にまた、その自体は大なりとせんや。

10－6

須菩提言さく、世尊、かれは大なるべし、善逝、かの自体は大なるべし、その故は、世尊、自体、自体とは如来は非体と説きたまへばなり、この故に、自体と説かるゝなり、世尊、実に彼は体にあらず、非体にあらず、この故に、自体と説かるゝなり。

無爲福勝分第十一

１１－１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、諸恒伽大河に於ける沙と同数の諸恒伽河あらんに、その中にある沙はまた多かるべきや。

１１－２
須菩提言さく、世尊、そのあらゆる諸恒伽河は実に多かるべし、況んや、その諸恒伽河に於ける沙をや。

１１－３
世尊曰く、須菩提、我れ汝に告げ、汝に開覚す、女子或は男子ありて、諸恒伽大河にある沙と同数の世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施を行ぜんに、須菩提、汝云何にか思惟する、その女子或は男子はこの因縁によりて多く福聚を生ずべきや。

１１－４
須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、その女子或は男子はこの因縁によりて無量無数の福聚を生ずべし。

１１－５
世尊曰く、時にまた、須菩提、女子或は男子ありて、あらゆる世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施を行ずべし、又善男子或は善女子ありて、この法門より乃至四句の伽陀をも取りて、他人に宣説開示すべし、この（人）こそこの因縁によりて、尚多く無量無数の福聚を生ずべけれ。

尊重正教分第十二

１２－１

復次に、須菩提、国土のその方処に於て、この法門より乃至四句の伽陀を取りて、説話或は開示せらるべし、その国土の方処は天人、阿修羅の世間の真の塔廟たるべし、何に況んや、又この具足せる法門を受持読誦し、また、他人に詳細に開示すべきものに於てをや。須菩提、彼等は最勝希有を以て成就せらるべし、

１２－２

又、須菩提、国土のその方処に於て師は遊行し、或は次第せる賢師の住処たるべし。

如法受持分第十三

１３－１
是の如く曰へる時、具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、世尊、この法門は如何に名けらるゝや、又、我は如何なる方法を以てこれを持つべきや、

１３－２
是の如く言へる時、世尊は具寿須菩提にかく曰へり、須菩提、この法門は般若波羅蜜多と名けらるゝなり。又汝は是の如くこれを持つべし、

１３－３
その故は、須菩提、如来所説の般若波羅蜜多は実に如来所説の非般若波羅蜜多なればなり、この故に、般若波羅蜜多と説かるゝなり。

１３－４
須菩提、汝云何にか思惟する、時にまた、如来所説の或る法ありや、

１３－５
須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、如来所説の或る法あるなし。

１３－６
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、所有三千大千世界に於ける地塵は然らば多かるべきや。

１３－７

須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、地塵はあるべし、その故は、世尊、如来所説の地塵は、世尊、如来所説の非塵なればなり。この故に、地塵と説かるゝなり。

１３－８

如来所説のかの世界も如来所説の非界なり、この故に、世界と説かるゝなり。

１３－９

世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、三十二大人相を以て如来応供正等覚者は見らるべきや、

１３－１０

須菩提言さく、世尊、実に、これ否なり、三十二大人相を以て如来応供正等覚者は見らるべからず。

１３－１１

その故は、世尊、実に如来所説の三十二大人相は、世尊、如来所説の非相なればなり、この故に、三十二大人相と説かるゝなり。

１３－１２

世尊曰く、時にまた、須菩提、女子或は男子ありて、日々恒伽沙に等しき自体を捨つべし、是の如く捨てつゝ、恒伽沙に等しき劫数の間、彼等の自体を捨つべし、又この法門より乃至四句の伽陀をも取りて、他人に宣説開示すべし、この（人）こそこの因縁によりて、尚多く無量無数の福聚を生ずべけれ。

離相寂滅分第十四

１４－１
爾の時に、具寿須菩提は法の威力によりて涙を灑げり、彼は涙を拭ひて、世尊に次の如く白して言さく、

１４－２
希有なり世尊、最勝希有なり善逝、如来所説のこの法門は最上乗、最勝乗に発趣したる諸有情の利益のためなり、世尊、これより我が智は生ぜり、

１４－３
世尊、未だ曾て我は是の如き法門を聞きたることなし、世尊、最勝希有を以て成就せるかの諸菩薩はこゝに説話中の経を聞きて実想を生ずべし、

１４－４
その故は、世尊、この実想こそ非実想なれ、この故に、如来は実想、実想と説きたまふ。

１４－５
世尊、我は説話中のこの法門を領悟信解する時、我には希有なることなし、

１４－６
世尊、また未来世、後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進し

つゝある時に、世尊、この法門を受持読踊し、又詳細に他人に宣説するところのかの諸有情あるべし、彼等は最勝希有を以て成就すべし。

１４－７
されど、時にまた、世尊、彼等の我想は転ぜざるべし、有情想、命者想、士夫想も転ぜざるべし、彼等の或る想も非想も転ぜざるべし、

１４－８
その故は、世尊、我想こそ非想なるべけれ。有情想、命者想、士夫想こそ実に非想なるべけれ、

１４－９
その故は、諸仏世尊は一切想を遠離したまへばなり。

１４－１０
是の如く言へる時、世尊は具寿須菩提に次の如く告げて曰はく、これは是の如し、これは是の如し、須菩提、こゝに経の説かれつゝある時驚かず、懼れず、畏れざるところのかの諸有情は最勝希有を成就すべし、その故は、須菩提、如来所説のこの最勝波羅蜜多はまた非波羅蜜多なり、また、須菩提、如来所説のこの最勝波羅蜜多はかの無量の諸仏世尊の所説なればなり、この故に、最勝波羅蜜多と説かるゝなり。

１４－１１
復次に、須菩提、如来の忍辱波羅蜜多こそかの非波羅蜜多なれ、

１４－１２

その故は、須菩提、羯利王の我が支節の肉を割截せし時、その時、我に我想、或は有情想、或は命者想、或は士夫想も、或る想も、非想も、有らざりしなり、

１４－１３

その故は、須菩提、若しその時我に我想ありしならば瞋恨想もまたありしならん、若し有情想、命者想、士夫想ありしならば、その時我に瞋恨想もありしならん。

１４－１４

その故は、須菩提、我れ過去世五百生中、忍語僊人たりし時、また、我に我想、有情想、命者想、士夫想なかりしことを認知すればなり。この故に、今、須菩提、菩薩摩訶薩は一切想を遠離して阿耨多羅三藐三菩提に発心すべきなり、色に住して発心すべからず、声香味觸に住して発心すべからず、法に住して発心すべからず、非法に住して発心すべからず、如何なる処にも住して発心すべからず、

１４－１５

その故は、所住こそ非所住なれ、この故に、如来は説きたまふ、菩薩は無所住にして布施は行ぜらるべきなり、色声香味觸法に住せずして布施は行ぜらるべきなり。

１４－１６

復次に、須菩提、菩薩は一切有情の利益の為めに是の如き施捨は作さるべきなり、その故は、須菩提、かの有情想こそ非想なれ、この如く如来の説きたまふ一切有情こそ非有情なれ、

１４－１７

その故は、須菩提、如来は実語者なり、諦語者なり、如語者なり、如来は不異語者にして、不如語者に非らざればなり。

１４－１８

復次に、須菩提、如来の証得し、宣説し、思惟したまひたる法は実に非ず、虚に非ず、

１４－１９

須菩提、思ふに、譬へば闇に入りたる人は何物をも見ざるが如く、事に堕して布施を行ずる菩薩も亦是の如し、

須菩提、思ふに、譬へば夜過ぎて拂暁太陽の昇りたる時は明眼の人は種々の色を見ることを得るが如く、事に堕せずして布施を行ずる菩薩も事に堕せずして是の如く見らるべきなり。

１４－２０

復次に、須菩提、この法門を受持読誦し、而して、他人に詳細に宣説する所の善男子或は善女子を、須菩提、如来は仏智を以て彼等を知りたまひ、須菩提、如来は仏眼を以て彼等を見たまひ、如来は彼等を覚りたまふ、須菩提、彼等一切有情は無量無数の福聚を生じ且つ受持すべし。

持經功德分第十五

１５－１

復次に、須菩提、女子或は男子ありて、午前の分時に恒伽河沙に等しき自体を捨つべし、是の如く日中の分時にも恒伽河沙に等しき自体を捨つべし、午後の分時にも恒伽河沙に等しき自体を捨つべし、この縁を以て倶胝那庾多百千劫の間に多き自体を捨つべし、又この法門を聞きて誹謗せざるものあるべし、このものこそこの因縁によりて尚多く無量無数の福聚を生ずべけれ、何に況んや、また之を書寫して受持讀誦し、他人に詳細に開示すきべきものに於てをや。

１５－２

復次に、須菩提、この法門は不可思議なり、無比なり、また、須菩提、如来は最上乘に発趣したる諸有情の饒益のため、最勝乘に発趣したる諸有情利益のためにこの法門を説きたまひき。この法門を受持讀誦し、又他人に詳細に開示する彼等を、須菩提、如来は佛智を以て知りたまひ、須菩提、如来は佛眼を以て彼等を見たまひ、如来は彼等を覚りたまふなり、須菩提、かの一切有情は無量の福聚を以て成就せらるべし、不可思議、無比、不可称量、不可計の福聚を以て成就せらるべし、

１５－３

須菩提、一切有情は等しく菩提を受持し読誦すべし、その故は、須菩提、実に下劣信解の有情、我見者、有情見者、命者見者、士夫見者はこの法門を聞くこと能はず、菩薩智なき有情はこの法門を聞き、或は受持読誦すること能はず、この処有ること無ければなり。

１５－４

復次に、須菩提、この経の開示せらるゝ国土の方処には天人阿素洛を倶にする世間に供養せられ、その国土の方処は敬礼せられ、又右遶せられ、その国土の方処は真の塔廟たるべし。

舩淨業障分第十六

１６－１
されどまた、須菩提、善男子或は善女子ありて、是の如き諸経典を受持読誦し、全くこれを念じ、他人に詳細に開示すべし、彼等は軽毀に遭ひ、又極めて軽毀せらるゝことあるべし、

１６－２
その故は、須菩提、かの諸有情の悪趣に堕すべき宿生造る所の諸不浄業あらんに、法解了の後、軽毀に遭ふを以ての故に、その宿生造る所の諸不浄業を消盡し、当に仏道を随得すべければなり。

１６－３
須菩提、我は記憶す、過去世無数劫、尚無数劫に、燈作如来応供正等覚者の前の更に前に、八十四百千億尼由他の諸仏在しまして我は承事しき、既に承事して違背せざりき。

１６－４
若し又、須菩提、我れ諸仏世尊に承事しき、既に承事して違犯せざりき、（然るに）若し又後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進しつゝある時に、是の如きこれ等の諸経典を受持読誦し、又他人に詳細に開示せんに、其時また、須菩提、先きの福聚はこの福聚の近く第一百分にも、第一千分にも、第百千分にも、第一億分にも、第百億分にも、第百千億分にも、第百千億尼由他分にも近づかず、数にも、分数にも、計量にも、比喩にも、鄔波尼殺曇分にも、乃至類似にも及ばざるなり。

１６－５

若し復た、須菩提、我れかの諸善男子或は諸善女子の福聚と、乃至その諸善男子或は諸善女子のその時生じ且つ摂すべき福聚とを説かば、諸有情は狂乱を得て或は心散乱に達すべきなり。

１６－６

されどまた、須菩提、如来の説きたまふこの法門は不可思議無比なり、その異熟（果）も実に不可思議なりと観察せらるべきなり。

究竟無我分第十七

１７－１
爾の時に、具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、世尊、菩薩乗に発趣したるものは云何に住し、云何に修行し、云何に心を摂伏すべきや。

１７－２
世尊曰く、須菩提、こゝに菩薩乗に発趣したるものは是の如く心を発起すべきなり、一切有情は我によりて無餘依涅槃界に於て滅度せしめらるべきなりと。

１７－３
又是の如く諸有情を滅度せしめて、滅度せしめられたる或る有情もあることなし。

１７－４
その故は、須菩提、若し菩薩に有情想転起せば彼は菩薩と名くべからず、或は命者想乃至士夫想転起せんに、彼は菩薩と名くべからざればなり。

１７－５
その故は、須菩提、菩薩乗に発趣したると名くるところの或る法もあることなければなり。

１７－６
須菩提、汝云何にか思惟する、如来は燈作如来の所より無上正等を証得したまへる或る法ありや、

１７－７
是の如く曰へる時、具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、尊、我れ世尊所説の意義を解する如きは、世尊、如来は燈作如来供正等覚者の所より無上正等覚を証得したまへる或る法あることし。

１７－８
是の如く言へる時、世尊は具寿須菩提に次の如く告げて曰く、須提、これは是の如し、これは是の如し、須菩提、如来は燈作如来供正等覚者の所より無上正等覚を証得したまへる或る法もあることなし、

１７－９
須菩提、若しまた、如来所証の或る法ありしならば燈作如来は摩納婆、未来世に於て釈迦牟尼と名くる如来応供正等覚者たるべと我れに授記したまはざりき。

１７－１０
須菩提、今現に、如来応供正等覚者の無上正等覚を証得したまへ或る法もなきが故に、我は燈作如来によりて汝、摩納婆、未来世於て釈迦牟尼と名くる如来応供正等覚者たるべしと授記せられ

１７－１１
その故は、須菩提、如来とはこれ真如性の義なり、須菩提、如来はこれ無生法性の義なり、須菩提、如来とはこれ法断の義なり、

菩提、如来とはこれ畢竟不生の義なればなり。その故は、須菩提、この不生は即ち第一義諦なればなり、

１７－１２
須菩提、是の如く如来応供正等覚者によりて、無上正等覚は証得せられたりと或者は云ふべし、須菩提、彼は不真実を云ふべし、彼は不実執を以て我を謗るべし、

１７－１３
その故は、須菩提、如来によりて証得せられたる無上正等覚なる或る法もあることなければなり、

１７－１４
須菩提、如来によりて証得せられ、或は説かれたる法は其中に実なく虚なし、この故に、如来は一切法は諸仏法なりと説きたまふ、

１７－１５
その故は、須菩提、一切法とは如来によりて説かれたる諸非法なればなり、この故に、一切諸法をば諸仏法と説かるゝなり。

１７－１６
須菩提、思ふに、譬へば具身大身の人あらんが如し、

１７－１７
具寿須菩提白して言さく、世尊、如来所説の具身大身の人は、世尊、如来所説の非身者なればなり、この故に、具身大身者と説かるゝなり。

１７－１８
世尊曰く、須菩提、これは是の如し、我の諸有情を滅度せしむべ

しと、かく云ひ得るところの菩薩あらば彼は菩薩と名くべからず、その故は、須菩提、菩薩と名くるところの或る法ありや、

１７－１９

須菩提言さく、世尊、実に、これ否也、菩薩と名くるところの或る法はあらざればなり、

１７－２０

世尊曰く、須菩提、諸有情、諸有情とは如来所説の諸非有情なり、この故に、諸有情と説かるゝなり、この故に、如来は一切諸法は無我なり、無命者なり、無長養者なり、一切諸法は非人なりと説きたまふ。

１７－２１

須菩提、我れ諸仏土荘厳を成辨すべしと、かく云ひ得るところの菩薩あらば不真実を言ふものなり、その故は、須菩提、諸仏土荘厳、諸仏土荘厳とは如来所説の諸非荘厳なり、この故に、諸仏土荘厳と説かるゝなり。

１７－２２

須菩提、諸法無我、諸法無我と信解するところの菩薩は如来応供正等覚者所説の菩薩摩訶薩なり。

一體同觀分第十八

１８－１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来には肉眼ありや、

１８－２
須菩提言さく、世尊、これは是の如し、如来には肉眼あり、

１８－３
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来には天眼ありや、

１８－４
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、如来には天眼あり、

１８－５
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来には慧眼ありや、

１８－６
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、如来には慧眼あり、

１８－７
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来には法眼ありや、

１８－８
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、如来には法眼あり、

１８－９
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、如来には仏眼ありや、

１８－１０
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、如来には仏眼あり。

１８－１１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、恒伽大河に於てかくも多き沙あるも、如来は之を沙なりと説きたまふや、

１８－１２
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、これは是の如し、善逝、如来は之を沙なりと説きたまふ、

１８－１３
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、恒伽大河に於てかくも多き沙あり、その如き多くの恒伽河あるべし、其中にも彼の如き多くの沙あるべし、而してその如き多くの世界あるべし、それ等の世界は寧ろ多きと為んや、

１８－１４
須菩提言さく、これは是の如し、世尊、これは是の如し、善逝、それ等の世界は多かるべし、

１８－１５
世尊曰く、須菩提、それ等の世界に於てかくも多き有情あるべし、我れ彼等の種々の心の流注を知る。

１８－１６
その故は、須菩提、心の流注、心の流注とはこれ如来所説の非流注なればなり、この故に、心の流注と説かるゝなり、

１８－１７
その故は、須菩提、過去の心は得べからず、未来の心は得べからず、現在の心は得べからざればなり。

法界通化分第十九

１９－１

須菩提、汝云何にか思惟する、若し善男子或は善女子ありて、この三千大千世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚に布施を行すべし、実にまた、その善男子或は善女子はこの因縁によりて多く福聚を生ずべきや、

１９－２

須菩提言さく、多く世尊、多く善逝、

１９－３

世尊曰く、これは是の如し、須菩提、これは是の如し、この善男子或は善女子はこの因縁によりて多く無量無数の福聚を生ずべし、

１９－４

その故は、須菩提、福聚、福聚とは如来所説の非聚なればなり、この故に、福聚と説かるゝなり、

１９－５

須菩提、若しまた、福聚ありしならば如来は福聚、福聚と説きたまはざりしなるべし。

離色離相分第二十

２０－１
須菩提、汝云何にか思惟する、色身具足を以て如来は見らるべきや、

２０－２
須菩提言さく、世尊、実に、これ否也、色身具足を以て如来は見らるべからず、

２０－３
その故は、世尊、色身具足、色身具足とはこれ如来所説の非具足なればなり、この故に、色身具足と説かるゝなり。

２０－４
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、相具足を以て如来は見らるべきや、

２０－５
須菩提言さく、実に、これ否也、世尊、相具足を以て如来は見らるべからず、

２０－６
その故は、世尊、如来所説の相具足は如来所説の非相具足なればなり、この故に、相具足と説かるゝなり。

非説所説分第二十一

２１－１
世尊曰く、須菩提、汝云何にか思惟する、実にまた、如来には我れ法を説けりと云ふが如き（念）ありや、

２１－２
須菩提言さく、実に、これ否也、世尊、如来には我れ法を説けりと云ふが如き（念）あらざるなり、

２１－３
世尊曰く、須菩提、若し人、如来は法を説けりとかく云ふべし、須菩提、彼は不真実を云ひ、不実執を以て我を謗るべし、

２１－４
その故は、須菩提、説法、説法とは説法と名けらるゝ或る法あらざればなり。

２１－５
是の如く曰へる時、具寿須菩提は次の如く世尊に白して言さく、世尊、未来世、後時、後分、後五百歳、正法破滅の時の転進しつゝある時に、此等の諸法を聞きて深信すべき諸有情あるべきや、

２１－６
世尊曰く、須菩提、彼等は有情にあらず、非有情にもあらざるなり、

２１－７

その故は、須菩提、諸有情、諸有情とは、須菩提、一切彼等は如来所説の非有情なればなり、この故に、諸有情と説かるゝなり。

無法可得分第二十二

２２－１

須菩提、汝云何にか思惟する、如来所証の無上正等覚なる或る法ありや、

２２－２

具寿須菩提言さく、世尊、実に、これ否也、世尊、如来所証の無上正等覚なる或る法あらざるなり、

２２－３

世尊曰く、須菩提、これは是の如し、これは是の如し、其中に少法すらあらじ、又認知せられじ、この故に、無上正等覚と説かるゝなり。

淨心行善分第二十三

２３－１
復次に、須菩提、かの法は平等なり、其中に或る不平等なし、この故に、無上正等覚と説かるゝなり、

２３－２
其無上正等覚は無我性、無有情性、無命者性、無士夫性を以て平等なり、一切諸善法を以て証得せらるゝなり、

２３－３
その故は、須菩提、諸善法、諸善法とは実に如来所説の諸非法なり、この故に、諸善法と説かるゝなり。

福智無比分第二十四

２４－１

復次に、須菩提、女子或は男子ありて、三千大千世界に於ける須彌山王の如き七宝の聚量を集めて、如来応供正等覚者に布施を行ずべし、また、善男子或は善女子ありて、この般若波羅蜜多の法門より乃至四句の伽陀を取りて他人に宣説すべし、須菩提、かの前者の福聚はこの（後者）福聚の第百分にも達せず、乃至鄔波尼殺曇分にも及ばざるなり。

化無所化分第二十五

２５－１
須菩提、汝云何にか思惟する、実にまた、如来には我れ諸有情を度脱せしめたりと云ふが如き（念）ありや、

２５－２
復次に、須菩提、汝是の如く観ること勿れ、その故は、須菩提、如来によりて度脱せしめられたる或る有情もあることなければなり、

２５－３
若しまた、須菩提如来によりて度脱せしめられたる或る有情ありとせば、かの如来には我執あるべく有情執、命者執、士夫執ありしなるべし、

２５－４
須菩提、我執とは如来所説の非執なり、而して、かれは諸愚夫異生の所執なり、

２５－５
須菩提、諸愚夫異生は如来所説の諸非生なり、この故に、諸愚夫異生と説かるゝなり。

法身非相分第二十六

２６－１
須菩提、汝云何にか思惟する、相具足を以て如来は見らるべきや、

２６－２
須菩提言さく、実に、これ否也、世尊、我れ世尊所説の意義を解するが如きは相具足を以て如来は見られざるべし、

２６－３
世尊曰く、須菩提、善哉、善哉、これは是の如し、須菩提、これは是の如し、汝の所説の如し、相具足を以て如来は見らるべからず、

２６－４
その故は、相具足を以て如来を見るべきことありしならば転輪聖王も亦応に如来たりしなるべければなり、この故に、相具足を以て如来は見られざるなり、

２６－５
具寿須菩提は世尊に次の如く白して言さく、我れ世尊所説の意義を解するが如きは相具足を以て如来は見られざるなり。

２６－６
爾の時に、世尊は此等の二偈頌を説きたまへり。

色を以て我を観、
音声を以て我を尋ね、
邪断を履む諸人は
我を見ざるべし。（一偈）

仏は法によりて見らるべし、
如何となれば諸導師は法身なればなり、
而して、その法性は識るべからず、
また、知らしむること能はず。（二偈）

無斷無滅分第二十七

２７－１
須菩提、汝云何にか思惟する、相具足を以て、如来は無上正等覚を証得したまひたるや、

２７－２
復次に、須菩提、汝は是の如く観るべからず、その故は、須菩提、相具足を以て如来は無上正等覚を証得したまはざるべし、

２７－３
復次に、須菩提、或るものは汝に是の如く言はざるべし、諸菩薩乗に発趣したるものは或る法の壊若しくは断は解了せられたりと、

２７－４
復次に、須菩提、是の如く観るべからず、その故は、諸菩薩乗に発趣したるものは或る法の破滅若しくは断は解了せられざればなり。

不受不貪分第二十八

２８－１

復次に、須菩提、若し善男子或は善女子ありて、恒伽河沙に等しき諸世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施を行ずべし、又若し菩薩ありて、無我無生の諸法に於て忍辱を獲得せんに、これこそこの因縁によりて尚多き無量無数の福聚を生ずべけれ、復次に、須菩提、菩薩摩訶薩によりて福聚は摂受せられざるべきなり、

２８－２

具寿須菩提言さく、世尊、実に、菩薩によりて福聚は摂受せられざるべきや、

２８－３

世尊曰く、須菩提、摂受せらるべく、摂受せられざるべきなり、この故に、摂受せらるべきなりと説かるゝなり。

威儀寂靜分第二十九

２９－１

復次に、須菩提、若し或るものありて、如来は或は行き、或は来り、或は住し、或は坐し、或は臥床を支度すとかく言べし、須菩提、彼は我が所説の意義を知らざるなり、

２９－２

その故は、須菩提、如来とは如何なる処にも行きたることなく、何処よりも来りたることなしと説かるればなり、この故に、如来応供正等覚者と説かるゝなり。

一合離相分第三十

３０－１

復次に、須菩提、善男子或は善女子ありて、三千大千世界に於ける地塵の如きその如き諸世界を善く計量せられざる精進（力）を以て、譬へば極微聚の如き墨粉になすべし、須菩提、汝云何にか思惟する、その極微聚は、また実に、多かるべきや、

３０－２

須菩提言さく、これは是の如し、世尊、これは是の如し、善逝、その極微聚は多かるべし、その故は、世尊、若し極微聚多かりしならば世尊は極微聚とは説きたまはざりしなるべければなり、

３０－３

その故は、世尊、如来所説の極微聚は即ち如来所説の非聚なり、この故に、極微聚と説かるゝなり。

３０－４

又如来所説の三千大千世界とは如来所説の非界なり、この故に、三千大千世界と説かるゝなり、

３０－５

その故は、世尊、若し世界ありしならばそれこそ聚執なるべけれ、又如来によりて説かれたる聚執こそ如来所説の非執なるべけれ、この故に、聚執と説かるゝなり、

３０－６

世尊曰く、須菩提、又聚執こそ不可戯論、不可言説なれ、法にあらず、非法にあらず、而して、諸愚夫異生の所執なり。

知見不生分第三十一

３１－１
その故は、須菩提、或るものありて、如来は我見を説き、如来は有情見、命者見、士夫見を説きたまひたりと言ふべし、須菩提、実にまた、彼は正しく言説すと言ふべきや、

３１－２
須菩提言さく、世尊、実に、これ否也、彼は正しく言説すと言ふべからず、その故は、如来所説の我見は如来所説の非見なればなり、この故に、我見と説かるゝなり。

３１－３
世尊曰く、須菩提、菩薩乗に発趣したるものによりて、一切法は是の如く知見信解せらるべきなり、

３１－４
而して、かく知見信解せらるべきが如くその如く法想、非法想に於ても住すべからず、その故は、須菩提、法想、法想とは如来所説の非想なればなり、この故に、法想と説かるゝなり。

應化非眞分第三十二

３２－１

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩ありて、無量なる諸世界に七宝を充満せしめて、諸如来応供正等覚者に布施を行ずべし、また、善男子或は善女子ありて、この般若波羅蜜多法門より乃至四句の伽陀を執りて受持読誦し、又他人に詳細に宣説開示せんに、このものこそこの因縁によりて尚多き無量無数の福聚を生ずべけれ。

３２－２

而して、如何に之を開示すべきか、それは下に述ぶるが如し、

虚空に於ける星と翳と燈と
幻と露と泡と
夢と電と雲との如く
有為（法）をば是の如く観らるべきなり。（偈）

是の如く開示すべし、この故に、彼は開示すべしと説かるゝなり。

３２－３

心悦豫せる世尊はこれを説きたまひき、長老須菩提及び諸苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦及び諸菩薩並に諸天人、阿素洛、健達縛と共に、世間は世尊の所説を歓喜せりと。

３２－４

能く金剛を断ずる福徳ある聖般若波羅蜜多（経）は終る。

金剛般若経

渡邊照宏　譯

１９５６～１９５７

法會因由分第一

第一節　祇園精舍

１－１
このように私は伝え聞いている。
あるとき世尊はシラーヴァスティーの郊外にある祇園精舎に滞在しておられた。千二百五十人ものおおぜいのビクたちがいっしょにいた。そのうえボサツたちもおおぜいいた。

１－２
さて、ある朝のこと、世尊は下着をつけ、鉢と上着とを手にして、シラーヴァスティーの大きな都に行き、施食をもとめて歩かれた。

１－３
そして食事をすませて、もとの場所にもどり、鉢と上着とをかたづけ、足を洗い、敷物をしいて、両足をくみあわせ、からだをまっすぐに起し、精神を集中して、そこに坐られた。

１－４
そのとき、おおぜいのビクたちが世尊のおいでになるところに来て、世尊の足もとにひれふし、世尊のまわりを右まわりにみたびまわってから、かたわらに坐った。

善現起請分第二

第二節　ボサツの道

２－１
そのときまた、長老スブーティ（須菩提）も、ちょうど、その場にいあわせて、そこに坐っていた。

２－２
そこで、長老スブーティは席から立ちあがり、上着の片袖をぬぎ、右の膝を地面につけ、世尊のおいでになる方に合掌して敬礼した。そして世尊にむかって次のように申しあげた――

２－３
「世尊よ。おどろくべきことです。善逝よ。きわめておどろくべきことです。というのは、如来であり、アラカンであり、正しく悟られた仏陀は、ボサツマカサツたちに最上の恩恵をあたえられるからです。

２－４
世尊よ。おどろくべきことです。というのは、如来であり、アラカンであり、正しく悟られた仏陀は、ボサツマカサツたちに最上の権能をあたえられるからです。

２－５
世尊よ。ところで、生まれただしい男子なり女子なりが、ボサツの

道をあゆむときは、どういう生活をし、どういう行いをし、どのように心をたもてばよいのですか。」

２－６
このように言われたとき、世尊は長老のスブーティにむかって、次のように仰せになった――
「みごと、みごと、スブーティよ。スブーティよ、汝の言うとおりである。如来はボサツマカサツたちに最上の恩寵を与える。如来はボサツマカサツたちに最上の権能を与える。

２－７
スブーティよ。だから、聞くがよい。よくよく考えるがよい。ボサツの道を歩むものはどういう生活をし、どういう行いをし、どのように心を保てばよいかということを汝に話して聞かせよう。」

２－８
「はい、承知いたしました、世尊よ。」
と長老スブーティは世尊にむかってお答えした。

大乘正宗分第三

第三節　考えにとらわれない

３－１
世尊は彼にむかって次のように仰せになった――
「スブーティよ。ここに、ボサツの道を歩むものは、次のような考えをおこさなければならない――
『およそ生きとし生けるもの、生きもののなかまに入れられるものは、卵から生まれたもの、母胎から生まれたもの、湿気から生まれたもの、神通力でつくられたもの、形のあるもの、形のないもの、心のあるもの、心のないもの、心があるのでもなくないのでもないもの、およそ生きものと考えられるもの、ありとあらゆるものを、私は完全に滅却したネハンに導きいれよう。

３－２
こうして、数かぎりない生きものをネハンに導きいれても、だれひとりネハンに導きいれはしなかった（と考えなければならない。）』

３－３
それはなぜだろうか。
スブーティよ。もしボサツが『生きもの』という考えをおこすとすれば、ボサツとはいわれないからである。

３－４
それはなぜであろうか。

スブーティよ。『生きもの』とか『生命』とか『個人』とかいう考えをおこすようなものは、ボサツとはいわれないからである。」

妙行無住分第四

第四節　とらわれない施し

４－１
「スブーティよ。またボサツは事物に依存して施しをしてはいけない。何かに依存して施しをしてはいけない。色形に依存して施しをしてはいけない。声や香や味や触覚やものごとに依存して施しをしてはいけない。

４－２
スブーティよ。つまり、ボサツマカサツが施しをするには、目印という思いに依存しないようにするのである。

４－３
それはなぜであろうか。
スブーティよ。もしボサツが依存することなしに施しをすれば、そのボサツの福徳の集積は容易にはかり知れないものである。

４－４
スブーティよ。どう思うか。東の方角における虚空は容易にはかり知れるであろうか。」

４－５
スブーティは申しあげた――
「世尊よ。はかり知れません。」

４－６

世尊は仰せになったーー

「それでは、南や西や北や下や上の方角など、あらゆる十方の方角における虚空は容易にはかり知れるであろうか。」

４－７

スブーティは申しあげたーー

「世尊よ。はかり知れません。」

４－８

世尊は仰せになったーー

「スブーティよ。これと同じことである。もしボサツが依存することなしに施しをすれば、そのボサツの福徳の集積は容易にはかり知れないものである。

４－９

スブーティよ。ボサツの道を歩むものは施しをして、目印という思いに依存しないようにするがよい。」

如理實見分第五

第五節　仏の特徴

５－１
「スブーティよ。どう思うか。如来は（仏の）特徴をそなえたものと見てよいであろうか。」

５－２
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。ちがいます。如来は特徴をそなえたものと見てはいけないのです。
それはなぜでしようか。
世尊よ。特徴をそなえているというのは、特徴をそなえていないことであると如来は仰せになったからです。」

５－３
こう申しあげると、世尊は長老のスブーティにむかって次のように仰せになったーー
「スブーティよ。特徴をそなえているといえば、それはみないつわりであり、特徴をそなえていないといえば、それはいつわりではない。だから、特徴と特徴のないこととの両方から如来を見なければいけない。」

正信希有分第六

第六節　筏のたとえ

６－１
このように仰せになったとき、長老のスブーティは世尊にむかって次のように申しあげた――
「世尊よ。将来、後世になって第二の五百年代に正しい教えがほろびるころ、このような経典の言葉を聞いて『ほんとうだ』と思うようなものがいるでしょうか。」

６－２
世尊は仰せになった――
「スブーティよ。そういうことを言ってはいけない。将来、後世になって第二の五百年代に正しい教えがほろびるころ、このような経典の言葉を聞いて『ほんとうだ』と思うようなものがいるにちがいない。

６－３
スブーティよ。また、将来、後世になって第二の五百年代に正しい教えがほろびるころ、徳の高く、行い正しく、智慧のすぐれたボサツマカサツたちが、このような経典の言葉を聞いて『ほんとうだ』と思うにちがいない。

６－４
スブーティよ。また、ボサツマカサツのうちでも、ただ一人だけの

仏を供養し、ただ一人だけの仏のもとで善根をうえただけではなくて、何千何万という多くの仏を供養し、多くの仏のもとで善根をうえたことのあるボサツマカサツが、このような経典の言葉を聞いて、ひたすらに清らかな信仰を持つようになるにちがいない。

６－５

スブーティよ。彼らを如来は仏の智によって見ているのである。スブーティよ。彼らを如来は仏の眼によって見ているのである。スブーティよ。彼らを如来は悟っているのである。

６－６

スブーティよ。彼らは、はかり知れず、数えきれぬ福徳の集積を生じ、自分のものにするにちがいない。

６－７

それはなぜであろうか。

スブーティよ。そのボサツマカサツたちにおいては『自我』という考えはおこらないし、『生きもの』という考えも、『生命』という考えも、『個人』という考えもおこらないからである。

６－８

スブーティよ。またそのボサツマカサツたちにおいては『ものごと』（法）という考えもおこらないし、『ものごとの否定』（非法）という考もおこらない。

スブーティよ。また彼らにおいては、考えもおこらないし、考えの否定もおこらない。

６－９

それはなぜであろうか。

スブーティよ。もし、そのボサツマカサツたちにおいて『ものごと』という考えがおこるとすれば、彼らにおいて『自我』の執着があり、『生きもの』の執着があり、『生命』の執着があり、『個人』の執着があることになろう。

６－１０
もし『ものごとの否定』という考えがおこるとすれば、彼らにおいて『自我』の執着があり、『生きもの』の執着があり、『生命』の執着があり、『個人我』の執着があることになろう。

６－１１
それはなぜであろうか。
スブーティよ。実にボサツマカサツはものごとを取りあげてはいけない。また、ものごとの否定を取りあげてもいけない。

６－１２
それだから、如来は、この意味で『〈筏のたとえの法門〉を知るものは、ものごとを放棄しなければいけない。ものごとの否定はなおさらである』と仰せになったのである。」

無得無說分第七

第七節　さとり

７－１
さてそのうえで、世尊は長老のスブーティにむかって、次のように仰せになった――
「スブーティよ。どう思うか。如来がこのうえない正しいさとりをさとったというのは、なにかものごとがあるのだろうか。また、如来が説いたものごとがなにかあるのだろうか。」

７－２
長老のスブーティは、世尊に向って次の様に申しあげた――
「世尊よ。私が世尊のお言葉の意味を理解しているかぎりでは、如来がこのうえない、正しいさとりをおさとりになったというものごとはなにもございませんし、如来がお説きになったものごともなにもございません。

７－３
なぜでしょうか。如来がおさとりになったり、お説きになったりするものごとというものは、認識することもできず、言葉で述べることもできないからです。それは、ものごとでもなく、ものごとの否定でもありません。

７－４
なぜでしょうか。聖者たちは、現象界以上のものによってあらわされるからです。」

依法出生分第八

第八節　ほとけの法

８－１

「スブーティよ。どう思うか。生まれただしい男子なり女子なりが、この広い宇宙を七種類の宝ものでみたして、如来であり、ひじりであるみほとけたちに、贈りものとしてささげるとすれば、その生まれただしい男子なり女子なりは、それによって、たくさんのくどくをつんだことになるであろうか。」

８－２

「世尊よ。そうです。すぐれた方よ。そうです。そういうような生まれただしい男子なり女子なりは、そのために、たくさんのくどくをつんだことになるのです。

８－３

なぜでしようか。世尊よ。〈くどくをつむ〉と如来が仰せになるのは、なんにもつまないことだと如来が仰せになったのです。ですから、如来は〈くどくをつむ、くどくをつむ〉と仰せになるのです。」

８－４

「スブーティよ。生まれただしい男子なり女子なりが、この広い宇宙を七種類の宝ものでみたして、如来でありひじりであるみほとけたちに、贈りものとしてささげるとしても、もしこの経典のうちから、たとえ、四行詩ひとつでもおぼえておいて、ほかのものたちに

くわしく教えて説いてきかせるものがあるとすれば、こちらの方が、さらにいっそうはかり知れず、かぞえきれないくらいたくさんのくどくをつむことになる。

８－５

なぜか。スブーティよ。如来でありひじりであるみほとけたちの、このうえない正しいさとりも、それから生じたのであり、みほとけである世尊たちもまた、それから生まれたからである。

８－６

なぜか。スブーティよ。〈ほとけの法、ほとけの法〉というのは、ほとけの法の否定であると如来が言ったのである。それだから、〈ほとけの法〉というのである。」

一相無相分第九

第九節　あらそいをこえたもの

９－１

「スブーティよ。どう思うか。〈ネハンへの道が確実になったもの〉は『私はネハンへの道が確実になった』と考えるであろうか。」

９－２

「世尊よ。そういうことはございません。〈ネハンへの道が確実になったもの〉『私はネハンへの道が確実になった』と考えるようなことはありません。

世尊よ、彼はなんにも得たわけではないからです。それですから〈ネハンへの道が確実になったもの〉といわれるのです。

色形を得たわけでもなく、音や香りや、味や触覚や、ものごとを得たわけでもないのです。それですから〈ネハンへの道が確実になったもの〉といわれるのです。

９－３

世尊よ。もし〈ネハンへの道が確実になったもの〉が『私はネハンへの道が確実になったのだ』と考えるとしたらば、彼は我の執着をもつことになり、生きものの執着、生命の執着、個人の執着を持つことになるのです。』」

９－４

「スブーティよ。どう思うか。〈あと一度しか生まれかわってこない

もの〉は『私は〈あと一度しか生まれかわってこないもの〉になった』と考えるであろうか。」

９－５

「世尊よ。そういうことはございません。〈あと一度しか生まれかわってこないもの〉が『私は〈あと一度しか生まれかわってこないもの〉になった』と考えるようなことはありません。」

「世尊よ。〈あと一度しか生まれかわってこないもの〉になったといっても、なんにもあるわけではないからです。それですから〈あと一度しか生まれかわってこないもの〉といわれるのです。」

９－６

「スブーティよ。どう思うか。〈もうけっして生まれかわってこないもの〉は『私は〈もうけっして生まれかわってこないもの〉になった』と考えるであろうか。」

９－７

「世尊よ。そういうことはございません。〈もうけっして生まれかわってこないもの〉が『私は〈もうけっして生まれかわってこないもの〉になった』と考えるようなことはありません。世尊よ。〈もうけっして生まれかわってこないもの〉になったといっても、なんにもするわけではないからです。それですから〈もうけっして生まれかわってこないもの〉といわれるのです。」

９－８

「スブーティよ。どう思うか。ひじりは『私はひじりになった』と考えるであろうか。」

９－９

「世尊よ。そういうことはございません。ひじりが『私はひじりになった』と考えるようなことはありません。世尊よ。ひじりというようなものは、なんにもないからです。それですから〈ひじり〉というのです。

９－１０

世尊よ。もしひじりが『私はひじりになった』と考えるとしたならば、彼は我の執着を持つことになり、生きものの執着、生命の執着、個人の執着を持つことになるのです。

９－１１

世尊よ。如来でありひじりであるみほとけは、私のことを『〈あらそいをこえたもの〉たちのなかでも第一人者である』と仰せになりました。

９－１２

世尊よ。私はひじりであり欲望をすてさっています。世尊よ。しかし私は自分が『ひじりであり欲望をすてさったものである』と考えるようなことはありません。世尊よ。もし自分が『ひじりであり欲望をすてさったものである』と考えるとしたならば、如来が私のことを断定して『生まれただしいスブーティは〈あらそいをこえたもの〉たちのなかでも第一人者であり、どこにもとらわれないから〈あらそいをこえたもの〉である』と仰せにはならなかったことでしょう。」

莊嚴淨土分第十

第十節　からだ

１０－１

「スブーティよ。どう思うか。如来が、如来でありひじりであるみほとけのディーパンカラ(燃燈仏)から受けとったものがなにかあるだろうか。」

１０－２

「世尊よ。そういうことはございません。如来が、如来でありひじりであるみほとけのディーパンカラから受けとったものはなんにもございません。」

１０－３

「スブーティよ。もしだれかボサツが『私は国土の建設をなしとげよう』というとすれば、その人のいう事は間違っている。スブーティよ。〈国土の建設、国土の建設〉というのは建設のないことであると如来はいった。それだから国土の建設というのである。

１０－４

スブーティよ。それゆえ、ボサツマカサツは、とらわれない心をおこさなければいけない。どこにもとらわれない心をおこさなければいけない。色形にとらわれない心をおこさなければいけない。音や香りや味や触覚やものごとにとらわれない心をおこさなければいけない。

１０－５

スブーティよ。たとえばひとりの人がいて、そのからだは大きく、山々の王のスメールほどもあるとしたならば、スブーティよ、どう思うか。その人のからだは大きいであろうか。」

１０－６

「世尊よ。大きいですとも。すぐれた方よ。そのからだは大きいですとも。なぜでしようか。世尊よ。〈からだ、からだ〉というべき存在ではないと如来は仰せになりました。それゆえに〈からだ〉というのです。世尊よ。それは存在ではないので、それゆえに〈からだ〉というのです。」

無為福勝分第十一

第十一節　経典のくどく

１１－１
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。どう思うか。ガンジスの大河の砂のかずだけガンジス河があるとする。そこにある砂のかずは多いであろうか。」

１１－２
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。それらのガンジス河のかずだけでも多いのです。そこにある砂のかずはなおさらのことです。」

１１－３
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。説いてきかせよう。教えてあげよう。それだけのガンジス河にある砂のかずだけの世界を、ある一人の女なり男なりが七種類の宝ものでみたして、如来でありひじりであるみほとけに贈りものとしてささげるとする。スブーティよ。どう思うか。その女なり男なりはそのために、たくさんのくどくをつんだことになるであろうか。」

１１－４
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。そうです。すぐれた方よ。そうです。女なり男なりはそ

のために、はかりきれず、かぞえきれないくらいたくさんのくどくをつんだことになるのです。」

１１－５

世尊は仰せになったーー

「スブーティよ。女なり男なりがそれだけの世界を七種類の宝ものでみたして、如来でありひじりであるみほとけたちに贈りものとしてささげるとしても、もし生まれただしい男子なり女子なりが、この経典のうちから、たとえ四行詩をひとつでもおぼえておいて、ほかの人たちに教えて説いてきかせるとすれば、このほうがそれによって、はかりしれずかぞえきれないくらいさらに多くのくどくをつむことになる。」

尊重正教分第十二

第十二節　神聖な場所

１２－１

「スブーティよ。さらにまた、もしある土地で、この経典のうちから、たとえ四行詩をひとつでもおぼえておいて、述べたり説いて聞かせたりするとすれば、その土地は神々や人間やアスラたちをもふくめて世界のものたちが礼拝すべき神聖な場所となるはずである。まして、この経典をそっくりそのままおぼえて、読み研究し、ほかのものたちのためにくわしく説いてきかせるものがあれば、なおさらのことである。スブーティよ。彼らはもっともすぐれた奇瑞をもつであろう。

１２－２

スブーティよ。そういう地方には師とあおぐべきものが住み、またはいろいろの賢いすぐれたものの住むところとなるであろう。」

如法受持分第十三

第十三節　三十二の特徴

１３－１
このように仰せになったとき、長老のスブーティは世尊にむかって次のように申しあげたーー
「世尊よ。この経典の名は何と申しますか。また、どういうようにおぼえたらよいでしょうか。」

１３－２
このように申し上げたとき、世尊は長老のスブーティにむかって次のように仰せになったーー
「スブーティよ。この経典の名はプラジュニャー・パーラミター（般若波羅蜜）という。そのようにおぼえておくがよい。

１３－３
なぜか。スブーティよ。如来がプラジュニャー・パーラミターであると説くのはパーラミターの否定であると如来は説いた。それだからプラジュニャー・パーラミターというのである。

１３－４
スブーティよ。どう思うか。如来が説いた法というものがなにかあるだろうか。」

１３－５
スブーティは申しあげたーー

「世尊よ。いいえ。如来がお説きになった法というものはなんにもございません。」

１３－６
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。どう思うか。この広い宇宙にある土のほこりは多いだろうか。」

１３－７
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。土のほこりは多いですとも。すぐれた方よ。多いですとも。なぜでしょうか。世尊よ。如来が土のほこりであるとしてお説きになったのはほこりの否定であると如来はお説きになりました。それだから土のほこりというのです。

１３－８
また、如来がこの世界であるとお説きになったのは世界の否定であると如来はお説きになりました。それだから世界というのです。」

１３－９
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。どう思うか。如来でありひじりであるみほとけは偉大な人物にそなわる三十二の特徴によって見わけがつくであろうか。」

１３－１０
スブーティは申しあげたーー
「いいえ。世尊よ。如来でありひじりであるみほとけは偉大な人物にそなわっている三十二の特徴によって見わけがつくものではあり

ません。

１３－１１

なぜでしょうか。偉大な人物にそなわっている三十二の特徴であると如来がお説きになったのは、特徴の否定であると如来は仰せになりました。それゆえに、偉大な人物にそなわっている三十二の特徴というのです。」

１３－１２

世尊は仰せになったーー

「スブーティよ。女なり男なりがあって、毎日ガンジス河の砂のかずほどの自分のからだを提供し、こうして提供しながらガンジス河の砂のかずほどのカルパ（長い時間）のあいだ自分のからだを提供しつづけるとする。また一方ではこの経典のうちから、たとえ四行詩をひとつでもおぼえておいて、ほかの人たちに教えて説いてきかせるとすれば、この方がそれによって、はかりしれずかぞえきれないくらいさらに多くのくどくをつむことになる。」

離相寂滅分第十四

第十四節　パーラミター

１４－１
そのとき長老のスブーティは法に感動して涙をながした。彼は涙をふいてから世尊にむかって次のように申しあげた――

１４－２
「世尊よ。おどろくべきことです。すぐれた方よ。きわめておどろくべきことです。というのは、この経典を如来がお説きになるのは、この上ない乗りものに乗って出発したものたちのため、もっともすぐれた乗りものに乗って出発したものたちのためです。

１４－３
世尊よ。私が認識を持つようになって以来、いまだかつてこのような経典を聞いたことがありません。世尊よ。もっともおどろくべき性質をそなえたボサツでなければ、この経典が説かれたときに、それを聞いて正しい思いをおこすことはできますまい。

１４－４
なぜでしょうか。世尊よ。正しい思いというのは正しい思いの否定のことです。ゆえに如来は〈正しい思い、正しい思い〉と仰せになるのです。

１４－５
世尊よ。その経典が説かれているときに、それを私が理解し受けいれるということはふしぎなことではありません。

１４－６
世尊よ。しかし、将来、後世になって、第二の五百年代に正しい教えがほろびるころ衆生たちがこの経典を聞き、おぼえ、述べたり説いて聞かせたり、ほかのものたちにくわしく説明してやるとすれば、そういう衆生たちはもっともおどろくべき性質をそなえているにちがいありません。

１４－７
世尊よ。またそれらのものにおいては「自我」という考えはおこらないし、「生きもの」という考えも、「生命」という考えも、「個人」という考えもおこりません。またそれらのものにおいては考えも考えの否定もおこりません。

１４－８
なぜでしょうか。世尊よ。「自我」という考えは考えの否定です。「生きもの」という考え、「生命」という考え、「個人」という考えは考えの否定です。

１４－９
なぜでしょうか。みほとけである世尊たちはあらゆる考えを超越しておられるからです。」

１４－１０
このように申しあげたときに世尊は長老のスブーティにむかって次のように仰せになった――

「スブーティよ。そのとおりである。もっともおどろくべき性質をそなえた衆生でなければ、この経典が説かれたときに、おそれおののきおじずにはいられない。なぜか。スブーティよ。もっともすぐれたパーラミターであると如来の説くのはパーラミターの否定である。スブーティよ。如来がもっともすぐれたパーラミターとして説くものを、はかりしれないほどのみほとけであると世尊たちが説くのであるゆえに、もっともすぐれたパーラミターという。

１４－１１
スブーティよ。また如来における忍耐のパーラミターはパーラミターの否定である。

１４－１２
なぜか。スブーティよ。私がカリンガ王であつて、手足をはじめからだのあらゆる部分や肉をたちきったとき、私には「自我」という考えも「生きもの」という考えも「生命」という考えも「個人」という考えも、またどのような考えも、考えの否定もおこらなかった。

１４－１３
もしあのとき私に「自我」という考えがおこったとすれば、その際に私に恨むという考えもおこったにちがいない。もし私に「生きるもの」という考え、「生命」という考え、「個人」という考えがおこったとすれば、その際私に恨むという考えもおこったにちがいない。

１４－１４
スブーティよ。私は思いだす。かつて以前のこと、私は五百の生涯のあいだ仙人となって忍耐を教えたのである。そのばあいにも私は

「自我」という考えも「生きもの」という考えも、「生命」という考えも、「個人」という考えもおこさなかった。
スブーティよ。それであるからボサツマカサツは、あらゆる考えをすてて、そのうえなく正しい悟りにむかう決心をしなければならない。物にこだわる心をおこしてはいけない。音や香りや、味や、触覚の対象や、ものごとにこだわる心をおこしてはいけない。教えにこだわる心をおこしてはいけない。教えの否定にこだわる心をおこしてはいけない。どんなものにもこだわる心をおこしてはいけない。

１４－１５
なぜであるか。安定しているというのはこだわりないことである。それであるから如来は『ボサツはこだわりなく施しをしなればいけない』と言われたのである。ものや、音や、香りや、味や、触覚や、ものごとにこだわることなく施しをしなければいけない。

１４－１６
スブーティよ。またボサツはすべての衆生のために、このような施しをあたえなればいけない。なぜであろうか。スブーティよ。この衆生という考えは考えの否定である。如来がこのように、《あらゆる衆生》といわれたのは衆生の否定にほかならない。

１４－１７
如来は真実を語り、真理を悟り、ありのままを語り、あやまりなく語る。如来はいつわりを語るものではない。

１４－１８
スブーティよ。また如来がよく悟り、教え、思いめぐらした法においては真実もなければ、いつわりもない。

１４－１９

スブーティよ。たとえば、くらやみのなかにいる人はなんにも見ることができない。実体的な見かたをするボサツもそれと同じようであると見られる。それは実体的な見方で施しをあたえるのである。スブーティよ。また、たとえば月のみえる人は朝あかるくなって太陽がのぼったとき、いろいろな色かたちを見ることができる。実体的な見かたをしないボサツもそれと同じようであると見られる。それは実体的な見かたをしないで施しをあたえるのである。

１４－２０

スブーティよ。また、生まれただしい男子なり女子なりが、この経典をまなび、おぼえ、読み、ならい、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるとする。如来はこういう人びとを仏陀の智慧で知る。如来はこういう人びとを仏陀のまなこで見る。如来はこういう人びとを悟るのである。スブーティよ。それらすべての衆生たちは、はかりしれず、かぞえきれないくらいたくさんのくどくをつみ、身につけることになるであろう。」

持經功德分第十五

第十五節　第一等の乗りもの

１５－１

「スブーティよ。また女なり男なりがあって、午前中にガンジス河の砂のかずほどの自分のからだを提供し、同じように、ひるどきにもガンジス河の砂のかずほどの自分のからだを提供し、午後にもガンジス河の砂のかずほどの自分のからだを提供する。こうして何百千万億のカルパ（長い時間）のあいだ自分のからだを提供するとする。ところがまた一方では、この経典を聞いて、そむくことがないとすれば、この方が、それによってはかりしれず、かぞえきれないくらいさらに多くのくどくをつむことになる。まして、書きうつしてから、まなび、おぼえ、読み、ならい、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるものがあれば、なおさらのことである。

１５－２

スブーティよ。また、この経典は考えもおよびつかず、くらべられるものもない、スブーティよ。この経典を如来が説いたのは、第一等の乗りものにのって出発した衆生たちのためであり、もっともすぐれた乗りものにのって出発した衆生たちのためである。この経典をまなび、おぼえ、読み、ならい、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるとする。スブーティよ。如来はそういう人びとを仏陀の智慧で知る。スブーティよ。如来はそういう人びとを仏陀のまなこで見る。如来はそういう人びとを悟るのである。

１５－３

スブーティよ。すべてそういう衆生たちは、はかりしれないくどくをつんでいることになるであろう。考えもおよびつかずくらべられるものもなく、かぎりなく、はかりしれないくどくをつんでいることになるであろう。なぜであろうか。スブーティよ。下劣な目的をもとめる衆生たちは、この経典を聞くことができない。「自我」の執着があり「生きもの」の執着があり「生命」の執着があり「個人我」の執着があるものたちは、この経典を聞くことも、まなぶことも、おぼえることも、読むことも、ならうこともできないのである。そのようなことは、あり得ないのである。

１５－４

スブーティよ。またもしある土地で、この経が説かれるならば、それは神々や人間やアスラたちをもふくめて、世界のものたちが供養すべき土地となるはずである。それは尊敬し崇拝すべき土地となるはずである。それは礼拝すべき土地となるはずである。」

舩淨業障分第十六

第十六節　燃燈仏

１６－１

「スブーティよ。また、生まれただしい男子なり、女子なりがこのたぐいの経をまなび、おぼえ、読み、ならい、よく心に思いめぐらせ、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるとする。そういうものたちが苦しめられ、ひどいめにあうことがあるかもしれない。

１６－２

なぜであろうか。スブーティよ。彼らは前の生涯で悪い行いをしたので、当然地獄の苦しみを受けなければならないことになっていたのだが、現にこの世で前の生涯の悪い行いのつぐないをして、仏陀の悟りに達するようになるのである。

１６－３

スブーティよ。思いかえせばむかし、かぞえきれぬカルパのむかし、ディパンカラ（燃燈仏）如来という聖者なるみほとけのほかに、さらに八十四の百千万億倍の方々があったが、私はそれらの方に仕えて満足させ、不満を買うようなことはなかった。

１６－４

スブーティよ。ところが、私がそれらの仏陀世尊たちに仕えて満足させ、不満を買うようなことがなかったということにくらべると、のちの時代、のちの世になって、のちの五百年のとき、正しい法が

滅びようという時になって、このたぐいの経をまなび、おぼえ、読み、ならい、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるものの方がくどくが大きい。前の場合のくどくはこれにくらべると百分の一にもおよばないし、千分の一、百千分の一、万分の一、百万分の一、百千万分の一、百千万億分の一、兆分の一、京分の一にもおよばないのである。

１６－５

スブーティよ。またもしこのような生まれただしい男子なり女子なりのつむくどくを私が述べるとしたならば、それらの生まれただしい男子なり、女子なりがそのばあいにつみ、身につけるくどくがどんなものかということになると、それを聞けば衆生たちが正気を失い、心があやしくなるほどである。

１６－６

スブーティよ。またこの経典は考えもおよばず、くらべられるものもないと如来は説いたのであるが、その報いもまた考えもおよばぬものが期待されるのである。」

究竟無我分第十七

第十七節　ボサツの乗りもの

１７－１
そのとき、長老のスブーティは世尊にむかって、こう申しあげた――
「世尊よ。ボサツの乗りものにのって出発したものは、どのようにあるべきでしょうか。どのように行うべきでしょうか。どのような心がまえをしたらばよいのでしょうか。」

１７－２
世尊は仰せになった――
「スブーティよ。ここに、ボサツの乗りものにのって出発したものは『生きとし生けるものを私は〈あますところのないネハンの境地〉においてネハンさせるべきであり、

１７－３
しかも生きものたちをネハンさせておいて、だれ一人ネハンさせられたものはないのである』と、こういう心を起すべきである。

１７－４
なぜであろうか。スブーティよ。もしボサツにとって『生きもの』という考えがおこるとすれば、それはボサツとは言われないのである。『生命』という考えなり、もしくは『個人』という考えなりが起るとすれば、それはボサツとは言われないのである。

１７－５
なぜであろうか。スブーティよ。〈ボサツの乗りものにのって出発したもの〉というような法は、まったく存在しないのである。

１７－６
スブーティよ。どう思うか。如来が、ディーパンカラ（燃燈仏）のみもとにあって、このうえない、正しいさとりをさとったというような法が、なにかあるのだろか。」

１７－７
こう仰せになったとき、長老のスブーティは世尊にむかって、次のように申しあげた――
「世尊よ。私が世尊のお言葉の意味を理解しているかぎりでは、如来が、如来でありひじりであるみほとけのディーパンカラのみもとにあってこのうえない、正しいさとりをおさとりになったというような法は、なにもございません。」

１７－８
このように申しあげたとき、世尊は長老のスブーティにむかって、次のように仰せになった――
「そのとおりである。スブーティよ。そのとおりである。如来が、如来でありひじりであるみほとけのディーパンカラのみもとにあって、このうえない、正しいさとりをさとったというような法は、なんにもないのである。

１７－９
また、スブーティよ。もし如来がさとったというような法がなにかあるとするならば、ディーパンカラ如来が私の将来を預言して『青

年よ。汝は未来の世に、シャークヤムニ如来という、ひじり、みほとけとなるであろう』とは言われなかったことであろう。

１７－１０

スブーティよ。しかし、如来である、ひじりであるみほとけは、このうえない、正しいさとりをさとったというような法は、なんにもないのであるから、それ故に、私はディーパンカラ如来から『青年よ。汝は未来の世に、シャークヤムニ将来という、ひじり、みほとけとなるであろう』と言って、如来を預言されたのである。

１７－１１

なぜであろうか。スブーティよ。如来というのは真実の真如というのと同じ意味である。スブーティよ。如来というのは生ずることのない法性と同じ意味である。スブーティよ。如来というのは法の断絶と同じ意味である。如来というのは絶対的に生ずることがないというのと同じ意味である。なぜであろうか。スブーティよ。生ずることがないというのが最高の真理である。

１７－１２

もし誰かが『如来であり、ひじりであるみほとけは、このうえない正しいさとりをおさとりになった』と言うとすれば、その人はまちがったことを言っているのである。

１７－１３

なぜであろうか。スブーティよ。如来がこのうえもない正しいさとりをさとったというような法は、なんにもないのである。

１７－１４

またスブーティよ。如来がさとりまたは説いた法については、真実

もなければあやまりもない、それであるから、如来は『あらゆる法は仏陀の法である』と言うのである。

１７－１５
なぜであろうか。スブーティよ。あらゆる法というのは法の否定であると如来は言ったのである。それだから『あらゆる法は仏陀の法である』と言うのである。

１７－１６
たとえば〈身をそなえ、身の大きな人〉というようなものである。」

１７－１７
「世尊よ。如来が〈身をそなえ、身の大きな人〉と言われるのは、身の否定であると如来は言われました。それだから〈身をそなえ、身の大きい〉と言うのです。」

１７－１８
「スブーティよ。そのとおりである。もしボサツが『私は生きものたちをネハンさせてやろう』と言うとすれば、それはボサツとは言われない。なぜであろうか。スブーティよ。ボサツというような法がなにかあるのだろうか。」

１７－１９
「いいえ、世尊よ。ボサツというような法はべつになにもありません。」

１７－２０
「スブーティよ。〈生きもの、生きもの〉というのは〈生きものの否定〉であると如来は言った。それだから〈生きもの〉と言うのであ

る。それだから如来は『すべてのものごとには〈自我〉がない』『すべてのものごとには〈生命〉がなく〈成長〉がなく〈個人〉がない』というのである。

１７－２１
スブーティよ。もしボサツが『私の国土の建設を完成しよう』と言うとすれば、それは、まちがったことを言うのである。なぜであろうか。スブーティよ。〈国土の建設、国土の建設〉というのは建設の否定であると如来は言った。それだから〈国土の建設〉というのである。

１７－２２
スブーティよ。もしボサツが『ものごとには〈自我〉がない』『ものごとには〈自我〉がない』といって理解するならば、それを如来であり、ひじりであるみほとけは〈ボサツ〉〈マカサツ〉であると名づけるのである。」

一體同觀分第十八

第十八節　仏陀のまなこ

１８－１
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。どう思うか。如来には肉体的の眼があるか。」

１８－２
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。その通りであります。如来には肉体的の眼があります。」

１８－３
「スブーティよ。どう思うか。如来には神々しい眼があるか。」

１８－４
「世尊よ。その通りであります。如来には神々しい眼があります。」

１８－５
「スブーティよ。どう思うか。如来には智慧の眼があるか。」

１８－６
「世尊よ。その通りであります。如来には智慧の眼があります。」

１８－７
「スブーティよ。どう思うか。如来には法の眼があるか。」

１８－８
「世尊よ。その通りであります。如来には法の眼があります。」

１８－９
「スブーティよ。どう思うか。如来には仏陀の眼があるか。」

１８－１０
「世尊よ。その通りであります。如来には仏陀の眼があります。」

１８－１１
「スブーティよ。どう思うか。ガンジスの大河にあるだけの砂を如来は述べるであろうか。」

１８－１２
「世尊よ。その通りであります。すぐれた方よ。そのとおりであります。如来はその砂をお述べになります。」

１８－１３
「スブーティよ。どう思うか。ガンジスの大河にあるだけの砂の数だけの、ガンジス河にあるだけの砂ほどの世界といえば、たくさんの世界であろうか。」

１８－１４
「世尊よ。そのとおりであります。すぐれた方よ。そのとおりであります。それだけの世界はたくさんであります。」

１８－１５
「スブーティよ。それだけの世界における生きものたちのさまざまな心のながれを私は知っているのである。

１８－１６

なぜであろうか。スブーティよ。〈心のながれ、心のながれ〉というのは、ながれの否定であると如来は言ったのである。それだから〈心のながれ〉というのである。

１８－１７

なぜであろうか。スブーティよ。過去の心はとらえようがない。未来の心はとらえようがない。現在の心はとらえようがないのである。」

法界通化分第十九

第十九節　くどく

１９－１
「スブーティよ。どう思うか。生まれただしい男なり、女なりが、この広い宇宙を七種類の宝ものでみたして、如来であり、ひじりである、みほとけたちに贈りものとしてささげるとすれば、その生まれただしい男なり、女なりは、それによってたくさんのくどくをつむことになるであろうか。」

１９－２
スブーティは申しあげたーー
「世尊よ。たくさんです。すぐれた方よ。たくさんです。」

１９－３
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。そのとおりである。そのとおりである。その生まれただしい男なり、女なりは、それによって、はかり知れず、かぞえきれないくらいたくさんのくどくをつむことになる。

１９－４
なぜか。スブーティよ。〈くどくをつむ〉〈くどくをつむ〉というのは、つむことの否定である、と如来は言ったのである。それだから〈くどくをつむ〉というのである。

１９－５

スブーティよ。もしまた〈くどくをつむ〉ということが存在するものとすれば、如来は〈くどくをつむ〉〈くどくをつむ〉とは言わなかったであろう。」

離色離相分第二十

第二十節　かたちのあるからだ

２０－１
「スブーティよ。どう思うか。かたちのあるからだをそなえているという点から、如来を見るべきであろうか。」

２０－２
スブーティは申しあげたーー
「いいえ。世尊よ。かたちのあるからだをそなえているという点から如来を見たてまつるべきではありません。

２０－３
なぜでしょうか。世尊よ。〈かたちのあるからだをそなえる〉〈かたちのあるからだをそなえる〉というのは、そなえることの否定である、と如来は仰せになりました。それですから〈かたちのあるからだをそなえる〉というのです。」

２０－４
世尊は仰せになったーー
「スブーティよ。どう思うか。いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見るべきであろうか。」

２０－５
スブーティは申しあげたーー

「いいえ。世尊よ。いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見たてまつるべきではありません。

２０－６

なぜでしょうか。世尊よ。〈いろいろの特徴をそなえている〉と如来が仰せになったのは、いろいろの特徴をそなえていることの否定である、と如来は仰せになりました。それですから〈いろいろの特徴をそなえている〉というのです。」

非説所説分第二十一

第二一節　法の教

２１－１
世尊は仰せになった――
「スブーティよ。どう思うか。〈私が法を教えた〉と如来が考えることがあろうか。」

２１－２
スブーティは申しあげた――
「いいえ。世尊よ。〈私が法を教えた〉と如来がお考えになることはありません。」

２１－３
「スブーティよ。〈如来が法を説いた〉などと言うものはいつわりを言うものである。スブーティよ。それは、ありもしない執着を私にしいるものである。

２１－４
なぜか。スブーティよ。〈説法〉〈説法〉というが、説法としてみとめられるような法は、なにも存在しないのである。」

２１－５
このように仰せになったとき、長老のスブーティは、世尊にむかって次のように申しあげた――

「世尊よ。のちの時代、のちの世になって、のちの五百年のとき、正しい法が、ほろびようというときになって、このたぐいの法を聞いて、信ずるような生きものたちがいるでしょうか。」

２１－６

世尊は仰せになったーー

「スブーティよ。かれらは生きものでもなく、生きものの否定でもない。

２１－７

なぜか。スブーティよ。〈生きもの〉〈生きもの〉というのは、すべて、スブーティよ、生きものの否定である、と如来は言った。それであるから、〈生きもの〉というのである。」

無法可得分第二十二

第二二節　正しいさとり

２２－１
「スブーティよ。どう思うか。如来が、このうえない、正しいさとりをさとった、というような法が、なにかあるのだろうか。」

２２－２
長老のスブーティは申しあげたーー
「いいえ。世尊よ。世尊よ。如来が、このうえない、正しいさとりを、おさとりになったというような法は、なにもございません。」

２２－３
世尊は仰せになったーー
「そのとおりである。スブーティよ。そのとおりである。そこには少しの法も存在せず、みとめられない。それであるから〈このうえない、正しいさとり〉というのである。」

淨心行善分第二十三

第二三節　善の法

２３－１

「またスブーティよ。その法は平等であつて、そこには高低はまったくない。それであるから〈このうえない、正しいさとり〉というのである。

２３－２

自我たることを否定し、生きものたることを否定し、生命たることを否定し、個人たることを否定するから、平等である。そういう、このうえない、正しいさとりはあらゆる善の法によってさとられる。

２３－３

なぜか。スブーティよ。〈善の法〉〈善の法〉というのは、法の否定である、と如来は言った。それであるから〈善の法〉というのである。」

福智無比分第二十四

第二四節　四行詩ひとつ

２４－１

「またスブーティよ。男なり、女なりがあって、この広い宇宙にあるだけの、山々の王のスメールを、七種類の宝のかたまりにして、如来であり、ひじりである、みほとけたちに、贈りものとしてささげるとする。また一方では、生まれただしい男なり、女なりが、このプラジュニャー・パーラミターの経典のうちから、たとえ四行詩をひとつでも、おぼえておいて、ほかの人たちに教えてやるとすれば、スブーティよ。前の場合のくどくは、これにくらべると、百千分の一にもおよばないし、ないしは兆分の一にもあたらないのである。」

化無所化分第二十五

第二五節　解脱させる

２５－１
「スブーティよ。どう思うか。〈私は生きものを解脱させてやった〉と如来が考えるであろうか。

２５－２
スブーティよ。そのような見方をしてはいけない。なぜか。スブーティよ。如来が解脱させたというような生きものは、まったくないのである。

２５－３
またスブーティよ。もし、如来が解脱させたというような生きものが、なにかあるとすれば、如来において〈自我〉という執着があることになり、〈生きもの〉という執着、〈生命〉という執着、〈個人〉という執着があることになろう。

２５－４
スブーティよ。〈自我〉という執着は、執着の否定のことである、と如来は言った。しかし、おろかな一般の人たちは、それに執着する。

２５－５
スブーティよ。おろかな一般の人たちというのは、人たちの否定で

ある、と如来は言った。それであるから、おろかな一般の人たちというのである。」

法身非相分第二十六

第二六節　いろいろの特徴

２６－１
「スブーティよ。どう思うか。いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見るべきであろうか。」

２６－２
「世尊よ。そうではありません。私が世尊のお言葉の意味を理解しているかぎりでは、いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見たてまつるべきではありません。」

２６－３
みごと、みごと、そのとおりである。

２６－４
スブーティよ。いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見るべきであるとすれば、全世界を支配する帝王もまた如来であるということになるであろう。それであるから、いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見るべきではない。」

２６－５
「私が世尊のお言葉の意味を理解しているかぎりでは、いろいろの特徴をそなえているという点から、如来を見たてまつるべきではありません。」

２６－６

そこで、世尊は、この機会に、次の詩をおとなえになった――

「色かたちによって私を見、
声によって私を求めるものは、
あやまった努力をしているのだ。
かれらは私を見ることができない。

仏陀を法として見るべきである。
導師たちは法を身としている。
法性は知られない。
それを知ることはできない。」

無斷無滅分第二十七

第二七節　不滅の法

２７－１

「スブーティよ。どう思うか。もろもろの特徴をそなえていることによって、如来が、このうえない、正しいさとりをさとったのであろうか。

２７－２

スブーティよ。だが、そういう見かたをしてはいけない。なぜか。スブーティよ。もろもろの特徴をそなえていることによって、如来が、このうえない、正しいさとりをさとったというようなことはない。

２７－３

スブーティよ。またボサツの乗りものにのって出発したものたちは、なにかの法が滅したり、たちきられたりすることを考えるであろうか。

２７－４

だがそういう見かたをしてはいけない。なぜか。ボサツの乗りものにのって出発したものたちは、どんな法も滅したり、たちきられたりするなどとは考えないのである。」

不受不貪分第二十八

第二八節　わがもの

２８－１

「スブーティよ。また、生まれただしい男なり女なりが、ガンジス河にある砂の数だけの世界を七種類の宝ものでみたして如来でありひじりであるみほとけに、贈りものとしてささげるとする。また一方ではボサツが、無我と不生の法を受けいれる能力を得るとすれば、このほうがそれによってはかりしれず、数えきれないくらい、さらに多くのくどくをつむことになる。スブーティよ。また、ボサツ・マカサツは、つんだくどくをわがものにしてはいけない。」

２８－２

「世尊よ。ボサツは、つんだくどくを、わがものにしてはいけないのでしょうか。」

２８－３

「スブーティよ。わがものにするというのは、わがものにしないことである。それだからわがものにするというのである。」

威儀寂靜分第二十九

第二九節　不來不去

２９－１

「また実にスブーティよ。もし誰かが『如来は来たり、去ったり、坐ったり、臥したりする』と言うとすれば、スブーティよ。その人は私のいう言葉の意味を理解しないのである。

２９－２

なぜか。スブーティよ。如来と言われるものは、どこへも去らず、どこからも来ないのである。だから、如来であり、ひじりであり、ただしくさとったほとけというのである。」

一合離相分第三十

第三十節　原子のあつまり

３０－１

「またスブーティよ。生まれただしい男なり、女なりがあって、この宇宙全体の広い世界にある土の粒だけの数の世界をこなごなにして、原子のあつまりのようにしたとする。スブーティよ。どう思うか。その原子のあつまりは数多いであろうか。」

３０－２

「世尊よ。そのとおりです。すぐれた方よ。そのとおりです。その原子のあつまりは、数多いのであります。なぜでしょうか。世尊よ。もし、原子のあつまりが数多くあったとすれば、如来は〈原子のあつまり〉と仰せにはならなかったでしょう。

３０－３

世尊よ。如来が〈原子のあつまり〉と仰せになったのは、あつまりの否定である、と如来が仰せになりました。だから〈原子のあつまり〉というのです。

３０－４

如来が〈宇宙ぜんたいの広い世界〉と仰せになったのは、世界の否定であると如来が仰せになりました。だから〈宇宙ぜんたいの広い世界〉というのです。

３０－５

世尊よ。もし、世界というものがあるとしたならば、一つのかたまりに対して執着することになるでありましょう。そして〈一つのかたまりに対する執着〉と如来が仰せになったのは、執着の否定である、と如来が仰せになりました。ですから〈一つのかたまりに対する執着〉というのです。」

３０－６

「スブーティよ。〈一つのかたまりに対する執着〉というのは言葉で言いあらわされず、口で述べられないものである。それは愚かな卑しい人々が執着するものなのである。」

知見不生分第三十一

第三一節　法という考え

３１－１
「なぜであるか。スブーティよ。もし誰かが『如来は自我という見解を述べた』とか『如来は生きものという見解、生命という見解、個人という見解を述べた』などと言うとする。スブーティよ。そのひとの言うことは正しいであろうか。」

３１－２
「世尊よ。ちがいます。そう言うことは正しくはありません。世尊よ。如来が〈自我という見解〉であると言われたのは、見解の否定である、と如来は仰せになりました。だから〈自我という見解〉と言うのです。」

３１－３
「スブーティよ。そのとおりである。ボサツの乗りものにのって出発したものは、ありとあらゆる法を知り、見、受けいれなければならない。

３１－４
しかも、法という考えにおいても、とどまることがないようにしなければならない。なぜであろうか。〈法という考え、法という考え〉というのは、考えの否定である。と如来は言った。だから〈法という考え〉と言うのである。」

應化非眞分第三十二

第三二節　むすび

３２－１

「またスブーティよ。ボサツ・マカサツが、はかりきれずかぞえきれないくらいの世界を、七種類の宝物でみたして、如来であり、ひじりである、みほとけたちに贈りものとしてささげるとする。また、一方では、生まれただしい男なり、女なりが、このプラジュニャーパーラミターの経典のうちから、たとえ四行詩をひとつでも、まなび、おぼえ、読み、ならい、ほかのものたちにくわしく説いてきかせるとすれば、この方がそれによって、はかりしれず、かぞえきれないくらい、さらに多くのくどくをつむことになる。

３２－２

現象界というものは
星や眼病や燈火や
露や水の泡や
夢や稲光りや雲のような
ものであると見るがよい。」

３２－３

世尊はこのように仰せになった。

スブーティと、かの男女の出家たち、男女の在家信者たち、ボサツたちを初め、神々、人々、アスラ、ガンダルヴァたちをふくむ世

界のものたちは、喜んで世尊のお言葉をお受けした。

３２－４
聖なる金剛のきれあじのある
尊いハンニャ・ハラミツ　おわり

催破具としての金剛石

宇井伯壽　譯

１９５８

仏母なる聖般若波羅蜜に帰命す。

法會因由分第一

第一、序分（第一分）

１－１
私は此経を下の如くに聞いた。
一頃、世尊はシュラーヴスティー市外、ヂェーク林における給孤独長者園に、千二百五十人の比丘よりなる比丘僧伽と倶に、遊履した。

１－２
さても、世尊は、午前の頃、内衣を着け、衣鉢を執って、シュラーヴスティー大市内に、行乞の為に入った。

１－３
そこで、世尊はシュラーヴスティー大市内を行乞の為に往来して、食事を為し終わった。食事を終わって後，行乞から帰り、衣鉢を収め、両足を洗うて、設けられた座に結跏趺坐し、体を真直に置き、思ひを現前せしめて、坐した。

１－４
その時、多くの比丘も世尊の居る所に近づいた。近づいて、世尊の

両足を頭をもて拝し、そして世尊を右繞三匝して一側に坐した。
（以上第一分）

善現起請分第二

第二、正宗分

第一分（第二分）

２－１
又、其際、長老須菩提がその同じ会座の中に来集して坐して居た。

２－２
時に、長老須菩提は坐より起ち、上衣を一肩のみに為し、右膝を地に著けて、世尊の在す方に合掌を向け、世尊に次のことを言うた。

２－３
有り難いことである、世尊よ，最上の有り難いことである、善逝よ、如来、応供、正等覚者が、凡ての菩薩大士を最上の摂受を以て摂受して居ることや。

２－４
又、世尊よ、有り難いことである、如来、応供、正等覚者が、凡ての菩薩大士に最上の付嘱を以て付嘱して居ることや。

２－５
然らば、世尊よ、菩薩乗に発趣した善男若しくは善女は、(一)、如何に住すべきであるか、(二)、如何に修行すべきであるか、(三) 如

何に其心を制伏すべきであるか。

2－6

この如く言はれた時に、世尊は長老須菩提に次の如く答へた。善い哉、善い哉、須菩提よ、その如くである、須菩提よ、汝の言ふ如く、その如くである。如来は凡ての菩薩大士を最上の摂受を以て摂受して居る。又，如来は凡ての菩薩大士に最上の付嘱を以て付嘱して居る。

2－7

よって、須菩提よ、善く聴き、又、善く思念せよ、私は、汝に、菩薩乗に発趣した者が、(一)、如何に住すべきや、(二)、如何に修行すべきや、(三)、如何に其心を制伏すべきやを説くであらう。

2－8

しかあれ、世尊よ、と、長老須菩提は世尊に答へた。(以上第二分)

大乘正宗分第三

第二分（第三分）

3－1

世尊は彼に次のことを曰うた。今，須菩提よ、菩薩乘に発趣した者は、（一）以下の如き心を起すべきである。即ち、須菩提よ、衆生界に在る諸の衆生にして、衆生の摂にて摂せられる、若しくは卵生、若しくは胎生、若しくは湿生、若しくは化生、若しくは有色のもの、若しくは無色のもの、若しくは有想のもの、若しくは無想のもの、若しくは有想にも非ず、無想にも非ざるもの、と、及び、何れの衆生界として指定せられるもその中に指定せられるのを含める限りとの彼等一切をして、私は、無余涅槃界に於いて般涅槃せしめねばならぬ、と。

3－2

然し、此の如くにして無量の衆生を般涅槃せしめても、一人の衆生と雖、般涅槃せしめられたものは無い。

3－3

何となれば、若し、須菩提よ、菩薩に衆生想が起るであらうならば、彼は菩薩ではない、といはねばならないからである。

3－4

何となれば、須菩提よ、何人にでも、衆生想が起り、命我想若しくは人想が起る人は菩薩とはいはれ得ないから。（以上第三分）

妙行無住分第四

第三分（第四分）

４－１
然るに、又、実に、須菩提よ、（二）菩薩は事に住して布施すべきではない。何処に住しても布施すべきものではない。色に住して布施すべきではなく、声、香、味、触、法に於て住しても布施すべきでない。

４－２
(三)、実に、須菩提よ、菩薩大士は相想に於てすらも住しない如くに、此の如くに布施せねばならぬ。

４－３
何となれば、須菩提よ、菩薩にして、不住にして布施すれば、須菩提よ、彼の福聚の量は之を計ることが容易では無いから。

４－４
須菩提よ、東方に於て虚空の量を計ることは容易であると考へるか。

４－５
須菩提答ふ、否、然らず、世尊よ。

４－６

世尊曰く。之と同じく、南、西、北、下、上、四維に於て、普ねく十方に於て、虚空の量を計ることが容易であるか。

４－７

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ。

４－８

世尊曰く。之と全く同じく、須菩提よ、菩薩が不住にして布施すれば、須菩提よ、彼の福聚の量は之を計ることは容易でない。

４－９

実に、須菩提よ、菩薩乗に発趣した者は、相想に於てすらも住しない如くに、此の如くに布施をなさねばならぬのである。（以上第四分）

如理實見分第五

第四分（第五分）

5－1
須菩提よ、如来をば、相を具足するといふことで、見るべきであると考へるか。

5－2
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来は相の具足によってのみ見らるべきでは無い。何となれば、世尊よ、如来が相の具足を説く、それは即ち非相具足であるから。

5－3
かくいはれた時に、世尊は須菩提に次のことを曰うた。須菩提よ、相具足のある限りは虚妄であり、非相具足である限りは虚妄では無い。故に、如来は実に相非相から見らるべきである。（以上第五分）

正信希有分第六

第五分（第六分）

6－1

此の如く述べられた時に、長老須菩提は世尊に次のことを問うた。世尊よ、或は未来世、後の時、後の頃、後の五百歳正法破滅の起った時、これ等のかかる種類の経文の説かれるのに対して、これ（不）真実なりとの想を起す多少の衆生があるであらうか。

6－2

世尊は曰く。須菩提よ、汝はかく言ふこと勿れ、確かに、未来世、後の時、後の頃、後の五百歳正法破滅の起る時に於て、これ等のかかる種類の経文の説かれるに対して、真実なりとの想を起すであらう多少の衆生があるであらう。

6－3

然し、また、実に、須菩提よ、未来世に於て、後の時、後の頃、後の五百歳正法破滅の起る時に、これ等のかゝる種類の経文の説かれるのに対して、真実なりとの想を起すであらう有徳、有戒、有智の諸の菩薩大士があるであらう。

6－4

実に、須菩提よ、彼等菩薩大士は、啻に、一仏に承事したものであらうのみならず、又、啻に、一仏の下で善根を植えたものであらうのみならず、更に、又、実に、須菩提よ、多くの百千の諸仏に承事

し、多くの百千の諸仏の下で善根を植えた彼等諸菩薩であって、これらのかかる種類の経文の説かれるに対して、一念の誠信すらをも得るものであらう。

６－５

如来は、須菩提よ、仏智を以て彼等を知り、又、如来は、須菩提よ、仏眼を以て彼等を見、更に、如来は、須菩提よ、彼等を覚する。

６－６

彼等一切は、須菩提よ、無量無数の福聚を生じ、又、受けるであらう。

６－７

何となれば、実に、須菩提よ、これ等の菩薩大士には、我があるといふ想が起らず、衆生想が起らず、命我想が起らず、人想が起らないからである。

６－８

更に、又、須菩提よ、これ等の菩薩大士には、法想も起らない。之と同じく、非法想も無い。且つ、又、須菩提よ、彼等には想も起らず、非想も起らない。

６－９

何となれば、若し、須菩提よ、彼等菩薩大士に法想が起るであらうならば、彼等にはかの我執があるであらうし、衆生執、命我執、人執があるであらうから、

６－１０

又、若し非法想が起るであらうならば、彼等にはかの我執もあるで

あらうし、衆生執、命我執、人執もあるであらうから。

６－１１

何となれば、実に、又、須菩提よ、菩薩大士は法を取るべきでなく、非法をも取るべきでないからである。

６－１２

是の故に、如来は此義に随うて次の言を説いた、筏喩の法門を知解する者は法をすら捨つべきである、況んや非法をや、と。（以上第六分）

無得無説分第七

第六分（第七分）

７－１
又、更に、世尊は長老須菩提に次のことを述べた。須菩提よ、如来が、これ即ち無上正等覚であるとして、現覚した何等かの法がある、或は如来の教へた何等かの法がある、と考へるか。

７－２
かく言はれた時に、長老須菩提は世尊に次のことを答へた。世尊よ、私が世尊の所説の義を知解する所に従へば、如来は、これが無上正等覚である、と現覚したる何等の法も無く、又、如来の教へた法も無い。

７－３
何となれば、如来の現覚し、或は教へた法なるものは、即ち不可取であり、不可説であるからであるので、それは法でもなく、非法でもない。

７－４
何となれば、聖人は実に無為から顕はされたものであるから。（以上第七分）

依法出生分第八

第七分（第八分）

８－１

世尊曰く。須菩提よ、如何なる善男、若しくは善女にしても、この三千大千世界を、七宝を以て満たして、如来、応供、正等覚に布施せんに、而もその善男若しくは善女は、その因縁によつて、多く福聚を生ずるであらう、と考へるか。

８－２

須菩提答ふ。多く、世尊よ、多く、善逝よ、その善男若しくは善女は、その因縁によつて、福聚を生ずる。

８－３

何となれば、世尊よ、如来所説の福聚なるものは、それは即ち非聚である、と、如来は説いた、故に、如来は、福聚である、福聚である、と説くからである。

第八分（第八分）

８－４

世尊曰く。そして、又、実に、須菩提よ、善男若しくは善女があつて、この三千大千世界を七宝を以て満たして、如来、応供、正等覚に布施すると、この法門から少なくとも又四句より成る一偈のみを

取つて、他人の為に詳しく教説し開示すると、の中、此方が、その因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。

８－５

何となれば、これから、実に、須菩提よ、諸の如来、応供、正等覚の無上正等覚が生じ、また、これから諸仏世尊が生ずるからである。

８－６

何となれば、仏法である、仏法であるとは、須菩提よ、而もそれ等は非仏法である、と如来は説く、故に、仏法といはれるのであるから。（以上第八分）

一相無相分第九

第九分（第九分）

９－１
世尊曰く。また、預流のものに、私は預流果に達した、といふ考が起るや、如何。

９－２
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、預流のものに、私は預流果に達した、といふ考は起らない。何となれば、世尊よ、実に、彼は如何なる法にも預らない、故に、預流のものと称せられるのであるから。色にも預らず、声にも預らず、香にも預らず、味にも預らず、触にも預らず、法にも預らない、故に、預流のものといはれるのである。

９－３
若し、世尊よ、預流のものに、私は預流果に達した、といふ考が起るであらうならば、彼にはその我執があるであらう、衆生執、命我執、人執があるであらう。

９－４
世尊曰く。須菩提よ、一来のものにも、私は一来果に達した、といふ考が起るや、如何。

９－５

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、一来のものに、私は一来果に達した、といふ考は起らない。何となれば、実に、彼は一来性に預る何等の法でもない、故に、一来のものといはれるのであるから。

９－６

世尊曰く。須菩提よ、不還のものにも、私は不還果に達した、といふ考が起るや、如何。

９－７

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、不還のものに、私は不還果に達した、といふ考は起らない。何となれば、世尊よ、実に、彼は不還性に預る何等の法でもない、故に、不還のものといはれるのであるから。

９－８

世尊曰く。須菩提よ、阿羅漢にも、私は阿羅漢果に達した、といふ考が起るや、如何。

９－９

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、阿羅漢に、私は阿羅漢果に達した、といふ考は起らない。何となれば、世尊よ、実に、彼は阿羅漢と称せられる如何なる法でもない、故に阿羅漢といはれるのであるから。

９－１０

若し、世尊よ、阿羅漢に、私は阿羅漢果に達した、といふ考が起るならば、彼にはかの我執があるであらう、衆生執、命我執、人執があるであらう。

９－１１

其理由は下の如くである。私は、世尊よ、阿羅漢である、無諍住者中の最上者である、と如来正等覚によつて、指説せられて居る、

９－１２

私は、世尊よ、離欲の阿羅漢である。然し、私には、世尊よ、私は離欲の阿羅漢である、といふ考えは起らない。若し、私に、世尊よ、私は阿羅漢性に達した、といふ念があるならば、如来は、私に、善男須菩提は無諍住者の中の最上者で、何ものにも住しない、故に、無諍住者である、無諍住者である、といはれるのである、と授記しなかつたであらう。（以上第九分）

莊嚴淨土分第十

第十分（第十分）

１０－１

世尊曰く。須菩提よ、如来が然燈如来、応供、正等覚の許で得られた何等かの法なるものありや、如何。

１０－２

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来の然燈如来、応供、正等覚の許で得た如き一法もあることは無い。

第十一分（第十分）

１０－３

世尊曰く。須菩提よ、何れの菩薩にしても、私は諸諸の国土荘厳を成就するであらう、といふならば、彼はこれ妄語するものである。何となれば、国土荘厳である、国土荘厳であるといふのは、須菩提よ、それは即ち非荘厳である、と如来は説いた、故に国土荘厳といはれるのであるから。

第十二分（第十分）

１０－４

是の故に、今、須菩提よ、菩薩大士は此の如き不住の心を生ずべき

である、即ち何ものにか住する心を生ずべきでない、色に住する心を生ずへきでない、声、香、味、触、法に住する心を生ずべきでない。

第十三分（第十分）

１０－５

須菩提よ、譬べば人が具足身、大身のものであるとせん、それについて、彼の身体は譬へば須弥山王の如きかかる種類であるであらう。須菩提よ、然らばその身体は大であるか、如何。

１０－６

須菩提答ふ。それは大である、世尊よ、その身体は大であらう、善逝よ。何となれば、身体である、身体であるとは、世尊よ、それは非体である、と如来は説いた、故に、身体といはれるのであるから。実に，世尊よ、それは体でもなく、非体でもない、故に身体と称せられるのである。（以上第十分）

無爲福勝分第十一

第十四分（第十一分）

１１－１
世尊曰く。須菩提よ、ガンガー大河の中に在る限りの沙の数だけ、それだけの数のガンガー河があるとせん、それ等の中に在る沙なるものは多いであらうか、如何。

１１－２
須菩提答ふ。世尊よ、それだけのガンガー河すらも多いであらう、況んや、それ等ガンガー河に在る沙は猶更である。

１１－３
世尊曰く。吾は汝に告ぐ、須菩提よ、吾は汝に知らしめる。それ等のガンガー河に存する沙だけのそれだけの多数の世界を、或る婦女若しくは男子が、七宝を以て満たして、諸の如来、応供、正等覚に布施せんに、須菩提よ、かの婦女若しくは男子は、その因縁によつて、多く福聚を生ずるであらうか、如何。

１１－４
須菩提答ふ。多く、世尊よ、多く、善逝よ、その婦女若しくは男子は、その因縁によつて、無量無数の福聚を生ずるであらう。

１１－５
世尊曰く。実に、また、須菩提よ、婦女若しくは男子にして、それ

だけの多数の世界を、七宝を以て満たして、諸の如来，応供，正等覚に布施すると、善男若しくは善女にして、この法門から少なくとも四句より成る一偈のみをも取つて、他の人々の為に、教説開示すると、の中、此の方が、その因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。（以上第十一分）

尊重正教分第十二

第十五分（第十二分）

１２－１

然るに、又、実に、須菩提よ、何れの地域にあつても、この法門から、少なくとも、四句よりなる一偈のみもが取られて、或は説かれ、或は開示せられるならば、その地域は、天、人、阿修羅と共なるこの世界に対しての霊祠たるものにならう。従つて、この法門を全部残りなく受持し、読誦し、学修し、そして他の人々の為に、詳細に開示せん人々は、須菩提よ、すべて最勝の希有を具するものとならうこと言を俟たぬ。

１２－２

そして、須菩提よ、その地域には大師が止住し、或はあらゆる有智の師の地位にあるものが止住する。（以上第十二分）

如法受持分第十三

第十六分（第十三分）

１３－１

此の如く説かれた時に、長老須菩提は、世尊に、次のことをいうた。この法門は、世尊よ、何と名づけられるか、又、私はこれを如何に受持すべきか。

１３－２

かくいはれた時に、世尊は、長老須菩提に、次の如く曰うた。この法門は、須菩提よ、般若波羅蜜と称せられる。そして此の如くに受持せよ。

１３－３

何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜と如来の説くものこそは、即ちこれ、非波羅蜜であるに外ならぬ、と如来は説く、故に般若波羅蜜と称せられるのであるから。

１３－４

須菩提よ、如来の説いた所の何等かの法があるか、如何。

１３－５

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来の説いた所の一法すらも存しない。

第十七分（第十三分）

１３－６
世尊曰く。須菩提よ、三千大千世界に在る限りの地塵、それは蓋し多いであらうか、如何。

１３－７
須菩提答ふ。地塵は多いであらう、世尊よ、多いであらう、善逝よ。何となれば、世尊よ、如来がその地塵と説くものは、世尊よ、凡て非塵である、と如来は説く、故に、地塵であるといはれるのであるから。

１３－８
又、かの世界と如来の説くものは、即ち非界である、と如来は説く、故に世界と称せられるのである。

第十八分（第十三分）

１３－９
世尊曰く。須菩提よ、如来、応供、正等覚は三十二大人相によつて見らるべきである、と考へるか。

１３－１０
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来、応供、正等覚は三十二大人相によつて見らるべきではない。

１３－１１
何となれば、実に、世尊よ、如来の説く三十二大人相なるものは、

即ちこれ、世尊よ、非相である、と如来は説く、故に、三十二大人相と称せられるのであるから。

第十九分（第十三分）

１３－１２

世尊曰く。又、実に、須菩提よ、何れの婦女又は男子にしても、日々ガンガー河の沙に等しい数の身体を施捨し、此の如く施捨しつつ、ガンガー河の沙の数に等しい劫の間その身体を施捨するであらうものと、この法門から少なくとも四句より成る一偈のみを取つて、他の人々の為に教説し開示するであらうものと、の中、此の方が、その因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。（以上第十三分）

離相寂滅分第十四

第二十分（第十四分）

１４－１
そのとき、実に、長老須菩提は、法の威力によつて、涙を流した。彼は涙を拭うて、世尊に次の如くいうた。

１４－２
希有である、世尊よ、最上希有である、善逝よ。この法門が、最上乗に発趣した衆生の為に、最勝乗に発趣した者の為に、如来によつて説かれ、それに由つて、世尊よ、私に智が生じたことや。

１４－３
私には、世尊よ、かかる種類の法門は未だ曾て全く聞かれたことが無い。世尊よ、菩薩にして、今、この経が説かれる時、聞いて真実なりとの想を生ずるならば最勝希有を具せるものであるであらう。

１４－４
何となれば、世尊よ、実想なるものこそは、即ちこれ非想であるに外ならない、是の故に、如来は実想である、実想であると説くから。

第二十一分（第十四分）

１４－５
然し、世尊よ、私がこの法門の説かれつつあるのを領受し、信解するときに、私には希有ではない。

１４－６
又、世尊よ、諸の衆生があつて、来るべき未来世、後の時、後の五百歳に正法の破滅の起る時に、世尊よ、この法門を取つて受持し、読誦し、学修し、そして他の人々の為に、詳細に開示するであらうが、彼等は最勝希有を具せるものなのであらう。

第二十二分（第十四分）

１４－７
然るに、又、実に、世尊よ、彼等には我想が起らないであらう、衆生想も起らず、命我想も起らず、人想も起らないであらう。更に、彼等には、如何なる想も、又非想も起らないであらう。

１４－８
何となれば、世尊よ、かの我想なるものは即ちこれ非想であり、衆生想、命我想、人想なるものは即ちこれ非想であるからである。

１４－９
何となれば、諸仏世尊は実に一切の想を遠離せるものであるから。

第二十三分（第十四分）

１４－１０
此の如くいはれた時に、世尊は長老須菩提に次のことを曰うた。そ

れはその通り、須菩提よ、それはその通りである、彼等衆生が、今、この経の説かれる時に、驚かず、怖れず、恐怖に陥らないであらうならば、最勝希有を具して居るものであらう。何となれば、須菩提よ、如来の説いたこの最勝波羅蜜は即ちこれは非波羅蜜であり、そして、又、須菩提よ、如来が最勝波羅蜜として説くそれを、また無量の諸仏世尊も説く、故に最勝波羅蜜と称せられるのであるから。

第二十四分（第十四分）

１４－１１

然るに、又、実に、須菩提よ、如来の忍辱波羅蜜なるものは、即ちこれ非波羅蜜である。

１４－１２

何となれば、須菩提よ、曾て、カリンガ王が私の大肢小肢から肉を切取つたその場合にも、私には、我想も、または衆生想も、或は命我想も、若しくは人想も無かつた、更に、私には何等の想も或は又非想も無かつた。

１４－１３

何となれば、若し、須菩提よ、その場合に、私に、我想があつたとすれば、其際、又、私に瞋怨想もあつたであらうし、若し衆生想、命我想、人想があつたとすれば、其際、又、私に瞋怨想もあつたであらうからである。

１４－１４

何となれば、須菩提よ、私は想起する、過去世にあつて、五百生の間、私がクシャーンティ・ワーディン仙であつたとき、其際にも亦私には我想が無かつたし、衆生想も無く、命我想も無く、人想も

無かつたから。それ故に、今、須菩提よ、菩薩大士は一切の想を捨離して、無上正等覚に対する心を発すべきである。色に住する心を起すべきでない、声、香、味、触、法に住する心を起すべきでない、法に住する心を起すべきでなく、非法に住する心を起すべきでない、如何なるものに住する心をも起すべきでない。

１４－１５

何となれば、住するのは即ちこれ非住であるから。是故に、如来は説いた、菩薩は不住にして布施すべきであつて、色、声、香、味、触、法に住して布施すべきではない、と。

第二十五分（第十四分）

１４－１６

然るに、又、実に、須菩提よ、菩薩は一切の衆生の為に、此の如き種類の施捨をなすべきである。何となれば、須菩提よ、この衆生想なるものこそは、即ちこれ非想であるに外ならぬから。此の如く、これ等の一切衆生と、如来の説くものは皆即ち非衆生である。

１４－１７

何となれば、如来は、須菩提よ、実語者であり、如来は真語者、如語者、不異語者であり、如来は決して不真語者ではないからである。

第二十六分（第十四分）

１４－１８

然るに、又、実に、須菩提よ、何れの法にしても、如来が現覚し、

教示し、観念したその法の中には真も無く、妄も無い。

１４－１９

例へば、須菩提よ、思ふに、闇の中に入った人は何ものをも見ないが如くに、およそ事に堕せる菩薩が事に堕したものとして施捨するのは、此の如くに見らるべきである。又、例へば、須菩提よ、具眼の人は、夜が明けて旭日の昇つたときには、種々雑多の色彩を見るが如く、事に堕せざる菩薩が事に堕せざるものとして施捨するのは、まさに、此の如くに見らるべきである。

第二十七分（第十四分）

１４－２０

然るに、又、実に、須菩提よ、善男又は善女にして、この法門を取り、受持し、読誦し、学修し、更に、他の人々に詳細に開演するものをば、須菩提よ、凡て如来は仏智によつて知り、凡て、須菩提よ、如来は仏眼を以て見、凡て如来は之を覚して居る。彼等一切衆生は、須菩提よ、無量無数の福聚を生じ、又受けるであらう。（以上第十四分）

持經功德分第十五

第二十八分（第十五分）

１５－１

復、実に、須菩提よ、婦女又は男子にして、午前時の頃に、ガンガー河の沙の数に等しい身命を施し、正午時の頃に、又、ガンガー河の沙の数に等しい身命を施し、晩景時の頃に、更に、ガンガー河の沙の数に等しい身命を施し、この方法によつて、多くの百千のコーティのニユタの劫の間、身命を施すものと、並びに、この法門を聴いて毀謗しないものと、の中、此の方が、この因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。更に、写して取り、受持し、読誦し、学修し、そして他の人々の為に、詳細に開演するであらうものの福聚については、更に言うに及ばない。

第二十九分（第十五分）

１５－２

然るに、又、実に、須菩提よ、この法門は不可思議であり、無比である。そして、須菩提よ、この法門を如来は最上乗に発趣した衆生の為に、最勝乗に発趣した衆生の為に説いたのである。この法門を取り、受持し、読誦し、学修し、更に、他の人々の為に開演するであらう人々を、須菩提よ、如来は仏智によつて知り、彼等を、須菩提よ、如来は仏眼を以て見、彼等を如来は覚知して居る。彼等一切の衆生は、須菩提よ、無量の福聚を具有せるものとならう、不可思

議にして無比、不可称にして不可量の福聚を具有せるものであらう。

１５－３

彼等一切の衆生は、須菩提よ、自己の肩によつて菩提を担ふであらう。何となれば、実に、この法門は小法を信解する衆生には、之を聴くことを得ないし、我見を有するものにも、衆生見を有するものにも、命我見を有するものにも、人見を有するものにも、また、凡て聴かれ得ないからである、菩薩の誓いをなさない衆生に、この法門が聴かれたり、若しくは取られたり、若しくは受持せられたり、若しくは読誦せられたり、若しくは学修せられ得んこと、此道理は全くないから。

第三十分（第十五分）

１５－４

然し、又、実に、須菩提よ、如何なる地域に於てでも、この経が開演せられるその地域は、天、人、阿修羅と共なる世界に供養せられ、礼拝せられる所になるであらう。そして、その地域は右繞三匝せらるべき所となり、その地域は霊祀たるものとなるであらう。（以上第十五分）

能淨業障分第十六

第三十一分（第十六分）

１６－１

然るに、須菩提よ、諸の善男又は善女にして、此の如き種類のこれ等の経を取り、受持し、読誦し、学修し、そして如理に作意し、更に、又他の人々のために詳細に開示せんに、而も彼等は猶且つ軽賤せられ、また甚だしく軽賤せられることがあるであらう。

１６－２

これは何故かといへば、須菩提よ、これ等の衆生の前生に於て為されて、悪道に堕すべき幾多の不浄業があつて、この現生に於て、軽賤せられることの為に、それ等の前生の不浄業が消尽せられて、そして仏の菩提を得るに至るであらうからである。

第三十二分（第十六分）

１６－３

私は想起する、須菩提よ、無数の、更に一層無数の劫の前の過去世に於て、然燈如来、応供、正等覚より以前に、更に以前に、私が承事親近し、承事親近して曾て息めなかつた八十四百千（八百四十万）コーティのニユタの諸仏があつた。

１６－４

須菩提よ、私はこれ等の諸仏世尊に承事親近し、承事親近して曾て息めなかつたのと、又、後の時、後の頃、後の五百歳に正法の破滅の起る際に、これ等のかかる種類の経を取り、受持し、読誦し、学修し、そして他の人々に詳細に開演するのと、の中、実に、復、須菩提よ、この方の福聚に比すると、前のかの福聚はその第百の一分にだも及ばない、千分の一にも、百千分の一にも、コーティ分の一にも、百コーティ分の一にも、百千コーティ分の一にも、百千コーティニユタ分にも及ばないし、数量も、割分も、計算も、譬喩も、擬似も、乃至、相似もあるに堪へる所でない。

第三十三分（第十六分）

１６－５

又、若し、須菩提よ、彼等善男又は善女が、其際、どれだけ福聚を生じ又得るであらうかの限りの、彼等善男又は善女の福聚を私が説くであらうならば、衆生は聞いて狂乱に陥り、或は心動揺の状態になるであらう。

１６－６

確かに、又、実に、須菩提よ、如来の説いたこの法門は不可思議であり、無比である。これの果報も実に不思議である、と期待すべきである。（以上第十六分）

究竟無我分第十七

第三十四分（第十七分）

１７－１

その時に、実に、長老須菩提は世尊に下のことを言うた。世尊よ、菩薩乗に発趣したものは、如何に住すべきであるか、如何に修行すべきであるか、如何に心を制伏すべきであるか。

１７－２

世尊曰く。今、須菩提よ、菩薩乗に発趣したものは、以下の如き心を起すべきである。即ち、私は一切衆生をして無余涅槃界に於て般涅槃せしめねばならぬ、と。

１７－３

然し、この如くに、衆生を般涅槃せしめても、一人も般涅槃せしめられた衆生は無い。

１７－４

何となれば、須菩提よ、若し菩薩に衆生想が存するであらうならば、彼は菩薩ではないといはれねばならぬし、命我想、若しくは、乃至、人想が存するならば、彼は菩薩ではないといはれねばならぬからである。

１７－５
何となれば、須菩提よ、菩薩乗に発趣したといはれる何等の一法も存しないから。

第三十五分（第十七分）

１７－６
須菩提よ、如来が然燈如来の許で、無上正等覚として現覚した何等かの法なるものがあるか、如何。

１７－７
かく問はれた時に、長老須菩提は世尊に此の如く答へた。世尊よ、私が、世尊の所説の意味を知解する所では、世尊よ、如来が、然燈如来、応供、正等覚の許で無上正等覚として現覚した何等の一法もあることはない。

１７－８
かく答へられて、世尊は長老須菩提に曰うた。それはその通り、須菩提よ、それはその通りである、須菩提よ、如来が然燈如来、応供、正等覚の許で、無上正等覚として現覚した何等の一法も無い。

１７－９
従つて、若し、須菩提よ、何等かの法が如来によつて現覚せられたとすれば、然燈如来は、私に、汝は、童子よ、未来世に於て釈迦牟尼といふ如来、応供、正等覚になる、と授記しなかつたであらう。

１７－１０
然る、今、須菩提よ、如来、応供、正等覚によつて、無上正等覚と

して現覚せられた何等の一法も存しないから、その為に、私は然燈如来によつて、汝は、童子よ、未来世に於て釈迦牟尼といふ如来、応供、正等覚になる、と授記せられたのである。

１７－１１

何となれば、如来といふは、須菩提よ、これ真如の異名である。如来とは、須菩提よ、これ無生法の異名、如来とは、須菩提よ、これ法断滅の異名、如来とは、須菩提よ、これ畢竟不生の異名であるからである。何となれば、須菩提よ、真諦なるものは、これ無生であるから。

第三十六分（第十七分）

１７－１２

人有り、須菩提よ、如来、応供、正等覚は無上正等覚を現覚した、と此の如くに語るならば、其人は不真を語るのであり、彼は、須菩提よ、不実を執して私を毀謗したのである。

１７－１３

何となれば、須菩提よ、如来が無上正等覚として現覚した如何なる一法も存しないから。

１７－１４

又、須菩提よ、如来が法として現覚し、或は説示したその法の中には真も無く、妄も無い。故に如来は一切諸法が仏法である、と説く。

１７－１５

何となれば、一切諸法といふは、須菩提よ、即ち非法である、と、

如来は説く、故に、一切諸法は仏法であるからである。

第三十七分（第十七分）

１７－１６
例へば、須菩提よ、思ふに、人あり、具足身、大身を有するが如くである。

１７－１７
長老須菩提曰く。かの、世尊よ、人あり、具足身、大身を有すと如来の説くものは、それは即ち非身である、と、世尊よ、如来は説く、故に、具足身、大身を有す、といはれる。

第三十八分（第十七分）

１７－１８
世尊曰く。その通り、須菩提よ、菩薩が、私は衆生を般涅槃せしめるであらう、と、かく言ふならば、彼は菩薩ではないといはねばならぬ。何となれば、須菩提よ、菩薩と名づけられる何等かの一法があるのか。

１７－１９
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、菩薩と名づけ得る何等の一法も存することはない。

１７－２０
世尊曰く。衆生である、衆生である、といふは、須菩提よ、これは即ち非衆生である、と如来は説く、故に衆生といはれるのであるか

らである。この故に、如来は一切諸法は無我であり、一切諸法は無命我、無長養者、無人である、と説く。

第三十九分（第十七分）

１７－２１

須菩提よ、菩薩あり、私は国土荘厳を成就するであらう、と、此の如くに説くならば、彼は非真を語るのである。何となれば、国土荘厳である、国土荘厳である、といふのは、須菩提よ、それは即ち非荘厳である、と如来は説いた、故に、国土荘厳である、といはれるのであるから。

１７－２２

須菩提よ、菩薩にして諸法は無我である、諸法は無我である、と信解すれば、如来、応供、正等覚は、彼を菩薩大士であると説く。（以上第十七分）

一體同觀分第十八

第四十分（第十八分）

１８－１
世尊曰く。須菩提よ、如来に肉眼ありや、如何。

１８－２
須菩提答ふ。然り、世尊よ、如来には肉眼がある。

１８－３
世尊曰く。須菩提よ、如来に天眼ありや、如何。

１８－４
須菩提答ふ。然り、世尊よ、如来には天眼がある。

１８－５
世尊曰く。須菩提よ、如来に慧眼ありや、如何。

１８－６
須菩提答ふ。然り、世尊よ、如来には慧眼がある。

１８－７
世尊曰く。須菩提よ、如来に法眼ありや、如何。

１８－８
須菩提答ふ。然り、世尊よ、如来には法眼がある。

１８－９
世尊曰く。須菩提よ、如来に仏眼ありや、如何。

１８－１０
須菩提答ふ。然り、世尊よ、如来には仏眼がある。

第四十一分（第十八分）

１８－１１
世尊曰く。須菩提よ、ガンガー河に存する限りの沙、それ等の沙を如来は説いたか、如何。

１８－１２
須菩提答ふ。その通りである、世尊よ、その通りである、善逝よ、その沙を如来は説いた。

１８－１３
世尊曰く。須菩提よ、ガンガー河にある沙の数だけ、それだけのガンガー河があり、そしてそれ等の中に存するあらゆる沙の数だけの世界があるであろうならば、その世界は多いであろうか、如何。

１８－１４
須菩提答ふ。その通りである、世尊よ、その通りである、善逝よ、それ等の世界は多いであらう。

１８－１５
世尊曰く。須菩提よ、これ等の世界に於て存する限りの彼等衆生の種々様々の心の流を私は知つて居る。

１８－１６
何となれば、心の流である、心の流であるといふのは、須菩提よ、これは非流である、と如来は説いた、故に、心の流といはれるのであるから，

１８－１７
何となれば、須菩提よ、過去の心も不可得であり、未来の心も不可得であり、現在の心も不可得であるからである。（以上第十八分）

法界通化分第十九

第四十二分（第十九分）

１９－１
須菩提よ、何れかの善男又は善女はあつて、この三千大千世界を、七宝を以て満たして、諸の如来、応供、正等覚に布施せんに、その善男又は善女は、その因縁によつて、多く福聚を生ずるであらうか、如何。

１９－２
須菩提答ふ。多くである、世尊よ、多くである、善逝よ。

１９－３
世尊曰く。その通りである、須菩提よ、その通りである。かの善男又は善女は多く、その因縁によつて無量無数の福聚を生ずるであらう。

１９－４
何となれば、福聚である、福聚である、といふのは、須菩提よ、それは即ち非聚である、と如来は説く、故に、福聚といはれるからである。

１９－５
復、若し、須菩提よ、福聚があるとすれば、如来は福聚である、福聚である、とは説かないであらう。（以上第十九分）

離色離相分第二十

第四十三分（第二十分）

２０－１
須菩提よ、色身成就といふことで、如来を見るべきであると考へるか。

２０－２
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、色身の成就といふことで、如来を見るべきでは無い。

２０－３
何となれば、色身の成就である、色身の成就である、といふのは、世尊よ、それは即ち非成就である、と如来は説いた、故に、色身の成就であるからである。

第四十四分（第二十分）

２０－４
世尊曰く。須菩提よ、相具足によつて如来を見るべきであると考へるか。

２０－５
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、相具足によつて如来を見るべきではない。

２０－６

何となれば、世尊よ、如来が相具足と説くものは、それは即ち非相具足である、と如来は説く、故に相具足といはれるのであるからである。（以上第二十分）

非説所説分第二十一

第四十五分（第二十一分）

２１－１

世尊曰く。須菩提よ、如来に、私は法を教示したといふ如き考が起るや、如何。

２１－２

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来には、私は法を教示した、といふ如き考は起らない。

２１－３

世尊曰く。何人でも、須菩提よ、如来は法を教示した、と、かく語るものは、即ち不真を語るのであり、不実を取つて、須菩提よ、私を誹謗したのである。

２１－４

何となれば、法の教示である、法の教示である、いふも、須菩提よ、法の教示といはれるものとして得られる如何なる一法も存しないから。

第四十六分（第二十一分）

２１－５

此の如く曰はれた時に、長老須菩提は世尊に次のことを言うた。世

尊よ、或は、未来世、後の時、後の頃、後の五百歳に正法破滅の起る際に於て、これ等のかかる種類の法門を聴いて、信仰するであろう何れかの衆生があるであらうか。

２１－６

世尊答ふ。彼等は、須菩提よ、衆生でもなく、非衆生でもない。

２１－７

何となれば、衆生である、衆生である、といふのは、須菩提よ、彼等一切は非衆生である、と如来は説く、故に、衆生と称せられるのであるから。（以上第二十一分）

無法可得分第二十二

第四十七分（第二十二分）

２２－１

須菩提よ、如来が無上正等覚として現覚した何等かの法があるか、如何。

２２－２

長老須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、如来が無上正等覚として現覚した何等の一法も存しない。

２２－３

世尊曰く。その通りである、須菩提よ、その通りである。微塵ばかりの法すらも、そこには存しないし、得られない、故に、無上正等覚といはれるのである。（以上第二十二分）

淨心行善分第二十三

第四十八分（第二十三分）

２３－１

然るに、又、実に、須菩提よ、この法は平等である、その中には何等の不平等も存しない。故に、無上正等覚といはれるのである。

２３－２

この無上正等覚は無我性により、無衆生性により、無命我性により、無人性によりて、平等であるのであり、一切善法によつて現覚せられるのである。

２３－３

何となれば、善法である、善法である、といふのは、須菩提よ、而もそれ等は非法である、と如来は説く、故に善法であると称せられるのであるから。（以上第二十三分）

福智無比分第二十四

第四十九分（第二十四分）

２４－１

復、実に、須菩提よ、婦女又は男子があつて、三千大千世界にある須弥山王の数量だけ、それだけの七宝の集まりを持して、諸の如来、応供、正等覚に布施するであらうのと、並びに、善男又は善女があつて、この般若波羅蜜の法門から、少なくとも四句より成る一偈のみをも取りて、他の人々に教示するであらうのと、の中、かの前の福聚は、須菩提よ、この方の福聚の第百の一分もに及ばない、乃至、擬似すらもあるに堪へる所でない。（以上第二十四分）

化無所化分第二十五

第五十分（第二十五分）

２５－１
須菩提よ、如来に、私は衆生を解脱せしめた、という如き考が起るや、如何。

２５－２
然し、又、実に、須菩提よ、此の如く見てはならない。何となれば、如来が解脱せしめた如何なる一衆生も存しないから。

２５－３
従つて、若し、須菩提よ、如来が解脱せしめた何れかの一衆生だにあるであらうならば、如来には、かの我執があるのであらう、衆生執、命我執、人執があるのであらう。

２５－４
我執といふは、須菩提よ、これは即ち非執であると、如来は説く。然るに、それは幼童凡夫によつて執せられるものである。

２５－５
幼童凡夫といふも、須菩提よ、これ非凡夫に外ならぬ、と如来は説く、故に幼童凡夫といはれるのである。（以上第二十五分）

法身非相分第二十六

第五十一分（第二十六分）

２６－１
須菩提よ、如来は相具足によつて見らるべきであるや、如何。

２６－２
須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、私が世尊の所説の義を知解する所では、如来は相具足によつて見らるべきではない。

２６－３
世尊曰く。善し、善し、須菩提よ、汝の言ふが如く、その通りである、須菩提よ、その通りである、如来は相具足によつて見らるべきではない。

２６－４
何となれば、復、若し、須菩提よ、如来が相具足によつて見らるべきであらうならば、転輪聖王も亦如来であるであらうから。この故に、相具足によつて如来を見るべきではない。

２６－５
長老須菩提は世尊に次のことを言うた。私が世尊の所説の義を知解する所に従へば、実に如来は相具足を以て見らるべきではない。

２６－６

乃ち、実に、世尊は其際この頌を説いた。

一、何人にても、私を色によつて見んと欲し、
また、何人にても、私を声によつて求めるならば、
これ等の人々は邪な精勤に耽るものであつて、
私を見得ないであろう。

二、仏は法によって見らるべきである。
何となれば、諸の導師は法身であるから。
そして法性は識らるべきもので無い。
法性は識ることを得ないものである。（以上第二十六分）

無斷無滅分第二十七

第五十二分（第二十七分）

２７－１

須菩提よ、如来は相具足によつて無上正等覚を現覚したのであるか、如何。

２７－２

然し、須菩提よ、汝はかく見てはならない。何となれば、実に、須菩提よ、如来は相具足によつて無上正等覚を現覚したのではないから。

第五十三分（第二十七分）

２７－３

復、実に、須菩提よ、菩薩乗に発趣したものには、何れかの法の滅壊、或は断滅が知られる、と、此の如くに或は、何人かが、汝に語るであらう。

２７－４

然し、実に、須菩提よ、汝はかく見てはならない。何となれば、菩薩乗に発趣せるものには、何等かの法の滅壊も、または断滅も知られることはないから。（以上第二十七分）

不受不貪分第二十八

第五十四分（第二十八分）

２８－１

又、実に、須菩提よ、善男若しくは善女があつて、ガンガー河の沙の数に等しい世界を、七宝を以て満たして、諸の如来、応供、正等覚に供養するであらうものと、菩薩があって、無我無生の法に於て忍智を得るものと、の中、この方が、その因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。然し、又、実に、須菩提よ、菩薩大士は福聚を摂取してはならぬ。

２８－２

長老須菩提は言う。世尊よ、菩薩は福聚を摂取せねばならぬではないか。

２８－３

世尊曰く。須菩提よ、摂取せねばならぬとは、取らねばならぬのではない、故に、摂取せねばならぬといはれるのである。（以上第二十八分）

威儀寂靜分第二十九

第五十五分（第二十九分）

２９－１

然るに、復、実に、須菩提よ、如何なる人にても、如来は去り、或は来り、或は住し、或は坐し、或は臥す、と、かく語るものは、須菩提よ、私の所説の義を知解しないのである。

２９－２

何となれば、如来というのは、須菩提よ、何処にも行つたのでなく、何処からも来たのではないものといはれる、故に如来、応供、正等覚と称せられるのであるから。（以上第二十九分）

一合離相分第三十

第五十六分（第三十分）

３０－１

そして、又、実に、須菩提よ、善男若しくは善女にして、三千大千世界の中にある地塵の数だけそれだけの世界について、乃至、無数量の精進を以てして、それを、例へば原子の集合の如き、此の如き種類の粉となさんに、須菩提よ、その原子の集合は多いであろうか、如何。

３０－２

須菩提答ふ。その通りである、世尊よ、その通りである、善逝よ、その原子の集合は多いであらう。何となれば、若し、世尊よ、実に、原子の集合が実有であらうならば、世尊は原子の集合と言はないであらうから。

３０－３

何となれば、世尊よ、かの原子の集合なるものは、如来は、それは即ち非集合である、と説く、故に、原子の集合といはれるのであるからである。

３０－４

また、如来が三千大千世界であると説くものは、それは非界である、と如来は説く、故に、三千大千世界である、といはれる。

３０－５

何となれば、若し、世尊よ、世界が実有であるとするならば、それは即ち総執であるであらう、そして、如来が総執と説くものは、それは即ち非執である、と如来は説く、故に、総執といはれるのであるから。

３０－６

世尊は曰く。そして総執は、須菩提よ、即ち不可言であり、不可説である。それは法でもなく、非法でもない。然るに、かの幼童凡夫はそれを執する。（以上第三十分）

知見不生分第三十一

第五十七分（第三十一分）

３１－１

実に、如何なる人にしても、須菩提よ、如来は我見と説き、衆生見、命我見、人見と説くと、此の如くに語るであらうものは、須菩提よ、彼は正語しつつ語るのであらうか。

３１－２

須菩提答ふ。否、然らず、世尊よ、否、然らず、善逝よ、彼は正語しつつ語るのではない。何となれば、世尊よ、かの、我見、と如来の説くものは、それは即ち非見である、と如来は説く、故に、我見といはれるのであるから。

第五十八分（第三十一分）

３１－３

世尊曰く。実に、須菩提よ、菩薩乗に発趣したものは、一切法を知らねばならぬし、見ねばならぬし、信解せねばならぬ。

３１－４

そして彼は法想にすらも住せざるが如くに、此の如くに知らねばならぬし、見ねばならぬし、信解せねばならぬ。何となれば、法想である、法想であるといふのは、須菩提よ、これは即ち非法想である、

と如来は説く、故に、法想であるといはれるからである。(以上第三十一分)

應化非眞分第三十二

第五十九分（第三十二分）

３２－１

又、実に、須菩提よ、菩薩大士があつて、無量無数の世界を、七宝を以て、満たして、諸の如来、応供、正等覚に布施するであらうものと、また善男或は善女にして、この般若波羅蜜の法門から少なくとも四句より成る一偈のみをも取り、受持し、読誦し、学修し、そして他の人々に詳細に開演せんものと、の中、この方が、その因縁によつて、一層多くの無量無数の福聚を生ずるであらう。

３２－２

然らば如何に開演せんか。開演しないが如くにする、故に、開演するといはれるのである。

第六十分（第三十二分）

有為法は星、翳、
燈、幻、露、泡、
夢、電、及び雲である。
此の如くに見らるべきである。

第三、流通文（第三十二分）

３２－３

以上を世尊が説いた。上座須菩提は歓喜し、そしてこれ等の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、並びに天、人、阿修羅、乾闥婆と共なる世界が世尊の所説に大歓悦した、といふ。（以上第三十二分）

３２－４

聖なる催破具としての仏母たる般若波羅蜜　終。

能く金剛を断ずる

長尾雅人　譯

1973

とうとき聖なる「知恵の完成」に帰命したてまつる

法會因由分第一

１－１
つぎのように私は聞いた。
あるとき世尊は、千二百五十人の比丘からなる大僧団や数多くの偉大な菩薩たちとともに、シュラーヴァスティ（舎衛国）のジェータ林のなかにある、アナータピンダダ（給孤独長者）の庭園（祇園）におられたことがあった。

１－２
そのとき世尊は、朝早く下着を着け、鉢と上着をとって、食を乞う（托鉢）ために、大都シュラーヴァスティへ行かれた。

１－３
さて、大都シュラーヴァスティを托鉢して歩かれたのち、食事をすまされた世尊は、午後、托鉢から帰ってきて、鉢と上着を整頓し、両足を洗い、足を組み（結跏趺坐）、身体をまっすぐに保ち、思いを眼前に凝らしながら、設けられた座にすわられた。

１－４
そのとき、多数の比丘たちが、世尊のおられる場所へ近づいた。近

づいて、世尊の両足に（自分の）頭を触れて礼拝し、世尊のまわりを三度右まわりにまわったのち、一方にすわった。

善現起請分第二

仏陀の援助と委託

２－１
ちょうどそのとき、長老スブーティ（須菩提）もその集まりのなかにあって座を占めていた。

２－２
そこで長老スブーティは席から立ちあがり、一方の肩に上着をかけ（偏袒右肩）、右の膝を地面につけ、世尊のおられるほうに向かって合掌して、つぎのように世尊に申し上げた。

２－３
「世尊よ、驚くべきことです。善逝よ、まったく驚嘆にたえません。正しいさとりを得た尊敬すべき如来が、これほどまでに最高の援助（摂取）の手をのべて、偉大な菩薩たちを援助しているとは。

２－４
世尊よ、驚くべきことです、正しいさとりを得た尊敬すべき如来が、これほどまでに最高の委託（付嘱）を与えて、偉大な菩薩たちに委嘱しているとは」

菩薩のあり方と実践と心の訓練

２－５

「ところで、世尊よ、良家の男子にせよ、女子にせよ、すでに菩薩の道（菩薩乗）に向かって歩みを進めたものは、どのようにあるべきであり、どのように実践すべきであり、どのように心を訓練すべきでありましょうか」

２－６

このようにいわれて、世尊は、長老スブーティにつぎのように話された。

「まことによろしい、スブーティよ。そのとおりだ、スブーティよ。お前のいうとおりなのだ。最高の援助をもって、如来は偉大な菩薩たちを援助している。最高の委託をもって、如来は偉大な菩薩たちに（仏陀の教法を）委託しているのである。

２－７

だから、スブーティよ、よく聞くがよい、よくよく心にとどめるがよい。菩薩の道に向かって歩みはじめたものは、どのようにあるべきか、どのように実践すべきか、どのように心を訓練すべきかを、お前に話して聞かせよう」

２－８

「世尊よ、そうお願いいたします」と、長老スブーティは答えた。

大乘正宗分第三

菩薩はどのようにあるべきか

３－１

世尊はつぎのように話された。

「さて、スブーティよ、菩薩の道を志したものは、ここでつぎのような考えを起こさなければならない。すなわち、スブーティよ、『生けるものの世界（衆生界）において、およそ衆生という名のもとに包摂される生きとし生けるもの――卵から生まれたものにせよ、胎生のものにせよ、湿気から生まれたものにせよ、忽然と化生したものにせよ、形のあるものにせよ、形のないものにせよ、意識（想）のあるものにせよ、意識のないものにせよ、意識があるのでもなくないのでもないものにせよ――およそ衆生界に属するものとして考えられているほどのものは、何ものにもせよ、彼らすべてを、私は、煩悩の余燼さえない涅槃（無余依涅槃）の世界に引きいれなければならない。

３－２

しかもなお、たとえそのように無数の衆生を涅槃に導いたとしても、実はいかなる衆生も涅槃にはいったのではない』と。

３－３

それはなぜかというと、スブーティよ、もしも菩薩に衆生という観念（想）が生ずるならば、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである。

3－4

それはまたなぜか。スブーティよ、もし彼に自我という観念が生ずるなら、あるいは衆生という観念、命あるものという観念、個我という観念が生ずるなら、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである」

妙行無住分第四

菩薩はどのように実践すべきか

４－１

「さらにまた、スブーティよ、菩薩は事物に執着しながら布施をすべきではない。何かに執着しながら布施をすべきではない。――つまり、色形に執着して布施をしてはならないし、声や香りや味や触れられるものや心の対象（法）に執着して布施をすべきではない」

菩薩はどのように心を訓練すべきか

４－２

「というのは、スブーティよ、偉大な菩薩は、そのようにして（だれが、だれに、何をという、三つの）相の観念にさえもとらわれないで、布施をしなければならないからである。

４－３

それはなぜか。スブーティよ、菩薩が執着することなく布施を行なうならば、その功徳の集積の量は、容易にはかりえないものとなるからである。

４－４

ブーティよ、お前どう思うか。東のほうにどれだけ虚空があるか、その量をはかることは容易だろうか」

４－５
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、それは容易ではありません」

４－６
世尊がいわれた。
「同じように、南、西、北において、また下方や上方や、四方やその中間の方角など、あまねく十方において、虚空の量をはかることは容易だろうか」

４－７
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、それは容易ではありません」

４－８
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、それとまったく同じように、菩薩が執着することなく布施を行なうならば、その功徳の集積した量は、容易にはかられうるものではない。

４－９
すスブーティよ、実にこのようにして、菩薩の道に志したものは、相の観念にさえもとらわれないで布施をしなければならないのである」

如理實見分第五

以下、種々なる疑問に対する答え。執着なくして布施を行なうとは何か

５－１
「スブーティよ、どう思うか。如来は（三十二の）相をそなえたものとして見られてよいであろうか」

５－２
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ。如来は相をそなえたものとして見られてはなりません。なぜかといいますと、世尊よ、如来が『相をそなえる』とお説きになったのは、すなわち『相をそなえないこと』なのですから」

５－３
このようにお答えしたとき、世尊は、つぎのようにスブーティに話された。
「スブーティよ、およそ相が（完成し）そなわっているならば、それはすべて虚偽なのである。およそ相がそなわっていないのであるならば、それはすべて虚偽なのではない。したがって、如来は『相のないことを相とする』というように見られなければならない」

正信希有分第六

右のような逆説に満ちた教えを信ずるものがありえようか

６－１
このように話されたとき、長老スブーティは、つぎのように世尊にお尋ねした。
「そもそも世尊よ、将来、のちの世、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、これらの経典のことばがこのように説かれたばあい、それを真実だと理解しうるものがだれかいるでしょうか」

６－２
世尊は答えられた。
「スブーティよ、そのように、『そもそも将来、のちの世、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、これらの経典のことばがこのように説かれたばあい、それを真実だと理解しうるものがだれかいるでしょうか』などと語ってはならない。

６－３
スブーティよ、むしろ、将来、のちの世、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、徳をそなえ、戒律を保ち、知恵のすぐれた偉大な菩薩たちがいて、これらの経典のことばがこのように説かれたばあい、彼らはそれを真実だと理解しうるにちがいない」

6－4

「さらにまた、スブーティよ、これら偉大なる菩薩たちは、ただひとりの仏陀にのみ仕え、ただひとりの仏陀のもとで功徳の善根を植えたのではない。そうではなくて、スブーティよ、これら偉大な菩薩たちは、百．千という多くの仏陀に仕え、百．千という多くの仏陀のもとで善根を植えたものたちであろう。彼らは、これらの経典のことばがこのように説かれたばあい、浄らかな一心（浄信）を得ることとなろう」

6－5

「スブーティよ、如来は、仏知をもって彼らを知っておられるのである。如来は仏眼をもって、彼らをごらんになっている。スブーティよ、彼らは、如来によってよく理解されているのである。

6－6

彼らはすべて、スブーティよ、はかりしれない無数の功徳を積み重ね、また（その結果を）自分のものにするであろう。

6－7

それはなぜか。スブーティよ、これらの偉大な菩薩たちには、自我という観念が起こらないし、衆生という観念も、命あるものという観念も、個我という観念も起こらないからである。

6－8

スブーティよ、彼ら偉大な菩薩にはまた、もの（法）という観念も生じないし、ものでない（非法）という観念も生じない。さらにまた、スブーティよ、彼らには観念であるとか観念でないとかということも生じない」

６－９

「それはなぜか。スブーティよ、もし、彼ら偉大な菩薩たちに、もの（法）という観念が生じるなら、彼らには、かの自我への執着が起こるであろう。衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるであろう。

６－１０

もし、ものでない（非法）という観念が生じるなら、同じくかの自我への執着が彼らには起こるであろう。衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着も起こるであろう。

６－１１

それはなぜかといえば、スブーティよ、偉大な菩薩は、教え（法）に執着してもいけないし、教えでないもの（非法）に執着してもいけないからである」

６－１２

「それゆえに、この隠された点を意味して、如来はつぎのことばを説かれたのである。『（法が）筏にたとえられている教え（法門）のあることを知るほどのものは、法さえも捨て去らなければならない。まして、法でないもの（非法）は、なおのことである』と」

無得無説分第七

仏（覚者）とは何か、説法とは何か

７－１
さらに世尊は、つぎのように長老スブーティに問われた。
「スブーティよ、ところでどう思うか。如来が、このうえなく正しいさとり（無上正等覚）であるとしてさとったような法が、何かあるのであろうか。如来が教え示したような法が、何かあるのであろうか」

７－２
このように問われたとき、長老スブーティは、つぎのように世尊に申しあげた。
「世尊よ、世尊のお説きになった意味を私が理解したところによりますと、如来が、このうえなく正しいさとりであるとしてさとられたような法は、何もありません。如来が教え示されたようないかなる法もありません。

７－３
なぜかといいますと、如来によってさとられたとか、教え示されたとかという法は、とらえられないもの、表現すべからざるものだからです。それは、法でもなく法でないのでもありません。

７－４
なぜならば、聖者たちというものは、因果の制約を超えたもの（無為）によって特徴づけられているからです」

依法出生分第八

功徳の多少

８－１
世尊が問われた。
「さて、スブーティよ、どう思うか。だれか良家の男子にせよ、女子によせ、この三千大千世界を七種の宝で満たして、正しいさとりを得た尊敬されるべきもろもろの如来に布施するものがあるとしよう。さて、良家の男子にせよ、女子にせよ、そのような人は、それによって、より多くの功徳を積み集めたことになるのであろうか」

８－２
スブーティがお答えした。
「世尊よ、それは多いのです。善逝よ、良家の男子にせよ、女子にせよ、彼らはそれによって多くの功徳を積むことになるでしょう。

８－３
なぜかといいますと、世尊よ、如来によって功徳の集積として説かれたものは、それは集積ではない、と如来は説かれるのであって、それゆえに、如来は『功徳の集積である、功徳の集積である』と説かれるからです」

８－４
世尊が語られた。
「実に、スブーティよ、良家の男子にせよ、女子にせよ、この三千

大千世界を七種の宝で満たして、正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来に布施するとしよう。ところで、他方、この法門のなかの、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、（自ら学んで）把握し、他の人々にもくわしく示し、説明するとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より大きな功徳の集積、はかりしれない無数の（功徳の集積）を生みだすことになろう。

８－５

それはなぜか。スブーティよ、正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来の無上の正しいさとりは、実はこの（教え）から生ずるからである。この（教え）から、諸仏世尊が生まれるからである。

８－６

それはまたなぜか。スブーティよ、仏陀の教法（仏法）、仏陀の教法というが、それは、実に仏陀の教法ではない、と如来は説くのであり、それゆえ、仏陀の教法と呼ばれるのだからである」

一相無相分第九

とらわれがないから聖者である

９－１

「さて、スブーティよ、どう思うか。預流のものに『自分は預流果に達した』という考えが生じるであろうか」

９－２

スブーティは答えた。

「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。預流のものには『自分は預流果に達した』という考えは生じません。なぜかといいますと、世尊よ、彼はいかなるもの（法）をも得ることはないからです。だから、預流のものと呼ばれるのです。――（彼は）色形（の法）を得ることはありません。声も、香りも、味も、触れられるものも、心の対象（法）も得ることはありません。だから、預流のものと呼ばれるのです。

９－３

世尊よ、もし預流のものに『自分は預流果に達した』という考えが生じるなら、彼には、かの自我への執着が起こり、衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるでしょう」

９－４

世尊が問われた。

「スブーティよ、どう考えるか。一来のものに『自分は一来果に達

した』という考えが生じるであろうか」

９－５
スブーティは答えた。
「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。一来のものには『自分は一来果に達した』という考えが生じません。なぜかといえば、一来たることを得たというような、いかなるものも存在しないからです。だから、一来のものと呼ばれるのです」

９－６
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう考えるか。不還のものに『自分は不還果に達した』という考えが生じるであろうか」

９－７
スブーティが答えた。
「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。不還のものには『自分は不還の果に達した』という考えが生じません。なぜかといえば、世尊よ、不還たることを得たというような、いかなるものもないからです。だから、不還のものと呼ばれるのです」

９－８
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう考えるか。阿羅漢に『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるであろうか」

９－９
スブーティは答えた。
「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。阿羅漢には『自分は

阿羅漢たることに達した』という考えは生じません。なぜかといえば、世尊よ、阿羅漢と名づけられるような、いかなるものもないからです。だから、阿羅漢と呼ばれるのです。

９－１０

世尊よ、もし阿羅漢に『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるなら、彼には、かの自我への執着が起こり、衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるでしょう」

９－１１

「それはなぜかといいますと、世尊よ、かつて、正しいさとりを得た尊敬すべき如来は、私が『煩悩なくしてあるもの（無諍）のうちの最上のもの』である、と仰せられました。世尊よ、私は欲望を離れた阿羅漢であります。

９－１２

しかしながら、私には『自分は阿羅漢である、欲望を離れている』という考えは生じません。世尊よ、もし私に『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるなら、如来は私について、『良家の子であるスブーティは、煩悩なくしてあるもののうちの最上のものである。彼は、いずこにもあるのではない。だから、煩悩なくしてあるもの、煩悩なくしてあるもの、といわれる』などと宣言されることはなかったでありましょう」

莊嚴淨土分第十

しかし、仏陀には法の把握があったのではないか

１０－１
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。何か教法があって、それを如来が、正しいさとりを得た尊敬すべきディパンカラ如来のもとで、（自ら学び）把握したのであろうか」

１０－２
スブーティがお答しえた。
「いいえ、世尊よ、そうではありません。正しいさとりを得た尊敬すべきディパンカラ如来のもとで、如来が（自ら学び）把握されたような、いかなる教法もありません」

無為であり、とらえられないことが真実ならば、仏土を浄めるとはいかなることか

１０－３
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、もしもある菩薩が『自分は（仏陀の）国土の光輝（国土荘厳）を完成しよう』というならば、彼は虚偽を語るものである。なぜかというと、スブーティよ、国土の光輝、国土の光輝というのは、それは光輝ではないのだと、如来は説かれたのであり、

それゆえ、国土の光輝というのだからである」

また仏の受用身が、その浄められた仏土の法王として仰がれるのはいかにしてか

１０－４

「それゆえに、スブーティよ、偉大な菩薩は、執着のない心を生じるべきである。すなわち、何かに執着した心を生じるべきできない。――色形に執着した心を生じるべきではない。声、香り、味、触れられるもの、心の対象などに執着した心を生じるべきではない。

１０－５

スブーティよ、たとえば、欠陥のないからだをそなえた、巨大なからだの持ち主――つまり、その身体はあたかも山の王であるスメール山（須弥山）にも等しい――がいるとしよう。そこで、スブーティよ、お前どう思うか。彼の身体は巨大であるといえるであろうか」

１０－６

スブーティはお答えした。

「世尊よ、巨大であります。善逝よ、彼の身体は巨大であります。それはなぜかといいますと、世尊よ、身体、身体というが、それは体ではないのだと如来は説かれたのであり、それゆえに身体と呼ばれるのだからです。実に、世尊よ、それは体でもなく、体でないのでもないのであって、だから、身体と呼ばれるのです。」

無爲福勝分第十一

再び功徳――その質的な差異について

１１－１
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう思うか。大河ガンガーにある砂の数と同じだけ、ガンガー河があるとしよう。それら（すべて）にある砂の数はまた多いといえるだろうか」

１１－２
スブーティはお答えした。
「世尊よ、それらのガンガー河は、たいへんな数です。まして、それら（すべて）のガンガー河にある砂の数はいうまでもありません」

１１－３
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、お前につぎのことを告げよう。そして教えてあげよう。――ある女子にせよ、男子にせよ、だれでもよいが、それらのガンガー河にある砂の数ほどの世界を七種に宝で満たして、正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来にささげ供養するとしよう。さて、スブーティよ、どう思うか。そのような女子や男子は、そのことによって、多くの功徳の集積をつくることになるのであろうか」

１１－４

スブーティはお答えした。

「世尊よ、それは多いのです。善逝よ、女子にせよ、男子にせよ、そのことによって、多くの、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだすことでしょう」

１１－５

世尊が仰せられた。

「ところで、スブーティよ、女子にせよ、男子にせよ、それほどの量の世界を七種の宝で満たし、これを正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来に布施するとしよう。他方、良家の男子、あるいは女子が、この法門のなかの、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、（自ら学んで）把握し、他の人々のにも示し、説明するとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より多くの、はかりしれない無数の功徳の集積を生み出すことになろう」

尊重正教分第十二

すぐれた功徳としての説法

１２－１

「さらに、スブーティよ、ある土地で、この法門のなかの、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、(自ら学んで) 把握し、(他の人々に) 解釈し、あるいは説明することがあるとしよう。(そのとき) その土地は、神々や人間やアスラを含めた全世界にとって、塔廟に等しいものとなるであろう。まして、この法門をすべて完全に記憶 (受持) し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するならば、スブーティよ、そのような人々は、最高の奇瑞 (希有) をそなえたものとなるであろう。

１２－２

スブーティよ、その土地には師 (である仏陀) がおられることにもなろうし、あるいは、たとえだれであっても、師と等しい知識の人々がおられる、ということにもなろう」

如法受持分第十三

１３－１
このように話されたとき、長老スブーティは、つぎのように世尊にお尋ねした。
「世尊よ、この法門の名はなんと申しますか。また、それをどのように（心に）受持したらよろしいのでしょうか」

１３－２
このように尋ねられたので、世尊は、つぎのことを長老スブーティに答えられた。
「スブーティよ、この法門の名は『知恵の完成』（般若波羅密多）である。そのようにこれを受持するがよい。

１３－３
それはなぜか。スブーティよ、如来によって説かれた『知恵の完成』は、すなわち完成ではない、と如来は説かれたのであって、それゆえ、『知恵の完成』といわれるからである」

１３－４
「どう思うか、スブーティよ、如来によって説かれたというような法が、そもそも何かあるのであろうか」

１３－５
スブーティがお答えした。
「世尊よ、そうではありません。如来によって説かれたような法は、

何もありません」

１３－６
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。およそ三千大千世界にあるところの土の塵というもの、それは多量であろうか」

１３－７
スブーティが答えた。
「世尊よ、それは多量です。善逝よ、土の塵は多量です。なぜかといいますと、世尊よ、かの如来がお説きになった土の塵というもの、それは塵ではないのだ、と如来は仰せられました。だから、土の塵といわれるのです。

１３－８
また如来の仰せられるこの世界なるもの、それは世界ではない、と如来は仰せられました。だからこそ、世界といわれるのです」

１３－９
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。正しいさとりを得た如来が、三十二相という大人の相によって見られるべきであろうか」

１３－１０
スブーティが答えた。
「世尊よ、そうではありません。尊敬すべく正しいさとりを得た如来は、三十二の大人の相によって見られるべきではありません。

１３－１１

なぜかといいますと、世尊よ、如来が三十二の大人の相としてお説きになったもの、それは相ではない、と如来は仰せられました。それゆえ、三十二の大人の相といわれるのだからです」

説法の功徳は最高である

１３－１２

世尊が仰せられた。

「実にまた、スブーティよ、ある女子にせよ、男子にせよ、だれかがいて、毎日毎日、ガンガー河の砂の数ほども自分の身体をささげ供養するとしよう。このように供養して、それがガンガー河の砂の数ほどもの劫のあいだつづくとしよう。他方ある人が、この法門のなかの、たとえ四句の一詩頌だけでも、（自ら学んで）把握し、他の人々にも示し説明するとしよう。この後者こそが、そのことによって、より大きな功徳の集積、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだすことになろう」

離相寂滅分第十四

１４－１

そのとき、長老スブーティは、（このような）教えに感激して涙を流した。涙をぬぐいおわって、彼はつぎのように世尊に申しあげた。

１４－２

「世尊よ、驚くべきことです。善逝よ、まったく驚嘆すべきことです。最上の道にはいった人々のために、至高の道にはいった人々のために、この法門が如来によって説かれたとは。――そして、世尊よ、それによって私に知が生じたとは。

１４－３

世尊よ、私は、いまだかつて、このような形の法門を聞いたことがありません。世尊よ、この経典が説かれるのを聞いて、（これこそ）真実であるという思いを生ずる菩薩は、最高の驚異をそなえたものとなるでありましょう。

１４－４

なぜかといいますと、世尊よ、その真実であるという思いは、すなわち真実の思いではなく、それゆえにこそ、真実の思いである、真実の思いである、と如来は説かれるのだからです」

１４－５

「世尊よ、この法門が説かれるとき、それを了解し、それに信をお

くことは、私にとってむずかしいことではありません。

１４－６
しかし、世尊よ、将来、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年――になったとき、世尊よ、ある人々があって、この法門を把握し、記憶し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するでもあろうならば、彼らは最高の驚異をそなえたものとなるでしょう」

１４－７
「さらに、世尊よ、実に彼らには自我という観念は起こらないでしょうし、衆生という観念も、命あるものという観念も、個我という観念も起こらないでしょう。また彼らには、何かの観念であるとか観念でないとかということもありません。

１４－８
なぜかといいますと、世尊よ、自我という観念なるもの、それは観念ではなく、衆生という観念も、命あるものという観念も、個我の観念も、観念ではないからです。

１４－９
なぜならば、実に諸仏世尊は、あらゆる観念から離脱しておられるからです」

１４－１０
このように述べたとき、世尊はつぎのように長老スブーティに仰せられた。
「そのとおりだ、スブーティよ。この経典が説かれるとき、（それを聞いて）動揺せず、おそれず、恐怖に陥らないような人々は、最高

の驚異をそなえたものというべきであろう。なぜかというと、スブーティよ、この最高の完成は、すなわち完成ではない、と如来によって説かれたからである。しかも、スブーティよ、如来（である私）が説く最高の完成というものを、無数の諸仏世尊もまた説くのである。それゆえに、最高の完成と称される」

菩薩行における苦難のあり方

１４－１１

「さらに、スブーティよ、如来の忍耐の完成（忍波羅密多）は、すなわち完成ではない。

１４－１２

なぜかというと、スブーティよ、かつてある悪王が私の四肢の肉を切りとったとき、自我という観念にせよ、衆生という観念にせよ、命あるものという観念にせよ、個我という観念にせよ、また、いかなる観念も、観念でないものも、私にはなかったからである。

１４－１３

それはまたなぜか。スブーティよ、そのとき、もし私に自我という観念があったなら、敵意を持った恨みが私に起こったであろう。もし衆生の観念、命あるものという観念、個我の観念があったなら、そのとき、敵意の観念も、私に起こったであろうから。

１４－１４

それはなぜかというと、スブーティよ、私はつぎのことを思いだす。すなわち、かつて五百の生涯のあいだ、私はクシャーンティヴァーディンという苦行者であった。そのときにも、私には自我という観念はなかったし、衆生という観念、命あるものという観念、

個我という観念もなかったからである」

勝義の発心――すなわち執着なくして心を起こすこと

「したがって、スブーティよ、偉大な菩薩は、あらゆる観念を取り除いて、（しかも）無上の正しいさとりに対して心を起こさ（発心）なければならない。色形に執着した心を起こしてはならない。――声、香り、味、触れられるもの、心の対象に執着した心を起こしてはならない。――法に執着した心を起こしてはならない。法ではないものに執着した心を起こしてはならない。何かに執着した心を起こしてはならない。

１４－１５

それはなぜかというと、およそ執着したということは、すなわち執着しなかったことだからである。それゆえ、如来は説かれた。『菩薩は、執着することなく布施をしなければならない。――色形、声、香り、味、触れられるもの、心の対象に執着することなく、布施をしなければならない』と」

執着のないことと菩薩の利他の心とは相反するのではないか

１４－１６

「さらに、スブーティよ、あらゆるもの、生きとし生けるもの（衆生）のために、菩薩は、このような布施、喜捨を行なわなければならない。なぜかというと、スブーティよ、この衆生という観念は、観念ではないからである。同様に、如来によって説かれたあらゆる衆生とは、すなわち衆生ではないのである」

説法の本質

１４－１７

「それはなぜか。スブーティよ、如来は真実を語るものであり、如来は真理を説くもの、ありのままに語るもの、誤りなく説くものだからである。如来は虚偽を語るものではない」

１４－１８

「さらに、スブーティよ、如来がさとった法、教示しまた洞察した法、――そこには真理もなく虚偽もない」

１４－１９

「スブーティよ、たとえば暗闇のなかにはいった人にはなにも見えないであろう。それと同じく、ものにとらわれて布施をする菩薩は、ものにとらわれ（て何も見えない）ものとみなされなければならない。スブーティよ、たとえば、（健全な）眼をもっている人ならば、夜が明けて太陽がのぼったときに、いろいろな形のものを見るであろう。それと同じく、ものにとらわれずに布施をする菩薩は、ものにとらわれないもの（あらゆる真実を見うるもの）と考えられなければならない」

文字の修行と意味の修行

１４－２０

「さらにまた、スブーティよ、だれが良家の男子、あるいは良家の女子がいて、この法門を（自ら）把握し、記憶し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するとしよう。スブーティよ、彼らを如来は、仏知をもって知っておられるのである。如来は、仏眼をもって、彼らをごらんになっている。スブーティよ、彼らは、

如来によってよく知られているのである。彼らはすべて、スブーティよ、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだし、また（その結果を）自分のものにするであろう」

持經功德分第十五

１５－１

「さて、スブーティよ、女子にせよ、男子にせよ、朝のあいだにガンガー河の砂の数に等しい（自己の）身体を喜捨し、同様に、昼間にもガンガー河の砂の数に等しい身体を喜捨し、夕刻にもガンガー河の砂の数に等しい身体を喜捨するとしよう。このようにして、百・千のコーティ・ニユタという多くの劫のあいだ、身体を喜捨しつづけるとしよう。他方、この法門を聞いて、（それを）謗らないものがいるとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より多くの、はかりしれない無数の功徳を集積するであろう。まして（この法門を）書写して把握し、記憶し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するものはいうまでもない」

修行にはどのような作用（業）があるか

１５－２

「さらに、スブーティよ、この法門は思議することのできないもの（不可思議）、比較を絶したものである。また、スブーティよ、この法門は、最上の道にはいった人々のために、至高の道にはいった人々のために、如来によって説かれたものである。およそこの法門を（自ら）把握し、記憶し、読誦し、理解し、さらに他の人々にくわしく説明するならば、スブーティよ、そのような人々を、如来は仏知をもって知る。スブーティよ、彼らを如来は仏眼をもって見る。彼らは如来によってよく知られている。彼らはすべて、スブーティよ、はかりしれない功徳の集積をそえたものとなるであろう。

思議することができず、比較を絶し、はかることもできない無量の功徳の集積をそなえたものとなるであろう。

１５－３

スブーティよ、これらの人々はすべて、わがさとり（菩提）をその肩に担うものであろう。

それはなぜか。スブーティよ、劣った（教えに）信をおく人々は、この法門を聞くことができないからである。自我を実在視するもの、衆生を実在視するもの、命あるものを実在視するもの、個我を実在視するものも、（同じくこの法門を聞くことが）できないからである。菩薩の誓いをたてないものは、この法門を聞くことも、把握することも、記憶することも、読誦することも、理解することもできない。そのような道理はありえないのである」

１５－４

「さらにまた、スブーティよ、ある土地で、この経典が説かれるでもあろうならば、その土地は、神々や人間やアスラを含めた世界にとって、供養されるべきものとなるであろう。その土地は、礼拝されるべきもの、右繞されるべきものとなるであろう。その土地は、塔廟に等しいものとなるであろう」

能淨業障分第十六

１６－１

「しかしながら、スブーティよ、良家の子女たちが、このような経典を（自ら）把握し、記憶し、読誦し、理解し、さらに根底的に考察（如理作意）して、他の人々にくわしく説明するとしても、彼らはいやしめられ、ひどく軽蔑されるでもあろう。

１６－２

それはなぜか。スブーティよ、そのような人々は、悪趣に生まれる結果を招くさまざまな悪業を前世にしており、（彼らは）現世でいやしめられることによってはじめて、その前世になしたさまざまな悪業が破棄されて、仏陀のさとりを得るであろうからである」

１６－３

「それはなぜかというと、スブーティよ、私はつぎのことを思い起こすからである。無数の、というよりさらに無数の劫の昔――正しいさとりを得た尊敬すべきディパンカラ如来より前、はるか以前――に、百・千・コーティ・ニユタの八十四倍もの仏陀がおられた。私はこれらの仏陀を（供養して）喜ばせ、喜ばせはしたが、違背することはなかった。

１６－４

スブーティよ、私は、これら諸仏、世尊を喜ばせ、喜ばせて違背することがなかったが、他方、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になって、このような経典を

把握し、記憶し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明する人々がいるとしよう。実に、スブーティよ、(両者のうちで)前者の功徳の集積は、後者の功徳の集積の百分の一にも及ばない。千分の一にも、百・千分の一にも、コーティ分の一にも、百・コーティ分の一にも、百・千・コーティ分の一にも、百・千・コーティ・ニユタ分の一にも及ばない。数字にも、区分にも、計算にも、比喩にも、比較にも、類似にも、耐えうることはないのである」

１６－５

「またもしも、スブーティよ、右のような良家の子女たちが、そのばあいにどれほどの功徳を積むことになり、また(その結果を)自分のものにするであろうかという、彼ら良家の子女たちの功徳の集積について私が説明するならば、(それを聞いて)人々は気がおかしくなったり、心が狂乱したりするであろう。

１６－６

しかし実に、スブーティよ、この法門は思議することのできないものと如来は説いたのであり、(したがって)その報いもまた思議を超えたものであることが、予期されるべきなのである」

究竟無我分第十七

重ねて、菩薩のあり方、実践、心の訓練について

１７－１
そこで長老スブーティは、世尊に次のように申し上げた。
「世尊よ、すでに菩薩の道に向かって歩みを進めたものは、どのようにあるべきであり、どのように実践すべきであり、どのように心を訓練すべきでありましょうか」

１７－２
世尊は仰せられた。
「スブーティよ、菩薩の道に歩みを進めたものは、ここでつぎのように考えなければならない。すなわち、『あらゆる衆生を、私は、煩悩の余燼さえない涅槃の世界に引きいれなければならない。

１７－３
しかもなお、たとえ多くの衆生を涅槃に導いたとしても、いかなる衆生も涅槃にはいったのではない』と。

１７－４
それはなぜかというと、スブーティよ、もしも菩薩に衆生という観念が起こるであろうなら、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである。あるいは命あるものという観念や、個我の観念にいたるまでが起こるであろうなら、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである。

１７－５
それは何ゆえか。『菩薩の道に歩みを進めた』と言われるようなもの（法）は、何も存在しないからである」

１７－６
スブーティよ、どう思うか。如来が、ディパンカラ如来のみもとで、このうえなく正しいさとりとしてさとったような法が、何かあるのであろうか」

１７－７
このようにいわれて、長老スブーティは、世尊につぎのように申しあげた。
「世尊よ、世尊のお説きになった意味を私が理解したところによりますと、世尊よ、正しいさとりを得た尊敬すべきディパンカラ如来のみもとで、如来が、このうえなく正しいさとりをさとったような法は、何もあるのではありません」

１７－８
このようにいわれたとき、世尊は長老スブーティにつぎのように語られた。
「そのとおりだ、スブーティよ、それはそのとおりだ。スブーティよ、正しいさとりを得た尊敬すべきディパンカラ如来のもとで、如来がこのうえなく正しいさとりとしてさとったような法は、何も存在しない。

１７－９
スブーティよ、もしも何か如来がさとった法があるのであれば、ディパンカラ如来は、つぎのような予言を私に与えはしなかったであろう、『若者よ、お前はのちの世に、シャーキヤムニ（釈迦牟尼）

と名づけられる正しいさとりを得た尊敬すべき如来となるであろう』と。

１７－１０

実に、スブーティよ、正しいさとりを得た尊敬すべき如来（である私）が、なんらの法も、このうえなく正しいさとりとして（そのときに）さとったのではないから、それゆえに私は、『若者よ、お前はのちの世に、シャーキヤムニと呼ばれる正しいさとりを得た尊敬すべき如来となるであろう』と、ディパンカラ如来によって予言を与えられたのである」

１７－１１

「それはなぜか。如来というのは、スブーティよ、これは、実在なる真如の異名にほかならないからである。〔スブーティよ、如来というのは、不生なる法性の異名である。スブーティよ、如来とは、ものが断絶することの異名である。スブーティよ、如来とは、究極的に不生なることの異名である。なぜかといえば、最高の真理とは、すなわち不生であることだからである。〕」

１７－１２

「スブーティよ、だれかある人が、『正しくさとった尊敬すべき如来は、このうえもなく正しいさとりをさとったのだ』と、このように語るとすれば、彼は誤りを語ることになる。彼は、スブーティよ、真実でないことに執着して、私を謗ることになるのである。

１７－１３

それは何ゆえか。スブーティよ、如来が、このうえもなく正しいさとりをさとったような法は、何も存在しない。

１７－１４
また、スブーティよ、如来がさとったり、あるいは説いたりしたような法においては、真理もなく、虚偽もないからである。それゆえに、『あらゆるもの（法）は、仏陀の本質（法）である』と、如来は説くのである。

１７－１５
なぜならば、スブーティよ、あらゆるもの（法）というものは、法ではないと、如来は説いた（第六節）。だから、『あらゆる法は、仏陀の法である』といわれるのである」

巨身のたとえ

１７－１６
「スブーティよ、たとえば、欠陥のないからだをそなえた、巨大なからだの持ち主がいるとしよう」

１７－１７
長老スブーティがお答えした。
「世尊よ、ある人を、欠陥のないからだをそなえた、巨大なからだの持ち主であるとして、如来は仰せられたのですが、世尊よ、かの人は実はからだの持ち主ではないのだと、如来はお説きになったのです。したがって、欠陥のないからだ、巨大なからだ、といわれるのです」

菩薩も、その行も、その浄土も、すべて否定されるか

１７－１８
世尊が仰せられた。

「そのとおりだ、スブーティよ。ある菩薩が、『私は、多くの衆生を完全に涅槃せしめるであろうと』、このように語るならば、彼は菩薩ではないというべきである。それは何ゆえか。スブーティよ、そもそもさとりを求める衆生（菩薩）と呼ばれるようなものが、何かあるのであろうか」

１７－１９

スブーティが答えた。

「いいえ、世尊よ、さとりを求める衆生（菩薩）と呼ばれるような、何ものかがあるのではありません」

１７－２０

世尊が仰せられる。

「スブーティよ、（さとりを求める）衆生である、（さとりを求める）衆生であるという、それらのものは、衆生ではないのだと如来は語ったからである。だから、衆生といわれるのである。したがって如来は、『あらゆる法に自我がない、あらゆる法に衆生がなく、命あるものがなく、個我がない』と説いたのである」

１７－２１

「スブーティよ、ある菩薩が、『私は、（仏陀の）国土の光輝を完成しよう』というならば、彼もまた同様に（菩薩ではない）といわれるべきである。なぜかというと、スブーティよ、国土の光輝、国土の光輝というのは、それは光輝ではないのだと、如来は説かれたのであって、それゆえ、国土の光輝といわれるのだからである」

１７－２２

「スブーティよ、もしも菩薩が『法には自我がない、法には自我がない』と信じ理解するならば、彼をこそ、正しくさとりを得た尊敬

されるべき如来は、菩薩であり偉大な衆生であると、称するのである」

一體同觀分第十八

すべてを否定し、すべてを見ないのは、眼がないことではないか

１８－１
世尊は仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。如来には肉眼があるであろうか」

１８－２
スブーティが答える。
「世尊よ、そのとおりです。如来には肉眼がございます」

１８－３
世尊がいわれる。
「スブーティよ、どう思うか。如来には神の眼（天眼）があるであろうか」

１８－４
スブーティが答える。
「世尊よ、そのとおりです。如来には神の眼がございます」

１８－５
世尊がいわれる。
「スブーティよ、どう思うか。如来には知恵の眼（慧眼）があるであろうか」。

１８－６
スブーティが答える。
「世尊よ、そのとおりです。如来には知恵の眼がございます」

１８－７
世尊がいわれる。
「スブーティよ、どう思うか。如来には法の（真相を見る）眼（法眼）があるであろうか」

１８－８
スブーティが答える。
「世尊よ、そのとおりです。如来には法の眼がございます」

１８－９
世尊がいわれる。
「スブーティよ、どう思うか。如来にはさとれるものの眼（仏眼）があるであろうか」

１８－１０
スブーティが答える。
「世尊よ、そのとおりです。如来には仏眼がございます」

１８－１１
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。ガンガーの大河のなかにあるほどの砂、その砂について如来は説いたであろうか」

１８－１２
スブーティが答えた。
「世尊よ、そのとおりです。善逝よ、そのとおりです。如来はその砂のことを説かれました」

１８－１３
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。ガンガーの大河のなかにある砂の数と同じだけ、ガンガーの河があり、それら（すべて）にある砂の数と同じだけの世界があるとしよう。いったい、それらの世界の数は、多いといえるだろうか」

１８－１４
スブーティが答えた。
「世尊よ、そのとおりです。善逝よ、そのとおりです。それらの世界は、多数でありましょう」

１８－１５
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、それらの世界にあるかぎりの衆生たちの、種種の性質の心の流れを、私は知っている。

１８－１６
それはなぜか。心の流れ、心の流れというのは、スブーティよ、それは流れではないのだと、如来は説き、それゆえ、心の流れといわれるのだからである。

１８－１７
それはまた何ゆえか。スブーティよ、過去の心はとらえられない

（不可得）し、未来の心もとらえられないし、現在の心もとらえられないからである」

法界通化分第十九

功徳を見ることも誤りなのではないか

１９－１

「スブーティよ、どう思うか。良家の男子にせよ、女子にせよ、この三千大千世界を七種の宝で満たして、正しいさとりを得た尊敬されるべきもろもろの如来に布施するものがあるとしよう。さて、良家の男子にせよ、女子にせよ、そのような人は、それによって、多くの功徳を積み集めたことになるのであろうか」

１９－２

スブーティがお答えした。

「世尊よ、多いのです。善逝よ、それは多いのです」

１９－３

世尊がいわれた。

「そのとおりなのだ、スブーティよ。かの良家の男子にせよ、女子にせよ、彼はそれによって、多くの功徳を積み集めたことになるであろう。

１９－４

なぜかというと、スブーティよ、功徳の集積、功徳の集積というのは、それは集積ではない、と如来は説いたのであって、だから、功徳の集積といわれるからである。

１９－５

スブーティよ、もしも功徳の集積ということがあるとすれば、如来は、功徳の集積である、功徳の集積であるとは、語らなかったであろう」

離色離相分第二十

無為としての仏と、その相好

２０－１
「スブーティよ、どう思うか。物質的な身（色身）の完備したものとして、如来を見るべきであろうか」

２０－２
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、そうではありません。物質的な身の完備したものとして、如来を見るべきではありません。

２０－３
なぜかといえば、世尊よ、物質身の完備、物質身の完備というのは、それは完備ではないのだ、と如来はお説きになったのであり、それゆえ、物質的な身が完備したといわれるのだからです」

２０－４
世尊が問うた。
「スブーティよ、どう思うか。（三十二の）相を具備したものとして、如来を見るべきであろうか」

２０－５
スブーティが答えた。

「世尊よ、そうではありません。相を具備したものとして、如来を見るべきではありません。

２０－６

なぜかといえば、世尊よ、およそ、相を具備する、と如来がお説きになった、そのことは、相を具備してはいないのだ、と如来はお説きになったのであり、それゆえに、相を具備する、といわれるのだからです」

非説所説分第二十一

無為としての仏と、その説法

２１－１
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。いったい『私は法を説いた』と如来は考えるであろうか」

２１－２
スブーティがお答えした。
「世尊よ、そのようなことはありません。如来が『私は法を説いた』と考えるようなことは、ありません」

２１－３
世尊がいわれた。
「スブーティよ、だれかがいて、『如来は法を説かれた』と、このように語るとすれば、彼は誤りを語ることになる。彼は真実ならざることに執着して、私を謗ることになるのである。

２１－４
それはなぜかといえば、スブーティよ、説法、説法といわれるが、説法と呼ばれ認められるようなものは、何も存在しないからである」

仏もなく説法もないということをだれが信じえようか

２１－５

このようにいわれて、長老スブーティは、世尊につぎのことをお尋ねした。

「世尊よ、将来、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、このような（理解しがたい）これらの法を聞いて信ずるような衆生が、だれかおりましょうか」

２１－６

世尊が仰せられた。

「スブーティよ、彼らは、衆生なのでもなく、衆生でないのでもない。

２１－７

それはなぜかといえば、スブーティよ、衆生、衆生といわれるが、彼らはすべて衆生ではないのだ、と如来は説いたのであって、それゆえに、衆生といわれるのだからである」

無法可得分第二十二

何かの認識把握を積み重ねて、最後に“このうえなき”ものに到達するのではないか

２２－１
「スブーティよ、つぎのことをどう思うか。このうえない正しいさとりを如来がさとったという、そのようななんらかの法がはたしてあるのであろうか」

２２－２
長老スブーティがお答えした。
「世尊よ、そうではありません。世尊よ、このうえない正しいさとりを如来がさとったという、そのような法がなんらかあるのではありません」

２２－３
世尊が仰せられた。
「そのとおりだ、スブーティよ、それはそのとおりだ。そこには法が塵ほどもあるのではなく、認められもしない。それゆえに、このうえもない正しいさとりといわれるのである」

淨心行善分第二十三

２３－１

「さらにまた、スブーティよ、実にその法は平等なのであって、そこに（高下、増減など）何か差別があるのではない。それゆえに、このうえない正しいさとりといわれる。

２３－２

自我がなく、衆生がなく、命あるものがなく、個我がないということによって、またこのうえない正しいさとりが平等なのであって、それがあらゆる善の諸法によってさとられるのである。

２３－３

なぜかといえば、スブーティよ、善の諸法、善の諸法というが、それらは法なのではない、と如来は説いたのであり。それゆえに、善の諸法といわれるのだからである」

福智無比分第二十四

善によってさとりが得られるなら、説法は無意味なのではないか

２４－１

「スブーティよ、さらにまた女子にせよ、男子にせよ、だれかがいて、三千大千世界のなかにあるかぎりの幾多の山の王なるスメール山――そのすべてを集めた量に等しいだけの七種の宝を積み重ねて、それを、正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来に供養しささげるとしよう。他方また、だれか良家の子女がいて、この『知恵の完成』の法門のなかから、たとえ四句からなる詩頌の一つだけでも、（自ら）把握し、他の人々にも説くとしよう。スブーティよ、（両者のうちで）かの前者の功徳の集積は、この後者の功徳の集積に比して、その百分の一にも及ばず、ないし、比較にたえることはできないのである」

化無所化分第二十五

すべてが平等（第二三節）であるなら、いかにして救われる衆生と救う仏とがあるか

２５－１

「スブーティよ、どう思うか。『私は衆生を解脱させた』などと、はたして如来が考えるであろうか。

２５－２

実に、スブーティよ、けっしてそのようにみなすべきではない。それはなぜかといえば、スブーティよ、如来によって解脱させられたような衆生は、だれもいないからである。

２５－３

もしまた、スブーティよ、如来が解脱させたような衆生がだれかいるとすれば、如来には自我への執着があることとなろう。衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着があることとなろう。

２５－４

スブーティよ、自我への執着という、それは執着ではない、と如来は説いたのであって、それを愚かな凡夫たちがみだりに執着しているにほかならない。

２５－５

愚かな凡夫というのも、スブーティよ、凡夫ではない、と如来は説いたのであり、それゆえに愚かな凡夫といわれるのである」

法身非相分第二十六

法身に相好はありえないとしても、相好によって法身が推し測られうるのではないか

２６－１
「スブーティよ、どう思うか。如来を（三十二の）相をそなえたものとして見てよいであろうか」

２６－２
スブーティが答えた。
「世尊よ、そうではありません。私が世尊のお説きになった意味を理解するかぎりでは、如来を相をそなえたものとして見るべきではありません」

２６－３
世尊が仰せられる。
「よいかな、よいかな、スブーティよ。まったくお前のいうとおりである。相をそなえたものとして、如来は見られるべきではない。

２６－４
なぜかといえば、スブーティよ、もし如来を相をそなえたものとして見てよいのであるならば、転輪王もまた如来であることになるであろう。だから、相をそなえたものとして、如来が見られるべきではない」

２６－５

長老スブーティは、世尊に次のように申しあげた。

「世尊の仰せられたところを私が理解するかぎりでは、如来は相をそなえたものとして見られるべきではありません」

２６－６

さて、世尊はそのとき、つぎの二つの詩頌を説かれた。

「われを色や形によって見るであろうもの、
われを声によって理解するであろうもの、
これらの人々は誤った努力に身をおくものであって、
（真の意味で）われを見るものではない」

「諸仏は法として見られるべきであり、
（世間を）導くもの（仏陀）は法を身体とするものとして（見られるべき）である。
しかも、法の本質（法性）は知られるべくもなく、
それを認識することは不可能である」

無斷無滅分第二十七

徳がさとりに無縁であるならば、菩薩には功徳もその果報もないのか

２７－１
「スブーティよ、どう思うか。如来は、相好をそなえることによって、このうえない正しいさとりをさとったのであろうか。

２７－２
しかし、スブーティよ、お前、そのように考えてはならない。なぜかといえば、スブーティよ、相好をそなえることによって、如来が、このうえない正しいさとりをさとったであろうというようなことはないからである。

２７－３
さらにまた、スブーティよ、『菩薩の道にはいったものは、(世間的な功徳とかその果報とかのような)何らかの法を消滅し、あるいは断滅することを期するのである』と、このようにお前にだれかが語るかもしれない。

２７－４
しかし、スブーティよ、お前、そのように考えてはならない。なぜかといえば、菩薩の道にはいったものは、いかなる法についての消滅も断滅も、期することはないからである」

不受不貪分第二十八

２８－１

「さらにまた、スブーティよ、良家の男子、あるいは女子が、ガンガー河の砂の数ほどの世界を、七種の宝で満たし、それを正しいさとりを得た尊敬すべきもろもろの如来にささげ供養するとしよう。またある菩薩は、諸法には自我がなく、また生ずることもないと認容する知（無生法忍）を得たとする。（両者のうちで）後者こそは、そのことによって、（前者よりも）より多くの、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだすことになろう。しかしまた、スブーティよ、偉大なる菩薩は功徳の集積を受けとるべきではない」

２８－２

長老スブーティがお尋ねした。

「世尊よ、菩薩は功徳の集積を受けとるべきなのではないでしょうか」

２８－３

世尊が答えられた。

「スブーティよ、受けとるべきなのだ。しかし（執着して）執るべきではない。それゆえに、受けとるべき（でない）といわれるのである」

威儀寂靜分第二十九

果報がないとすれば、菩薩の功徳になんのはたらきがあるか

２９－１

「さらにまた、スブーティよ、あるものがつぎのようにいうかもしれない。『如来は去る、くる、立っている、すわっている、あるいは臥ている』と。しかし彼は、スブーティよ、私の説いた意味を理解してはいないのである。

２９－２

なぜかといえば、スブーティよ、如来（すなわち、如々に去り、如々に来るもの）というのは、どこかに去ったのでもなく、どこかからきたのでもないからである。それゆえに、正しくさとりを得た尊敬すべき如来といわれるのである」

一合離相分第三十

法界における仏身のあり方について

３０－１

「さらにまた、スブーティよ、だれか良家の男子、あるいは女子がいて、三千大千世界のなかにあるすべての土の塵の数に等しいだけの世界を、数えきれない努力によって粉砕し、たとえば原子（極微）の集合とでもいうべき粉末にしたとしよう。スブーティよ、この原子の集合は多量であろうか」

３０－２

スブーティがいった。

「世尊よ、そのとおりです。善逝よ、そのとおりです。それは多量の原子の集合でありましょう。なぜかといえば、世尊よ、もしも多量の原子の集合があったとすれば、世尊は原子の集合だとは説かれなかったであろうからです。

３０－３

なぜならば、世尊よ、如来がお説きになった原子の集合なるものは、集合ではないのだ、と如来は説かれたからです。それゆえに、原子の集合といわれるのです」

３０－４

「如来が三千大千世界といってお説きになったものも、それは界ではな

いのだと如来は仰せになりました。それゆえ、三千大千世界といわれるのです。

３０－５

なぜかといえば、世尊よ、もしも世界があったとすれば、それこそは一つの塊りとして執着していることでありましょう。如来がお説きになった一つの塊りへの執着なるものは、それは執着ではないのだ、と如来は仰せられました。それゆえ、一つの塊りへの執着といわれるのです」

凡夫の執着と、菩薩の正しい見方

３０－６

世尊が仰せらた。

「スブーティよ、一つの塊りへの執着というのも、世俗のことばにすぎない。（その本質は、ことばでは）語りえないものである。それは法でもないし、法でないのでもない。しかし、それに愚かな凡夫たちは執着している」

知見不生分第三十一

３１－１

「それはなぜか。スブーティよ、だれかがつぎのようにいうとしよう。『如来は、自我について（実在すると）の見解を説いた。衆生についての、命あるものについての、個我についての（同様の）見解を説いた』と。そのようにいう彼は、スブーティよ、真実を語るものであろうか」

３１－２

スブーティはお答えした。

「世尊よ、そうではありません。善逝よ、そうではありません。彼は真実を語るものではありません。なぜかといいますと、如来がお説きになった、自我についての（実在の）見解なるもの、それは見解ではないのだ、と如来はお説きになったのであり。それゆえにこそ、自我についての見解だといわれるからです」

３１－３

世尊がいわれた。

「実に、スブーティよ、菩薩の道にはいったものは、あらゆる法をそれと同じように、知るべきであり、見るべきであり、信じ理解すべきである。

３１－４

（すなわち）法という観念にさえもとらわれることがないようにし

て、知るべきであり、見るべきであり、信じ理解すべきである。それはなぜかといえば、スブーティよ、法の観念、法の観念というのは、観念ではないのだ、と如来は説いたのであり、それゆえにこそ、法の観念といわれるのだからである」

應化非眞分第三十二

説法は説法ではないから、説法には大きな功徳がある

３２－１

「さらにまた、スブーティよ、だれか偉大な菩薩がいて、はかりしれない無数の世界を七種の宝で満たし、それを正しくさとりを得た尊敬されるべきもろもろの如来にささげ供養したとしよう。他方また、良家の男子、あるいは女子がいて、この知恵の完成という法門から、たとえ四句からなる詩頌の一つだけでも、（自ら）把握し、記憶し、読誦し、理解し、さらに他の人々にくわしく説き明かすとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より多くの、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだすであろう。

３２－２

また説き明かすとは、どのようなあり方でするのであろうか。『説き明かさないというあり方で』である。それゆえ、説き明かす、といわれる」

化身の説法が尽きることのないものならば、何ゆえに仏陀は涅槃にはいるのか

（そのとき世尊は、つぎの詩頌をお説きになった。）

「星、目の翳、ともし火、
まぼろし、露、水泡、
夢、稲妻、雲ーー、
このようなものとして、つくられたもの（有為の世界）が、
見られなければならない」

３２－３

以上のように、世尊はお話しになられた。スブーティ上座、これらの比丘、比丘尼、男女の在俗の信者たち、かの菩薩たち、そして神々、人間、アスラ、ガンダルヴァからなるこの世界中のものたちは、心が歓喜して、世尊の説かれたことを賞讃した。

３２－４

以上「金剛のごとくに摧断するもの」という、聖なる、とうとき「知恵の完成」が終わった。

金剛般若波羅蜜多経

中村元　譯

1960

尊ぶべき、神聖な、智慧の完成に礼したてまつる

法會因由分第一

１－１
わたくしが聞いたところによると、――あるとき師は、千二百五十人もの多くの修行僧たち〔と、多くの求道者・すぐれた人々〕とともに、シュラーウ゛ァスティー市のジェータ林、孤独な人々に食を給する長者の園に滞在しておられた。

１－２
さて師は、朝の中に、下衣をつけ、鉢と上衣をとって、シュラーウ゛ァスティー大市街を食物を乞うて歩かれた。

１－３
師はシュラーウ゛ァスティー大市街を食物を乞うために歩かれ、食事を終えられた。食事が終わると、行乞から帰られ、鉢と上衣とをかたづけて、両足を洗い、設けられた座に両足を組んで、体をまっすぐにして、精神を集中して坐られた。

１－４
そのとき、多くの修行僧たちは師の居られるところに近づいた。近づいて師の両足を頭に頂き、師のまわりを右まわりに三度まわって、かたわらに坐った。

善現起請分第二

２－１
ちょうどそのとき、スブーティ長老もまた、その同じ集まりに来合わせて坐っていた。

２－２
さて、スブーティ長老は座から起ちあがって、上衣を一方の肩にかけ、右の膝を地につけ、師の居られる方に合掌して次のように言った。

２－３
「師よ、すばらしいことです。幸ある人よ、まったくすばらしいことです、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人によって、求道者・すぐれた人々が《最上の恵み》につつまれているということは。

２－４
師よ、すばらしいことです。如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人によって、求道者・すぐれた人々が《最上の委嘱》をあたえられているということは。

２－５
ところで、師よ、求道者の道に向かう立派な若者や立派な娘は、どのように生活し、どうのように行動し、どのように心を保ったらよいのですか。」

２－６
このように問われたとき、師はスブーティ長老に向かって次のように答えられた――「まことに、まことに、スブーティよ、あなたの言う通りだ。如来は求道者・すぐれた人々を最上の恵みでつつんでいる。如来は求道者・すぐれた人々に最上の委嘱を与えている。

２－７
だから、スブーティよ、聞くがよい。よくよく考えるがよい。求道者の道に向かう者はどのように生活し、どのように行動し、どのように心を保つべきであるかということを，わたしはあなたに話して聞かせよう。」

２－８
「そうして下さいますように、師よ。」と、スブーティ長老は師に向かって答えた。

大乘正宗分第三

３－１

師はこのように話し出された

「スブーティよ、ここに、求道者の道に向かう者は、次のような心をおこさなければならない。すなわち、スブーティよ――

『およそ生きもののなかまに含められるかぎりの生きとし生けるもの、卵から生まれたもの、母胎から生まれたもの、湿気からうまれたもの、他から生まれず自から生まれ出たもの、形のあるもの、形のないもの、表象作用のあるもの、表象作用のないもの、表象作用があるのでもなく無いのでもないもの、その他生きもののなかまとして考えられるかぎり考えられた生きとし生けるものども、それらのありとあらゆるものを、わたしは、《悩みのない永遠の平安》という境地に導き入れなければならない。

３－２

しかし、このように、無数の生きとし生けるものを永遠の平安に導き入れても、実は誰ひとりとして永遠の平安に導き入れられたものはない。』と。

３－３

それはなぜかというと、スブーティよ、もしも求道者が、《生きているものという思い》をおこすとすれば、もはやかれは求道者とは言われないからだ。

３－４

それはなぜかというと、スブーティよ、誰でも《自我という思い》をおこしたり、《生きているものという思い》や、《個体という思い》や、《個人という思い》などをおこしたりするものは、もはや求道者とは言われないからだ。」

妙行無住分第四

４－１
「ところで、また、スブーティよ、求道者はものにとらわれて施しをしてはならない。なにかにとらわれて施しをしてはならない。形にとらわれて施しをしてはならない。声や、香りや、味や、触れられるものや、心の対象にとらわれて施しをしてはならない。

４－２
このように、スブーティよ、求道者・すぐれた人々は、跡をのこしたいという思いにとらわれないようにして施しをしなければならない。

４－３
それはなぜかというと、スブーティよ、もしも求道者がとらわれることなく施しをすれば、その功徳が積み重なって、たやすくは計り知られないほどになるからだ。

４－４
スブーティよ、どう思うか。東の方の虚空の量は容易に計り知られるだろうか。」

４－５
スブーティは答えた――「師よ、計り知られません。」

４－６
師は問われた――「これと同じように、南や西や北や下や上の方角

など、あまねく十方の虚空の量は、たやすく計り知られるだろうか。」

４－７
スブーティは答えた――「師よ、計り知られません。」

４－８
師は言われた――「スブーティよ、これと同じことだ。もしも求道者がとらわれることなく施しをすれば，その功徳の積み重なりはたやすくは計り知られない。

４－９
実に、スブーティよ、求道者の道に向かうものは、このように、跡をのこしたいという思いにとらわれないようにして施しをしなければならないのだ。」

如理實見分第五

５－１
「スブーティよ、どう思うか、如来は特徴をそなえたものと見るべきであろうか。」

５－２
スブーティは答えた――「師よ、そう見るべきではありません。如来は特徴をそなえたものと見てはならないのです。それはなぜかというと、師よ、〈特徴をそなえているということは特徴をそなえていないことだ〉と、如来が仰せられたからです。」

５－３
このように答えられたとき、師はスブーティ長老に向かって次のように言われた――「スブーティよ、特徴をそなえているといえば、それはいつわりであり、特徴をそなえていないといえば、それはいつわりではない。だから、特徴があるということと、特徴がないということとその両方から如来を見なければならないのだ。」

正信希有分第六

６－１
このように言われたとき、スブーティ長老は、師に向かって次のように訊ねた――「師よ、これから先、後の時世になって第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃には、このような経典の言葉が説かれても、それが真実だと思う人々が誰かいるでしょうか。」

６－２
師は答えられた――「スブーティよ、あなたはそういう風に言ってはならない。これから先、後の時世になって、第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃に、このような経典の言葉が説かれるとき、それが真実だと思う人々が誰かいるに違いない。

６－３
スブーティよ、また、これから先、後の時世になって、第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃に、徳高く、戒律を守り、智慧深い求道者・すぐれた人々は、このような経典の言葉が説かれるとき、それは真実だと思うに違いない。

６－４
スブーティよ、また、かれら求道者・すぐれた人々は、ひとりの目ざめた人（仏）に近づき帰依したり、ひとりの目ざめた人のもとで善の根を植えたりしただけではなく、何十万という多くの目ざめた人々（諸仏）に近づき帰依したり、何十万という多くの目ざめた人々のもとで善の根を植えたりしたことのある人々であって、この

ような経典の言葉が説かれるとき、ひたすらに清らかな信仰を得るに違いないのだ。

6－5

スブーティよ、如来は目ざめた人の智慧でかれらを知っている。スブーティよ、如来は目ざめた人の眼でかれらを見ている。スブーティよ、如来はかれらを覚っている。

6－6

スブーティよ、かれらすべては、計り知れず、数えきれない功徳を積んで、自分のものとするようになるに違いないのだ。

6－7

それはなぜかというと、スブーティよ、実にこれらの求道者・すぐれた人々には、自我という思いはおこらないし、生存するものという思いも、個体という思いも、個人という思いもおこらないからだ。

6－8

また、スブーティよ、これらの求道者・すぐれた人々には、《ものという思い》もおこらないし、同じく、《ものでないものという思い》もおこらないからだ。また、スブーティよ、かれらには、思うということも、思わないということもおこらないからだ。それはなぜかというと、

6－9

スブーティよ、もしも、かれら求道者・すぐれた人々に、《ものという思い》がおこるならば、かれらには、かの自我に対する執着があるだろうし、生きているものに対する執着、個体に対する執着、個人に対する執着があるだろうから。

６－１０

もしも、《ものでないものという思い》がおこるならば、かれらには、かの自我に対する執着があるだろうし、生きているものに対する執着、個体に対する執着、個人に対する執着があるだろうからだ。

６－１１

それはなぜだろうか。実に、また、スブーティよ、求道者・すぐれた人々は、法をとりあげてもいけないし、法でないものをとりあげてもいけないからだ。

６－１２

それだから、如来は、この趣意で、次のようなことばを説かれた――『筏の喩えの法門を知る人は、法をさえも捨てなければならない。まして、法でないものはなおさらのことである。』と。」

無得無説分第七

７－１
さらに、また、師はスブーティ長老に向かってこのように問われた――「スブーティよ、どう思うか。如来が、この上ない正しい覚りであるとして現に覚っている法がなにかあるだろうか。また、如来によって教え示された法がなにかあるのだろうか。」

７－２
こう問われたときに、スブーティ長老は師に向かってこのように答えた――「師よ、わたくしが師の説かれたところの意味を理解したところによると、如来が、この上ない正しい覚りであるとして現に覚っておられる法というものはなにもありません。また、如来が教え示されたという法もありません。

７－３
それはなぜかというと、如来が現に覚られたり、教え示されたりした法というものは、認識することもできないし、口で説明することもできないからです。それは、法でもなく、法でないものでもありません。

７－４
それはなぜかというと、聖者たちは、絶対そのものによって顕されているからです。」

依法出生分第八

８－１

師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。立派な若者や、あるいは立派な娘が、この《はてしなく広い宇宙》を七つの宝で満たして、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人々に施したとすると、その立派な若者や立派な娘は、そのことによって、多くの功徳を積んだことになるであろうか。」

８－２

スブーティは答えた――「師よ、幸ある人よ、その立派な若者や立派な娘は、そのことによって、多くの、多くの功徳を積んだことになるのです。

８－３

それはなぜかというと、師よ、〈如来によって説かれた、功徳を積むということは、功徳を積まないということだ〉と如来が説かれているからです。それだから、如来は、〈功徳を積む、功徳を積む〉と説かれるのです。」

８－４

師は言われた――「そこで、また、実に、スブーティよ、立派な若者や立派な娘があって、このはてしなく広い宇宙を七つの宝で満たして、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人々に施すとしても、この法門から四行詩ひとつでもとり出して、他の人たちのために詳しく示し、説いて聞かせる者があるとすれば、こちらの方が、

このことのために、もっと多くの、計り知れず、数えきれない功徳を積むことになるのだ。

８－５

それはなぜかというと、スブーティよ、実に、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人々の、この上ない正しい覚りも、それから生じたのであり、目ざめた人である世尊らもまた、それから生まれたからだ。

８－６

それはなぜかというと、スブーティよ、〈目ざめた人の理法、目ざめた人の理法というのは、目ざめた人の理法ではない〉と如来が説いているからだ。それだからこそまた目ざめた人の理法と言われるのだ。」

一相無相分第九

９－１

(世尊がいわれたーー)「スブーティよ、どう思うか。《永遠の平安への流れに乗った者》が、〈わたしは、永遠の平安への流れに乗った者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすだろうか。」

９－２

スブーティは答えたーー「師よ、そういうことはありません。永遠の平安への流れに乗った者が、〈わたしは、永遠の平安への流れに乗った者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすはずはありません。それはなぜかというと、師よ、実に、彼はなにものも得ているわけではないからです。それだからこそ、《永遠の平安への流れに乗った者》と言われるのです。かれは、かたちを得たのでもなく、声や、香りや、味や、触れられるものや、心の対象、を得たわけでもありません。それだからこそ、《永遠の平安への流れに乗った者》と言われるのです。

９－３

師よ、もしも、永遠の平安への流れに乗った者が、〈わたしは、永遠の平安への流れに乗った者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこしたとすると、かれには、かの自我に対する執着があることになるし、生きているものに対する執着、個体に対する執着、個人に対する執着があるということになりましょう。」

９－４
師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。《もう一度だけ生まれかわって覚る者》が、〈わたしは、もう一度だけ生まれかわって覚る者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすだろうか。」

９－５
スブーティは答えた――「師よ、そういうことはありません。もう一度だけ生まれかわって覚る者が、〈わたしは、もう一度だけ生まれかわって覚る者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすはずがありません。それはなぜかというと、もう一度だけ生まれかわって覚る者になったといっても、なにもそういうものがあるわけではないからです。それだからこそ、《もう一度だけ生まれかわって覚る者》と言われるのです。」

９－６
師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。《もう決して生まれかわって来ない者》が、〈わたしは、もう決して生まれかわって来ない者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすだろうか。」

９－７
スブーティは答えた――「師よ、そういうことはありません。もう決して生まれかわって来ない者が、〈わたしは、もう決して生まれかわって来ない者という成果に達しているのだ〉というような考えをおこすはずがありません。それはなぜかというと、師よ、実に、もう決して生まれかわって来ない者になったといっても、なにもそういうものがあるわけではないからです。それだからこそ、《もう決して生まれかわって来ない者》と言われるのです。」

９－８
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。《尊敬さるべき人》が、〈わたしは、尊敬さるべき人になった〉というような考えをおこすだろうか。」

９－９
スブーティは答えたーー「師よ、そういうことはありません。尊敬さるべき人が、〈わたしは、尊敬さるべき人になった〉というような考えをおこすはずがありません。それはなぜかというと、師よ、実に、尊敬さるべき人といわれるようなものはなにもないからです。それだからこそ、《尊敬さるべき人》と言われるのです。

９－１０
師よ、もしも、尊敬さるべき人が、〈わたしは、尊敬さるべき人になった〉というような考えをおこしたとすると、かれには、かの自我に対する執着があることになるし、生きているものに対する執着、個体に対する執着、個人に対する執着があるということになりましょう。

９－１１
それはなぜかというと、師よ、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人は、わたくしのことを、《争いのない境地を楽しむ第一人者》と仰せられました。

９－１２
師よ、わたくしは、尊敬さるべき人であり、欲望をはなれています。しかし、師よ、わたくしは、〈わたしは尊敬さるべき人であり、欲望をはなれている〉というような考えはおこしません。師よ、もしも、わたくしが、〈わたしは尊敬さるべき人という状態に達して

る〉というような考えをおこしていたとするならば、如来がわたくしのことを、『立派な若者であるスブーティは、争いをはなれた境地を楽しむ第一人者であり、どこにもとらわれないから、争いをはなれた者である。争いをはなれた者である』などと断言したりはなさらなかったでありましょう。」

莊嚴淨土分第十

１０－１

師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。如来が、尊敬さるべき人・正しく目ざめた人であるディーパンカラ（然燈）如来のみもとで得られたものが、なにかあるだろうか。」

１０－２

スブーティは答えた――「師よ、そういうことはありません。如来が、尊敬さるべき人・正しく目ざめた人であるディーパンカラ如来のみもとで得られたものは、なにもありません。」

１０－３

師は言われた――「スブーティよ、もしも、ある求道者が、『わたしは国土の建設をなしとげるだろう』と、このように言ったとすれば、かれは間違ったことを言ったことになるのだ。それはなぜかというと、スブーティよ、如来は〈国土の建設、国土の建設というのは、建設でないことだ〉と説かれているからだ。それだからこそ、〈国土の建設〉と言われるのだ。

１０－４

それだから、スブーティよ、求道者・すぐれた人々は、とらわれない心をおこさなければならない。何ものかにとらわれた心をおこしてはならない。形にとらわれた心をおこしてはならない。声や、香りや、味や、触れられるものや、心の対象、にとらわれた心をおこしてはならない。

１０－５

スブーティよ、たとえば、ここにひとりの人がいて、その体は整っていて大きく、山の王スメール山のようであったとするならば、スブーティよ、どう思うか。かれの体は大きいであろうか。」

１０－６

スブーティは答えた――「師よ、それは大きいですとも、幸ある人よ、その体は大きいですとも。それはなぜかというと、師よ、如来は、『体、体、というがそんなものはない』と仰せられたからです。それだからこそ、〈体〉と言われるのです。師よ、それは有でもなく、また、無でもないのです。それだからこそ、〈体〉と言われるのです。」

無爲福勝分第十一

１１－１
師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。ガンジス大河の砂の数だけガンジス河があるとしよう。それらの河にある砂は多いであろうか。」

１１－２
スブーティは答えた――「師よ、それだけのガンジス河でさえも、おびただしい数にのぼりましょう。まして、それらのガンジス河にある砂の数にいたってはなおさらのことです。」

１１－３
師は言われた――「わたしはあなたに告げよう。スブーティよ、あなたによく理解させよう。それらのガンジス河にある砂の数だけの世界を、ある女なり、あるいは男なりが、七つの宝で満たして、如来・尊敬すべき人・正しく目ざめた人々に施したとしよう。スブーティよ、どう思うか。その女なり、あるいは男なりは、そのことによって、多くの功徳を積んだことになるであろうか。」

１１－４
スブーティは答えた――「師よ、幸ある人よ、その女なり、あるいは男なりは、そのことによって、多くの、多くの、計り知れず、数えきれない功徳を積んだことになるのです。」

１１－５

師は言われた――「実に、また、スブーティよ、ある女なり、あるいは男なりがそれだけの世界を七つの宝で満たして、如来・尊敬すべき人・正しく目ざめた人々に施すとしても、もしも立派な若者や、あるいは立派な娘が、この法門から四行詩ひとつでもとり出して、他の人々のために示し、説いて聞かせるとすれば、こちらの方が、このことのために、いっそう多くの、計り知れず、数えきれない功徳を積むことになるのだ。」

尊重正教分第十二

１２－１

「「さらにまた、スブーティよ、どのような地方でも、この法門から四行詩ひとつでもとり出して、話したり、説いて聞かせたりされるとすれば、その地方は、神々と人間とアスラたちを含む世界にとって、塔廟にもひとしいものとなるだろう。ましてや、この法門を余すところなく記憶し、読み、研究し、他の人々のために詳しく説いて聞かせる者どもがあるとすれば、スブーティよ、かれらは《最高の奇瑞をそなえた者》となるに違いない。

１２－２

スブーティよ、そういう地方には師と仰がれる者が住み、また、さまざまな《聡明なる師の地位にある者》が住むのだ。」

如法受持分第十三

１３－１
このように言われたときに、スブーティ長老は師に向かって次のように問うた――「師よ、この法門の名は何と申しますか。また、これをどのように記憶したらよいでしょうか。」

１３－２
このように問われたときに、師はスブーティ長老に向かって次のように答えられた――「スブーティよ、この法門は《智慧の完成》と名づけられる。そのように記憶するがよい。

１３－３
それはなぜかというと、スブーティよ、『如来によって説かれた《智慧の完成》は、智慧の完成ではない』と如来によって説かれているからだ。それだからこそ、〈智慧の完成〉と言われるのだ。

１３－４
スブーティよ、どう思うか。如来によって説かれた法というものがなにかあるだろうか。」

１３－５
スブーティは答えた――「師よ、そういうものはありません。如来によって説かれた法というものはなにもありません。」

１３－６
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。このはてしなく広い宇宙の大地の塵は多いであろうか。」

１３－７
スブーティは答えたーー「師よ、それは多いですとも。幸ある人よ、それは多いですとも。そはなぜかというと、師よ、『如来によって説かれた、大地の塵は、大地の塵ではない』と如来によって説かれているからです。それだからこそ、大地の塵と言われるのです。

１３－８
また、『如来によって説かれたこの世界は、世界ではない』と如来によって説かれているからです。それだからこそ〈世界〉と言われるのです。」

１３－９
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来・尊敬すべき人・正しく目ざめた人は、偉大な人物に具わる三十二の特徴によって見分けられるであろうか。」

１３－１０
スブーティは答えたーー「師よ、そうではありません。如来・尊敬すべき人・正しく目ざめた人は、偉大な人物に具わる三十二の特徴によって見分けられるものではありません。

１３－１１
それはなぜかというと、実に、師よ、『如来によって説かれた、偉大な人物に具わる三十二の特徴は、特徴ではない』と如来が説かれているからです。それだからこそ、〈偉大な人物に具わる三十二の

特徴〉と言われるのです。」

１３－１２

師は言われたーー「また、実に、スブーティよ、ひとりの女、または男が、毎日、ガンジス河の砂の数だけの体を捧げ、このように捧げつづけて、ガンジス河の砂の数ほどの無限の時期の間、その体を捧げつづけたとしても、この法門から四行詩ひとつでもとり出して、他の人々のために教え示し、説いて聞かせる者があるとすれば、こちらの方が、このことのために、いっそう多くの、計り知れず、数えきれない功徳を積むことになるであろう。」

離相寂滅分第十四

１４－１
そのとき、スブーティ長老は、法に感動して涙を流した。かれは涙を拭ってから、師に向かってこのように言った――

１４－２
「師よ、すばらしいことです。幸ある人よ、まったくすばらしいことです。《この上ない道に向かう人々》のために、《もっとも勝れた道に向かう人々》のために、この法門を如来が説かれたということは。そして、師よ、それによって、わたくしに智が生じたということは。

１４－３
師よ、わたくしは、このような種類の法門を未だかつて聞いたことがありません。師よ、この経が説かれるのを聞いて、真実だという思いを生ずる求道者は、この上ない、すばらしい性質を具えた人々でありましょう。

１４－４
それはなぜかというと、師よ、真実だという思いは、真実でないという思いだからです。それだからこそ、如来は、〈真実だという思い、真実だという思い〉と説かれるのです。

１４－５
〔しかし、師よ、この法門が説かれているときに、わたくしがそれ

を受け入れ、理解するということは、それほど難しいことではありません。

１４－６
しかし、師よ、これから先、後の時世になって、第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃に、ある人々がこの法門をとりあげて、記憶し、誦え、研究し、他の人々のために、詳しく説明するでありましょうが、その人々はもっともすばらしい性質を具えた者ということになるでありましょう。」

１４－７
けれども、また、師よ、実にそれらの人々には、自己という思いはおこらないし、生きているものという思いや、個体という思いや、個人という思いもおこらないでありましょう。また、それらの人たちには、思うということも、思わないということもおこりません。

１４－８
それはなぜかというと、師よ、自己という思いは思わないということにほかなりませんし、生きているものという思いも、個体という思いも、個人という思いも、思わないということに他ならないからです。

１４－９
それはなぜかというと、みほとけである世尊らは、一切の思いを遠く離れていられるからです。」

１４－１０
このように言われたとき、師はスブーティ長老に向かってこのように言われた――「その通りだ。スブーティよ、その通りだ。この経

が説かれるときに、驚かず、恐れず、恐怖に陥らない人々は、この上ない、すばらしい性質をそなえた人々である。それはなぜかというと、スブーティよ、如来の説かれたこの最上の完成は、実は完成ではないからだ。また、スブーティよ、如来が、最上の完成であると説いたそのことを、無量の、目ざめた人である世尊らがまた説いているからだ。それだからこそ、〈最上の完成者〉と言われるのだ。

１４－１１

けれども、さらにまた、スブーティよ、実に、如来における忍耐の完成は、実は完成ではないのだ。

１４－１２

それはなぜかというと、スブーティよ、かつて或る悪王がわたしの体や手足から肉を切りとったその時にさえも、わたしには、自己という思いも、生きものという思いも、個体という思いも、個人という思いもなかったし、さらにまた、思うということも、思わないということもなかったからである。

１４－１３

それはなぜかというと、スブーティよ、もしも、あの時に、わたしに自己という思いがあったとすると、その時にまたわたしに、《怨みの思い》があったに違いないし、もしも、生きているものという思いや、個体という思いや、個人という思いがあったとすると、その時にまたわたしに、怨みの思いがあったに違いないからだ。

１４－１４

それはなぜかというと、スブーティよ、わたしはありありと思い出す。過去の世に、五百の生涯の間わたしが《忍耐を説く者》(kṣāntivādin) という名の仙人であったことを。その際にもわたし

には、自己という思いはなかったし、生きているものという思いもなかったし、個体という思いもなかったし、個人という思いもなかったからだ。それだから、スブーティよ、求道者・すぐれた人々は、一切の思いをすてて、この上なく正しい目ざめに心をおこさなければならない。かたちにとらわれた心をおこしてはならない。声や、香りや、觸れられるものや、心の対象にとらわれた心をおこしてはならない。法にとらわれた心をおこしてはならない。法でないものにとらわれた心をおこしてはならない。どんなものにもとらわれた心をおこしてはならない。

１４－１５

それはなぜかというと、とらわれているということは、とらわれていないということだからだ。それだから如来は、〈求道者はとらわれることなく施しをしなければならぬ。かたちや、声や、香りや、觸れられるものや、心の対象にとらわれないで、施しをしなければならぬ〉と説かれたのだ。

１４－１６

さらに、また、スブーティよ、実に、求道者は、生きとし生けるもののために、このような施しを与えなければならない。それはなぜかというと、スブーティよ、この生きものという思いは、思いでないということに他ならないからだ。このように、如来が生きとし生けるものと説かれたこれらのものどもは、実は生きものではない。

１４－１７

それはなぜかというと、スブーティよ、如来は真実を語る者であり、真理を語る者であり、ありのままに語る者であり、あやまりなく語る者であるからだ。如来はいつわりを語る者ではないのだ。

１４－１８

さらに、また、スブーティよ、実に、如来が現に覚られ、示され、思いめぐらされた法の中には、真理もなければ、虚妄もない。

１４－１９

スブーティよ、これをたとえて言うと、〔たとい眼があっても〕闇の中に入った人がなにものも見ないようなものだ。ものごとの中に堕ちこんだ求道者もそのように見なすべきである。かれはものごとの中に堕ちこんで施しを与えるのだ。スブーティよ、また、これをたとえて言うと、眼をもった人は、夜が明けて太陽が昇ったときに、いろいろな彩りを見ることができるようなものだ。ものごとの中に堕ちこまない求道者もそのように見なさるべきである。かれらはものごとの中に堕ちこまないで施しを与えるのだ。

１４－２０

さて、スブーティよ、実に、立派な若者たちや立派な娘たちが、この法門をとり上げ、記憶し、誦え、理解し、他の人々に詳しく説いて聞かせるとしよう。スブーティよ、如来は、目ざめた人の智慧でこういう人々を知っている。スブーティよ、如来は、目ざめた人の眼でこういう人々を見ている。スブーティよ、如来はこういう人々を覚っている。スブーティよ、これらすべての人々は、計り知れず、数えきれない福徳を積んで、自分のものとするようになるに違いないのだ。」

持經功德分第十五

１５－１

「また、実に、スブーティよ、女なり男なりがあって、午前中に、ガンジス河の砂の数ほどの体を捧げ、同じように昼間にも、ガンジス河の砂の数ほどの体を捧げ、夕刻にも、ガンジス河の砂の数ほどの体を捧げ、この方法によって、無限に永い間、体を捧げるとしても、この法門を聞いて謗ったりしないならば、こちらの方が、このことのために、さらに多くの、計り知れず、数えきれない福徳を積むことになるのだ。況んや、書き写してから学び、記憶し、誦え、理解し、他の人々に詳しく説いて聞かせる者があれば、なおさらのことだ。

１５－２

さらに、また、スブーティよ、実に、この法門は不可思議で、比べるものがない。スブーティよ、如来はこの法門を、この上ない道に向かう人々のために、もっとも勝れた道に向かう人々のために説かれた。ある人々は、この法門をとり上げ、記憶し、誦え、理解し、他の人々に詳しく説いて聞かせるだろう。スブーティよ、如来は、目ざめた人の智慧によってこういう人々を知っている。スブーティよ、如来は目ざめた人の眼でこういう人々を見ている。スブーティよ、如来はこういう人々を覚っている。これらすべての人々は、計り知れない福徳を積んだことになるだろう。不可思議で、比べるものがなく、限りなく、無量の福徳を積んだことになるだろう。

１５－３

スブーティよ、これらすべての人々は、みずから目ざめに与るようになるだろう。それはなぜかというと、この法門を、信解の劣った人々は聞くことができないからだ。自己に対する執着の見解ある人、生きているものに対する執着の見解ある人、個体に対する執着の見解ある人、個人に対する執着の見解ある人々は聞くことができないからだ。求道者の誓いを立てない人々は、この法門を聞いたり、あるいはとり上げたり、あるいは記憶したり、あるいは誦えたり、あるいは理解したりすることはできない。そのようなことわりはあり得ないのだ。

１５－４

けれども、さらにまた、スブーティよ、実に、どのような地方でも、この経が説かれる地方は、神々と人間とアスラたちを含む世界が供養すべきこととなるだろう。その地方は右廻りに礼拝されることとなるだろう。その地方は塔廟にもひとしいものとなるだろう。」

―― 能淨業障分第十六

１６－１

「けれども、スブーティよ、立派な若者たちや立派な娘たちが、このような経典をとり上げ、記憶し、誦え、理解し、十分に思いめぐらし、また他の人々に詳しく説いて聞かせたとしても、しかもそういう人たちが辱しめられたり、また甚しく辱しめられたりすることがあるかも知れない。

１６－２

これはなぜかというと、こういう人たちは前の生涯において、罪の報いに導かれるような幾多の汚れた行為をしていたけれども、この現在の生存において、辱しめられることによって前の生涯の不淨な行いの償いをしたことになり、目ざめた人の覚りを得るようになるのだ。

１６－３

それはなぜかというと、スブーティよ、わたしはありありと思い出す。数えきれないほど無限の昔に、ディーパンカラ（然燈）という如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人がおられ、それよりも以前、もっと以前に、数かぎりもない目ざめた人々がおられた。わたしは、これらの人々に仕えて喜ばせ、仕えて喜ばせてはやめることがなかった。

１６－４

スブーティよ、わたしはこれらの目ざめた人々・世尊がたに仕えて

喜ばせ、仕えて喜ばせるのを休むことはなかったけれども、後の時世になって第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃になって、このような経典をとり上げ、記憶し、誦え、理解し、他の人々に詳しく説いて聞かせる者があるとすれば、スブーティよ、また、実に、こちらの方の福徳の積みかたに比べると、前の方の福徳の積みかたは、その百分の一にも及ばないし、千分の一にも、百千分の一にも、億分の一にも、百億分の一にも、百千億分の一にも、百千億兆分の一にも、及ばないのだ。数量にも、区分にも、計算にも、譬喩にも、類比にも、相似にも、堪えることができないのだ。

１６－５

また、スブーティよ、もしもわたしが、これらの立派な若者たちや、立派な娘たちの積む福徳について説明するとしたならば、その際にこれらの立派な若者たちや立派な娘たちが、どれだけ福徳を積んだり、身につけたりするかを聞くに及んで、人々は気が変になったり、心が散乱したりするようになるだろう。

１６－６

さて、また、スブーティよ、実に、この法門は不可思議であると、如来は説かれたが、その酬いも不可思議であると期待されるのだ。」

究竟無我分第十七

１７－１
そのとき、スブーティ長老は、師に向かって次のように問うたーー「師よ、求道者の道に進んだ者は、どのように生活し、どのように行動し、どのように心を保ったらよいのですか。」

１７－２
師は答えられたーー「スブーティよ、ここに、求道者の道に進んだ者は次のような心をおこすべきだ。すなわち、『わたしは生きとし生ける者を、汚れのない永遠の平安という境地に導き入れなければならない。

１７－３
しかも、このように生きとし生ける者を永遠の平安に導き入れても、実は誰ひとりとして永遠の平安に導き入れられたものはないのだ。』と。

１７－４
それはなぜかというと、スブーティよ、もしも求道者が、《生存するもの》という思いをおこすとすれば、かれはもはや求道者とは言われないからだ。個体という思いや、乃至個人という思いなどをおこしたりするものは、求道者とは言われないからだ。

１７－５
それはなぜかというと、スブーティよ、〈求道者の道に向かった人〉

というようなものはなにも存在しないからだ。

１７－６
スブーティよ、どう思うか。如来がディーパンカラ如来のみもとで、この上ない正しい覚りを現に覚ったというようなことがらがなにかあるのだろうか。」

１７－７
このように問われたときに、スブーティ長老は師に向かって次のように答えたーー「師よ、わたくしが師の仰せられた言葉の意味を理解しているかぎりでは、如来が、尊敬さるべき人・正しく目ざめた人であるディーパンカラ如来のみもとで、この上ない正しい覚りを現に覚られたというようなことがらはなにもありません。」

１７－８
このように言われたとき、師はスブーティ長老に向かってこのように言われたーー「そのとおりだ、スブーティよ、そのとおりだ。如来が、尊敬さるべき人・正しく目ざめた人であるディーパンカラ如来のみもとで、この上ない正しい覚りを現に覚られたというようなことがらはなにもないのだ。

１７－９
スブーティよ、もしも、如来が現に覚られた法がなにかあるとするならば、ディーパンカラ如来がわたしのことを、『若者よ、あなたは未来の世に、シャーキヤムニという名の如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人となるだろう』などと予言したりはなさらなかっただろう。

１７－１０

けれども、スブーティよ、今、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人が、この上ない正しい覚りとして現に覚られたような法はなにもないのだから、それだから、わたしは、ディーパンカラ如来によって『若者よ、あなたは未来の世に、シャーキヤムニという名の如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人となるだろう。』と予言されたのだ。

１７－１１

それはなぜかというと、スブーティよ、〈如来〉というのは、これは、真如の異名なのだ。〔スブーティよ、如来というのは、これは、生ずるということはないという存在の本質の異名なのだ。スブーティよ、如来というのは、これは、存在の断絶の異名なのだ。スブーティよ、如来というのは、これは究極的に不生であるということの異名なのだ。それはなぜかというと、スブーティよ、生ずることがないというのが最高の真理だからだ。〕

１７－１２

スブーティよ、もしも誰かが、『如来が、尊敬さるべき人・正しく目ざめた人が、この上ない正しい覚りを現に覚られた』と、このように言ったとすると、その人は誤りを言ったことになる。スブーティよ、かれは、真実でないことに執着して、わたしを謗っていることになるだろう。

１７－１３

それはなぜかというと、スブーティよ、如来がこの上もない正しい覚りを現に覚ったというようなことがらはなにもないからだ。

１７－１４
また、スブーティよ、如来が現に覚り示された法には、真実もなければ虚妄もないのだ。それだから、如来は、『あらゆる法は、目ざめた人の法である』と説くのだ。

１７－１５
それはなぜかというと、スブーティよ、『あらゆる法というものは実は法ではない』と、如来によって説かれているからだ。それだからこそ《あらゆる法》と言われるのだ。

１７－１６
たとえば、スブーティよ、身が整い、身の大きな人があると言うようなものだ。」

１７－１７
スブーティ長老は言った――「師よ、如来が、〈身が整い身の大きな人〉と説かれたかの人は、師よ、実は体のない人であると、如来は説かれました。それだからこそ、〈身が整い、身が大きい〉と言われるのです。」

１７－１８
師は言われた――「スブーティよ、そのとおりだ。もしも、ある求道者が『わたしは生きとし生けるものどもを永遠の平安に導くだろう』と、このように言ったとすれば、その人は求道者であるとは言うことはできない。それはなぜかというと、スブーティよ、一体、かの求道者と名づけられるようなものがなにかあるのだろうか。」

１７－１９

スブーティは答えたーー「師よ、そうではありません。かの求道者と名づけられるようなものはなにもありません。」

１７－２０

師は言われたーー「スブーティよ、『〈生きているもの〉〈生きているもの〉と言うのは。実は生きているものではない』と如来は言っている。それだからこそ、生きているものと言われるのだ。それだから、如来は、『すべてのものには自我というものはない、すべてのものには、生きているものというものはない。個体というものはない。個人というものはない』と言われるのだ。

１７－２１

スブーティよ、もしも、ある求道者が、『わたしは国土の建設をなしとげるだろう』と、このように言ったとすれば、この人もまた同様に（求道者ではないと）言わなければならない。それはなぜかというと、スブーティよ、如来は、『〈国土の建設〉、〈国土の建設〉というのは、建設でないことだ』と説いているからだ。それだからこそ、〈国土の建設〉と言われるのだ。

１７－２２

スブーティよ、もしも、求道者が、〈ものには自我がない。ものには自我がない〉と信じて理解するとすれば、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人は、その人を求道者・すぐれた者であると説くのだ。」」

一體同觀分第十八

１８－１
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来には肉眼があるだろうか。」

１８－２
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。如来には肉眼があります。」

１８－３
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来には天眼があるだろうか。」

１８－４
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。如来には天眼があります。」

１８－５
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来には智慧の眼があるだろうか。」

１８－６
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。如来には智慧の眼があります。」

１８－７
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来には法の眼があるだろうか。」

１８－８
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。如来には法の眼があります。」

１８－９
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。如来には目ざめた人の眼（仏眼）があるだろうか。」

１８－１０
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。如来には、目ざめた人の眼があります。」

１８－１１
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。ガンジスの大河にあるかぎりの砂、その砂を如来は説いたであろうか。」

１８－１２
スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。幸ある人よ、そのとおりです。如来はその砂を説かれました。」

１８－１３
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。ガンジスの大河にあるかぎりの砂の数だけ、ガンジス河があり、そしてそれらの中にある砂の数だけの世界があるとすれば、その世界は多いであろうか。」

１８－１４

スブーティは答えたーー「師よ、そのとおりです。幸ある人よ、そのとおりです。それらの世界は多いでありましょう。」

１８－１５

師は問われたーー「スブーティよ、これらの世界にあるかぎりの生きものたちの、種々さまざまな心の流れをわたしは知っているのだ。

１８－１６

それはなぜかというと、スブーティよ、『〈心の流れ〉〈心の流れ〉というのは、流れではない』と、如来は説かれているからだ。それだからこそ、〈心の流れ〉と言われるのだ。

１８－１７

それはなぜかというと、スブーティよ、過去の心はとらえようがなく、未来の心はとらえようがなく、現在の心はとらえようがないからなのだ。」

法界通化分第十九

１９－１
「スブーティよ、どう思うか。立派な若者や立派な娘が、このはてしなく広い宇宙を七つの宝で満たして、如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人々に施したとすると、その立派な若者や立派な娘は、そのことによって、多くの福徳を積んだことになるだろうか。」

１９－２
スブーティは答えた――「師よ、多いですとも。幸ある人よ、多いですとも。」

１９－３
師は言われた――「そのとおりだ、スブーティよ、そのとおりだ。立派な若者や立派な娘は、そのことによって、多くの福徳を積むことになるのだ。

１９－４
それはなぜかというと、スブーティよ、『〈功徳を積む〉〈功徳を積む〉ということは、積まないということだ』と如来が説いているからだ。それだからこそ、〈功徳を積む〉と言われるのだ。

１９－５
スブーティよ、もしも、功徳を積むということがあるとすれば、如来は、〈功徳を積む〉〈功徳を積む〉とは説かなかったであろう。」

離色離相分第二十

２０－１
「スブーティよ、どう思うか。如来を、端麗な身体を完成しているものとして見るべきであろうか。」

２０－２
スブーティは答えた、――「師よ、そうではありません。如来を、端麗な身体を完成しているものとして見るべきではありません。

２０－３
それはなぜかというと、師よ、『〈端麗な身体を完成している〉〈端麗な身体を完成している〉というのは、実はそなえていないということなのだ』と、如来が説かれているからです。それだからこそ、〈端麗な身体を完成している〉と言われるのです。」

２０－４
師は問われた――「スブーティよ、どう思うか。如来は特徴をそなえたものと見るべきであろうか。」

２０－５
スブーティは答えた――「師よ、そうではありません。如来は特徴をそなえたものであると見なしてはならないのです。

２０－６
それはなぜかというと、師よ、『特徴をそなえていると如来の説か

れたことは、実は特徴をそなえていないことだ』と如来が仰せられたからです。それだからこそ、〈特徴をそなえている〉と言われるのです。」

非説所説分第二十一

２１－１
師は問われたーー「スブーティよ、どう思うか。〈わたしが法を教え示した〉というような考えが如来におこるだろうか。」

２１－２
スブーティは答えたーー「師よ、そうではありません。〈わたしが法を教え示した〉というような考えが如来におこることはありません。」

２１－３
師は言われたーー「スブーティよ、『如来は法を教え示した』と、このように説く者があるとすれば、かれは誤りを説くことになるのだ。スブーティよ、かれは、真実でないものに執着して、わたしを謗るものだ。

２１－４
それはなぜかというと、スブーティよ、〈法の教示〉〈法の教示〉というけれども、法の教示として認められるようなことがらはなにも存在しないからだ。」

２１－５
このように言われたときに、スブーティ長老は師に向かって次のように問うたーー「師よ、これから先、後の世になって第二の五百年代に正しい教えが亡びる頃に、このような法を聞いて信ずるような

人々が果しているでありましょうか。」

２１－６
師は答えられた――「スブーティよ、かれらは生きているものでもなければ、生きているものでないものでもない。

２１－７
それはなぜかというと、スブーティよ、『〈生きているもの〉〈生きているもの〉というものは、すべて、生きているものでないということだ』と如来が説かれているからだ。それだからこそ、〈生きているもの〉と言われるのだ。」

無法可得分第二十二

２２－１
「スブーティよ、どう思うか。如来が、この上ない正しい覚りを覚ったというようなことがなにかあるだろうか。」

２２－２
スブーティ長老は答えた――「師よ、そういうことはありません。如来が、この上ない正しい覚りを覚られたというようなことはなにもありません。」

２２－３
師は言われた――「そのとおりだ。スブーティよ、そのとおりだ。微塵ほどのことがらもそこには存在しないし、認められはしないのだ。それだからこそ、《この上ない正しい覚り》と言われるのだ。」

淨心行善分第二十三

２３－１
「さらに、また、スブーティよ、実に、その法は平等であって、そこにおいてはいかなる差別もない。それだからこそ、《この上ない正しい覚り》と言われるのだ。

２３－２
この、この上ない正しい覚りは、自我がないということにより、生きているものがないということにより、個体がないということにより、個人がないということによって、平等であり、あらゆる善の法によって現に覚られるのだ。

２３－３
それはなぜかというと、スブーティよ、『〈善の法〉〈善の法〉というのは法ではない』と如来は説いているからだ。それだからこそ、《善の法》と言われるのだ。」

福智無比分第二十四

２４－１

「さらにまた、スブーティよ、実に、ひとりの女あるいはひとりの男が、このはてしなく広い宇宙にあるかぎりの、山々の王スメールの数だけの七つの宝を集めて持っていて、それを如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人々に施すとしても、また他方で、立派な若者やあるいは立派な娘が、この智慧の完成という法門から四行詩ひとつでもとり出して、他の人々に説いたとすれば、スブーティよ、前の方の功徳の積み方は、こちらの方の功徳の積み方に比べると、その百の一にも及ばないし、乃至、類似にも堪えることができない。」

化無所化分第二十五

２５－１
「スブーティよ、どう思うか。〈わたしが生きているものどもを救った〉というような考えが、如来におこるだろうか。

２５－２
スブーティよ、しかし、このように見なしてはならないのだ。それはなぜかというと、スブーティよ、如来が救ったというような生きものはなにもないからである。

２５－３
また、スブーティよ、如来が救ったというような生きものがなにかあるとすれば、如来に、自我に対する執着が、生きているものに対する執着が、個体に対する執着が、個人に対する執着があることになるだろう。

２５－４
スブーティよ、『自我に対する執着とは執着がないということだ』と如来は説かれた。しかし、かの愚かな一般の人たちは、それに執着するのだ。

２５－５
スブーティよ、〈愚かな一般の人たち〉というのは、愚かな一般の人たちではないにほかならぬ』と如来は説いた。それだからこそ、《愚かな一般の人たち》と言われるのだ。」

法身非相分第二十六

２６－１
「スブーティよ、どう思うか。如来は特徴をそなえたものであると見るべきであろうか。」

２６－２
スブーティは答えた――「師よ、そうではありません。わたくしが師の仰せられた言葉の意味を理解しているところによると、如来は特徴をそなえたものであると見てはならないのです。」

２６－３
師は言われた――「まことに、まことに、スブーティよ、そのとおりだ、スブーティよ、あなたの言うとおり、そのとおりだ。如来は特徴をそなえたものであると見てはならないのだ。

２６－４
それはなぜかというと、スブーティよ、もしも、如来が特徴をそなえたものであると見られるようであるならば、転輪聖王もまた如来であるということになるだろう。それだから、如来は特徴をそなえたものであると見てはならないのだ。」

２６－５
スブーティ長老は、師に向かって次のように言った――「師よ、わたくしが師の仰せられた言葉の意義を究めたところによると、如来は特徴をそなえたものであると見てはならないのです。」

２６－６

さて、師は、この折に、次のような詩を歌われた。

かたちによって、わたしを見、
声によって、わたしを求めるものは、
まちがった努力にふけるもの、
かの人たちは、わたしを見ないのだ。

〔目ざめた人々は、法によって見られるべきだ。
もろもろの師たちは、法を身とするものだから。
そして法の本質は、知られない。
知ろうとしても、知られない。〕

無斷無滅分第二十七

２７－１

「スブーティよ、どう思うか。特徴をそなえていることによって、如来は、この上ない正しい覚りを現に覚ったのか。

２７－２

けれども、スブーティよ、あなたはそのように見てはならないのだ。それはなぜかというと、スブーティよ、特徴をそなえていることによって、如来が、この上ない正しい覚りを現に覚ったというようなことはないからだ。

２７－３

さらに、また、スブーティよ、実に、誰かが、『求道者の道に向かう者には、なにかの法が滅んだり、断ちきられたりするようになっている』と、このように言うかも知れない。

２７－４

けれども、スブーティよ、このように見てはならない。それはなぜかというと、求道者の道に向かう者には、いかなるものも滅びたり、断ち切られたりするようになってはいないからだ。」

不受不貪分第二十八

２８－１

「さらに、また、スブーティよ、実に、立派な若者や立派な娘が、ガンジス河の砂の数だけの世界を七つの宝で満たして、それを如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人に施したとしよう。他方では求道者が、〈法は自我というものがなく、生ずることもない〉と認容し得たとすれば、この方が、そのことによって、計り知れず数えきれないほどにさらに多くの功徳を積んだことになるだろう。けれども、また、実に、スブーティよ、求道者・すぐれた人は、積んだ功徳を自分のものにしてはならないのだ。」

２８－２

スブーティ長老は訊ねた――「師よ、求道者は、積んだ功徳を自分のものにすべきではないのでしょうか。」

２８－３

師は答えられた――「スブーティよ、自分のものにすべきであるけれども、固執すべきではない。それだからこそ、《自分のものにすべきである》と言われるのだ。」

威儀寂靜分第二十九

２９－１

「さらに、また、スブーティよ、実に、もしも誰かが、『如来は去り、あるいは来り、あるいは住し、あるいは坐り、あるいは床に臥す』と、このように説くとすると、その人は、スブーティよ、わたしが語った言葉の意味を理解していないのだ。

２９－２

それはなぜかというと、スブーティよ、如来と言われるものは、どこへも去らないし、どこからも来ないからである。それだからこそ、《如来であり、尊敬さるべき人であり、正しく目ざめた人である》と言われるのだ。」

一合離相分第三十

３０－１

「さらに、また、スブーティよ、実に、立派な若者や立派な娘が、たとえば、このはてしない宇宙にあるかぎりの大地の埃の数だけの世界を、無数の努力によって、原子の集合体のような粉にした場合に、スブーティよ、どう思うか、その原子の集合体は、多いであろうか。」

３０－２

スブーティは答えた――「師よ、そのとおりです。幸ある人よ、そのとおりです。その原子の集合体は多いのです。それはなぜかというと、師よ、もしも、原子の集合体が実有であったとすれば、師は、《原子の集合体》と説かれなかったであろうからです。

３０－３

それはなぜかというと、師よ、『如来の説かれたかの原子の集合体は、集合体ではない』と如来が説いておられるからです。それだからこそ、《原子の集合体》と言われるのです。

３０－４

また、『如来が説かれたはてしない宇宙は宇宙ではない』と如来は説かれています。それだからこそ、《はてしない宇宙》と言われるのです。

３０－５

それはなぜかというと、師よ、もしも、宇宙というものがあるとすれば、《全一体という執着》があることになりましょう。しかも、『如来の説かれた全一体という執着は、実は執着ではない』と如来が説かれています。それだからこそ、《全一体という執着》と言われるのです。」

３０－６

師は言われたーー「スブーティよ、《全一体に対する執着》は、言葉で表現できないもの、口で言えないようなものだ。それはものでもないし、《ものでないもの》でもない。それは、愚かな一般の人々が執着するものなのだ。」

知見不生分第三十一

３１－１
「それはなぜかというと、スブーティよ、誰かが、『如来は自我についての見解を説いた。生きているものについての見解、個体についての見解、個人についての見解を如来は説いた』と説いたとしよう。スブーティよ、その人は正しく説いたということになるだろうか。」

３１－２
スブーティは答えた――「師よ、そうではありません。幸ある人よ、そうではありません。その人は正しく説いたことになりません。それはなぜかというと、師よ、『如来の説かれた、かの自我についての見解は、見解ではない』と如来が説かれているからです。それだからこそ、《自我についての見解》と言われるのです。」

３１－３
師は言われた――「スブーティよ、実に、そのとおりだ。求道者の道に進んだ者は、すべてのことがらを知らなければならないし、見なければならないし、理解しなければならない。

３１－４
しかも、ことがらという思いさえも止まらないように、知らなければならないし、見なければならないし、理解しなければならないのだ。それはなぜかというと、スブーティよ、『ことがらという思い、

ことがらという思いというのは、実は思いではない』と如来が説かれたからだ。それだからこそ、《ことがらという思い》と言われるのだ。」

應化非眞分第三十二

３２－１

「さらに、また、スブーティよ、実に、求道者・すぐれた人が、計り知れず、数えきれないほどの世界を、七つの宝で満たして、諸の如来・尊敬さるべき人・正しく目ざめた人に施したとしよう。また他方では、立派な若者や立派な娘が、この智慧の完成という法門から四行詩ひとつでも、とり上げて、記憶し、誦え、理解し、他の人々に詳しく説いて聞かせたとすれば、この方が、そのことによって、計り知れず、数えきれないほどの、さらに多くの功徳を積むことになるのだ。

３２－２

それでは、どのように説いて聞かせるのであろうか。説いて聞かせないようにすればよいのだ。それだからこそ、《説いて聞かせる》と言われるのだ。

現象界というものは、
星や、眼の翳、燈し火や、
まぼろしや、露や、水泡や、
夢や、電光や、雲のよう、
そのようなものと、見るがよい。」

３２－３

師はこのように説かれた。スブーティ上座は歓喜し、そして、これらの修行僧や尼僧たち、在家の信者や信女たち、また、〔これらの

求道者たちや、〕神々や人間やアスラやガンダルヴァたちを含む世界のものどもは、師の説かれたことをたたえたという。

３２－４

切断するものとしての金剛石、聖なる、尊むべき、智慧の完成、終る。

能く金剛を断ずる

長尾雅人　譯

１９７８

凡　例

一、《金剛般若經》Ārya-vajracchedikā bhagavatī prajñāpāramitā（根據現存梵本末後所列），在般若部中，是比較小且古老的經典。此經在各地廣爲衆人所愛讀，除梵文原本外，漢譯和藏譯不用說，于闐語等中亞語的譯本也留傳於世。

二、翻譯時是以最近所編纂的 E. Conze 本〔Vajracchedikā Prajñāpāramitā, (Serie Orintale Roma, XIII), Roma 1957〕爲底本，但是此書印錯之處很多，因此還參照 Müller 本及其他譯本加以訂正補足。許多本經的現代語譯，已發表於日本及海外，但我並未一一參照。又，翻譯之際，承蒙桂紹隆君協助。

三、梁昭明太子將羅什譯加以分節，出版的梵文本也大略沿襲此方式，只因爲那樣做極爲方便。

四、根據解說（譯註：見於「大乘佛典」1《般若部經典》，東京：中央公論社，1973，pp. 317-324）所記的理由，本書中大約省略此一經典的一半。省略之處，爲梵文本中以下幾節：9-5, 9-7, 9-9, 13-4 至 13-12, 14-7 至 14-9, 15-4, 16-5 至 26-5, 27-1 至 32-1。

とうとき聖なる聖般若波羅蜜多に帰命したてまつる

法會因由分第一

１－１
つぎのようにわたくしは聞いた。
あるとき世尊（仏陀の敬稱）は、千二百五十人の比丘（仏教の修行僧）からなる大僧団と、数多くの偉大な菩薩たちとともにシュラーウ゛ァスティ（コーサラ国首都、舎衛城）のジェータ林（祇園）の中にある、アナータピンダダ（給孤独。よるべなきものに食事を与える者）の庭園におられたことがあった。

１－２
そのとき、世尊は、朝早く下着を着け、鉢と上着をとって、托鉢（信者家で食をもらうこと）のために大都シュラーウ゛ァスティ（舎衛城）へ行かれた。

１－３
さて、大都シュラーウ゛ァスティを托鉢して歩かれたのち、食事をすまされた世尊は、午後、托鉢から帰ってきて、鉢と上着をもとへもどし、両足を洗い、すでに整えられた座に、足を組み（結跏趺坐）、身体をまっすぐに保ち、思いを眼前に凝らしてすわられた。

１－４

そのとき、多くの比丘たちが、世尊のおられる場所に近づいた。近づいて、世尊の両足に（自分の）頭を触れて礼拝し、世尊の周囲を三度右回りに回った（礼拝の形式）のち、一方にすわった。

善現起請分第二

２－１
ちょうどそのとき、長老スブーティ（須菩提）も、その集まりの中にあって座をしめていた。

２－２
そこで長老スブーティは、席から立ち上がり、一方の肩に上着をかけ（偏袒右肩）、右の膝を大地につけ、世尊のおられるほうに向かって合掌して、次のように世尊に申し上げた。

２－３
「世尊よ、驚嘆すべきことです。善逝よ、まったく驚嘆すべきことです。正しい悟りを得た尊敬すべき如来によって、偉大な菩薩たちが、最高の援助のしかた（摂取）で援護されているとは。

２－４
世尊よ、驚くべきことです、正しい悟りを得た尊敬すべき如来によって、偉大な菩薩たちが、最高の委託のしかた（付嘱）で（仏の教法を）委任されているとは。

２－５
ところで、世尊よ、良家の男子にせよ、女子にせよ、すでに菩薩の道（菩薩乗）にはいった者は、どのように生活し、どのように実践し、どのように心を保つべきでしょうか」

２－６

このように言われて世尊は、長老スブーティに次のように話された。

「まことに結構だ。スブーティよ。おまえの言うとおりである。如来によって、偉大な菩薩たちは、最高の援助のしかたで援護されている。如来によって、偉大な菩薩たちは、最高の委嘱のしかたで（仏の教法を）委任されているのである。

２－７

だから、スブーティよ、よく聞くがよい、よく心を集中するがよい。すでに菩薩の道にはいった者が、どのように生活し、どのように実践し、どのように心を保つべきかを、おまえに話して聞かせよう」

２－８

「世尊よ、そうおねがいいたします」と、長老スブーティは答えた。

大乘正宗分第三

３－１

世尊は次のように話された。

「さて、スブーティよ、すでに菩薩の道にはいった者は、次のように心がけねばならない。すなわち、『生けるものの世界（有情界）において、およそ衆生という名のもとに包摂される生きとし生けるもの――卵生のものにせよ、胎生のものにせよ、湿生（湿気から生まれること）のものにせよ、化生（他によらず、自ら忽然と生まれること）のものにせよ、また、姿のあるものにせよ、姿のないものにせよ、意識（想）のあるものにせよ、意識のないものにせよ、意識があるのでもなくまたないのでもないものにせよ――およそ有情界に属するものとして考えられるほどのものは、何ものにもせよ、彼らをすべて、わたくしは、完全な涅槃の世界に引き入れねばならない。

３－２

しかし、そのように、たとえ無数の衆生を涅槃に導いたとしても、実はいかなる衆生も涅槃にはいったのではない』と。

３－３

それはなぜかというと、スブーティよ、もし菩薩に衆生という観念（想）があるなら、彼は菩薩とよばれることがありえないからである。

３－４

それはまたなぜか。スブーティよ、（もし菩薩に）わたくしという観念が生じるなら、あるいは衆生という観念、命あるものという観念、個我という観念が生ずるなら、彼は菩薩とよばれることがありえないからである」

妙行無住分第四

４－１
「さらにまた、スブーティよ、菩薩は事物に執着しながら布施をすべきではない。何かに執着しながら布施をすべきではない。――つまり、色形（色）に執着しながら布施をしてはならないし、音声やかおりや味や触れられるものや、心の対象（法）に執着して布施をすべきではない。

４－２
というのは、スブーティよ、偉大な菩薩は、相の観念にさえもとらわれないで、布施をしなければならないからである。

４－３
それはなぜか。スブーティよ、菩薩が執着することなく布施を行なうならば、その功徳の集積した量は、容易にはかりえないものとなるからである。

４－４
スブーティよ、おまえどう思うか。東のほうにある虚空の量は、容易にはかられうるであろうか」

４－５
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、そんなことはできません」

４－６
世尊が言われた。
「同様に、南、西、北において、また下方や上方や四方やその中間の方角など、あまねく十方にある虚空の量がはかられうるであろうか」

４－７
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、そんなことはできません」

４－８
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、まったくそれと同様に、菩薩が執着することなく布施を行なうならば、その功徳の集積した量は、容易にはかられうるものではない。

４－９
実にスブーティよ、このように、すでに菩薩の道にはいった者は、相の観念にさえもとらわれないで、布施をしなければならないのである」

如理實見分第五

５－１

「スブーティよ、どう思うか。如来は特相（偉大な人としての三十二の身体的な特相。三十二相という）をそなえた者として見られるべきであろうか」

５－２

スブーティがお答えした。

「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。如来は特相をそなえた者として見られてはなりません。なぜかといいますと、世尊よ、如来によって『特相をそなえる』と説かれたことは、すなわち『特相をそなえないこと』なのですから」

５－３

このようにお答えしたとき、世尊は、次のように長老スブーティに話された。

「スブーティよ、およそ特相がそなわるという、そのかぎりにおいて、それは虚偽なのである。特相はそなわらないという、そのかぎりにおいては、虚偽ではない。したがって、如来は『特相の無特相』という観点から見られねばならない」

正信希有分第六

６－１

このように話されたとき、長老スブーティは、次のように世尊にお尋ねした。

「世尊よ、将来、のちの時節、のちの時代――正しい教え（正法）が滅びるようなのちの五百年代――になったとき、これらの経典の句がこのような形で説かれたとして、それを真実と考える者がだれかおりましょうか」

６－２

世尊は答えられた。

「スブーティよ、そのように言ってはならない。『将来、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、これらの経典の句がこのような形で説かれたとして、それを真実と考える者がだれかおりましょうか』というように言ってはならない。

６－３

スブーティよ、そうではなくて、将来、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になったとき、徳をそなえ、戒律を保ち、知恵のすぐれた偉大な菩薩たちがいて、彼らはこれらの経典の句がこのような形で説かれた際に、それを真実と考える心を生じるにちがいない。

6－4
スブーティよ、またこれら偉大な菩薩たちは、ただひとりの仏陀にのみ仕え、ただひとりの仏陀のもとで功徳の善根を植えたのではない。スブーティよ、これら偉大な菩薩たちは、百千という非常に多くの仏陀に仕え、百千という非常に多くの仏陀のもとで功徳の善根を植えた者であるであろう。彼らは、これらの経典の句がこのような形で説かれる際に、浄らかな一心（浄信）を得るであろう。

6－5
スブーティよ、如来は、仏知をもって彼らを知っておられるのである。如来は仏眼をもって、彼らをごらんになっている。スブーティよ、彼らは、如来によってよく知られているのである。

6－6
彼らはすべて、スブーティよ、はかりしれない無数の功徳の集積を生みだし、また（その結果を）自分のものにするであろう。

6－7
それはなぜか。スブーティよ、これらの偉大な菩薩たちには、わたくしという観念が起こらないし、衆生という観念も、命あるものという観念も、個我という観念も、起こらないからである。

6－8
また、スブーティよ、彼ら偉大な菩薩たちには、もの（法）という観念も生じないし、また、ものでないという観念も生じない。さらにまた、スブーティよ、彼らには観念であるとか観念でないとかということも生じない。

６－９

それはなぜか。スブーティよ、もし、彼ら偉大な菩薩たちに、もの（法）という観念が生じるなら、彼らには、かのわたくしへの執着が起こるであろう。衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるであろう。

６－１０

もし、ものでない（非法）という観念が生じるなら、また彼らには、かのわたくしへの執着が起こるであろう。衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着も起こるであろう。

６－１１

それはなぜかといえば、スブーティよ、偉大な菩薩は、法に執着してもいけないし、法でないものに執着してもいけないからである

６－１２

したがって、如来は、この点を考慮することによって、次のことばを説かれたのである。『教法（法門）が筏にたとえられることを知る者は、法さえも捨て去らねばならない。まして、法でないもの（非法）は、なおのことである』と」

無得無説分第七

７－１

さらに世尊は、次のように長老スブーティに問われた。

「スブーティよ、ところで、どう思うか。如来が、このうえなく正しい悟り（無上正等覚）であるとして悟ったような法が、何かあるのであろうか。如来が教え示したような法が、何かあるのであろうか」

７－２

このように問われたとき、長老スブーティは、次のように世尊に申し上げた。

「世尊よ、世尊のお説きになった意味をわたくしが理解したところによりますと、如来が、このうえなく正しい悟りであるとして悟られたような法は、何もありません。如来が教え示されたようないかなる法もありません。

７－３

なぜかといいますと、如来によって悟られたとか、教え示されたとかという法は、とらえられないもの、表現すべきでないものだからです。それは、法でもなく、法でないのでもありません。

７－４

なんとなれば、聖者たち（仏、菩薩、阿羅漢など）というものは、つくりつくられたものでないことによって特徴づけられているからです」

依法出生分第八

８－１
世尊が問われた。
「さて、スブーティよ、どう思うか。だれか良家の男子にせよ、女子にせよ、この三千大千世界を七種の宝で満たして、正しい悟りを得た尊敬されるべきもろもろの如来に布施するとしよう。さて、良家の男子にせよ、女性にせよ、そのような人は、それによって、大きな功徳を積み集めたことになるのであろうか」

８－２
スブーティがお答えした。
「世尊よ、それは大きなものです。善逝よ、良家の男子にせよ、女子にせよ、彼らは、それによって大きな功徳を積むことになるでしょう。

８－３
なぜかといいますと、世尊よ、如来によって功徳の集積として説かれたものは、それは集積ではないと、如来によって説かれるからです。それゆえに、如来は『功徳の集積である。功徳の集積である』と説かれるのです」

８－４
世尊が語られた。
「実に、スブーティよ、良家の男子にせよ、女子にせよ、この三千大千世界を七種の宝で満たして、正しい悟りを得た尊敬すべきもろ

もろの如来に布施するとしよう。ところで、他方、この法門の中の、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、（自ら学んで）身につけ、他の人々にもくわしく示し、説明するとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より大きな功徳の集積、はかりしれない無数の（功徳の集積）を生みだすことになろう。

８－５

それはなぜか。スブーティよ、正しい悟りを得た尊敬すべきもろもろの如来の無上の正しい悟りは、実はこ（の教え）から生ずるからである。この（教え）から、諸仏世尊が生まれるからである。

８－６

それはまたなぜか。スブーティよ、仏陀の教法（仏法）、仏陀の教法というが、それは、実に仏陀の教法ではない、と如来は説くからである。だから、仏陀の教法とよばれる」

一相無相分第九

９－１

「さて、スブーティよ、どう思うか。預流の者に『自分は預流果に達した』という考えが生じるであろうか」

９－２

スブーティは答えた。

「いいえ、世尊よ、そんなことはありません。預流の者には『自分は預流果に達した』という考えは生じません。なぜかといいますと、世尊よ、彼はいかなるもの（法）をも得ることはないからです。――（彼は）色形（の法）を得ることはありません。声も、かおりも、味も、触れられるものも、心の対象も得ることはありません。だから、預流とよばれるのです。

９－３

世尊よ、もし預流の者に『自分は預流果に達した』という考えが生じるなら、彼には、かのわたくしへの執着が起こり、衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるでしょう」

９－４

世尊が問われた。

「スブーティよ、どう考えるか。一来の者に『自分は一来果に達した』という考えが生じるであろうか」

９－５
(略)

９－６
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう考えるか。不還のものに『自分は不還果に達した』という考えが生じるであろうか」

９－７
(略)

９－８
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう考えるか。阿羅漢に『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるであろうか」

９－９
(略)

９－１０
スブーティは答えた。
「世尊よ、もし阿羅漢に『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるなら、彼には、かのわたくしへの執着が起こり、衆生への執着、命あるものへの執着、個我への執着が起こるでしょう」

９－１１
「それはなぜかといいますと、世尊よ、かつて、正しい悟りを得た尊敬すべき如来は、わたくしが『煩悩なく（無諍）してある者のう

ちの最上の者』である、と仰せられました。

９－１２

世尊よ、わたくしは欲望をはなれた阿羅漢であります。しかしながら、わたくしには『自分は欲望をはなれた阿羅漢である』という考えは生じません。世尊よ、もしわたくしに『自分は阿羅漢であることに達した』という考えが生じるなら、如来はわたくしについて、『良家の子であるスブーティは、煩悩なくしてある者のうちの最上の者である。彼は、いずこにもあるのではない。だから、煩悩なくしてある者、煩悩なくしてある者、と言われる』などと宣言されることはなかったでありましょう」

莊嚴淨土分第十

１０－１
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、どう思うか。何か教法があって、それを如来が、正しい悟りを得た尊敬すべきディパンカラ如来のもとで（学んで）、身につけたのであろうか」

１０－２
スブーティがお答えした。
「いいえ、世尊よ、そうではありません。正しい悟りを得た尊敬すべきディパンカラ如来のもとで、如来が身につけられたような、いかなる教法もありません」

１０－３
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、もしもある菩薩が『自分は（仏陀の）国土の光輝（国土荘厳）を完成しよう』と言うならば、彼は虚偽を語る者である。なぜかというと、スブーティよ、国土の光輝、国土の光輝というのは、それは光輝ではないのだと、如来は説かれるからである。だから、国土の光輝というのである」

１０－４
「それゆえに、スブーティよ、偉大な菩薩は、執着のない心を生じるべきである。すなわち、何かに執着した心を生じるべきではない。――色形に執着した心を生じるべきではない。声、かおり、味、

触れられるもの、心の対象などに執着した心を生じるべきではない。

１０－５

スブーティよ、たとえば、肉体に欠陥のないある人が、巨大な肉体の持ち主――つまり、その身体はあたかも山の王であるスメール（須弥山）にも等しい――がいるとしよう。そこで、スブーティよ、おまえどう思うか。彼の身体は巨大であると言えるであろうか」

１０－６

スブーティはお答えした。

「世尊よ、巨大であります。善逝よ、彼の身体は巨大であります。それはなぜかといいますと、世尊よ、身体、身体というが、それは身体ではないのだと如来は説かれたからです。それゆえに身体とよばれるのです。というのは、世尊よ、それは身体でもなく、身体でないのでもないからです。だから、身体とよばれるのです」

無為福勝分第十一

１１－１
世尊が問われた。
「スブーティよ、どう思うか。大河ガンガーにある砂の数と同じだけ、ガンガー河があるとしよう。それら（すべて）にある砂の数もまた多いと言えるだろうか」

１１－２
スブーティはお答えした。
「世尊よ、それらのガンガー河は、たいへんな数です。まして、それら（すべて）のガンガー河にある砂の数は言うまでもありません」

１１－３
世尊が仰せられた。
「スブーティよ、お前に次のことを告げよう。そして、教えてあげよう。――ある女子にせよ、男子にせよ、だれでもよいが、それらのガンガー河にある砂の数ほどの世界を七種に宝で満たして、正しい悟りを得た尊敬すべきもろもろの如来に布施（供養）するとしよう。さて、スブーティよ、どう思うか。そのような女子や男子は、そのことによって、大きな功徳の集積をつくることになるのであろうか」

１１－４
スブーティはお答えした。

「世尊よ、それは大きなものです。善逝よ、女子にせよ、男子にせよ、そのことによって、多くのはかりしれない無数の功徳の集積を生みだすことでしょう」

１１－５

世尊が仰せられた。

「ところで、スブーティよ、女子にせよ、男子にせよ、それほどの量の世界を七種の宝で満たし、これを正しい悟りを得た尊敬すべきもろもろの如来に布施するとしよう。他方、良家の男子、あるいは女子が、この法門（教え、経典）の中の、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、（自ら学んで）身につけ、他の人々にもくわしく示し、説明するとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より大きな、はかりしれない無数の功徳の集積を生み出すことになろう」

尊重正教分第十二

１２－１

「さらに、スブーティよ、ある土地で、この法門の中の、たとえ四句からなる詩頌一つだけでも、(自ら学んで) 身につけ、(他の人々に) 解釈し、あるいは説明するとしよう。(そのとき) その土地は、神々や人間やアスラ (阿修羅。海底の鬼神。インドラと戦う悪神) を含めた全世界にとって、塔廟 (チヤイトヤ) というものとなるであろう。まして、この法門をすべて完全に記憶 (受持) し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するならば、スブーティよ、そのような人々は、最高の驚異 (希有) をそなえた者となるであろう。

１２－２

スブーティよ、その土地には師 (仏陀) がおられることにもなろうし、あるいは、たとえだれであっても、師と知識の等しい人々がおられる、ということにもなろう」

如法受持分第十三

１３－１
このように話されたとき、長老スブーティは、次のように世尊にお尋ねした。
「世尊よ、この法門の名はなんと申しますか。それをどのように受持したらよろしいのでしょうか」

１３－２
このように尋ねられたので、世尊は、次のことを長老スブーティに答えられた。
「スブーティよ、この法門の名は『知恵の完成』（般若波羅密多）である。そのように、これを受持するがよい。

１３－３
それはなぜか。スブーティよ、如来によって説かれた『知恵の完成』は、すなわち完成ではないと、如来は説かれるからである、だから、『知恵の完成』といわれる」

１３－４　至　１３－１２
（略）

離相寂滅分第十四

１４－１
そのとき、長老スブーティは、（このような）教えに感激して涙を流した。涙をぬぐいおわって、彼は次のように世尊に申し上げた。

１４－２
「世尊よ、驚異です。善逝よ、まったく驚嘆すべきことです。最上の道にはいった人々のために、至高の道にはいった人々のために、この法門が如来によって説かれたとは。――そして、それによってわたくしに知が生じたとは。

１４－３
世尊よ、わたくしは、いまだかつて、このような形の法門を聞いたことがありません。世尊よ、この経典が説かれるのを聞いて、（それが）真実であるという考えを生ずる菩薩は、最高の驚異をそなえたものとなるでありましょう。

１４－４
なぜかといいますと、世尊よ、その真実であるという観念は、すなわち真実の観念ではないからです。だから、真実の観念である、真実の観念である、と如来は説かれるのです」

１４－５
「世尊よ、この法門が説かれるとき、それに信をおき理解（信解）することは、わたくしにとってむずかしいことではありません。

１４－６
しかし、世尊よ、将来、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年――になったとき、世尊よ、ある人々があって、この法門を身につけ、受持し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するでもあろうならば、彼らは最高の驚異をそなえた者となるでしょう」

１４－７
（略）

１４－８
（略）

１４－９
（略）

１４－１０
このように述べたとき、世尊は次のように長老スブーティに仰せられた。
「そのとおりだ、スブーティよ。この経典が説かれるとき、（それを聞いて）動揺せず、恐れず、恐怖に陥らないような人々は、最高の驚異をそなえた者と言うべきであろう。なぜかというと、スブーティよ、如来によって説かれた、この最高の完成（般若パーラミター）は、すなわち完成ではないからである。しかも、スブーティよ、如来が説く最高の完成というものを、無数の諸仏、諸菩薩もまた説く。それゆえに、最高の完成と称されるのである」

１４－１１
「さらに、スブーティよ、如来の忍の完成（忍波羅密多）は、すなわち完成ではない。

１４－１２
なぜかというと、スブーティよ、かつてある悪王がわたくしの四肢の肉を切りとったとき、わたくしという観念にせよ、衆生という観念にせよ、命あるものという観念にせよ、個我という観念にせよ、また、いかなる観念も、観念でないものも、わたくしにはなかったからである。

１４－１３
それはまたなぜか。スブーティよ、そのとき、もしわたくしにわたくしという観念があったなら、敵意の観念がわたくしに起こったであろう。もし衆生の観念、命あるものという観念、個我の観念があったなら、そのとき、敵意の観念も、わたくしに起こったであろうから。

１４－１４
それはなぜかというと、スブーティよ、わたくしは次のことを思いだす。すなわち、かつて五百の生涯の間、わたくしはクシャーンティヴァーディン（忍耐を説く者）という仙者であった。そのときにも、わたくしにはわたくしという観念はなかったし、衆生という観念、命あるものという観念、個我という観念もなかったからである。したがって、スブーティよ、偉大な菩薩は、あらゆる観念を取り除いて、無上の正しい悟りに対して発心しなければならない。色形に執着した心を起こしてはならない。――声、かおり、味、触れられるもの、心の対象に執着した心を起こしてはならない。――法に執着した心を起こしてはならない。法ではないものに執着した心

を起こしてはならない。何かに執着した心を起こしてはならない。

１４－１５

それはなぜかというと、およそ執着したということは、すなわち執着しなかったことだからである。それゆえ、如来は説かれた。『菩薩は、執着することなく布施をしなければならない。――色形、声、かおり、味、触れられるもの、心の対象に執着することなく、布施をしなければならない』と」

１４－１６

「さらに、スブーティよ、あらゆるもの、生きとし生けるもの（衆生）のために、菩薩は、このような布施、喜捨を行なわなければならない。なぜかというと、スブーティよ、この衆生という観念は、観念ではないからである。同様に、如来によって説かれたあらゆる衆生とは、すなわち衆生ではないのである。

１４－１７

それはなぜか。スブーティよ、如来は真実を語るものであり、如来は真理を説くもの、ありのままに語るもの、誤りなく説くものだからである。如来は虚偽を語るものではない」

１４－１８

「さらに、スブーティよ、如来がさとった法、教示しまた洞察した法、――そこには真実もなく虚偽もない。

１４－１９

スブーティよ、たとえば暗闇の中にはいった人には何も見えないであろう。それと同じく、ものにとらわれて布施をする菩薩は、もの

にとらわれ（て何も見えない）ものとみなされなければならない。スブーティよ、たとえば、（健全な）眼をもっている人ならば、夜が明けて太陽がのぼったときに、いろいろな形のものを見るであろう。それと同じく、ものにとらわれずに布施をする菩薩は、ものにとらわれない者（あらゆる真実を見うるもの）と考えられなければならない」

持經功德分第十五

１５－１

「さて、スブーティよ、女子にせよ男子にせよ、朝の間にガンガー河の砂の数に等しい（自己の）身体を喜捨し、同様に、昼間にも、夕刻にも、ガンガー河の砂の数に等しい身体を喜捨するとしよう。このようにして、百千のコティ・ニユタという多くの劫の間、身体を喜捨し続けるとしよう。他方、この法門を聞いて、（それを）謗らない者がいるとしよう。（両者のうちで）後者こそが、そのことによって、より大きな、はかりしれない無数の功徳を集積するであろう。まして（この法門を）書写して身につけ、受持し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明するものはいうまでもない」

１５－２

「さらに、スブーティよ、この法門は思議することのできないもの（不可思議）、比較を絶したものである。また、スブーティよ、この法門は、最高の道にはいった人々のために、至高の道にはいった人々のために、如来によって説かれたものである。およそこの法門を身につけ、受持し、、読誦し、理解し、さらに他の人々にくわしく説明するならば、スブーティよ、そのような人々を、如来は仏知をもって知る。スブーティよ、彼らを如来は仏眼をもって見る。彼らは如来によってよく知られている。彼らはすべて、スブーティよ、はかりしれない功徳の集積をそなえた者となるであろう。思議することができず、比較を絶し、はかることもできない無量の功徳の集積をそなえた者となるであろう。

１５－３

スブーティよ、これらの人々はすべて、わが悟り（菩提）をその肩に担う者であろう。それはなぜか。スブーティよ、信（信解）の劣った人人は、この法門を聞くことができないからである。わたくしを実在視する者、衆生を実在視する者、命あるものを実在視する者、個我を実在視する者も（同じくこの法門を聞くことが）できないからである。菩薩の誓いをたてない者は、この法門を聞くことも、身につけることも、受持することも、読誦することも、理解することもできない。そのような道理はありえないのである」

１５－４

（略）

能淨業障分第十六

１６－１

「しかしながら、スブーティよ、良家の子女たちが、このような経典を身につけ、受持し、読誦し、理解し、さらに正しく注意（如理作意）して、他の人々にくわしく説明するとしても、彼らは卑しめられ、ひどく卑しめられるであろう。

１６－２

それはなぜか。スブーティよ、そのような人々は、悪趣（地獄、餓鬼、畜生などの苦悩の存在）の結果を招くさまざまな悪業を前世にしており、（彼らは）現世で卑しめられることによってはじめて、その前世になしたさまざまな悪業を捨てて、仏陀の悟りを得るであろうからである」

１６－３

「それはなぜかというと、スブーティよ、わたくしは次のことを思い起こすからである。無数の、というよりさらに無数の劫の昔――正しい悟りを得た尊敬すべきディハンカラ如来より前、はるか以前――に、百千コーティ・ニユタの八十四倍もの仏陀がおられた。わたくしはこれらの仏陀を（供養して）喜ばせ、喜ばせはしたが、違背することはなかった。

１６－４

スブーティよ、わたくしは、これら諸仏、世尊を喜ばせ、喜ばせて

違背することがなかったが、他方、のちの時節、のちの時代――正しい教えが滅びるようなのちの五百年代――になって、このような経典を身につけ、受持し、読誦し、理解して、さらに他の人々にくわしく説明する人々がいるとしよう。実に、スブーティよ、(両者のうちで)前者の功徳の集積は、後者の功徳の集積の百分の一にも及ばない。千分の一にも、百千分の一にも、コーティ分の一にも、百コーティ分の一にも、百千コーティ分の一にも、百千コーティ・ニユタ分の一にも及ばない。数字にも、区分にも、計算にも、比喩にも、比較にも、類似にもたええないのである」

１６－５　至　２６－５

(略)

法身非相分第二十六

２６－６

さて、世尊は、そのとき、次の二つの詩頌を説かれた。

姿形によってわたくしを見る者、
音声によってわたくしに従う者は、
誤った努力をなす者であり、
そのような者は、（真の意味で）わたくしを見ることはないだろう。

仏は法という観点から見られなければならない。
なぜなら、（世間を）教導する者（仏陀）は、法を身体とするもの（法身）であるから。
――そして、法の本質（法性）は知識の対象とはならない。
それは知られるものではない。

２７－１　至　３２－１

（略）

應化非眞分第三十二

３２－２

また、どのようにして説き明かすべきか。それは「説き明かさないように」である。だから、説き明かさねばならない、と言われる。

星、目の幻覚、ともしび、
幻、露、水の泡、
夢、稲妻、雲――
つくられたもの（有為）とは、このようなものであると見られなければならない

３２－３

以上のように、世尊はお話しになられた。スブーティ上座、これらの比丘、比丘尼、男女の在俗の信者たち、かの菩薩たち、そして神々、人間、アスラ、ガンダルヴァからなるこの世界中の者たちは、心が歓喜して、世尊の説かれたことを賞讃した。

３２－４

以上『金剛のごとくに摧断するもの』という、聖なる、とうとき『知恵の完成』を終わる。

The Vagrakkhedikā Or Diamond-cutter

Max Müller 譯

1894

ADORATION to the blessed Ārya-pragñā-pāramitā (perfection of wisdom).

法會因由分第一

1-1

Thus it was heard by me: At one time Bhagavat (the blessed Buddha) dwelt in Srāvastī, in the grove of Geta, in the garden of Anāthapiṇḍada, together with a large company of Bhikshus (mendicants), viz. with 1250 Bhikshus, with many noble-minded Bodhisattvas.

1-2

Then Bhagavat having in the forenoon put on his under-garment, and having taken his bowl and cloak, entered the great city of Srāvastī to collect alms.

1-3

Then Bhagavat, after he had gone to the great city of Srāvastī to collectalms, performed the act of eating, and having returned from his round in the afternoon, he put away his bowl and cloak, washed his feet, and sat down on the seat intended for him, crossing his legs, holding his body upright, and turning his reflection upon himself.

1-4

Then many Bhikshus approached to where Bhagavat was, saluted his feet with their heads, turned three times round him to the right, and sat down on one side.

善現起請分第二

2-1
At that time again the venerable Subhūti came to that assembly and sat down.

2-2
Then rising from his seat and putting his robe over one shoulder, kneelingon the earth with his right knee, he stretched out his folded hands towards Bhagavat and said to him:

2-3
‘ It is wonderful, O Bhagavat, it is exceedingly wonderful. O Sugata, how much the noble-minded Bodhisattvas have been favoured with the highest favour by the Tathāgata, the holy and fully enlightened!

2-4
It is wonderful how much the noble-minded Bodhisattvas have been instructed with the highest instruction by the Tathāgata, the holy and fully enlightened!

2-5
How then, O Bhagavat, should the son or the daughter of a good family, after having entered on the path of the Budhi-

sattvas, behave, how should he advance, and how should he restrain his thoughts?'

2-6

After the venerable Subhūti had thus spoken, Bhagavat said to him: ' Well said, well said, Subhūti! So it is, Subhūti, so it is, as you say. The noble-minded Bodhisattvas have been favoured with the highest favour by the Tathāgata, the noble-minded Bodhisattvas have been instructed with the highest instruction by the Tathāgata.

2-7

Therefore, O Subhūti, listen and take it to heart, well and rightly. I shall tell you, how any one who has entered on the path of Bodhisattvas should behave, how he should advance, and how he should restrain his thoughts.

2-8

Then the venerable Subhūti answered the Bhagavat and said: 'So be it, O Bhagavat.'

大乘正宗分第三

3-1

Then the Bhagavat thus spoke to him: 'Any one, O Subhūti, who has entered here on the path of the Bodhisattvas must thus frame his thought: As many beings as there are in this world of beings, comprehended under the term of beings (either born of eggs, or from the womb, or from moisture, or miraculously), with form or without form, with name or without name, or neither with nor without name, as far as any known world of beings is known, all these must be delivered by me in the perfect world of Nirvana.

3-2

And yet, after I have thus delivered immeasurable beings, not one single being has been delivered.

3-3

And why ? If, O Subhūti, a Bodhisattva had any idea of (belief in) a being, he could not be called a Bodhisattva (one who is fit to become a Buddha).

3-4

And why ? Because, O Subhūti, no one is to be called a Bodhisattva, for whom there should exist the idea of a being, the idea of a living being, or the idea of a person.'

妙行無住分第四

4-1

‘ And again, O Subhūti, a gift should not be given by a Bodhisattva, while he believes in objects; a gift should not be given by him, while he believes in anying; a gift should not be given by him, while he believes in form; a gift should not be given by him, while he believes in the special qualities of sound, smell, taste, and touch.

4-2

For thus, O Subhūti, should a gift be given by a noble-minded Bodhisattva, that he should not believe even in the idea of cause.

4-3

And why ? Because that Bodhisattva, O Subhūti, who gives a gift, without believing in anything, the measure of his stock of merit is not easy to learn.

4-4

‘ What do you think, O Subhūti, is it easy to learn the measure of space in the eastern quarter?’

4-5

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat.’

4-6

Bhagavat said: ' In like manner, is it easy to learn the measure of space in the southern, western, northern quarters, below and above (nadir and zenith) , in quarters and sub-quarters, in the ten quarters all round?

4-7

'Subhūti said: ' Not indeed, O Bhagavat.'

4-8

Bhagavat said: ' In the same manner, O Subhūti, the measure of the stock of merit of a Bodhisattva, who gives a gift without believing in anything, is not easy to learn.

4-9

And thus indeed, O Subhūti, should one who has entered on the path of Bodhisattvas give a gift, that he should not believe even in the idea of cause.'

如理實見分第五

5-1

‘ Now, what do you think, O Subhūti, should a Tathāgata be seen (known) by the possession of signs?’

5-2

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat, a Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs. And why? Because what has been preached by the Tathāgata as the possession of signs, that is indeed the possession of no-signs.’

5-3

After this, Bhagavat spoke thus to the venerable Subhūti: ‘ Wherever there is, O Subhūti, the possession of signs, there is falsehood; wherever there is no possession of signs, there is no falsehood. Hence the Tathāgata is to be seen (known) from no-signs as signs.

正信希有分第六

6-1

After this, the venerable Subhūti spoke thus to the Bhagavat: 'Forsooth, O Bhagavat, will there be any beings in the future, in the last time, in the last moment, in the last 500 years, during the time of the decay of the good Law, who, when these very words of the Sūtras are being preached, will frame a true idea?'

6-2

The Bhagavat said: 'Do not speak thus, Subhūti. Yes, there will be some beings in the future, in the last time, in the last moment, in the last 500 years, during the decay of the good Law, who will frame a true idea when these very words are being preached.

6-3

' And again, O Subhūti, there will be noble-minded Bodhi-sattvas, in the future, in the last time, in the last moment, in the last 500 years, during the decay of the good Law, there will be strong and good and wise beings, who, when these very words of the Sūtras are being preached, will frame a true idea.

6-4

But those noble-minded Bodhisattvas, O Subhūti, will not have served one Buddha only, and the stock of their merit will not have been accumulated under one Buddha only; on the contrary, O Subhūti, those noble-minded Bohisattvas will have served many hundred thousands of Buddhas, and the stock of their merit will have been accumulated under many hundred thousands of Buddhas; and they, when these very words of the Sūtras are being preached, will obtain one and the same faith.

6-5

They are known, O Subhūti, by the Tathāgata through his Buddha-knowledge; they are seen, O Subhūti, by the Tathāgata through his Buddha-eye; they are understood,

6-6

O Subhūti, by the Tathāgata. All these, O Subhūti, will produce and will hold fast an immeasurable and innumerable stock of merit.

6-7

And why? Because, O Subhūti, there does not exist in those noble-minded Bodhisattvas the idea of self, there does not exist the idea of a being, the idea of a living being, the idea of a person.

6-8

Nor does there exist, O Subhūti, for these noble-minded

Bodhisattvas the idea of quality (dharma), nor of no-quality. Neither does there exist, O Subhūti, any idea (samgñā) or no-idea.

6-9

And why? Because, O Subhūti, if there existed for these noble-minded Bodhisattvas the idea of quality, then they would believe in a self, they would believe in a being, they would believe in a living being, they would believe in a person.

6-10

And if there existed for them the idea of no-quality, even then they would believe in a self, they would believe in a being, they would believe in a living being, they would believe in a person.

6-11

And why? Because, O Subhūti, neither quality nor no-quality is to be accepted by a noble-minded Bodhisattva.

6-12

Therefore this hidden saying has been preached by the Tathāgata: " By those who know the teaching of the Law, as like unto a raft, all qualities indeed must be abandoned; much more no-qualities." '

無得無說分第七

7-1

And again Bhagavat spoke thus to the venerable Subhūti: ' What do you think, O Subhūti, is there anything (dharma) that was known by the Tathāgata under the name of the highest perfect knowledge, or anything that was taught by the Tathāgata?'

7-2

After these words, the venerable Subhūti spoke thus to Bhagavat: ' As I, O Bhagavat, understand the meaning of the preaching of the Bhagavat, there is nothing that was known by the Tathāgata under the name of the highest perfect knowledge, nor is there anything that is taught by the Tathāgata.

7-3

And why? Because that thing which was known or taught by the Tathāgata is incomprehensible and inexpressible. It is neither a thing nor no-thing.

7-4

And why? Because the holy persons are of imperfect power.'

依法出生分第八

8-1

Bhagavat said: ' What do you think, O Subhūti, if a son or daughter of a good family filled this sphere of a million millions of worlds with the seven gems or treasures, and gave it as a gift to the holy and enlightened Tathāgata, would that son or daughter of good family on the strength of this produce a large stock of merit ? '

8-2

Subhūti said: ' Yes, O Bhagavat, yes, O Sugata, that son or daughter of a good family would on the strength of this produce a large stock of merit.

8-3

And why? Because, O Bhagavat, what was preached by the Tathāgata as the stock of merit, that was preached by the Tathāgata as no-stock of merit. Therefore the Tathāgata preaches: "A stock of merit, a stock of merit indeed!" '

8-4

Bhagavat said: 'And if, O Subhūti, the son or daughter of a good family should fill this sphere of a million millions of worlds with the seven treasures and should give it as a gift to the holy and enlightened Tathāgatas, and if another after

taking from this treatise of the Law one Gāthā of four lines only should fully teach others and explain it, he indeed would on the strength of this produce a larger stock of merit immeasurable and innumerable.

8-5

And why ? Because, O Subhūti, thehighest perfect knowledge of the holy and enlightened Tathāgatas is produced from it; the blessed Buddhas are produced from it.

8-6

And why ? Because, O Subhūti, when the Tathāgata preached: " The qualities of Buddha, the qualities of Buddha indeed! " they were preached by him as no-qualities of Buddha. Therefore they are called the qualities of Buddha.'

一相無相分第九

9-1

Bhagavat said: 'Now, what do you think, O Subhūti, does a Srota-āpanna think in this wise: The fruit of Srota-āpatti has been obtained by me? '

9-2

Subhūti said: ' Not indeed, O Bhagavat, a Srota-āpanna does not think in this wise: The fruit of Srota-āpatti has been obtained by me. And why? Because, O Bhagavat, he has not obtained any particular state (dharma). Therefore he is called a Srota-āpanna. He has not obtained any form, nor sounds, nor smells, nor tastes, nor things that can be touched. Therefore he is called a Srota-āpanna.

9-3

If, O Bhagavat, a Srota-āpanna were to think in this wise: The fruit of Srota-āpatti has been obtained by me, he would believe in a self, he would believe in a being, he would believe in a living being, he would believe in a person.'

9-4

Bhagavat said: ' What do you think, O Subhūti, does a Sakṛdāgāmin think in this wise: The fruit of a Sakṛdāgāmin has been obtained by me ? '

9-5

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat, a Sakṛdāgāmin does not think in this wise: The fruit of a Sakṛdāgāmin has been obtained by me. And why? Because he is not an individual being (dharma), who has obtained the state of a Sakridāgāmin. Therefore he is called a Sakṛdāgāmin.’

9-6

Bhagavat said: ‘ What do you think, O Subhūti, does an Anāgāmin think in this wise: The fruit of an Anāgāmin has been obtained by me?’

9-7

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat, an Anāgāmin does not think in this wise: The fruit of an Anāgāmin has been obtained by me. And why? Because he is not an individual being, who has obtained the state of an Anāgāmin. Therefore he is called an Anāgāmin.’

9-8

Bhagavat said: ‘What do you think, O Subhūti, does an Arhat think in this wise: The fruit of an Arhat has been obtained by me?’

9-9

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat, an Arhat does not think in this wise: The fruit of an Arhat has been obtained by me. And why? Because he is not an individual being, who is called an Arhat. Therefore he is called an Arhat.

9-10

And if, O Bhagavat, an Arhat were to think in this wise: The state of an Arhat has been obtained by me, he would believe in a self, he would believe in a being, he would believe in a living being, he would believe in a person.

9-11

'And why? I have been pointed out, O Bhagavat, by the holy and fully enlightened Tathāgata, as the foremost of those who dwell in virtue.

9-12

I, O Bhagavat, am an Arhat, freed from passion. And yet, O Bhagavat, I do not think in this wise: I am an Arhat, I am freed from passion. If, O Bhagavat, I should think in this wise, that the state of an Arhat has been obtained by me, then the Tathāgata would not have truly prophesied of me, saying: "Subhūti, the son of a good family, the foremost of those dwelling in virtue, does not dwell anywhere, and therefore he is called a dweller in virtue, a dweller in virtue indeed! " '

莊嚴淨土分第十

10-1

Bhagavat said: ‘ What do you think, O Subhūti, is there anything (dharma) which the Tathāgata has adopted from the Tathāgata Dīpaṅkara, the holy and fully enlightened?’

10-2

Subhūti said: ‘ Not indeed, O Bhagavat; there is not anything which the Tathāgata has adopted from the Tathāgata Dīpaṅkara, the holy and fully enlightened.’

10-3

Bhagavat said: ‘ If, O Subhūti, a Bodhisattva should say : “ I shall create numbers of worlds, “ he would say what is untrue. And why? Because, O Subhūti, when the Tathāgata preached: ‘ Numbers of worlds, numbers of worlds indeed!” they were preached by him as no-numbers. Therefore they are called numbers of worlds.

10-4

‘Therefore, O Subhūti, a noble-minded Bodhisattva should in this wise frame an independent mind, which is to be framed as a mind not believing in anything, not believing in form, not believing in sound, smell, taste, and anything that can be touched.

10-5

Now, for instance, O Subhūti, a man might have a body and a large body, so that his size should be as large as the king of mountains, Sumeru. Do you think then, O Subhūti, that his selfhood (he himself) would be large? '

10-6

Subhūti said: 'Yes, O Bhagavat, yes, O Sugata, his selfhood would be large. And why? Because, O Bhagavat, when the Tathāgata preached: "Selfhood, selfhood indeed!" it was preached by him as no-selfhood. Therefore it is called self-hood.'

無為福勝分第十一

11-1

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, if there were as many Gaṅgā rivers as there are grains of sand in the large river Gaṅgā, would the grains of sand be many?'

11-2

Subhūti said: 'Those Gaṅgā rivers would indeed be many, much more the grains of sand in those Gaṅgā rivers.'

11-3

Bhagavat said: 'I tell you, O Subhūti, I announce to you, If a woman or man were to fill with the seven treasures as many worlds as there would be grains of sand in those Gaṅgā rivers and present them as a gift to the holy and fully enlightened Tathāgatas — what do you think, O Subhūti, would that woman or man on the strength of this produce a large stock of merit?'

11-4

Subhūti said: 'Yes, O Bhagavat, yes, O Sugata, that woman or man would on the strength of this produce a large stock of merit, immeasurable and innumerable.'

11-5

Bhagavat said: 'And if, O Subhūti, a woman or man having filled so many worlds with the seven treasures should give them as a gift to the holy and enlightened Tathāgatas, and if another son or daughter of a good family, after taking from this treatise of the Law one Gāthā of four lines only, should fully teach others and explain it, he, indeed, would on the strength of this produce a larger stock of merit, immeasurable and innumerable.'

尊重正教分第十二

12-1

'Then again, O Subhūti, that part of the world in which, after taking from this treatise of the Law one Gāthā of four lines only, it should be preached or explained, would be like a Kaitya (holy shrine) for the whole world of gods, men, and spirits; what should we say then of those who learn the whole of this treatise of the Law to the end, who repeat it, understand it, and fully explain it to others? They, O Subhūti, will be endowed with the highest wonder.

12-2

And in that place, O Subhūti, there dwells the teacher, or one after another holding the place of the wise preceptor.'

如法受持分第十三

13-1

After these words, the venerable Subhūti spoke thus to Bhaga-vat: 'O Bhagavat, how is this treatise of the Law called, and how can I learn it?'

13-2

After this, Bhagavat spoke thus to the venerable Subhūti: ' This treatise of the Law, O Subhūti, is called the Pragñā-pāramitā (Transcendent wisdom), and you should learn it by that name.

13-3

And why? Because, O Subhūti, what was preached by the Tathāgata as the Pragñā-pāramitā, that was preached by the Tathāgata as no-Pāramitā. Therefore it is called the Pragñā-pāramitā.

13-4

'Then, what do you think, O Subhuti, is there anything (dharma) that was preached by the Tathāgata?'

13-5

Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat, the is not anything that was preached by the Tathāgata. '

13-6

Bhagavat said: 'What do you think then, O Subhūti- -the dust of the earth which is found in this sphere of a million millions of worlds, is that much?'

13-7

Subhūti said: 'Yes, O Bhagavat, yes, O Sugata, that dust of the earth would be much. And why? Because, O Bhagavat, what was preached by the Tathāgata as the dust of the earth, that was pre-ached by the Tathāgata as no-dust. Therefore it is called the dust of the earth.

13-8

And what was preached by the Tathāgata as the sphere of worlds, that was preached by the Tathāgata as no-sphere. Therefore it is called the sphere of worlds.'

13-9

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, is a holy and fully enlightened Tathāgata to be seen (known) by the thirty-two signs of a hero?'

13-10

Subhūti said: 'No indeed, O Bhagavat; a holy and fully enlightened Tathāgata is not to be seen (known) by the thirty-two signs of a hero.

13-11

And why? Because what was preached by the Tathāgata as

the thirty-two signs of a hero, that was preached by the Tathāgata as no-signs. Therefore they are called the thirty-two signs of a hero.'

13-12

Bhagavat said: 'If, O Subhūti, a woman or man should day by day sacrifice his life (selfhood) as many times as there are grains of sand in the river Gaṅgā, and if he should thus sacrifice his life for as many kalpas as there are grains of sand in the river Gaṅgā, and if another man, after taking from this treatise of the Law one Gāthā of four lines only, should fully teach others and explain it, he indeed would on the strength of this produce a larger stock of merit, immeasurable and innumerable.'

離相寂滅分第十四

14-1

At that time, the venerable Subhūti was moved by the power of the Law, shed tears, and having wiped his tears, he thus spoke to Bhagavat:

14-2

'It is wonderful, O Bhagavat, it is exceedingly wonderful, O Sugata, how fully this teaching of the Law has been preached by the Tathāgata for the benefit of those beings who entered on the foremost path (the path that leads to Nirvāṇa), and who entered on the best path, from whence, O Bhagavat, knowledge has been produced in me.

14-3

Never indeed, O Bhagavat, has such a teaching of the Law been heard by me before. Those Bodhisattvas, O Bhagavat, will be endowed with the highest wonder, who when this Sūtra is being preached hear it and will frame to themselves a true idea.

14-4

And why? Because what is a true idea is not a true idea. Therefore the Tathāgata preaches: "A true idea, a true idea indeed!"

14-5

'It is no wonder to me, O Bhagavat, that I accept and believe this treatise of the Law, which has been preached.

14-6

And those beings also, O Bhagavat, who will exist in the future, in the last time, in the last moment, in the last 500 years, during the time of the decay of the good Law, who will learn this treatise of the Law, O Bhagavat, remember it, recite it, understand it, and fully explain it to others, they will indeed be endowed with the highest wonder.

14-7

'But, O Bhagavat, there will not arise in them any idea of a self, any idea of a being, of a living being, or a person, nor does there exist for them any idea or no-idea.

14-8

And why? Because, O Bhagavat, the idea of a self is no-idea, and the idea of a being, or a living being, or a person is no-idea.

14-9

And why? Because the blessed Buddhas are freed from all ideas.'

14-10

After these words, Bhagavat thus spoke to the venerable Subhūti: 'So it is, O Subhūti, so it is. Those beings, O

Subhūti, who when this Sūtra was being recited here will not be disturbed or frightened or become alarmed, will be endowed with the highest wonder. And why? Because, O Subhūti, this was preached by the Tathāgata, as the Parama pāramitā, which is no-Pāramitā. And, O Subhūti, what the Tathāgata preaches as the Paramapāramitā, that was preached also by immeasurable blessed Buddhas. Therefore it is called the Paramapāramitā.

14-11

'And, O Subhūti, the Pāramitā or the highest perfection of endurance (kshānti) belonging to a Tathāgata, that also is no-Pāramitā.

14-12

And why? Because, O Subhūti, at the time when the king of Kaliṅga cut my flesh from every limb, I had no idea of a self, of a being, of a living being, or of a person; I had neither an idea nor no-idea.

14-13

And why? Because, O Subhūti, if I at that time had had an idea of a self, I should also have had an idea of malevolence. If I had had an idea of a being, or of a living being, or of a person, I should also have had an idea of malevolence.

14-14

And why? Because, O Subhūti, I remember the past 500

births, when I was the Rishi Kshāntivādin (preacher of endurance). At that time also, I had no idea of a self, of a being, of a living being, of a person. Therefore then, O Subhūti, a noble-minded Bodhisattva, after putting aside all ideas, should raise his mind to the highest perfect knowledge. He should frame his mind so as not to believe (depend) in form, sound, smell, taste, or anything that can be touched, in something (dharma), in nothing or anything.

14-15

And why? Because what is believed is not believed (not to be depended on). Therefore the Tathāgata preaches: "A gift should not be given by a Bodhisattva who believes in anything, it should not be given by one who believes in form, sound, smell, taste, or anything that can be touched."

14-16

'And again, O Subhūti, a Bodhisattva should in such wise give his gift for the benefit of all beings. And why? Because, O Subhūti, the idea of a being is no-idea. And those who are thus spoken of by the Tathāgata as all beings are indeed no-beings.

14-17

And why? Because, O Subhūti, a Tathāgata says what is real, says what is true, says the things as they are; a Tathāgata does not speak untruth.

14-18

'But again, O Subhūti, whatever doctrine has been perceived, taught, and meditated on by a Tathāgata, in it there is neither truth nor falsehood.

14-19

And as a man who has entered the darkness would not see anything, thus a Bodhisattva is to be considered who is immersed in objects, and who being immersed in objects gives a gift. But as a man who has eyes would, when the night becomes light, and the sun has risen, see many things, thus a Bodhisattva is to be considered who is not immersed in objects, and who not being immersed in objects gives a gift.

14-20

'And again, O Subhūti, if any sons or daughters of good families will learn this treatise of the Law, will remember, recite, and understand it, and fully explain it to others, they, O Subhūti, are known by the Tathāgata through his Buddha-knowledge, they are seen, O Subhūti, by the Tathāgata through his Buddha-eye. All these beings, O Subhūti, will produce and hold fast an immeasurable and innumerable stock of merit.'

持經功德分第十五

15-1

'And if, O Subhūti, a woman or man sacrificed in the morning as many lives as there are grains of sand in the river Gaṅgā and did the same at noon and the same in the evening, and if in this way they sacrificed their live for a hundred thousands of niyutas of kotis of ages, and if another, after hearing this treatise of the Law, should not oppose it, then the latter would on the strength of this produce a larger stock of merit, immeasurable and innumerable. What should we say then of him who after having written it, learns it, remembers it, understands it, and fully explains it to others?

15-2

'And again, O Subhūti, this treatise of the Law is incomprehensible and incomparable. And this treatise of the Law has been preached by the Tathāgata for the benefit of those beings who entered on the foremost path (the path that leads to Nirvāṇa), and who entered on the best path. And those who will learn this treatise of the Law, who will remember it, recite it, understand it, and fully explain it to others, they are known, O Subhūti, by the Tathāgata through his Buddha-knowledge, they are seen, O Subhūti, by the Tathāgata through his Buddha-eye. All these beings, O Subhūti, will be endowed with an immeasurable stock of merit, they will be

endowed with an incomprehensible, incomparable, immeasurable and unmeasured stock of merit.

15-3

All these beings, O Subhūti, will equally remember the Bodhi (the highest Buddha-knowledge), will recite it, and understand it. And why? Because it is not possible, O Subhūti, that this treatise of the Law should be heard by beings of little faith, by those who believe in self, in beings, in living beings, and in persons. It is impossible that this treatise of the Law should be heard by beings who have not acquired the knowledge of Bodhisattvas, or that it should be learned, remembered, recited, and understood by them. The thing is impossible.

15-4

'And again, O Subhūti, that part of the world in which this Sutra will be propounded, will have to be honoured by the whole world of gods, men, and evil spirits, will have to be worshipped, and will become like a Kaitya (a holy sepulchre).'

能淨業障分第十六

16-1

'And, O Subhūti, sons or daughters of a good family who will learn these very Sūtras, who will remember them, recite them, understand them, thoroughly take them to heart, and fully explain them to others, they will be overcome , they will be greatly overcome.

16-2

And why? Because, O Subhūti, whatever evil deeds these beings have done in a former birth, deeds that must lead to suffering, those deeds these beings, owing to their being overcome, after they have seen the Law, will destroy, and they will obtain the knowledge of Buddha.

16-3

'I remember, O Subhūti, in the past, before innumerable and more than innumerable kalpas, there were eighty-four hundred thousands of niyutas of kotis of Buddhas following after the venerable and fully enlightened Tathāgata Dīpaṅkara, who were pleased by me, and after being pleased were not displeased.

16-4

And if, O Subhūti, these blessed Buddhas were pleased by

me, and after being pleased were not displeased, and if on the other hand people at the last time, at the last moment, in the last 500 years, during the time of the decay of the good Law, will learn these very Sutras, remember them, recite them, understand them, and fully explain them to others, then, O Subhūti, in comparison with their stock of merit that former stock of merit will not come to one hundredth part, nay, not to one thousandth part, not to a hundred thousandth part, not to a ten millionth part, not to a hundred millionth part, not to a hundred thousand ten millionth part, not to a hundred thousands of niyutas ten millionth part. It will not bear number, nor fraction, nor counting, nor comparison, nor approach, nor analogy.

16-5

'And if, O Subhūti, I were to tell you the stock of merit of those sons or daughters of good families, and how large a stock of merit those sons or daughters of good families will produce, and hold fast at that time, people would become distracted and their thoughts would become bewildered.

16-6

And again, O Subhūti, as this treatise of the Law preached by the Tathāgata is incomprehensible and incomparable, its rewards also must be expected (to be) incomprehensible.'

究竟無我分第十七

17-1

At that time the venerable Subhūti thus spoke to the Bhagavat: 'How should a person, after having entered on the path of the Bodhisattvas, behave, how should he advance, and how should he restrain his thoughts?'

17-2

Bhagavat said: 'He who has entered on the path of the Bodhisattvas should thus frame his thought: All beings must be delivered by me in the perfect world of Nirvāna;

17-3

and yet after I have thus delivered these beings, no being has been delivered.

17-4

And why? Because, O Subhūti, if a Bodhisattva had any idea of beings, he could not be called a Bodhisattva, and so on from the idea of a living being to the idea of a person; if he had any such idea, he could not be called a Bodhisattva.

17-5

And why? Because, O Subhūti, there is no such thing (dharma) as one who has entered on the path of the

Bodhisattvas.

17-6

'What do you think, O Subhūti, is there anything which the Tathāgata has adopted from the Tathāgata Dīpaṅkara with regard to the highest perfect knowledge?'

17-7

After this, the venerable Subhūti spoke thus to the Bhagavat: 'As far as I, O Bhagavat, understand the meaning of the preaching of the Bhagavat, there is nothing which has been adopted by the Tathāgata from the holy and fully enlightened Tathāgata Dīpaṅkara with regard to the highest perfect knowledge.'

17-8

After this, Bhagavat thus spoke to the venerable Subhūti: 'So it is, Subhūti, so it is. There is not, O Subhūti, anything which has been adopted by the Tathāgata from the holy and fully enlightened Tathāgata Dīpaṅkara with regard to the highest perfect knowledge.

17-9

And if, O Subhūti, anything had been adopted by the Tathāgata, the Tathāgata Dīpaṅkara would not have prophesied of me, saying: "Thou, O boy, wilt be in the future the holy and fully enlightened Tathāgata called Sākyamuni."

17-10

Because then, O Subhūti, there is nothing that has been adopted by the holy and fully enlightened Tathāgata with regard to the highest perfect knowledge, therefore I was prophesied by the Tathāgata Dīpaṅkara, saying: "Thou, boy, wilt be in the future the holy and fully enlightened Tathāgata called Sākyamuni."

17-11

'And why, O Subhūti, the name of Tathāgata? It expresses true suchness. And why Tathāgata, O Subhūti? It expresses that he has no origin. And why Tathāgata, O Subhūti? It expresses the destruction of all qualities. And why Tathāgata, O Subhūti? It expresses one who had no origin whatever. And why this? Because, O Subhūti, no-origin is the highest goal.

17-12

'And whosoever, O Subhūti, should say that, by the holy and fully enlightened Tathāgata, the highest perfect knowledge has been known, he would speak an untruth, and would slander me, O Subhūti, with some untruth that he has learned.

17-13

And why? Because there is no such thing, O Subhūti, as has been known by the Tathāgata with regard to the highest perfect knowledge.

17-14

And in that, O Subhūti, which has been known and taught by the Tathāgata, there is neither truth nor falsehood. Therefore the Tathāgata preaches: "All things are Buddha-things."

17-15

And why? Because what was preached by the Tathāgata, O Subhūti, as all things, that was preached as no-things; and therefore all things are called Buddha-things.

17-16

'Now, O Subhūti, a man might have a body and a large body.'

17-17

The venerable Subhūti said: 'That man who was spoken of by the Tathāgata as a man with a body, with a large body, he, O Bhagavat, was spoken of by the Tathāgata as without a body, and therefore he is called a man with a body and with a large body.'

17-18

Bhagavat said: 'So it is, O Subhūti, and if a Bodhisattva were to say: "I shall deliver all beings," he ought not to be called a Bodhisattva. And why? Is there anything, O Subhūti, that is called a Bodhisattva?'

17-19

Subhūti said: 'Not indeed, Bhagavat, there is nothing which

is called a Bodhisattva.'

17-20

Bhagavat said: 'Those who were spoken of as beings, beings indeed, O Subhūti, they were spoken of as no-beings by the Tathā-gata, and therefore they are called beings. Therefore the Tathāg-ata says: "All beings are without self all beings are without life, without manhood, without a personality."

17-21

'If, O Subhūti, a Bodhisattva were to say: "I shall create numbers of worlds," he would say what is untrue. And why? Because, what were spoken of as numbers of worlds, numbers of worlds indeed, O Subhūti, these were spoken of as no-numbers by the Tathāgata, and therefore they are called numbers of worlds.

17-22

'A Bodhisattva, O Subhūti, who believes that all things are without self, that all things are without self, he has faith, he is called a noble-minded Bodhisattva by the holy and fully enlightened Tathāgata.'

一體同觀分第十八

18-1
Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, has the Tathāgata the bodily eye?'

18-2
Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, the Tathāgata has the bodily eye.'

18-3
Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, has the Tathāgata the heavenly eye?'

18-4
Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, the Tathāgata has he heavenly eye.'

18-5
Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, has the Tathāgata the eye of knowledge?'

18-6
Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, the Tathāgata has the eye of knowledge.'

18-7

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, has the Tathāgata the eye of the Law?'

18-8

Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, the Tathāgata has the eye of the Law.'

18-9

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, has the Tathāgata the eye of Buddha?'

18-10

Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, the Tathāgata has the eye of Buddha.'

18-11

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, as many grains of sand as there are in the great river Gaṅgā—were they preached by the Tathāgata as grains of sand?'

18-12

Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, so it is, O Sugata, they were preached as grains of sand by the Tathāgata.'

18-13

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, if there were as many Gaṅgā rivers as there are grains of sand in the great river Gaṅgā; and, if there were as many worlds as there are

grains of sand in these, would these worlds be many?'

18-14

Subhūti said: 'So it is, O Bhagavat, so it is, O Sugata, these worlds would be many.'

18-15

Bhagavat said: 'As many beings as there are in all those worlds, I know the manifold trains of thought of them all.

18-16

And why? Because what was preached as the train of thoughts, the train of thoughts indeed, O Subhūti, that was preached by the Tathāgata as no-train of thoughts, and therefore it is called the train of thoughts.

18-17

And why? Because, O Subhūti, a past thought is not perceived, a future thought is not perceived, and the present thought is not perceived.'

法界通化分第十九

19-1

'What do you think, O Subhūti, if a son or a daughter of a good family should fill this sphere of a million millions of worlds with the seven treasures, and give it as a gift to holy and fully enlightened Buddhas, would that son or daughter of a good family produce on the strength of this a large stock of merit?'

19-2

Subhūti said: 'Yes, a large one.'

19-3

Bhagavat said: 'So it is, Subhūti, so it is; that son or daughter of a good family would produce on the strength of this a large stock of merit, immeasurable and innumerable.

19-4

And why? Because what was preached as a stock of merit, a stock of merit indeed, O Subhūti, that was preached as no-stock of merit by the Tathāgata, and therefore it is called a stock of merit.

19-5

If, O Subhūti, there existed a stock of merit, the Tathāgata

would not have preached: "A stock of merit, a stock of merit indeed!" '

離色離相分第二十

20-1

'What do you think then, O Subhūti, is a Tathāgata to be seen (known) by the shape of his visible body?'

20-2

Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat, a Tathāgata is not to be seen (known) by the shape of his visible body.

20-3

And why? Because, what was preached, O Bhagavat, as the shape of the visible body, the shape of the visible body indeed, that was preached by the Tathāgata as no-shape of the visible body, and therefore it is called the shape of the visible body.'

20-4

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, should a Tathāgata be seen (known) by the possession of signs?'

20-5

Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat, a Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs.

20-6

And why? Because, what was preached by the Tathāgata as the possession of signs, that was preached as no-possession of signs by the Tathāgata, and therefore it is called the possession of signs.'

非說所說分第二十一

21-1

Bhagavat said: 'What do you think, O Subhūti, does the Tathāgata think in this wise: The Law has been taught by me?'

21-2

Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat, does the Tathāgata think in this wise: The Law has been taught by me.'

21-3

Bhagavat said: 'If a man should say that the Law has been taught by the Tathāgata, he would say what is not true; he would slander me with untruth which he has learned.

21-4

And why? Because, O Subhūti, it is said the teaching of the Law, the teaching of the Law indeed. O Subhūti, there is nothing that can be perceived by the name of the teaching of the Law.'

21-5

After this, the venerable Subhūti spoke thus to the Bhagavat: 'Forsooth, O Bhagavat, will there be any beings in the future, in the last time, in the last moment, in the last 500 years,

during the time of the decay of the good Law, who, when they have heard these very Laws, will believe?'

21-6

Bhagavat said: 'These, O Subhūti, are neither beings nor no-beings.

21-7

And why? Because, O Subhūti, those who were preached as beings, beings indeed, they were preached as no-beings by the Tathāgata, and therefore they are called beings.'

無法可得分第二十二

22-1

'What do you think then, O Subhūti, is there anything which has been known by the Tathāgata in the form of the highest perfect knowledge?'

22-2

The venerable Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat, there is nothing, O Bhagavat, that has been known by the Tathāgata in the form of the highest perfect knowledge.'

22-3

Bhagavat said: 'So it is, Subhūti, so it is. Even the smallest thing is not known or perceived there, therefore it is called the highest perfect knowledge.'

淨心行善分第二十三

23-1

'Also, Subhūti, all is the same there, there is no difference there, and therefore it is called the hightest perfect knowledge.

23-2

Free from self, free from being, free from life, free from personality, that hightest perfect knowledge is always the same, and thus known with all good things.

23-3

And why? Because, what were preached as good things, good things indeed, O Subhūti, they were preached as no-things by the Tathāgata, and therefore they are called good things.'

福智無比分第二十四

24-1

'And if, O Subhūti, a woman or man, putting together as many heaps of the seven treasures as there are Sumerus, kings of moun-tains, in the sphere of a million millions of worlds, should give them as a gift to holy and fully enlightened Tathāgatas; and, if a son or a daughter of a good family, after taking from this treatise of the Law, this Pragñāpāramitā, one Gāthā of four lines only, should teach it to others, then, O Subhūti, compared with his stock of merit, the former stock of merit would not come to the one hundredth part,' &c., till 'it will not bear an approach.'

化無所化分第二十五

25-1

'What do you think then, O Subhūti, does a Tathāgata think in this wise: Beings have been delivered by me?

25-2

You should not think so, O Subhūti. And why? Because there is no being, O Subhūti, that has been delivered by the Tathāgata.

25-3

And, if there were a being, O Subhūti, that has been delivered by the Tathāgata, then the Tathāgata would believe in self, believe in a being, believe in a living being, and believe in a person.

25-4

And what is called a belief in self, O Subhūti, that is preached as no-belief by the Tathāgata. And this is learned by children and ignorant persons;

25-5

and they who were preached as children and ignorant persons, O Subhūti, were preached as no-persons by the

Tathāgata, and therefore they are called children and ignorant persons.'

法身非相分第二十六

26-1

'What do you think then, O Subhūti, is the Tathāgata to be seen (known) by the possession of signs?'

26-2

Subhūti said: 'Not indeed, O Bhagavat. So far as I know the meaning of the preaching of the Bhagavat, the Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs.'

26-3

Bhagavat said: 'Good, good, Subhūti, so it is, Subhūti; so it is, as you say; a Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs,

26-4

And Why? Beause, O Subhūti, if the Tathāgata were to be seen (known) by the possession of signs, a wheel-turning king also would be a Tathāgata; therefore a Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs.'

26-5

The venerable Subhūti spoke thus to the Bhagavat: 'As I understand the meaning of the preaching of the Bhagavat, a Tathāgata is not to be seen (known) by the possession of signs.'

26-6

Then the Bhagavat at that moment preached these two Gāthās:

They who say me by form,
and they who heard me by sound.
They engaged in false endeavours,
will not see me.

A Buddha is to be seen (known) from the Law;
for the Lords (Buddhas) have the Law-body;
And the nature of zthe Law cannot be understood,
nor can it be made to be understood.

無斷無滅分第二十七

27-1

'What do you think then, O Subhūti, has the highest perfect knowledge been known by the Tathāgata through the possession of signs?

27-2

You should not think so, O Subhūti. And why? Because, O Subhūti, the highest perfect knowledge would not be known by the Tathāgata through the possession of signs.

27-3

Nor should anybody, O Subhūti, say to you that the destruction or annihilation of any thing is proclaimed by those who have entered on the path of the Bodhisattvas.'

27-4

(缺)

不受不貪分第二十八

28-1

'And if, O Subhūti, a son or a daughter of a good family were to fill worlds equal to the number of grains of sand of the river Gaṅgā with the seven treasures, and give them as a gift to holy and fully enlightened Tathāgatas; and if a Bodhisattva acquired endurance in selfless and uncreated things, then the latter will on the strength of this produce a larger stock of merit, immeasurable and innumerable.

'But, O Subhūti, a stock of merit should not be appropriated by a noble-minded Bodhisattva.'

28-2

The venerable Subhūti said: 'Should a stock of merit, O Bhagavat, not be appropriated by a Bodhisattva?'

28-3

Bhagavat said: 'It should be appropriated, O Subhūti; it should not be appropriated; and therefore it is said: It should be appropriated.'

威儀寂靜分第二十九

29-1

'And again, O Subhūti, if anybody were to say that the Tathāgata goes, or comes, or stands, or sits, or lies down, he, O Subhūti, does not understand the meaning of my preaching.

29-2

And why? Because the word Tathāgata means one who does not go to anywhere, and does not come from anywhere; and therefore he is called the Tathāgata (truly come), holy and fully enlightened.'

一合離相分第三十

30-1

'And again, O Subhūti, if a son or a daughter of a good family were to take as many worlds as there are grains of earth-dust in this sphere of a million millions of worlds, and reduce them to such fine dust as can be made with immeasurable strength, like what is called a mass of the smallest atoms, do you think, O Subhūti, would that be a mass of many atoms?'

30-2

Subhūti said: 'Yes, Bhagavat, yes, Sugata, that would be a mass of many atoms. And why? Because, O Bhagavat, if it were a mass of many atoms, Bhagavat would not call it a mass of many atoms.

30-3

And why? Because, what was preached as a mass of many atoms by the Tathāgata, that was preached as no-mass of atoms by the Tathāgata; and therefore it is called a mass of many atoms.

30-4

And what was preached by the Tathāgata as the sphere of a million millions of worlds, that was preached by the

Tathāgata as no-sphere of worlds; and therefore it is called the sphere of a million millions of worlds.

30-5

And why? Because, O Bhagavat, if there were a sphere of worlds, there would exist a belief in matter; and what was preached as a belief in matter by the Tathāgata, that was preached as no-belief by the Tathāgata; and therefore it is called a belief in matter.'

30-6

Bhagavat said: 'And a belief in matter itself, O Subhūti, is unmentionable and inexpressible; it is neither a thing nor no-thing, and this is known by children and ignorant persons.'

知見不生分第三十一

31-1

'And why? Because, O Subhūti, if a man were to say that belief in self, belief in a being, belief in life, belief in personality had been preached by the Tathāgata, would he be speaking truly?'

31-2

Subhūti said: 'Not indeed, Bhagavat, not indeed, Sugata; he would not be speaking truly. And why? Because, O Bhagavat, what was preached by the Tathāgata as a belief in self, that was preached by the Tathāgata as no-belief; therefore it is called belief in self.'

31-3

Bhagavat said: 'Thus then, O Subhūti, are all things to be perceived, to be looked upon, and to be believed by one who has entered on the path of the Bodhisattvas.

31-4

And in this wise are they to be perceived, to be looked upon, and to be believed, that a man should believe neither in the idea of a thing nor in the idea of a no-thing. And why? Because, by saying: The idea of a thing, the idea of a thing

indeed, it has been preached by the Tathāgata as no-idea of a thing.'

應化非眞分第三十二

32-1

'And, O Subhūti, if a noble-minded Bodhisattva were to fill immeasurable and innumerable spheres of worlds with the seven treasures, and give them as a gift to holy and fully enlightened Tathāgatas; and if a son or a daughter of a good family, after taking from this treatise of the Law, this Pragñā-pāramitā, one Gāthā of four lines only, should learn it, repeat it, understand it, and fully explain it to others, then the latter would on the strength of this produce a larger stock of merit, immeasurable and innumerable.

32-2

And how should he explain it? As in the sky:

Stars, darkness,
a lamp,a phantom, dew, a bubble.
A dream, a flash of lightning, and a cloud—
thus we should look upon the world (all that was made).

Thus he should explain; therefore it is said: He should explain.'

32-3

Thus spoke the Bhagavat enraptured. The elder Subhūti, and

the friars, nuns, the faithful laymen and women, and the Bodhisattvas also, and the whole world of gods, men, evil spirits and fairies, praised the preaching of the Bhagavat.

32-4

Thus is finished the Diamond-cutter, the blessed Pragñā-pāramitā.

Vajracchedikā Prajñāpāramitā.

Edward Conze 譯

1957

Homage to the Perfection of Wisdom, the Lovely, the Holy!

法會因由分第一

1-1

Thus have heard at one time. The Lord dwelt at Śrāvastī, in the Jeta Grove, in the garden of Anāthapiṇḍada, together with a large gathering of monks, consisting of 1.250 monks, and with many Bodhisattvas, great beings.

1-2

The Lord dressed himself early in the morning, put on his cloak and took his bowl. and entered the great city of Śrāvastī to collect alms.

1-3

Having gone to the great city of Śrāvastī to collect alms, having eaten and returned from his round, the Lord then put away his bowl and cloak, washed his feet, and sat down on the seat arranged for him, crossing his legs, holding his body upright, and intent on fixing his mindfulness.

1-4

Then many monks approached to where the Lord was, saluted

his feet with their heads, thrice walked round him to the right, and sat down on one side.

善現起請分第二

2-1

At that time the Venerable Subhuti came to that assembly and sat down.

2-2

Then the Venerable Subhuti rose from his seat, put his upper robe over one shoulder, placed his right knee on the ground, bent forth his folded hands towards the Lord, and said to the Lord:

2-3

"It is wonderful, O Lord, it is exceedingly wonderful, O Well-Gone, how much the Bodhisattvas, the great beings have been helped with the greatest help by the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One.

2-4

It is wonderful, O Lord, how much the Bodhisattvas, the great beings, have been favoured with the highest favour by the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One.

2-5

How then, O Lord, should a son or daughter of good family, who have set out in the Bodhisattva-vehicle, stand, how

progress, how exert their thought?"

2-6

After these words the Lord said to the Venerable Subhuti: "Well said, well said, Subhuti. So it is, Subhuti, so it is, as you say. Helped are, Subhuti, the Bodhisattvas, the great beings with the greatest help by the Tathagata, favoured are the Bodhisattvas, the great beings with the highest favour by the Tathagata.

2-7

Therefore, Subhuti, listen well, and with well-placed attention! I will teach you how someone who has set out in the Bodhisattva-vehicle should stand, how progress, how exert his thought".

2-8

"So be it, O Lord", the Venerable Subhuti replied to the Lord.

大乘正宗分第三

3-1

The Lord: Here, Subhuti, someone who has set out in the vehicle of a Bodhisattva should produce a thought in this manner: 'As many beings as there are in the universe of beings, comprehended under the term 'beings', —— either egg-born, or born from a womb, or moisture-born, or miraculously born; with or without form; with perception, without perception, or with neither perception nor no-perception, —— as far as any conceivable universe of beings is conceived: all these should by me be led to Nirvana, into that Realm of Nirvana which leaves nothing behind.

3-2

And yet, although innumerable beings have thus been led to Nirvana, no being at all has been led to Nirvana'.

3-3

And why? If in a Bodhisattva the perception of a 'being' should take place, he could not be called a 'Bodhi-being'.

3-4

And why? He is not to be called a Bodhi-being, in whom the perception of a self or a being would take place, or the perception of a living soul or a person.

妙行無住分第四

4-1

And again, Subhuti, not by a Bodhisattva who is supported by a thing should a gift be given, nor by one who is supported anywhere should a gift be given. Not by one who is supported by form should a gift be given, nor by one who is supported by sounds,smells, tastes, touchables, or mind-objects.

4-2

For thus, Subhuti, should the Bodhi-being, the great being give a gift as one who is not supported by the perception of a sign.

4-3

And why? That Bodhi-being, who unsupported gives a gift, his heap of merit, Subhuti, is not easy to measure.

4-4

What do you think, Subhuti, is it easy to measure the extent of space in the East?

4-5

Subhuti: No indeed, O Lord.

4-6

The Lord: In like manner, is it easy to measure the extent of space in the South, West or North, downwards, upwards, in the intermediate directions, in all the ten directions all round?

4-7

Subhuti: No indeed, O Lord.

4-8

The Lord: Even so, that Bodhi-being who unsupported gives a gift, his heap of merit, Subhuti, is not easy to measure.

4-9

It is thus, Subhuti, that someone who has set out in the Budhisattva-vehicle should give a gift,—— as one who is not supported by the perception of a sign.

如理實見分第五

5-1

What do you think, Subhuti, can the Tathagata be seen by the possession of his marks?

5-2

Subhuti: No indeed, O Lord, not by the possession of his marks can the Tathagata be seen. And why? What has been taught by the Tathagata as the possession of marks, that is truly a no-possession of no-marks.

5-3

The Lord: Wherever there is possession of marks there is fraud, wherever there is no-possession of no-marks there is no fraud. Hence the Tathagata is to be seen from no-marks as marks.

正信希有分第六

6-1

Subhuti: Will there be any beings in the future period, in the last time, in the last epoch, in the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine, who, when these very words of the Sutra are being taught, will produce a true perception?

6-2

The Lord: Do not speak thus, Subhuti! Yes, there will be in the future period, in the last time, in the last epoch, in the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine, beings who, when these very words of the Sutra are being taught, will produce a true perception.

6-3

And again, Subhuti, there will be Bodhisattvas, there will be great beings, in the future period, in the last time, in the last epoch, in the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine who are gifted with virtuous qualities, gifted with good conduct, gifted with wisdom, and who, when these very words of the Sutra are being taught, will produce a true perception.

6-4

Moreover, Subhuti, these Bodhisattvas, these great beings will not be such as have honoured only one single Buddha, nor such as have planted their roots of merit under one single Buddha only. On the contrary, Subhuti, those Bodhisattvas, those great beings, who, when these very words of the Sutra are being taught, will find even one single thought of serene faith, will be such as have honoured many hundreds of thousands of Buddhas, such as have planted their roots of merit under many hundreds of thousands of Buddhas.

6-5

Known they are, Subhuti, by the Tathagata through his Buddha-cognition. seen they are, Subhuti, by the Tathagata with his Buddha-eye, fully known they are, Subhuti, to the Tathagata.

6-6

And they all, Subhuti, will beget and acquire an immeasurable and incalculable heap of merit.

6-7

And why? Because in these Bodhisattvas, these great beings, Subhuti, the perception of a self does not take place, nor the perception of a being, nor the perception of a soul, nor the perception of a person.

6-8

Nor does there take place in these Bodhi-beings, these great

beings, a perception of a dharma, and likewise no perception of a no-dharma. Nor Subhuti, does a perception or no-perception take place in them.

6-9

And why? If, Subhuti, in these Bodhi-beings, these great beings, a perception of a dharma could take place, that would be with them a seizing on a self, seizing on a being, seizing on a soul, seizing on a person.

6-10

And why? Because the Bodhi-being, the great being, should not seize upon a dharma or a no-dharma.

6-11

And why? Because the Bodhi-being, the great being, should not seize upon a dharma or a no-dharma.

6-12

Therefore this saying has been taught by the Tathagata with a hidden meaning, "By those who know the discourse on dharma like unto a raft, dharmas should be forsaken, much more so no-dharmas".

無得無說分第七

7-1

The Lord: What do you think, Subhuti, is there any dharma which has been fully known by the Tathagata as 'the utmost, right and perfect enlightenment', or is there any dharma which has been demonstrated by the Tathagata?

7-2

Subhuti: No, as I understand the Lord's teaching, there is not any dharma which has been fully known by the Tathagata as 'the utmost, right and perfect enlightenment', and there is no dharma which has been demonstrated by the Tathagata.

7-3

And why? This dharma which has been fully known or demonstrated by the Tathagata, —— it is not to be seized, it is not to be talked about, it is neither dharma nor no-dharma.

7-4

And why? Because an Absolute exalts the Holy Persons.

依法出生分第八

8-1

The Lord: What do you think, Subhuti, if a son or daughter of good family had filled this world system of 1,000 million worlds with the seven treasures, and then gave it as a gift to the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones, would that son or daughter of good family on the strength of that beget a great heap of merit?

8-2

Subhuti: Great, O Lord, great, O Well-Gone, would the heap of merit be which that son or daughter of good family would beget on the strength of that.

8-3

And why? What was taught by the Tathagata as 'heap of merit', as no-heap that has been taught by the Tathagata. Therefore the Tathagata teaches, 'heap of merit, heap of merit'.

8-4

The Lord: And if again, Subhuti, a son or daughter of good family had filled this world system of 1,000 million worlds with the seven treasures, and gave it as a gift to the Tathagatas, Arhars, Fully Enlightened Ones, and if, on the other hand, someone else had taken from this discourse on

dharma but one stanza of four lines, and were to demonstrate and illuminate it in full detail to others, then the latter would on the strength of this beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable.

8-5

And why? Because from it has issued the utmost, right and perfect enlightenment of the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones, and from it have issued the Buddhas, the Lords. And why? 'The Buddha's own and special dharmas, the Buddha's own and special dharmas', Subhuti, just as not the Buddha's own and special dharmas have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'the Buddha's own and special dharmas'.

一相無相分第九

9-1

What do you think, Subhuti, does it occur to the Stream-winner, 'by me has the fruit of a Streamwinner been attained'?

9-2

Subhuti: No indeed, O Lord, it does not occur to the Streamwinner 'by me has the fruit of a Streamwinner been attained'. And why? Because, O Lord, he has not won any dharma. Therefore is he called a Streamwinner. No form has been won, no sounds, smells, tastes, touchables or objects of mind. Therefore is he called a 'Streamwinner'.

9-3

If, O Lord, it would occur to the Streamwinner, 'by me has the fruit of a Streamwinner been attained', then that would be in him a seizing of self, seizing of a being, seizing of a soul, seizing of a person.

9-4

The Lord: What do you think, Subhuti, does it then occur to the Once-Returner, 'by me has the fruit of a Once-Returner been attained'?

9-5

Subhuti: No indeed, O Lord. it does not occur to the Once-Returner, 'by me has the fruit of a Once-Returner been attained'. And why? Because there is not any dharma that has won Once-Returnership. Therefore is he called a Once-Returner.

9-6

The Lord: What do you think, Subhuti, does it then occur to the Never-Returner, 'by me has the fruit of a Never-Returner been attained'?

9-7

Subhuti: No indeed, O Lord, it does not occur to the Never-Returner, 'by me has the fruit of a Never-Returner been attained'. And why? Because there is not any dharma that has won Never-Returnership. Therefore is he called a Never-Returner.

9-8

The Lord: What do you think, Subhuti, does it then occur to the Arhat, 'by me has Arhatship been attained'?

9-9

Subhuti: No indeed, O Lord, it does not occur to the Arhat, 'by me Arhatship has been attained'. And why? Because there is not any dharma which is called 'Arhat'. Therefore is he called an Arhat.

9-10

If, O Lord, it would occur to an Arhat, 'by me has Arhat-ship been attained', that would be in him a seizing on a self, seizing on a being, seizing on a soul, seizing on a person.

9-11

And why? I am, O Lord, the one who has been pointed out by the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One as the foremost of those who dwell in Peace.

9-12

I am, O Lord, an Arhat free from greed. And yet, O Lord, it does not occur to me, 'an Arhat am I and free from greed'. If to me, O Lord, it would thus occur, 'by me has Arhatship been attained', the Tathagata would not have declared of me, "the foremost of those who dwell in Peace, Subhuti, son of good family, dwells not anywhere, therefore is he called 'a dweller in Peace, a dweller in Peace'".

莊嚴淨土分第十

10-1

The Lord: What do you think, Subhuti, is there any dharma which has been taken up by the Tathagata when he was in the presence of Dipankara, the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One?

10-2

Subhuti: Not so, O Lord, there is not any dharma which has been taken up by the Tathagata when he was in the presence of Dipankara, the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One.

10-3

The Lord: If any Bodhisattva would speak thus: 'I will create harmonious Buddha-fields', he would speak falsely. And why? 'The harmonies of Buddha-fields, the harmonies of Buddha-fields', Subhuti, as no-harmonies have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'harmonious Buddha-fields'.

10-4

Therefore then, Subhuti, the Bodhisattva, the great being, should thus produce an unsupported thought i.e. he should produce a thought which is nowhere supported, he should

produce a thought which is not supported by sounds, smells, tastes, touchables, or mind-objects.

10-5

Suppose, Subhuti, there were a man, endowed with a body, a huge body, so that his personal existence were of such a kind as Sumeru, king of mountains. Do you think, Subhuti, that would be a huge personal existence?

10-6

Subhuti: Yes, huge, O Lord, huge, O Well-Gone, would his personal existence be. And why so? 'Personal existence, personal existence', as no-existence that has been taught by the Tathagata; for not, O Lord, is that existence or nonexistence. Therefore is it called 'personal existence'.

無為福勝分第十一

11-1

The Lord: What do you think, Sudhuti, if there were as many Ganges rivers as there are grains of sand in the large river Ganges, would the grains of sand in them be many?

11-2

Subhuti: Those Ganges rivers would indeed be many, much more so the grains of sand in them.

11-3

The Lord: This is what I announce to you, Subhuti, this is what I make known to you, ——if some woman or man had filled with the seven treasures as many world systems as there would be grains of sand in those Ganges rivers, and would give them as a gift to the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones, —— What do you think, Subhuti, would that woman or man on the strength of that beget a great heap of merit?

11-4

Subhuti: Great, O Lord, great, O Well-Gone, would be the heap of merit, immeasurable and incalculable, which a woman or man would beget on the strength of that.

11-5

The Lord: And if, Subhuti, on the one side a woman or man had filled so many world systems with the seven treasures, and given them as a gift to the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones, —— and if, on the other hand a son or daughter of good family had taken up from this discourse on dharma but one stanza of four lines, and were to demonstrate and illuminate it for others, then the latter indeed would on the strength of that beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable.

尊重正教分第十二

12-1

Then again, Subhuti, that spot of earth where one has taken from this discourse on dharma but one stanza of four lines, taught it or illuminated it, that spot of earth would be like a shrine for the whole world with its Gods, men and Asuras. What then should we say of those who will bear in mind this discourse on dharma in its entirety, who will recite, study, and illuminate it in full datail for others? Most wonderfully blest, Subhuti, will they be.

12-2

And on that spot of earth, Subhuti, either the Teacher dwells, or a sage representing him.

如法受持分第十三

13-1

Subhuti: What then, O Lord, is (this) discourse on dharma, and how should I bear it in mind?

13-2

The Lord: 'Wisdom which has gone beyond', Subhuti, is this discourse on dharma called, and as such should you bear it in mind.

13-3

And why? Just that which has been taught by the Tathagata as the wisdom which has gone beyond, just that has been taught by the Tathagata as not gone beyond. Therefore is it called 'Wisdom which has gone beyond'.

13-4

What do you think, Subhuti, is there any dharma which has been taught by the Tathagata?

13-5

Subhuti: No indeed, O Lord, there is not any dharma which has been taught by the Tathagata.

13-6

The Lord: What do you think, Subhuti, (when you consider) the number of particles of dust in this world system of 1,000 million worlds, -- would they be many?

13-7

Subhuti: Many, O Lord, many, O Well-Gone, would the particles of dust be. And why? Because, O Lord, what was taught as particles of dust by the Tathagata, as no-particles that was taught by the Tathagata. Therefore are they called 'particles of dust'.

13-8

And that which as a world system was taught by the Tathagata, as a no-system that has been taught by the Tathagata. Therefore is it called a 'world system'.

13-9

The Lord: What do you think, Subhuti, is the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One to be seen by means of the 32 marks of the Superman?

13-10

Subhuti: No indeed, O Lord, the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One is not to be seen by means of the 32 marks of the Superman.

13-11

And why? Because those 32 marks of the Superman which

were taught by the Tathagata, as no-marks they were taught by the Tathagata. Therefore are they called the '32 marks of the Superman'.

13-12

The Lord: And again, Subhuti, suppose a woman or man would day by day renounce all they have and all they are, as many times as there are grains of sand in the river Ganges, and if they should renounce all they have and all they are for as many aeons as there are grains of sand in the river Ganges,-- but if someone else would, after taking from this discourse on dharma but one stanza of four lines, demonstrate and illuminate it to others, then this latter on the strength of that would beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable.

離相寂滅分第十四

14-1

Thereupon the Venerable Subhuti, by the impact of dharma, was moved to tears. Having shed tears, he thus spoke to the Lord:

14-2

It is wonderful, O Lord, it is exceedingly wonderful, O Well-Gone, how well this discourse on dharma has been taught by the Tahtagata for the weal of those beings who have set out in the best vehicle, for the weal of those set out in the most excellent vehicle. Through it cognition has been produced in me.

14-3

Not by me has such a discourse on dharma ever been heard before. Most wonderfully blest will be those Bodhisattvas who, when this Sutra is being taught, on hearing it will produce a true perception.

14-4

And why? That which is true perception, that is indeed no true perception. Therefore the Tathagata teaches, 'true perception, true perception'.

14-5

It is not difficult for me that I should accept and believe this discourse on dharma when it is being taught.

14-6

But those beings who will be in a future period, in the last time, in the last epoch, in the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine, and who, O Lord, will take up this discourse on dharma, bear it in mind, recite it, study it, and illuminate it in full detail for others, these will be most wonderfully blest.

14-7

In them, however, no perception of a self will take place, no perception of a being, no perception of a soul, no perception of a person.

14-8

And why? That, O Lord, which is perception of self, that is indeed no perception. That which is perception of a being, perception of a soul, perception of a person, that is indeed no perception.

14-9

And why? Because the Buddhas, the Lords have left all perceptions behind.

14-10

The Lord: So it is, Subhuti, so it is. Most wonderfully blest

will be those beings who, when this Sutra is being taught, will not tremble, nor be frightened nor terrified. And why? As the highest (paramā) perfection (pāramitā), Subhuti, has this been taught by the Tathagata, i.e. as no-perfection. And what the Tathagata teaches as the highest perfection, that also the innumerable (aparimāṇa) Blessed Buddhas do teach. Therefore is it called the 'highest perfection'.

14-11

Moreover, Subhuti, that which is the Tathagata's perfection of patience, that is really no-perfection.

14-12

And why? Because, Subhuti, when the king of Kalinga cut my flesh from every limb, at that time I had no perception of a self, no perception of a being, no perception of a soul, no perception of a person, nor had I any perception or no-perception.

14-13

And why? If, Subhuti, at that time I had had a perception of self, I would also have had a perception of ill-will at that time. If I had had a perception of a being, a percepti on of a soul, a perception of a person, then I would also have had a perception of ill-will at that time.

14-14

And why? By my superknowlege I know the past, 500 births, and how I have been the Rishi 'Preacher of Patience'. Then

also have I had no perception of a self, no perception of a being, no perception of a soul, no perception of a person. Therefore then, Subhuti, the Bodhi-being, the great being, after he has got rid of all perceptions, should produce a thought of utmost, right and perfect enlightenment. Unsupported by form should a thought be produced, unsupported by sounds, smells, tastes, touchables or mind-objects should a thought be produced, unsupported by dharma should a thought be produced, unsupported by no-dharma should a thought be produced, unsupported by anything should a thought be produced.

14-15

And why? All supports have actually no support. It is therefore that the Tathagata teaches: By an unsupported Bodhisattva should a gift be given, not by one who is supported by forms, sounds, smells, tastes, touchables or mind-objects.

14-16

And further, Subhuti, for the weal of all beings should a Bodhisattva renounce a gift in such a way. And why? This perception of a being, Subhuti, that is just a no-perception. Those all-beings of whom the Tathagata has spoken, they are indeed no-beings.

14-17

And why? Because the Tathagata speaks in accordance with reality, speaks the truth, speaks of what is, not otherwise. A Tathagata does not speak falsely.

14-18

But nevertheless, Subhuti, with regard to that dharma which the Tathagata has fully known, demonstrated, and meditated upon, on account of that there is neither truth nor fraud.

14-19

A man who has entered darkness would not see anything. Just so should be viewed a Bodhisattva who has fallen among things, and who, fallen among things, renounces a gift. A man with eyes would, when the night becomes light and the sun has risen, see manifold forms. Just so should be viewed a Bodhisattva who has not fallen among things, and who, without having fallen among things, renounces a gift.

14-20

Furthermore, Subhuti, those sons and daughters of good family, who will take up this discourse on dharma, will bear it in mind, will recite it, study it, and illuminate it in full detail for others, they have been known, Subhuti, by the Tathagata with his Buddha-cognition, they have been seen. Subhuti, by the Tathagata with his Buddha-eye, they have been fully known by the Tathagata. All these beings, Subhuti, will beget and acquire an immeasurable and incalculable heap of merit.

持經功德分第十五

15-1

And if again, Subhuti, a woman or man should renounce in the morning all they have and all they are as many times as there are grains of sand in the river Ganges, and if at noon they should renounce all they have and all they are as many times as there are grains of sand in the river Ganges, and if in the evening they should renounce all they have and all they are as many times as there are grains of sand in the river Ganges, and if in this way they should renounce all they have and all they are for many hundreds of thousands of millions of milliards of aeons——and if someone else, on hearing this discourse on dharma, would not reject it, -- then the latter would on the strength of that beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable. What then should we say of him who, after writing it, would learn it, bear it in mind, recite it, study it, and illuminate it in full detail for others?

15-2

Moreover, Subhuti, unthinkable and incomparable is this discourse on dharma. And this discourse on dharma, Subhuti, has been taught by the Tathagata for the weal of beings who have set out in the best vehicle, for the weal of those who have set out in the most excellent vehicle. Those who will

take up this discourse on dharma bear it in mind, recite it, study it, and illuminate it in full detail for others, they have been known. Subhuti, by the Tathagata with his Buddha-cognition, they have been seen, Subhuti, by the Tathagata with his Buddha-eye, they have been fully known by the Tathagata. All these beings, Subhuti, will be blest with an immeasurable heap of merit, they will be blest with a heap of merit unthinkable, incomparable, measureless and illimitable.

15-3

All these beings, Subhuti, will carry along an equal share of enlightenment. And why? Because it is not possible, Subhuti, that this discourse on dharma could be heard by beings of inferior resolve, nor by such as have a self in view, a being, a soul, or a person. Nor can beings who have not taken the pledge of a Bodhi-being either hear this discourse on dharma, or take it up, bear it in mind, recite or study it. That cannot be.

15-4

And again, Subhuti, the spot of earth where this Sutra will be revealed, that spot of earth will be worthy of worship by the whole world with its Gods, men and Asuras, that spot of earth will be worthy of being saluted respectfully, worthy of being honoured by circumambulation, -- like a shrine will be that spot of earth.

能淨業障分第十六

16-1

And yet, Subhuti, those sons and daughters of good family, who will take up these very Sutras, who will bear them in mind, recite them, study them, and wisely attend to them, and who will illuminate them in full detail for others, they will be humbled, and they will be well humbled.

16-2

And why? The impure deeds which these beings have done in their former lives, and which are liable to lead them into the states of woe, -- in this very life they will, by means of that humiliation, annul those impure deeds of their former lives, and they will reach the enlightenment of a Buddha.

16-3

And why? I know by my superknowledge, Subhuti, that in the past period, during incalculable, quite incalculable aeons, there were 84,000 million milliards of Buddhas, farther and farther away from Dipankara, the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One, to whom I gave satisfaction by loyal service, and from whom I did not again become estranged.

16-4

And if, on the one hand, Subhuti, I gave satisfaction to those

Buddhas and Lords, without again becoming estranged from them, -- and if, on the other hand, other people in the last time, the last epoch, the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine, will take up these very Sutras, bear them in mind, recite and study them, and will illuminate them in full detail for others, -- then again, Subhuti, compared with this heap of merit that former heap of merit does not approach one hundredth part, not one thousandth part, not a 100 thousandth part, not a 10 millionth part, nor a 100 millionth part, nor a 100.000 millionth part. It does not bear number, nor fraction, nor counting, nor similarity, nor comparison, nor resemblance.

16-5

If moreover, Subhuti, I were to teach the heap of merit of those sons and daughters of good family, and how great a heap of merit those sons and daughters of good family will at that time beget and acquire, beings would become frantic and confused.

16-6

Since, however, Subhuti, the Tathagata has taught this discourse on dharma as unthinkable, so just an unthinkable karma-result should be expected from it.

究竟無我分第十七

17-1

Subhuti: How, O Lord, should someone stand, who has set out in the Bodhisattva-vehicle, how progress, how exert thought?

17-2

The Lord: Here, Subhuti, someone who has set out in the Bodhisattva-vehicle should thus produce a thought: 'all beings should be led by me to Nirvana, into that Realm of Nirvana which leaves nothing behind.

17-3

And yet, after beings have thus been led to Nirvana, no being at all has been led to Nirvana'.

17-4

And why? If in a Bodhisattva the perception of a being would take place, he should not be called a 'Bodhi-being'. If the perception of a soul, or the perception of a person would take place, he should not be called a 'Bodhi-being'.

17-5

And why? He who has set out in the Bodhisattva-vehicle, — — he is not one of the dharmas.

17-6

What do you think, Subhuti, is there any dharma by which the Tathagata, when he was in the presence of Dipankara, the Tathagata, has awoken to the utmost, right and perfect enlightenment?

17-7

Subhuti: As I understand the meaning of the Lord's teaching, there is not any dharma by which the Tathagata, when he was in the presence of Dipankara, the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One, has awoken to the utmost, right and perfect enlightenment.

17-8

The Lord: So it is, Subhuti, so it is, there is no dharma by which the Tathagata, when he was in the presence of Dipankara, the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One, has awoken to the utmost, right and perfect enlightenment.

17-9

If again, Subhuti, some dharma had been fully known by the Tathagata, not of me would the Tathagata Dipankara have predicted: "You, young Brahmin, will in a future period be a Tathagata, Arhat, Fully Enlightened, by the name of Sakyamuni".

17-10

Because then, Subhuti, there is not any dharma by which the Tathagata, Arhat, Fully Enlightened One has fully known the

utmost, right and perfect enlightenment, therefore the Tathagata Dipankara has predicted of me: "You, young Brahmin, will in a future period be a Tathagata, Arhat, Fully Enlightened, by the name of Sakyamuni".

17-11
And why? 'Tathagata', Subhuti, of true Suchness that is a synonym.

17-12
And whosoever, Subhuti, were to say: 'The Tathagata, the Arhat, the fully Enlightened One, has fully known the utmost, right and perfect enlightenment', he would speak falsely, and he would misrepresent me by seizing on what is not there.

17-13
And why? There is not any dharma by which the Tathagata has fully known the utmost, right and perfect enlightenment.

17-14
And that dharma which the Tathagata has fully known and demonstrated, on account of that there is neither truth nor fraud. Therefore the Tathagata teaches, 'all dharmas are the Buddha's own and special dharmas'.

17-15
And why? 'All-dharmas', Subhuti, have as no-dharmas been taught by the Tathagata. Therefore all dharmas are called the Buddha's own and special dharmas.

17-16
Suppose, Subhuti, a man were endowed with a body, a huge body.

17-17
Subhuti: That man who was spoken of by the Tathagata as 'endowed with a body, a huge body', as a no-body he has been taught by the Tathagata. Therefore is he called 'endowed with a body, a huge body'.

17-18
The Lord: So it is, Subhuti, the Bodhisattva who would say, 'I will lead beings to Nirvana', he should not be called a 'Bodhi being'. And why? Is there, Subhuti, any dharma named 'Bodhi-being'?

17-19
Subhuti: No indeed, O Lord, there is not any dharma named a 'Bodhi-being'.

17-20
The Lord: 'Beings, beings', Subhuti, as no-beings have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'beings'. Because of that the Tathagata teaches, 'selfless are all dharmas, unsubstantial, without a living soul, without personality'.

17-21
If any Bodhisattva should say: 'I will create harmonious Bud-

dha-fields' he likewise should not be called a Bodhisattva. And why? 'The harmonies of Buddha-fields, the harmonies of Buddha-fields', Subhuti, as no harmonies have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'harmonious Buddha-fields'.

17-22

The Bodhisattva, Subhuti, who is intent on 'without self are the dharmas, without self are the dharmas', he has been declared by the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One to be a Bodhi-being, a great being.

一體同觀分第十八

18-1
What do you think, Subhuti, does the fleshly eye of the Tathagata exist?

18-2
Subhuti: So it is, O Lord, the fleshly eye of the Tathagata does exist.

18-3
The Lord: What do you think, Subhuti, does the heavenly eye of the Tathagata exist?

18-4
Subhuti: So it is, O Lord, the heavenly eye of the Tathagata does exist.

18-5
The Lord: What do you think, Subhuti, does the wisdom eye of the Tathagata exist?

18-6
Subhuti: So it is, O Lord, the wisdom eye of the Tathagata does exist.

18-7
The Lord: What do you think, Subhuti, does the dharma-eye of the Tathagata exist?

18-8
Subhuti: So it is, O Lord, the dharma-eye of the Tathagata does exist.

18-9
The Lord: What do you think, Subhuti, does the Buddha-eye of the Tathagata exist?

18-10
Subhuti: So it is, O Lord, the Buddha-eye of the Tathagata does exist.

18-11
the Lord: What do you think, Subhuti, as many grains of sand as there are in the great river Ganges, has now the Tathagata spoken of these grains of sand?

18-12
Subhuti: So it is, O Lord, so it is, O Well-Gone, the Tathagata has spoken of these grains of sand.

18-13
The Lord: What do you think, Subhuti, if there were as many Ganges rivers as there are grains of sand in the great river Ganges, and if there were as many world systems as

there are grains of sand in these, would those world systems be many?

18-14
Subhuti: So it is, O Lord, so it is, O Well-Gone, these world systems would be many.

18-15
The Lord: As many beings as there are in these world systems, of them I know, in my wisdom, the manifold trends of thought.

18-16
And why? 'Trends of thought, trends of thought', Subhuti, as no-trends have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'trends of thought'.

18-17
And why? Past thought is not got at; future thought is not got at; present thought is not got at.

法界通化分第十九

19-1

What do you think, Subhuti, if a son or daughter of good family had filled this world system of 1,000 million worlds with the seven treasures, and then gave it as a gift to the Tathagatas, the Arhats, the Fully Enlightened Ones, would that son or daughter of good family on the strength of that beget a great heap of merit?

19-2

Subhuti: Much, O Lord, much, O Well-Gone.

19-3

The Lord: So it is, Subhuti, so it is; on the strength of that this son or daughter of good family would beget a great heap of merit, immeasurable and incalculable.

19-4

And why? 'Heap of merit, heap of merit', as no heap has that been taught by the Tathagata. Therefore is it called 'heap of merit'.

19-5

If there would be a heap of merit, the Tathagata would not have taught 'heap of merit, heap of merit'.

離色離相分第二十

20-1
What do you think, Subhuti, is the Tathagata to be seen by means of the accomplishment of his form-body?

20-2
Subhuti: No indeed, O Lord, the Tathagata is not to be seen by means of the accomplishment of his form-body.

20-3
And why? 'Accomplishment of his form-body, accomplishment of his form-body', this, O Lord, has been taught by the Tathagata as no-accomplishment. Therefore is it called 'accomplishment of his form-body'.

20-4
The Lord: What do you think, Subhuti, is the Tathagata to be seen through his possession of marks?

20-5
Subhuti: No indeed, O Lord, the Tathagata is not to be seen through his possession of marks.

20-6
And why? This possession of marks, O Lord, which has been

taught by the Tathagata, as a no-possession of no-marks this has been taught by the Tathagata. Therefore is it called 'possession of marks'.

非說所說分第二十一

21-1

The Lord: What do you think, Subhuti, does it occur to the Tathagata, 'by me dharma is demonstrated'?

21-2

Subhuti: No indeed, O Lord, it does not occur to he Tathagata, 'by me dharma is demonstrated'.

21-3

The Lord: Whosoever would say, 'the Tathagata has demonstrated dharma', he would speak falsely, he would misrepresent me by seizing on what is not there.

21-4

And why? 'Demonstration of dharma, demonstration of dharma', Subhuti, there is not any dharma which could be got at as demonstration of dharma.

21-5

Subhuti: Are there, O Lord, any beings in the future, in the last time, in the last epoch, in the last 500 years, at the time of the collapse of the good doctrine who, on hearing such dharmas, will truly believe?

21-6

The Lord: They, Subhuti, are neither beings, nor no-beings.

21-7

And why? 'Beings, beings', Subhuti, as no-beings have all these been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'beings'.

無法可得分第二十二

22-1

What do you think, Subhuti, is there any dharma by which the Tathagata has fully known the utmost, right and perfect enlightenment?

22-2

Subhuti: No indeed, O Lord, there is not any dharma by which the Tathagata has fully known the utmost, right and perfect enlightenment.

22-3

The Lord: So it is, Subhuti, so it is. Not even the least (anu) dharma is there found or got at. Therefore is it called 'utmost (anuttara), right and perfect enlightenment'.

淨心行善分第二十三

23-1

Furthermore, Subhuti, self-identical (sama) is that dharma, and nothing is therein at variance. Therefore is it called 'utmost, right (samyak) and perfect (sam-) enlightenment'.

23-2

Self-identical through the absence of a self, of a being, of a soul, of a person, the utmost, right and perfect enlightenment is fully known through all the wholesome dharmas.

23-3

And why? 'Wholesome dharmas, wholesome darmas', Subhuti, yet as no-dharmas have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'wholesome dharmas'.

福智無比分第二十四

24-1

And again, Subhuti, if a woman or man had piled up t he seven treasures until their bulk equalled that of all the Sumerus, kings of mountains, in the world system of 1,000 million worlds, and would give them as a gift to the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones,--and if, on the other hand, a son or daughter of good family would take up from this Prajnāpāramitā, this discourse on dharma, but one stanza of four lines, and demonstrate it to others,--compared with his heap of merit the former heap of merit does not approach one hundredth part, etc. until we come to (see ch. 16b), it will not bear any comparison.

化無所化分第二十五

25-1
What do you think, Subhuti, does it occur to a Tathagata. 'by me have beings been set free'?

25-2
Not thus should one see it, Subhuti. And why? There is not any being who has been set free by the Tathagata.

25-3
Again. if there had been any being who had been set free by the Tathagata, then surely there would have been on the part of the Tathagata a seizing of self, seizing of a being, seizing of a soul, seizing of a person.

25-4
'Seizing of a self', as a no-seizing, Subhuti, that has been taught by the Tathagata. And yet it has been seized upon by foolish common people.

25-5
'Foolish common people', Subhuti, as really no people have they been taught by the Tathagata. Therefore are they called 'foolish common people'.

法身非相分第二十六

26-1

What do you think, Subhuti, is the Tathagata to be seen by means of his possession of marks?

26-2

Subhuti: No indeed, O Lord, as I understand the meaning of the Lord's teaching, the Tathagata is not to be seen by means of his possession of marks.

26-3

The Lord: Well said, well said, Subhuti. So it is, Subhuti, so it is, as you say. The Tathagata is not to be seen by means of his possession of marks.

26-4

And why? If, Subhuti, the Tathagata were one who could be seen by his possession of marks, then also the universal monarch would be a Tathagata. Therefore the Tathagata is not to be seen by means of his possession of marks.

26-5

Subhuti: As I, O Lord, understand the Lord's teaching, the Tathagata is not to be seen through his possession of marks.

26-6

Further the Lord taught on that occasion these stanzas:

Those who by my form did see me,
And those who followed me by voice,
Wrong the efforts they engaged in
Me those people will not see.

From the dharma should one see the Buddhas.
For the dharma-bodies are t he guides.
Yet dharma's true nature should not be discerned.
Nor can it, either, be discerned.

無斷無滅分第二十七

27-1

What do you think, Subhuti, has the Tathagata fully known the utmost, right and perfect enlightenment through his possession of marks?

27-2

Not so should you see it, Subhuti,

And why? Because the Tathagata could surely not have fully known the utmost, right and perfect enlightenment through his possession of marks.

27-3

Nor should anyone, Subhuti, say to you, 'those who have set out in the Bodhisattva-vehicle have conceived the destruction of a dharma, or its annihilation'.

27-4

Not so should you see it, Subhuti! And why? Those who have set out in the Bodhisattva-vehicle have not conceived the destruction of a dharma nor its annihilation.

不受不貪分第二十八

28-1

And again, Subhuti, if a son or daughter of good family had filled with the seven treasures as many world systems as there are grains of sand in the river Ganges, and gave them as a gift to the Tathagatas, Arhats, Fully Enlightened Ones, —— and if on the other hand a Bodhisattva would gain the patient acquiescence in dharmas which are nothing of themselves and which fail to be produced, then this latter would on the strength of that beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable. Moreover, Subhuti, the Bodhisattva, the great being, should not acquire a heap of merit.

28-2

Subhuti: Surely, O Lord, the Bodhisattva, the great being should acquire a heap of merit?

28-3

The Lord: 'Should acquire', Subhuti, not 'should seize upon'. Therefore is it said 'should acquire'.

威儀寂靜分第二十九

29-1

Whosoever says that the Tathagata goes or comes, or stands or sits, or lies down, he does not understand the meaning of my teaching.

29-2

And why? 'Tathagata' is called one who has not gone anywhere, and who has not come from anywhere. Therefore is he called 'the Tathagata, the Arhat, the Fully Enlightened One'.

一合離相分第三十

30-1

And again, Subhuti, if a son or daughter of good family were to grind as many would systems as there are particles of dust in this would system of 1,000 million worlds, as finely as they can be ground with incalculable vigour, (and in fact reduce them to) something like a collection of atomic quantities, what do you think, Subhuti, would that be an enormous collection of atomic quantities?

30-2

Subhuti: So it is, O Lord, so it is, O Well-Gone, enormous would that collection of atomic quantities be. And why? If, O Lord, there would have been an enormous collection of atomic quantities, the Lord would not have called it an 'enormous collection of atomic quantities'.

30-3

And why? What was taught by the Tathagata as a 'collection of atomic quantities', as a no-collection that was taught by the Tathagata. Therefore is it called a 'collection of atomic quantities'.

30-4

And what has been taught by the Tathagata as 'the world-system

of 1,000 million worlds', as no-system that has been taught by the Tathagata. Therefore is it called 'the world-system of 1,000 million worlds'.

30-5

And why? If, O Lord, there would have been a world-system, that would have been (a case of) seizing on a material object, and what was taught as 'seizing on a material object' by the Tathagata, just as no-seizing that was taught by the Tathagata. Therefore is it called 'seizing on a material object'.

30-6

The Lord: And also, Subhuti, that 'seizing on a material object' is inexpressible, and not to be talked about. It is not a dharma nor a no-dharma. And yet it has been seized upon by foolish common people.

知見不生分第三十一

31-1

And why? Because whosoever would say that the view of a self has been taught by the Tathagata, the view of a being, he view of a living soul, the view of a person, would he, Subhuti, be speaking right?

31-2

Subhuti: No indeed, O Lord, no indeed, O Well-Gone, He would not be speaking right. And why? That which has been taught by the Tathagata as 'view of a self', as a no-view that has been taught b y the Tathagata. Therefore is it called 'view a self'.

31-3

The Lord: It is thus, Subhuti, that someone who has set out in the Bodhisattva-vehicle should know, see, and resolve upon all dharmas.

31-4

And he should know, see, and resolve upon them in such a way that he does not set up the perception of a dharma. And why? 'Perception of dharma, perception of dharma', Subhuti, as no-perception has this been taught by the Tathagata. Therefore is it called 'perception of dharma'.

應化非眞分第三十二

32-1

And finally, Subhuti, if a Budhisattva, a great being had filled world systems immeasurable and incalculable with the seven treasures, and gave them as a gift to the Tathagatas, the Arhats, the Fully Enlightned Ones,—— and if, on the other hand, a son or daughter of good family had taken from this Prajnaparamita, this discourse on dharma, but one stanza of four lines, and were to bear it in mind, demonstrate, recite and study it, and illuminate it in full detail for others, on the strength of that this latter would beget a greater heap of merit, immeasurable and incalculable.

32-2

And how would he illuminate it? So as not to reveal. Therefore is it said, 'he would illuminate'.

As stars, a fault of vision, as a lamp,
A mock show, dew drops, or a bubble,
A dream, a lightning flash, or cloud,
So should one view what is conditioned.

32-3

Thus spoke the Lord. Enraptured, the Elder Subhuti, the

monks and nuns, the pious lay-men and lay women, and the Bodhi-sattvas, and the whole world with its Gods, men, Asuras and Gandharvas rejoiced in the teaching of the Lord.

32-4
(缺)

Vajracchedikā

M. C. de Harlez 譯

1891

VÉNÉRATIN À LA SAINTE Et NOBlE PRAJÑAPARAMITA

法會因由分第一

1.—CAUSE DE LA RÉUNION POUR LA BONNE LOI.

1-1

C'est ainsi que je l'ai entendu dire. En une certaine circonstance, le bienheureux se trouvait à Śrāvastī, au bois de Jeta, au jardin de plaisance d'Anāthapiṇḍada, avec une grande assemblée de bhikshous, comptant 1,500 bhikshous et un nombre considérable de bodhisattvas, mahāsattvas, êtres supérieurs.

1-2

Or donc, s'étant habillé tout au matin, le bienheureux prit son écuelle et le vêtement de religieux mendiant, puis se mit à circuler dans Śrāvastī, la grande ville, pour mendier sa nourriture.

1-3

L'ayant ainsi parcourue, ayant fait son repas et étant revenu

de sa course pour sa nourriture, ayant mis au repos son écuelle et son manteau, et s'étant lavé les pieds, le bienheureux s'assit sur le siège magistral, les jambes pliées sous lui, le corps droit et la pensée fixée sur l'objet de sa méditation.

1-4

Alors de nombreux bhikshous assemblés s'en vinrent au lieu où était le bienheureux. En s'approchant, ils inclinèrent profondément la tête aux pieds du bienheureux, et ayant tourné trois fois en lui donnant la droite, ils allèrent tous s'asseoir du même côté.

善現起請分第二

2.—CHERCHER À FAIRE BRILLER LE BIEN.

2-1

Alors, en cette circonstance, Subhūti, à la longue vie, vint s'unir à cette assemblée et s'assit au milieu d'elle.

2-2

Puis se levant de son siège, rejetant son manteau sur une épaule, posant à terre le genou droit et faisant l'anjali devant le bienheureux, il lui adressa ces paroles:

2-3

C'est merveilleux, ô Bienheureux! c'est suprêmement merveilleux, ô Sugata! comment, par toi vénérable Tathāgata, arhat complètement illuminé, ces bodhisattvas mahāsattvas ont été réunis à ta suite par la grâce qui les a saisis.

2-4

Merveilleux! comment par ce vénérable Tathāgata, arhat complètement illuminé, ces bodhisattvas mahāsattvas ont été comblés de cette grâce suprême.

2-5

Comment donc doit-il se déterminer, ô Bienheureux, le jeune homme ou la jeune fille comme il faut, appliqué à la pratique de la doctrine des bodhisattvas? Comment doit-il se mettre à l'œuvre? Comment doit-il en comprendre l'idée?

2-6

Lorsque Subhūti, à la longue vie, eut ainsi parlé, le bienheureux lui dit: Très bien, très bien, Subhūti! Il en est précisément ainsi, ô Parfait! Il en est comme tu le dis. Les bodhisattvas mahāsattvas ont été amenés, assemblés ici par le Tathāgata, par une faveur suprême qui les a saisis. Ils ont été par lui comblés d'une grâce suprême.

2-7

Écoute donc, ô Excellent, et imprime ceci dans ton esprit, fortement, convenablement. Je te dirai comment l'homme appliqué à la doctrine des bodhisattvas doit se tenir, comment il doit s'y appliquer, comment il doit en comprendre la notion.

2-8

C'est bien, Bienheureux! dit Subhūti, puis il se mit à écouter le bienheureux.

大乘正宗分第三

3.—ENSEIGNEMENT CORRECT DE LA GRANDE DOCTRINE.

3-1

Le bienheureux lui dit: C'est ainsi, ô Excellent, que cette notion doit être conçue par celui qui s'applique aux règles des bodhisattvas. Tous les êtres, quels qu'ils soient, qui, dans l'élément général de l'être, ont été saisis de cette opération qui fait l'être particulier, qu'ils soient nés d'un œuf ou d'une matrice, de l'humidité ou par génération spontanée, qu'ils aient une forme sensible ou n'en aient point, qu'ils soient intelligents ou non intelligents, ou bien ni l'un ni l'autre, et tout élément d'être dont on peut acquérir la connaissance, tous doivent être plongés, quels qu'ils soient, dans l'élément du Nirvāṇa, tous sans exception.

3-2

Mais si même j'y plonge les êtres en nombre illimité, aucun n'y est plongé (en réalité).

3-3

Quelle est la cause de ceci? C'est que, Subhūti, si un bodhisattva croit à l'existence d'un être particulier, il n'est pas digne d'être appelé de ce nom.

3-4

Pour quelle raison? Parce qu'il en est indigne celui qui a la (fausse) connaissance, la (fausse) aperception de l'égoïté, de l'existence, de la vie, de la personnalité.

妙行無住分第四

4.—QUE L'ON NE DOIT POINT RECHERCHER LE SURNATUREL.

4-1

En outre, sans aucun doute, ô Subhūti, un bodhisattva qui fait fond sur la matière ne peut faire de dons (utilement); de même s'il fait fond sur une chose quelconque, sur les formes, les conditions des sons, des odeurs, du goûter, du tact.

4-2

Mais il pourra faire des dons (utiles) s'il ne fait fond sur la connaissance d'aucun objet déterminé.

4-3

Car, ô Subhūti, si ce bodhisattva, qui ne s'appuie sur rien, donne généreusement, on ne peut facilement apprécier la mesure de ses mérites.

4-4

(缺)

4-5
(缺)

4-6
Penses-tu, Subhūti, que l'on puisse aisément prendre la mesure de l'empyrée au sud, à l'ouest, au nord, en bas, en haut, partout dans les cinq régions et dans les directions intermédiaires ?

4-7
Non certainement, ô Bienheureux, répondit Subhūti.

4-8
Ainsi, dit alors le bienheureux, quand un bodhisattva fait des dons sans s'être appuyé sur rien, il est difficile de saisir la mesure de ses mérites.

4-9
Ainsi, ô Subhūti, celui qui appliqué à la règle des bodhisattvas doit donner de manière qu'il ne s'appuie sur aucune connaissance d'objet déterminé.

如理實見分第五

5.—COMMENT ON CONNAÎT LA VÉRITÉ EN SUIVANT LE PRINCIPE RATIONNEL (LI).

5-1

Qu'en penses-tu, ô Subhūti? Le Tathāgata doit-il être reconnu par une réunion en lui de signes extérieurs spéciaux?

5-2

Subhūti répondit: Il n'en est point ainsi, ô Bhagavān! le Tathāgata ne doit pas être reconnu par ces signes. Pourquoi cela? Parce que, ô Bienheureux, la réunion en lui de ces signes dont parle le Tathāgata n'en est point une, est une absence de signes extérieurs.

5-3

A ces paroles le bienheureux dit à Subhūti: C'est que, Subhūti, en ce qui est (conception de la) survenance de signes extérieurs, il y a illusion. En ce qui est absence de ces signes, il n'y a point d'erreur. Ainsi le Tathāgata doit être reconnu, aperçu par la présence et l'absence de marques particulières extérieures.

正信希有分第六

6.—LA DROITURE, LA SINCÉRITÉ, SONT RARES.

6-1

Subhūti, à la longue vie, dit alors au bienheureux: Il arrivera, n'est-ce pas, que certains êtres seront, à cette voie non encore fréquentée, à ce temps dernier, à cette dernière circonstance, à la dernière période de cinq cents ans, quand l'extinction de la bonne loi sera en cours, lesquels êtres manifesteront encore la connaissance (de la nature) de l'être en récitant les paroles des sūtras, semblables à celles-ci.

6-2

Le bienheureux répondit: Ne dis point cela, toi Subhūti!

6-3

Il y aura alors, ô Subhūti, dans cette voie où personne n'est encore entré, au dernier temps, au dernier moment, au dernier cinq-centenaire, quand l'extinction de la bonne loi sera en cours, il y aura des bodhisattvas mahāsattvas doués de qualités excellentes, de vertus morales, de science, qui manifesteront la connaissance de la nature de l'être, en récitant des maximes semblables des sūtras.

6-4

Il n'y aura plus, après cela, des bodhisattvas mahāsattvas disciples d'un seul Bouddha, ni possédant le principe du salut par l'enseignement d'un seul Bouddha. Mais il y aura des bodhisattvas, disciples de plusieurs, de cent, de mille bouddhas, ayant reçu le principe du salut de plusieurs, de cent, de mille bouddhas et qui, en récitant les paroles des Sūtras, sous cette forme, obtiendront le don suprême de l'unité parfaite de la pensée, de la pensée établie dans l'unité.

6-5

Ceux-là, Subhūti, sont connus du Tathāgata, par sa science de bouddha, d'illuminé. Ils sont vus par lui, de son œil de bouddha.

6-6

Eux tous, éclairés par le Tathāgata, produiront une masse de mérites en nombre incommensur able et ils en acquerront les fruits.

6-7

Pourquoi cela? Chez ces bodhisattvas mahāsattvas ne règne plus la conception de l'individualité, nicelle de l'existence, ni de la vie, ni de la personnalité,

6-8

ni même celle de la loi (essence de l'être). Il n'y a pas davantage la connaissance de la non-existence de la loi; il n'y

a plus ni connaissance ni ignorance.

6-9

Comment cela? C'est que si les bodhisattvas mahāsattvas avaient encore la connaissance expresse de la loi, ils se saisiraient encore de l'ātman, de l'existence particulière, de la vie, de la personnalité.

6-10

S'ils avaient encore la connaissance de la non-loi, ils se saisiraient encore de l'individualité, de l'être, de la vie, de la personnalité.

6-11

Pourquoi cela? Parce qu'après ce temps le bodhisattva mahāsattva ne doit plus recevoir de loi ou non-loi.

6-12

Ainsi fut prononcé cediscours par le Tathāgata sur cette matière. Les (notions des) lois sont nécessairement abandonnées (tuées en soi) par ceux qui connaissent le cours naturel et nécessaire de la loi (de l'être), semblable à un radeau; bien plus encore la non-existence de lois.

無得無說分第七

7.—CE QUI N'EST NI ACQUIS NI DIT.

7-1

Ensuite le bienheureux dit à Subhūti, à la longue vie: Que penses-tu de cela, ô Subhūti; y a-t-il une loi, appelée illumination suprême de l'intelligence, qui a reçu sa lumière par le Tathāgata, ou une loi révélée par le Tathāgata?

7-2

Subhūti répondit: Pour autant que je comprends, ô Bienheureux, le sens de ce qui a été dit par le bienheureux, il n'y a point de loi, dite illuminant l'intelligence, ayant reçu sa lumière du Tathāgata, qui ait été révélée par lui.

7-3

Parce que la loi qui a été révélée par le Tathāgata est incompréhensible, et sans qualités particulières que l'on puisse exprimer. Ce n'est ni loi ni non-loi,

7-4

parce que les entités supérieures sont produites telles sans être réelles et parfaites pour cela.

依法出生分第八

8.—VIVRE SELON LA LOI.

8-1

Le bienheureux dit: Que penses-tu de cela, Subhūti? Si un fils de famille ou une fille de famille (distinguée) fait en sorte que l'élément du monde du trimillénaire ou du grand millénaire soit plein des sept biens précieux, des sept joyaux et qu'il les donne tels, en pur don, aux Tathāgatas, aux arhats com-plètement illuminés, est-ce que ce fils ou cette fille de famille ferait ressortir de cette œuvre un grand amas de mérites?

8-2

Subhūti répondit: Très abondant, ô Bienheureux, très abondant, ô Sugata, serait l'amas de mérites que produirait par cette œuvre ce fils ou cette fille de famille.

8-3

Et pourquoi? Parce que cet amas de mérites dont parle le Tathāgata a été déclaré par lui un non-amas. C'est pourquoi le Tathāgata dit: C'est un amas, un vrai amas de mérites.

8-4

Le bienheureux dit: En outre, si ce fils ou cette fille de famille remplissait ainsi des sept joyaux l'élément du monde du trimillénaire, du grand millénaire et le livrait ainsi en don aux Tathāgatas, arhats complètement illuminés, et qu'un autre, prenant une simple Gāthā de quatre vers dans toute l'étendue de loi, l'enseignât aux autres complètement et l'expliquât en détail, celui-ci produirait ainsi un amas de mérites beaucoup plus abondant, un amas innombrable.

8-5

Et pourquoi? parce que, ô Subhūti, c'est par là qu'est née pour ce monde l'illumination complète que rien ne dépasse, des Tathāgatas, arhats complètement illuminés; c'est par là aussi qu'ont été engendrés les bouddhas bienheureux.

8-6

Comment cela? C'est que ces lois des bouddhas, proclamées telles, ô Subhūti, ont été en même temps déclarées non-lois des bouddhas par le Tathāgata. C'est pourquoi aussi elles ont été dites des lois de Bouddha.

一相無相分第九

9.—UNE SEULE FORME, PAS DE FORME.

9-1

Que penses-tu maintenant de ceci, Subhūti? Appartient-il à celui qui est entré dans le courant de l'existence (qui l'a atteint, de dire): J'ai acquis le fruit à recueillir dans ce courant?

9-2

Subhūti répondit: Non; cela ne lui appartient pas. Et pourquoi? parce que celui-là, quel qu'il soit, n'a réellement acquis aucune condition; c'est pourquoi il est appelé entré dans le courant de l'existence, l'ayant atteint. Il n'a réellement acquis les conditions ni des formes, ni des sons, ni des odeurs, ni du goût, ni des sensations du tact.

9-3

Si celui qui s'est engagé dans ce courant pouvait dire qu'il en a acquis les mérites, il aurait saisi, acquis l'égoïté, l'être, la vie, la personnalité.

9-4

Le bienheureux continua: Maintenant pensez-vous qu'il appartienne à celui qui est à sa dernière renaissance de dire

qu'il a acquis les fruits, les mérites de cet état?

9-5

Subhūti répondit: Non certainement, cela ne lui appartient pas. Et pourquoi? Parce que celui qui n'a plus à renaître qu'une fois n'a plus les conditions de l'existence sensible. C'est pourquoi il est appelé sakṛdāgamī "qui vient une fois".

9-6

Le bienheureux dit: Qu'en penses-tu, Subhūti? Appartient-il à celui qui ne revient plus à une nouvelle existence de dire qu'il a acquis le fruit de cette condition?

9-7

Subhūti répondit: Non, cela n'est point, ô Bienheureux! non, il n'appartient pas (même) à celui qui ne revient plus de dire: "J'ai acquis le fruit de l'état d'anāgamī." Et pourquoi? Parce que celui-là n'a plus de loi, plus de condition particulière. C'est pourquoi il est appelé anāgamī "qui ne revient plus".

9-8

Le bienheureux dit: Que penses-tu de ceci, ô Subhūti? Un arhat peut-il croire qu'il a acquis par lui-même la condition d'arhat?

9-9

Subhūti répondit: Cela n'est point, Bienheureux! l'arhat même ne peut se dire cela avec vérité. Et pourquoi? C'est qu'il n'y

a pas une loi de condition, une réalité qui soit l'arhat; c'est pour cela qu'il porte ce nom.

9-10

Si l'arhat pouvait se dire: J'ai acquis la condition d'arhat, alors il voudrait encore prendre une égoïté, une existence, une vie, une personnalité.

9-11

Pourquoi cela? C'est que je suis désigné par le Tathāgata, arhat complètement illuminé, comme chef de ceux qui ne s'adonnent plus à la jouissance,

9-12

et cependant, bien que je le sois,je ne puis pas dire: Je suis un arhat exempt de toute attache. Si je pouvais me dire que j'ai acquis la condition d'arhat, le Tathāgata ne prédirait pas de moi que je serai Subhūti, homme distingué, chef de ceux qui ne sont plus attachés à la jouissance, qui ne se plaira plus en aucune jouissance. C'est pourquoi il est appelé détaché de la jouissance, détaché de la jouissance.

莊嚴淨土分第十

10.—COMMENT RÉGLER AVEC DIGNITÉ ET BEAUTÉ CE QUI EST PUR.

10-1

Le bienheureux dit: Qu'en penses-tu, ô Subhūti? Y a-t-il eu une condition d'existence dont se saisisse le Tathāgata, la recevant de Dīpaṅkara le Tathāgata, l'arhat complètement illuminé?

10-2

Subhūti répondit: Non, une condition semblable n'a point existé. (Le Tathāgata ne reçoit point d'existence par ce moyen.)

10-3

Le bienheureux dit: Tout bodhisattva, Subhūti, qui dirait: "Je produirai tous les développements successifs du champ de l'être", parlerait contrairement à la vérité. Et pourquoi? On dit: développements des êtres, développements des êtres et ce ne sont point des développements de l'être, a dit le Tathāgata. C'est pourquoi on appelle cela "développements successifs des êtres".

10-4

C'est pourquoi, ô Subhūti, le bodhisattva mahāsattva doit former en lui et manifester la résolution qu'il n'y ait jamais en lui de pensée, de volonté déterminée, qui s'applique à la forme extérieure des êtres, ni aux sons, aux odeurs, au tact.

10-5

S'il se trouvait, par exemple, Subhūti, un être humain d'un corps élevé, d'une haute taille dont la forme, l'individualité serait comme est le Sumeru, le roi des montagnes, son individualité serait grande en réalité ?

10-6

Subhūti répondit: Elle serait grande, Bienheureux, elle serait grande, Sugata! cette individualité telle que tu la dis. Et pourquoi? parce que ce qu'on appelle une existence individuelle, une existence d'egoïté a été déclarée n'être point une existence par le Tathāgata. C'est pourquoi on l'appelle existence individuelle. Mais en réalité, ô Bienheureux, ce n'est ni une existence ni une non-existence; c'est pourquoi on l'appelle existence individuelle, égoïque.

無爲福勝分第十一

11.—PROSPÉRITÉ, GRANDEUR SANS EFFORTS.

11-1

Le bienheureux dit: Qu'en penses-tu, ô Subhūti? S'il y avait autant de fleuves (tels que le) Gange qu'il y a de grains de sable dans le Gange, le grand fleuve, les grains de sable qui se trouveraient dans tous ces Ganges seraient-ils pour cela en grand nombre?

11-2

Subhūti répondit: Autant il y aurait de ces Ganges, d'autant plus il y aurait de grains de sable dans ces fleuves.

11-3

Le bienheureux reprit: Je vais te l'expliquer, Subhūti, je vais te le faire connaître. Si un homme ou une femme remplissait des sept joyaux autant de monde qu'il y a de grains de sable dans tous ces Ganges, puis les donnait en don aux Tathāgatas, arhats complètement illuminés, quel serait, penses-tu, l'amas de mérites que cet homme ou cette femme produirait en retour?

11-4

Subhūti répondit: Nombreux, Bienheureux, (très) nombreux,

Sugata! serait l'amas de mérites que cet homme ou cette femme porduirait, incommensurable, innombrable.

11-5

Le bienheureux ajouta: Mais relativement à celui, homme ou femme, qui donnerait ces mondes ainsi remplis aux Tathāgatas, l'homme ou la femme distingué qui enseignerait, qui expliquerait aux autres un quatrain de l'exposé de la loi, obtiendrait un amas de mérites bien plus considérable encore; celui-là serait incommensurable, innombrable.

尊重正教分第十二

12.—QU'IL FAUT HONORER ET RESPECTER LA BONNE DOCTRINE.

12-1

En outre, cette partie de la terre dans la quelle serait prononcé ou expliqué ce quatrain de la loi, cette partie deviendrait un lieu sacré, un temple pour le monde réuni des dévas, des hommes et des asuras. Et ceux en outre qui soutiennent (dhāray) cet exposé de la loi tout entier, qui le réunissent ācay), l'obtiennent (paryavāp) entier par leurs recherches et l'expliquent complètement aux autres, ceux-là seront doués des pouvoirs surhumains les plus merveilleux.

12-2

Et dans ce lieu de la terre on jouira de la dignité de maître, ou bien on occupera la place de docteur de la science.

如法受持分第十三

13.—RECEVOIR ET ACCEPTER LA LOI, EN LA SUIVANT ET S'ENÉLOIGNANT.

13-1

Lorsque le bienheureux eut ainsi parlé, Subhūti, à la longue vie, lui adressa ces paroles: Quel est, ô Bienheureux, cet exposé, ce cours de la loi? Comment pourrais-je le maintenir?

13-2

Le bienheureux, ainsi interpellé, dit à Subhūti: Cet exposé de la loi est la Prajñāpāramitā. C'est elle que tu dois maintenir (en vigueur et hunneur).

13-3

Et pourquoi? Parce qu'elle a été dite par le Tathāgata traversée de la science et aussi non-traversée (la connaissance complète et la non-complète). C'est pourquoi elle est appelée Prajñāpāramitā.

13-4

Et qu'en penses-tu encore, Subhūti ? Est-ce cela une loi quelconque proférée par le Tathāgata?

13-5
Subhūti répondit: Non, cela n'est point, Bienheureux, car ce n'est point une loi qui ait été proférée par le Tathāgata.

13-6
Que penses-tu, Subhūti? Est-ce que la poussière terrestre de la région du monde du trimillénaire, du grand millénaire est abondante?

13-7
Subhūti répondit: Elle doit être abondante, Sugata! elle doit être abondante, la poussière terrestre de ce millénaire? Et pourquoi ? Parce que cette poussière terrestre dont parla le Tathāgata est déclarée par lui non-poussière. C'est pourquoi on l'appelle poussière (impureté) terrestre.

13-8
En outre, ce lieu, cet élément terrestre dont a parlé le Tathāgata a été déclaré par lui être un non-élément. C'est pourquoi il est appelé " élément du monde".

13-9
Le bienheureux dit: Penses-tu, ô Subhūti, que le Tathāgata, arhat parfaitement illuminé, doit être reconnu par les 32 marques extérieures de l'homme supérieur?

13-10
Non, répondit Subhūti, il ne doit pas être manifesté par cela.

13-11

Parce que, Bienheureux, ces 32 marques énoncées par le Tathāgata ont été déclarées par lui être des non-marques. C'est pourquoi on les appelle les 32 marques du Grand personnage.

13-12

Le bienheureux reprit: En outre, tout homme ou toute femme, Subhūti, qui renoncerait successivement à autant d'existences égoïques qu'il y a de grains de sable dans le Gange, ou qui, abandonnant autant d'âges qu'il y a de grains de sable dans le Gange, abandonnerait autant d'existences égoïques, aurait beaucoup moins de mérite que celui qui prendrait et apprendrait, expliquerait aux autres un quatrain de l'exposé de la loi. L'amas de mérites de ce dernier serait de beaucoup suspérieur; il serait incommensurable, innombrable.

離相寂滅分第十四

14.—DÉTACHÉ DE TOUTE FORME, S'ANÉANTIR DANS LE SILENCE.

14-1

Alors l'āyushman Subhūti, sous la vive impression de cette doctrine, versa des larmes. Puis il les essuya et dit au bienheureux:

14-2

C'est une merveille, Bienheureux, une suprême merveille, que ce cours de la loi enseignée par le Tathāgata, pour le salut des êtres appliqués à la règle parfaite (à la marche en avant), à la règle la plus excellente de toutes.Jamais depuis que j'ai acquis la science sacrée,

14-3

jamais une loi semblable ne m'a été enseignée. Ils seront doués d'une puissance surhumaine supérieure à toute autre, les bodhisattvas qui, ayant entendu ce Sūtra alors qu'on le leur enseignait, ont acquis la vraie connaissance de l'être.

14-4

Et pourquoi? Parce que cette connaissance de l'être est une

non-connaissance de l'être. C'est pourquoi le Tathāgata dit d'elle: "C'est la science de l'être, c'est la science de l'être".

14-5

Ce n'est point une merveille pour moi, Bienheureux, que je conçoive ce contenu de la loi ainsi énoncé et que j'en goûte la beauté.

14-6

Il y aura des êtres, ô Bienheureux, qui arriveront à la voie non encore battue, au dernier temps, au dernier moment, au dernier cinq-centenaire, lorsque la loi dépérira, et qui alors encore soutiendront la loi en toute son étendue, la maintiendront en son entier et la communiqueront aux autres, l'expliqueront en détail, ceux-là obtiendront la puissance magique la plus complète, l'état le plus merveilleux.

14-7

Après cela, ô Bienheureux, il n'y aura plus pour eux ni conscience de l'égoïte, ni conscience de l'être, de la vie ou de la personnalité, il n'y aura plus pour eux ni science ni absence de science.

14-8

Et pourquoi? Parce que cette connaissance de l'égoïté est une non-connaissancè. Celle de la vie, de l'existence, de la personnalité, l'est également.

14-9

Comment cela? C'est que les bouddhas bienheureux sont débarrassés de toute connaissance.

14-10

A ces mots, le bienheureux dit à Subhūti: Il en est ainsi, Subhūti, il en est ainsi. Ils seront dans un état merveilleux, supérieur, ceux qui, en entendant dire ce Sūtra, ne seront point saisis de crainte, ne seront pas transis d'effroi, ne tomberont pas dans un accès de frayeur. Pourquoi cela? Parce que c'est la parfaite pāramitā, Subhūti, la parfaite arrivée au terme, déclarée par le Tathāgata, celle-là qui est une non-pāramitā. Celle-là, ô Subhūti, que le Tathāgata dit être la pāramitā suprême, les bouddhas bienheureux la déclarent indéfinie (infranchissable et comme inaccessible). C'est pourquoi elle s'appelle la pāramitā suprême.

14-11

En outre, Subhūti, la Kṣāntipāramītā (perfection de la patience) du Tathāgata est aussi une non-pāramitā.

14-12

Comment cela? Si même, Subhūti, le roi Kalinga me coupait en morceaux les membres, les articulations et les chairs, alors même je n'aurais conscience ni de mon égoïté, ni de l'existence, ni de la vie, ni de la personnalité, ni aucune connaissance ni non-connaissance.

14-13

Comment cela? C'est que si, en cette circonstance, j'avais conscience de mon égoïté, j'aurais en même temps celle de ma perversion. Si j'avais connaissance de mon existence, de ma vie, de ma personnalité, j'aurais en même temps celle de ma perversion.

14-14

Et pourquoi? Je sais très bien, Subhūti, que dans les âges écoulés, il y a de cela 500 générations, j'ai été le Richi Kṣāntivādin. Et alors je n'avais conscience ni de l'égoïté, ni de l'existence, ni de la vie, ni de la personnalité. C'est pourquoi, Subhūti, le bodhisattva mahāsattva doit, en rejetant toute connaissance particulière, appliquer son intelligence à la complète illumination (samyaksambodhi) supérieure à tout. Il ne doit point concevoir de pensée attachée à la forme extérieure, qui y ait sa base; il ne doit point non plus en concevoir qui soit appuyée sur les sons, l'odeur, le goût, le tact, ni même sur la loi ou la non-loi, ni sur quoi que ce soit.

14-15

Pourquoi cela? Parce que ce qui est déterminé en un point est également indéterminé. C'est pourquoi le Tathāgata dit que le bon don est fait par le bodhisattva qui n'est appuyé sur rien et nullement par celui qui s'appuie sur le son, l'odeur, le goût, le tact ou la loi.

14-16

En outre, Subhūti, le bodhisattva doit renoncer à tout don de cette nature, pour le bien de tous les êtres. Et pourquoi? Parce que la connaissance de l'être est elle-même une non-connaissance. Tous les êtres ainsi désignés par le Tathāgata sont aussi des non-êtres.

14-17

Comment cela? C'est que le Tathāgata dit ce qui est, il dit la vérité, il dit les choses comme elles sont et non autrement, le Tathāgata; il ne dit rien de faux, le Tathāgata.

14-18

En outre, Subhūti, la loi parfaitement comprise et enseignée par le Tathāgata, qui s'en est pénétré l'esprit, n'est ni vérité ni erreur.

14-19

De même, ô Subhūti, qu'un homme enfoncé dans les ténèbresne sait rien voir, ainsi doit être considéré le bodhisattva qui, tombé dans le monde des corps, renonce à tout don; ou bien, comme un homme, jouissant de la vue, qui, à la première clarté qui éclaire la nuit, au lever du soleil, voit des formes de différentes espèces, ainsi est le bodhisattva qui, n'étant point enfoncé en monde corporel, renonce à tout don.

14-20

Bien plus, Subhūti, les hommes ou les femmes distingués qui

reçoivent, prennent (udgrahīsh) la loi en son étendue, la soutiennent (dhāray), la rendent complète (ācay) et cherchent (paryavāp) à la posséder et l'expliquent aux autres entièrement, ceux-là, Subhūti, sont vus du Tathāgata, de l'œil de son intelligence éclairée; ils sont connus du Tathāgata par sa science d'illumination, ils sont éclairés par le Tathāgata. Tous ces êtres produiront un amas de mérites incommensurable, innombrable et l'acquerront pour eux.

持經功德分第十五

15.—COMMENT GARDER LES SŪTRAS. MÉRITE DE QUI LE FAIT.

15-1

En outre, si une femme ou un homme renonçcit le matin à autant d'existences égoïtiques qu'il y a de grains de sable dans le Gange, s'il en faisait autant à midi, puis le soir, s'il renonçait aussi en ce même cours de temps aux existences personnelles, pendant des Kalpas innombrables, des millions, des milliards, et si un autre, ayant entendu cet exposé de la loi, ne la rejetait pas, ce dernier acquerrait un amas de mérites très considérable, un amas incommensurable, innombrable. Combien plus encore celui qui, l'écrivant, la recueille, qui la maintient, la consolide, la fait sienne et l'enseigne aux autres complètement!

15-2

En outre, ô Subhūti, il est inimaginable, incomparable cet ordre régulier de la loi. Il a été énoncé par le Tathāgata, pour le bien des êtres qui sont établis dans la voie la meilleure, dans la voie parfaite. Ceux qui l'accepteront le maintiendront, le consolideront, le feront leur et l'enseigneront aux autres complètement, en détail, sont connus du Tathāgata,

ô Subhūti, par sa science illuminée de Bouddha; ils sont vus par son œil de Bouddha, ils sont illuminés par le Tathāgata. Tous ces êtres seront doués d'une foule de mérites incommensurables, d'une masse de mérites inimaginable, incomparable, incommensurable.

15-3

Tous, ô Subhūti, posséderont, en quantité égale, une intelligence illuminée; ils l'accumuleront en eux, ils la feront leur tout entière. Pourquoi cela? Parce que cet ordre de la loi ne peut être entendu d'aucun de ceux qui sont dépourvus d'attrait pour elle, ou qui arrêtent leur vue sur l'égoïté, l'existence, la vie ou la personnalité (apparentes). Il ne peut être entendu davantage de quiconque applique sa connaissance à l'être dépourvu de science éclairée; celui-ci ne peut ni l'entendre, ni y adhérer, ni le maintenir, ni le consolider en soi, ni le faire sien. Ce n'est pas un point d'appui sénsible (pour l'esprit) [sthānam].

15-4

En outre, ô Subhūti, l'endroit de la terre où ce Sūtra sera expliqué deviendra un objet de louange; il sera digne de respect pour le monde des Dévas, des hommes et des Asuras; il sera digne d'honneur, cet endroit de la terre; il deviendra comme un lieu sacré.

能淨業障分第十六

16.—QUE L'ON PEUT PURIFIER LES FAUTES.

16-1

Deplus, Subhūti, les hommes et femmes distingués qui recueilleront, maintiendront, accumuleront ou feront leurs des Sūtras de ce genre, se les imprimeront au fond de l'esprit et les expliqueront complètement aux autres, seront abaissés (?), très abaissés (de condition).

16-2

Et pourquoi? Parce que les mauvaises actions commises par ces êtres dans les existences antérieures doivent être expiées, disparaître pour eux, et que, par cet abaissement, ces mauvaises actions sont arrêtées en leurs effets, anéanties; et ces êtres pourront acquérir la connaissance illuminative.

16-3

Je connais, ô Subhūti, les témoignages d'amitié, la joie que dans la voie du temps écoulé, dans des Kalpas innombrables et plus encore, antérieurs au Tathāgata, à l'arhat complètement illuminé, Dīpaṅkara, j'ai donné 400 fois aux millions et milliards de bouddhas sans leur causer aucune impression désagréable.

16-4

Et parce que ces bouddhas ont été traités par moi de cette manière et parce qu'au dernier âge, au dernier moment, au dernier cinq-centenaire, alors que l'extinction de la loi sera en cours, ils adhéreront à ces Sūtras, ils les soutiendront, ils les accumuleront, ils les feront leurs, ils les feront connaître complètement aux autres, conséquemment en comparaison de cet amas de mérites, ô Subhūti, le précédent ne l'atteint, ne l'égale pas de la centième partie, ni de la millième, ni de la cent-millième, ni de la millionième (Kāli 10 millions), ni de la cent-millionième, ni de la milliardième, ni de millions de milliards près. Et cette infériorité ne pourrait atteindre pour s'exprimer, la dernière, la plus infime fraction, l'expression du nombre, de la partie, de la supputation, du calcul, de la comparaison tant soit peu approchant, de toute relation de comparaison.

16-5

Si après cela, Subhūti, si je voulais exprimer le mérite de ces hommes et de ces femmes distiongués et dire combien, en cette circonstance, ils produiront de mérites, combien ils en recueilleront, les êtres en gagneraient la folie, ils en arriveraient à la démence.

16-6

De plus, ô Subhūti, cette loi en tout son développement est déclarée par le Tathāgata inimaginable, incomparable, et ses fruits, mûris en leur incompréhensibilité, doivent être l'objet de tous les désirs.

究竟無我分第十七

17.—QUE L'ON DOIT ÉTRE JUSQU'AU BOUT SANS ÉGOÏTÉ.

17-1

Alors le vénérable Subhūti dit au Tathāgata: Comment celui qui s'est appliqué à la vraie doctrine de la Bodhi doit-il se maintenir? Comment doit-il la pratiquer? comment doit-il en concevoir la notion?

17-2

Le bienheureux dit: Voici, Subhūti, comment celui qui s'est appliqué à la vraie doctrine de la Bodhi doit en former en soi la conception (sa pensée).

17-3

Tous les êtres, sans exception, doivent être jetés par moi dans le monde du Nirvāṇa, et en les lançant ainsi, il est vrai, toutefois, qu'aucun n'y est jeté.

17-4

Comment cela? C'est que, Subhūti, si la connaissance de l'être se produisait pour le bodhisattva (s'il croyait à l'existence réelle), il ne devrait plus être appelé de ce nom.

Lorsque la connaissance de la vie, de la personnalité prévaut ainsi, il ne peut pas non plus être quàlifié de bodhisattva.

17-5

Car la doctrine qui s'appuie sur la règle pratique de bodhisattva est une non-doctrine.

17-6

Qu'en penses-tu, Subhūti? Crois-tu qu'il y a une doctrine par laquelle le Tathāgata aurait reçu du Tathāgata Dīpaṅkara la science parfaite, l'illumination complète supérieure à tous, que le Tathāgata aurait fait briller à ses yeux?

17-7

Subhūti répondit: Pour autant que je comprenne la pensée, le sens du bienheureux en ses discours, il n'y pas de doctrine au moyen de la quelle il ait été parfaitement éclairé de l'illumination complète par le Tathāgata Dīpaṅkara, complètement illuminé.

17-8

Le bienheureux reprit à ces mots: C'est ainsi, Subhūti, c'est ainsi. Il n'y a point de doctrine qui ait produit cet effet.

17-9

S'il en était une, le Tathāgata Dīpaṅkara n'aurait pas prédit de moi: "Tu seras le Tathāgata Śākyamūni, qui marcheras par la voie où l'homme n'a jamais mis le pied, l'arhat com-

plètement illuminé."

17-10

C'est parce qu'il n'y avait point de doctrine de loi annoncée par le Tathāgata, arhat, Dīpaṅkara, complètement illuminé, qui ait appris la doctrine d'illumination complète, c'est pour cela que j'ai été prédit par le Tathāgata Dīpaṅkara disant: "Tu seras le Tathāgata Śākyamūni, arhat complètement illumineé, qui marcheras par la voie qu'aucun homme n'a fréquentée."

17-11

Car, Subhūti, le titre de Tathāgata est un qualificatif formé pour exprimer la nature de l'être, Tathāgata est un qualificatif répondant à la condition de ce qui ne s'est pas encore produit; c'est une dénomination de l'exclusion de la production, de l'existence; c'est celle de la plus perpétuelle et complète non-production. Pourquoi en est-il ainsi? C'est que, Subhūti, cette non-production, non-existence, est la chose essentielle.

17-12

Si quelqu'un disait: La connaissance illuminative complète, supérieure à toute, a été reçue par le Tathāgata, arhat illuminé, celui-là s'exprimerait d'une manière erronée, il me qualifierait d'un terme contraire à la vérité.

17-13
Et pourquoi? Parce qu'il n'y a point de doctrine qui ait été apprise par le Tathāgata en illumination parfaite.

17-14
Tout doctrine reconnue, enseignée par le Tathāgata n'est ni vérité ni erreur. C'est pourquoi le Tathāgata dit: Toutes les doctrines sont doctrines de Bouddha.

17-15
Comment cela? C'est que toutes les doctrines sont des non-doctrines, déclarées telles par le Tathāgata. C'est pourquoi il est dit: Toutes les doctrines sont doctrines de Bouddha.

17-16
C'est comme quand on dit d'un homme qui a acquis tout son corps, c'est un grand corps.

17-17
Là-dessus Subhūti remarqua: Cet homme dont vous parlez, Tathāgata, au corps formé, au grand corps, a été déclaré par le Tathāgata n'avoir point de corps. C'est pourquoi on peut dire: Corps formé, grand corps.

17-18
Le bienheureux dit: C'est ainsi, Subhūti. Le bodhisattva qui dirait: Je répandrai les êtres çà et là ne serait pass un vrai bodhisattva. Et pourquoi? Est-il une condition, une loi

d'existence qui soit le bodhisattva?

17-19
Subhūti répondit: Non, il n'y en a point.

17-20
Le bienheureux reprit: Ce qu' on appelle êtres sont des non-êtres, Subhūti! a dit le Tathāgata; c'est pourquoi ils sont appelés êtres. C'est pourquoi le Tathāgata dit: Toutes les conditions d'existence sont sans égoïté, sans vie, sans croissance, sans personnalité.

17-21
Le bodhisattva qui dirait, ô Subhūti!: "Je développerai l'extension du monde", parlerait d'une manière erronée. Parce que ce qu'on appelle le développement du monde est un non-développement, déclaré tel par le Tathāgata. C'est pourquoi on l'appelle développement.

17-22
Et le bodhisattva disposé à croire que toutes les conditions d'existence sont sans égoïté, celui-là est reconnu un vrai bodhisattva par le Tathāgata, arhat complètement illuminé.

一體同觀分第十八

18.—ENVISAGER TOUT COMME UN SEUL CORPS.

18-1
Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata a-t-il des yeux de chair?

18-2
Subhūti répondit: Oui, il en est ainsi. Le Tathāgata a des yeux de chair.

18-3
Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata a-t-il des yeux célestes, divins?

18-4
Il en est ainsi, répondit Subhūti.

18-5
Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata a-t-il les yeux de la science?

18-6
Oui, il a les yeux de la science, répondit Subhūti.

18-7

Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata a-t-il les yeux, la vue de la loi?

18-8

Oui, il les a, dit Subhūti.

18-9

Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata a-t-il aussi les yeux d'un Bouddha?

18-10

Oui, il les a aussi, répondit Subhūti.

18-11

(缺)

18-12

(缺)

18-13

Que penses-tu, Subhūti, s'il y avait autant de Ganges qu'il y a de grains de sable dans le Grand Fleuve de ce nom et que les grains de sable de ces Ganges seraient autant de mondes, y seraient-ils en grand nombre?

18-14

Subhūti dit: Certainement, Bienheureux, certainement, Sugata!

Ces mondes seraient très nombreux.

18-15

Le bienheureux continua: Eh bien, Subhūti, de tous les êtres, tout autant qu'il y en aurait dans ces mondes, je connaîtrais les natures différentes et les intelligences, le pensées.

18-16

Et comment? C'est que ceux qui sont dits portant en eux la pensée, les porte-pensées, comme on les appelle, ont été déclarés par le Tathāgata ne point la porter vraiment. C'est pourquoi on les appelle doués, porteurs d'intelligence, de pensée.

18-17

Et pourquoi cela ? C'est que la pensée passée ne se possède plus; la pensée future ne se possède pas; la pensée à la quelle on est appliqué, on ne peut la saisir, la garder.

法界通化分第十九

19.—CHANGEMENTS COMPLETS DANS LE MONDE DE LA LOI.

19-1

Qu'en penses-tu, Subhūti? Si un homme ou une femme vertueux et distingué faisait en sorte que ce monde du trimillénaire, du grand millénaire, fût rempli des sept joyaux et en ferait don aux Tathāgata, arhats complètement illuminés, est-ce que cet homme ou cette femme produirait par là une grande masse de mérites?

19-2

Subhūti répondit: Certainement, Sugata, certainemnt, Bienheureux, ils seraient très nombreux.

19-3

Le bienheureux reprit: Oui, Subhūti, il en est ainsi; ils produiraient une masse de mérites incommensurable, innombrable.

19-4

Comment cela? C'est que cette masse de mérites a été déclarée par le Tathāgata être une non-masse. C'est pourquoi

elle est appelée “masse de mérites”.

19-5

D’alleurs, si c’était une masse de mérites, le Tathāgata ne l’aurait pas appelée de ce nom, n’aurait pas dit: c’est une masse de mérites.

離色離相分第二十

20.—ABSENCE DE FORMES, D'ATTRIBUTS SENSIBLES.

20-1

Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata paraîtra-t-il sous une forme corporelle?

20-2

Subhūti répondit: Ce n'est point ainsi, Bienheurux! le Tathāgata ne doit pas être reconnu par la forme corporelle qu'il acquerra.

20-3

Car ce qu'on appelle revêtement de la forme corporelle n'en est point un d'après ce qu'a déclaré le Tathāgata, ô Bienheureux! C'est pourquoi on l'appelle revêtement, obtention de la forme corporelle.

20-4

Le bienheureux dit: Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata sera-t-il reconnu par la réunion en lui des marques extérieures propres?

20-5

Subhūti répondit: Non, Bienheureux, non, le Tathāgata ne sera pas reconnu par ces signes.

20-6

Car ce que le Tathāgata appelé une acquisition, une réunion des marques extérieures, il l'a appelée une non-acquisition de ces marques. C'est pourquoi on l'appelle acquisition des marques réunies.

非說所說分第二十一

21.—CE QU'ON DIT N'EST POINT DIT.

21-1

Le bienheureux dit: Qu'en penses-tu, Subhūti? Appartient-il au Tathāgata de dire: La loi a été révélée par moi?

21-2

Subhūti répondit: Non, Bienheureux, cela ne lui appartient pas.

21-3

Le bienheureux continua: Celui qui dirait que la loi a été révélée par le Tathāgata commettrait une erreur. Il me concevrait d'une manière contraire à la vérité.

21-4

Pourquoi? On parle bien d'une révélation, d'un enseignement de la loi; mais il n'y a point de loi qui soit reçue comme une révélation de loi.

21-5

Quand il eut ainsi parlé, le fortuné Subhūti lui dit: Il arrivera, Bienheureux, qu'au dernier âge, au dernier temps, au dernier

cinq-centenaire, lorsque l'extinction de la loi prévaudra, il y aura des êtres qui, entendant ces doctrines, y ajouteront foi.

21-6

Le bienheureux répondit: Ces êtres ne seront ni êtres ni non-êtres.

21-7

Comment cela ? Ce qu'on appelle êtres, êtres, a été déclaré non-êtres par le Tathāgata. C'est pourquoi ils ont été appelés êtres.

無法可得分第二十二

22.—IL N'Y A POINT DE LOI QU' ON PUISSE ACQUÉRIR.

22-1

Qu'en penses-tu, Subhūti? Y a-t-il une loi reconnue par le Tathāgata comme l'illumination complète, supérieure à tout?

22-2

Subhūti répondit: Non, Bienheureux, il n'y a pas une loi reconnue telle par le Tathāgata.

22-3

Le bienheureux repartit: C'est ainsi, Subhūti, c'est ainsi. Il n'y a pas la moindre loi qui soit ainsi connue, qui soit ainsi reçue. C'est pourquoi on l'appelle la parfaite et dernière illumination de l'esprit.

淨心行善分第二十三

23.—FAIRE LE BIEN AVEC UN COEUR PUR.

23-1

Cette loi est uniforme et sans dissemblance. C'est pourquoi elle est dite l'illumination, la connaissance complète, suprême.

23-2

Par l'absence d'égoïté, d'existence, de vie et de personnalité, elle est parfaitement uniforme. Cette connaissance parfaite, suprême, est reconnue par ses principes salutaires.

23-3

Et comment? C'est que ces lois salutaires sont déclarées des non-lois par le Tathāgata. C'est pourquoi elles sont appelées lois salutaires par le Tathāgata.

福智無比分第二十四

24.—BONHEUR ET SAGESSE INCOMPARABLES.

24-1

En outre, si un homme ou une femme accumulait autant d'amas des sept joyaux qu'il y a, dans le monde du trimillénaire, du grand millénaire, de Sumerus rois des montagnes et qu'ils les donneraient aux Tathāgata, arhats complètement illuminés, si, d'un autre côté, un fils ou une fille de famille prenait un quatrain du cours de la loi, de la Prajñāpāramitā et l'enseignait aux autres, les mérites du premier n'atteindraient pas la centième partie de l'amas du second, car celui-ci n'admet aucune comparaison.

化無所化分第二十五

25.—TRANSFORMATION SANS OBJET TRANSFORMABLE.

25-1

Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata peut-il dire: Les êtres sont délivrés par moi?

25-2

(Si tu l'as pensé), on ne doit plus désormais considérer la chose de cette manière. Il n'y a pas d'être qui ait été délivré par le Tathāgata.

25-3

S'il y en avait jamais, Subhūti, alors le Tathāgata reprendrait l'égoïté, la vie, l'existence, la personnalité.

25-4

Or la prise de l'égoïté a été déclarée par le Tathāgata être une non-prise. Elle est admise seulement par les gens inintelligents et vulgaires.

25-5

Et ces gens ne sont pas des gens, a dit le Tathāgata. C'est pourquoi ils sont dits inintelligents, enfants et vulgaires.

法身非相分第二十六

26.—LE DHARMAKĀYAS EST SANS FORME SENSIBLE.

26-1

Qu'en penses-tu, Subhūti? Le Tathāgata doit-il être reconnu par les marques extérieures propres?

26-2

Non, répondit Subhūti, cela n'est point. Si j'ai bien compris le sens des paroles du bienheureux, le Tathāgata ne doit-t-il pas être reconnu par la réunion en lui des marques propres de beauté?

26-3

Bien, bien; c'est ainsi, c'est ainsi, répondit le bienheureux, c'est comme tu le dis.

26-4

Et pourquoi? Si jamais, Subhūti, le Tathāgata était reconnu par des marques extérieures, alors le souverain au pouvoir suprême serait aussi un Tathāgata. C'est pourquoi ce n'est point par des marques extérieures que le Tathāgata devra être reconnu.

26-5

Subhūti, à la longue vie, dit alors au bienheurux: Pour autant que je saisis le sens des paroles du bienheureux, le Tathāgata ne doit pas être reconnu par les marques spéciales.

26-6

C'est ainsi que le Bienheureux disait en cette phrase, en cette strophe:

Ceux qui me voient par la forme,
ceux qui m'atteignent par le son
Suivent une fausse appréciation des choses,
ces gens-là ne me verront point.

Le Bouddha doit être reconnu par sa loi,
car les chefs sont l'incarnation de la loi.
Mais l'essence selon la loi ne peut être connue,
elle n'est point de nature à être distinguée et connue.

無斷無滅分第二十七

27.—POINT DE SUPPRESSION NI DE DISTINCTION.

27-1

Que penses-tu, Subhūti? Crois-tu que l'illumination parfaite sera donnée par le Bouddha par la réunion en lui des marques spéciales?

27-2

Si tu le penses, ne considère plus désormais la chose de cette façon. Et pourquoi? Parce que cela n'est point, et que personne ne te dise plus jamais rien de semblable, ô Subhūti.

27-3

Ce serait de la part de ceux qui sont engagés dans la voie des bodhisattvas une véritable destruction de toute loi, l'extirpation de la vraie doctrine.

27-4

Ne considère plus jamais la chose ainsi, car ce serait la mort de toute loi, la destruction de la vraie doctrine, causée par ceux qui sont engagés dans la voie, la règle des bodhisattvas.

不受不貪分第二十八

28.—（缺）

28-1

En outre, si un fils ou une fille de famille remplissait des sept joyaux autant de mondes xz1qu'il y a de grains de sable dans le Gange, le grand fleuve, et les donnait en don aux Tathāgatas, arhats illuminés, et si, d'autre part, un bodhisattva mettait toute son attente, ses désirs dans la condition des êtres sans égoïté, affranchis des renaissances, celui-ci produirat une masse de mérites de beaucoup supérieure, incommensurable, innombrable, et ce bodhisattva n'aurait plus besoin désormais d'acquérir des mérites.

28-2

Subhūti dit: Ainsi il ne doit plus chercher à acquérir des mérites de tous côtés.

28-3

Le bienheureux répondit: Ce que l'on cherche à acquérir ainsi ne doit pas être acquis, tenu; c'est pourquoi on dit qu'il faut chercher à l'acquérir de toutes manières.

威儀寂靜分第二十九

29.—DIGNITÉ MAJESTUEUSE ET TRANQUILLE.

29-1

En outre, celui qui dirait encore: Le Tathāgata va ou arrive, est debout ou assis, ou prépare sa couche, dort, celui-là ne comprend pas ce que je dis.

29-2

Parce que celui qui est dit Tathāgata ne va nulle part, ne vient de nulle part; c'est pour cela qu'il est appelé le Tathāgata, arhat complètement illuminé.

一合離相分第三十

30.—FORME ET PRINCIPE HOMOGE'NES.

30-1

En outre, si un fils ou une fille de famille broyait en atomes la matière d'autant de monde qu'il y a de poussières dans le monde du trimillénaire, du grand millénaire et avec une force incalculable en faisait un immense amas d'atomes, penses-tu que cet amas d'atomes serait considérable?

30-2

Certainement, Bienheureux; il en serait ainsi, Sugata! Ce dernier amas d'atomes serait immense. Et pourquoi? Parce que si cet amas d'atomes était immense, le Tathāgata n'aurait pas dit: C'est un immense amas d'atomes.

30-3

Et comment cela? C'est que cet énorme amas d'atomes a été déclaré par le Tathāgata un non-amas et c'est pourquoi il est appelé un amas d'atomes.

30-4

Et ce monde du trimillénaire, grand millénaire, appelé ainsi par le Tathāgata, a été déclaré par lui être un non-monde.

C'est pourquoi on l'appelle monde du trimillénaire, grand maillénaire.

30-5

Pourquoi cela? Parce que, Bienheureux, si c'était une région du monde, alors on devrait aussi y chercher et prendre sa nourriture, et cette prise de nourriture a été déclarée une non-prise, un non-recevoir, par le Tathāgata. C'est pourquoi il est appelé "qui reçoit, prend son pain".

30-6

Le bienheureux dit: Recevoir ainsi son pain n'est point une chose à faire, un rapport à avoir. C'est une chose sans nom, ce n'est ni bien ni pas bien; cela n'appartient, n'est à faire que par les gens inintelligents et grossiers.

知見不生分第三十一

31.—NE POINT CHERCHER À SAVOIR ET VOIR.

31-1

Comment cela? Celui qui dirat: Le Tathāgata a parlé de la vue de l'individualité, de la vue de l'existence, de la vie, de la personnalité, celui-là parlerait-il avec vérité et justesse?

31-2

Subhūti répondit: Non, Bienheureux, non, Sugata! celui-là ne parlerait pas justement. Pourquoi? Parce que, Bienheureux, la vue de l'individualité dont parle le Tathāgata a été déclarée par lui une non-vue. C'est pourquoi on l'appelle "vue de l'individualité".

31-3

Le bienheureux dit: Ainsi, ô Subhūti, l'homme engagé dans la voie, appliqué à la doctrine des bodhisattvas, doit connaître toutes les natures, les considérer, exciter son affection vers elles,

31-4

et il doit le faire de façon qu'il ne fasse fond ni sur la connaissance des lois, des essences, ni sur non-connaissance.

Pourquoi cela? Parce que la connaissance des essences a été déclarée par le Tathāgata une non-connaissance. C'est pourquoi elle est appelée " connaissance de l'essence des lois".

應化非眞分第三十二

32.—LES TRANSFORMATIONS NE SONT POINT RÉELLES.

32-1

Enfin, si un bodhisattva comblait des sept joyaux des mondes incommensurables, innombrables et les donnait ainsi en don aux Tathāgatas, arhats complètement illuminés, et si, d'autre part, un fils ou une fille de famille, prenant un quatrain de la Prajñāpāramitā, le gardait en sa pensée, le faisait connaître, le comprenait entièrement, l'expliquait aux autres complètement, ce dernier acquerrait des mérites bien plus que le premier, ils seraient incommensurables, innombrables.

32-2

Et comment l'expliquerait-on?

Comme je le comprends.
Entièrement comme les étoiles et les ténèbres,
comme une lampe, un fantôme, un grain de givre,
une bulle d'eau, un songe, une lueur d'éclair.

Qu'on l'explique ainsi, car c'est ainsi qu'on dit qu'on doit l'expliquer.

32-3

Ainsi parla le bienheureux transporté, hors de lui. Et Subhūti le vénérable et les bhixus et les disciples des deux sexes et les bodhisattvas, ainsi que les dévas, les hommes, les asuras, les gandharvas, applaudirent aux paroles du bienheureux.

32-4

Ainsi est achevée la noble Vajracchedikā, la vénérable et fortunée Prajñāpāramitā.

Vajracchedikā Prajñāpāramitā

Max Walleser 譯

1914

Verehrung der erhabenen edelen Vollkommenheit de Erkenntnis!

法會因由分第一

1-1

So hörte ich. Einst verweilte der Erhabene zu Śrāvastī, im Jetahaine, in dem Parke des Anāthapiṇḍada, zusammen mit einer großen Schar von Mönchen, mit 1250 Mönchen, und gar vielen Bodhisattvas Mahāsattvas.

1-2

Da ging denn der Erhabene zur Zeit des Vormittags, nachdem er sein Untergewand angelegt und die Schale und das Obergewand genommen, nach Śrāvastī, der großen Stadt, um zu betteln.

1-3

Nachdem nun der Erhabene nach Śrāvastī, der großen Stadt, betteln gegangen war und gegessen hatte, und dann nach dem Verzehren der Bettelspeise zurückgekehrt war, legte er Schale und Obergewand beiseite, wusch sich die Füße und

setzte sich nieder auf den ihm angewiesenen Sitz, mit untergeschlagenen Beinen, den Körper aufrecht haltend und sein Denken auf sich selbst richtend.

1-4

Da schritten denn gar viele Bettelmönche dahin, wo der Erhabene war; nachdem sie hinzugeschritten, verehrten sie seine beiden Füße mit ihren Häuptern, und nachdem sie den Erhabenen dreimal nach rechts umwandelt, setzten sie sich auf einer Seite nieder.

善現起請分第二

2-1
Zu jener Zeit denn gesellte sich der ehrwürdige Subhūti zu jener Versammlung und setzte sich nieder.

2-2
Da erhob sich der ehrwürdige Subhūti von seinem Sitze, legte das Obergewand über die eine Schulter, stellte die rechte Kniescheibe auf die Erde, senkte seine gefalteten Hände nach dem Erhabenen und sprach zu dem Erhabenen:

2-3
"Wunderbar, Erhabener, höchst wunderbar, Wohlgegangener (sugata), ist es, wie durch den Sogegangenen (tathāgata), den Würdigen (arhant), vollkommen Erleuchteten die Bodhisattvas Mahāsattvas umfaßt werden, durch höchsten Beistand unterstützt werden!

2-4
Wunderbar, Erhaber, wie sie durch den Vollendeten, den Würdigen, vollkommen Erleuchteten durch höchsten Schirm beschützt werden.

2-5
Wie soll daher, Erhabener, ein edler Sohn oder eine edle

Tochter, nachdem er das Fahrzeug der Bodhisattvas bestiegen, sich verhalten? wie soll er hingelangen? wie soll er seine Gedanken richten?“

2-6

Nach diesen Worten sprach der Erhabene zu dem ehrwürdigen Subhūti also: ”Gut, gut! Subhūti! so ist es, Subhūti, so ist es, wie du sprichst. Unterstützt durch den Tathāgata sind die Bodhisattvas Mahāsattvas durch höchsten Beistand, umschirmt von dem Tathāgata sind die Bodhisattvas Mahāsattvas durch höchsten Schirm.

2-7

Deshalb denn, Subhūti, höre wohl und gut und beherzige es! Ich werde dir sagen, wie ein auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas Befindlicher sich verhalten soll, wie er hingelangen, wie er die Gedanken lenken soll.“

2-8

”So sei es, Erhabener“, erwiderte der ehrwürdige Subhūti dem Erhabenen.

大乘正宗分第三

3-1

Der Erhabene sprach zu ihm also: "Wer immer hier, Subhūti, sich auf das Fahrzeug der Bodhisattvas gestellt hat, soll diesen Gedanken erwecken: "Soviele Lebewesen in dem Elemente (dhātu) der Lebewesen durch den Begriff "Lebewesen" zusammengefaßt werden, eientstandene, oder mutterleibentstandene, oder schleimentstandene, oder durch wunderbaren Zufall entstandene, gestaltete oder nichtgestaltete, mit Namen oder ohne Namen oder weder mit noch ohne Namen, welche Welt von Lebewesen immer erkannt wird, die alle sind durch mich im restlosen Nirvāṇa-Element zum Erlöschen zu bringen.

3-2

Und so, nachdem auch unermeßliche Lebewesen zum völligen Erlöschen gebracht sind, ist nicht irgendwelches Lebewesen zum völligen Erlöschen gebracht.

3-3

Aus welchem Grunde? Wenn, Subhūti, bei einem Bodhisattva der Begriff von Lebewesen wirksam ist, so ist er nicht als "Bodhisattva" zu bezeichnen.

3-4

Aus welchem Grunde? Nicht ist, Subhūti, als Bodhisattva zu bezeichnen, bei wem der Begriff von Lebewesen wirksam ist, oder der Begriff von Lebenden oder der Begriff von Person (pudgala) wirksam ist.

妙行無住分第四

4-1

"Auch soll nicht, Subhūti, ein in der Realität befangener Bodhisattva Gabe spenden, nicht soll ein irgendwo befangener Gabe spenden, nicht soll ein in der Erscheinung befangener Gabe spenden, nicht soll ein in Ton, Geruch, Geschmack, Tastbarem, den gedanklichen Objekten (dharma) befangener Gabe spenden.

4-2

So eben, Subhūti, soll ein Bodhisattva Mahāsattva Gabe spenden, daß auch er nicht im Begriff des Zeichens steht.

4-3

"Wer, o Subhūti, sich nicht (auf die Realität) stützend, Gabe spendet, dessen Menge von Verdiensten ist nicht leicht zu ermessen.

4-4

Wie meinst du, Subhūti, ist es leicht, in östlicher Richtung des Weltraums Ausdehnung zu erfassen?"

4-5

Subhūti erwiderte: "Nein, Erhabener!"

4-6

Der Erhabene sprach: "So in südlicher, westlicher, nördlicher Richtung, nach unten, nach oben, nach allen Richtungen und Zwischenrichtungen, in den zehn Richtungen ringsherum: ist es da leicht, des Weltraums Ausdehnung zu erfassen?"

4-7

Subhūti erwiderte: "Nein, Erhabener!"

4-8

Der Erhabene sprach: "So eben, Subhūti, ist der Vorrat von Verdiensten eines Bodhisattva, der, ohne sich (auf die Wirklichkeit) zu stützen, Gabe spendet, nicht leicht zu ermessen.

4-9

So soll denn, Subhūti, ein auf das Fahrzeug der Bodhisattva Gestellter Gabe spenden, daß er sich auch nicht auf den Begriff von äußerer Wirklichkeit stützt.

如理實見分第五

5-1

"Wie meinst du, Subhūti, ist ein Sogegangener in der Vollkommenheit der Merkmale zu erblicken?"

5-2

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht ist der Sogegangene durch die Vollkommenheit der Merkmale zu erblicken. Aus welchem Grunde? Die Vollkommenheit der Merkmale, welche durch den Sogegangenen verkündet ist, ist eben Vollkommenheit der Nicht-Merkmale."

5-3

Nach diesen Worten sprach der Erhabene zu dem ehrwürdigen Subhūti also: "Solange, Subhūti, Vollkommenheit der Merkmale besteht, solange ist Irrtum; wenn Nicht-Merkmal vollkommenheit besteht, ist kein Irrtum. So ist durch Merkmallosigkeit der Merkmale der Sogegangene zu erblicken."

正信希有分第六

6-1

Nach diesen Worten sprach der ehrwürdige Subhūti zum Erhabenen also: "Werden etwa, Erhabener, in künftiger Zeit Wesen sein, in dem letzten Zeitraum, in den letzten fünfhundert Jahren, zur Zeit des Verfalles der guten Lehre, welche, wenn diese dergestaltige Sūtrasätze vorgetragen werden, einen richtigen Begriff erzeugen werden?"

6-2

Der Erhabene erwiderte: "Sprich nicht so, Subhūti! Wohl werden in zukünftiger Zeit einige Lebewesen sein, in dem letzten Zeitraum, in den letzten fünfhundert Jahren, zur Zeit des Verfalles der guten Lehre, welche, wenn diese dergestaltigen Sūtrasätze vorgetragen werden, einen richtigen Begriff erzeugen werden.

6-3

Ferner, Subhūti, werden in zukünftiger Zeit Bodhisattvas Mahāsattvas sein, in der letzten Zeit, im letzten Zeitabschnitt, in den letzten fünfhundert Jahren, zur Zeit des Verfalles der guten Lehre, befähigte, tugendhafte, erkenntnisbegabte, welche, wenn diese dergestaltete Sūtrasätze vorgetragen werden, einen richtigen Begriff erzeugen werden.

6-4

Nicht fürwahr, Subhūti, werden jene Bodhisattvas Mahāsattvas nur einen Buddha bedient haben und nicht nur unter einem Buddha Verdienst angesammelt haben, vielmehr werden sie, Subhūti, viele Hunderttausende von Buddhas bedient und unter vielen Hunderttausenden von Buddhas Verdienst angesammelt haben, die Bodhisattvas Mahāsattvas, welche, wenn diese dergestaltete Sūtrasätze vorgetragen werden, in einem Gedanken Beruhigung finden werden.

6-5

Erkannt, o Subhūti, von dem Sogegangenen (tathāgata) durch Buddhaerkennen, geschaut, o Subhūti, von dem Sogegangenen durch Buddhaauge, gekannt sind sie durch den Sogegangenen (tathāgata).

6-6

Sie alle werden, o Subhūti, unermeßlichen, unzähligen Verdienstesvorrat erzeugen und erlangen.

6-7

Aus welchem Grunde? Nicht nämlich, Subhūti, ist bei jenen Bodhisattvas Mahāsattvas der Begriff des Selbstes wirksam, nicht der Begriff des Lebewesens, der Begriff des Lebenden, der Begriff der Person.

6-8

Auch ist nicht, Subhūti, bei jenen Bodhisattvas Mahāsattvas der Begriff der Lehre (dharma) wirksam; so auch nicht der

Begriff der Nicht-Lehre; auch ist bei ihnen nicht der Begriff, nicht der Nicht-Begriff wirksam.

6-9

Aus welchem Grunde? Wenn, o Subhūti, bei jenen Bodhisattvas Mahāsattvas der Begriff des dharma wirksam wäre, so wäre das bei ihnen Ergreifen eines Selbstes, Ergreifen eines Lebewesens, Ergreifen eines Lebenden, Ergreifen einer Person;

6-10

wenn der Begriff des Nicht-dharma wirksam wäre, so wäre dies bei ihnen Ergreifen eines Selbstes, Ergreifen eines Lebewesens, Ergreifen eines Lebenden, Ergreifen einer Person.

6-11

Aus welchem Grunde? Nicht ist, Subhūti, durch einen Bodhisattva Mahāsattva ein dharma zu erfassen, nicht ein Nicht-dharma.

6-12

Deshalb ist durch den Tathāgata der Gemeinde dieses Wort verkündet worden: "Die, welche das Lehren des dharma als einem Floße gleich erkennen, sollen die dharmas (Objekte) schon aufgeben, umsomehr die Nicht-dharmas (Nicht-Objekte)."

無得無說分第七

7-1

Ferner sprach der Erhabene zu dem ehrwürdigen Subhūti dieses: "Wie meinst du, Subhūti? Ist irgendwelcher dharma vorhanden, der durch den Tathāgata als "vollkommene Erleuchtung" erkannt wurde, oder irgendein (anderer) dharma (Zustand), der durch den Tathāgata gezeigt worden ist?"

7-2

Nach solchen Worten erwiderte der ehrwürdige Subhūti dem Erhabenen dieses: "Wie ich, o Erhabener, den Sinn des vom Erhabenen Gesprochenen verstehe, existiert nicht irgendwelcher dharma (Objekt), der durch den Tathāgata als "unübertroffene vollkommene Erleuchtung" erkannt wurde; nicht existiert ein dharma, der von dem Tathāgata gezeigt worden ist.

7-3

Aus welchem Grunde? Der dharma, der durch den Tathāgata als "vollkommen erleuchtet" gezeigt wurde, oder als unerfaßbar, oder als unaussprechbar, der ist nicht dharma (Objekt) und Nicht-dharma.

7-4

Aus welchem Grunde? Durch das Nichtgewirkte (asaṃskṛta) ausgezeichnet sind nämlich die Edlen.“

依法出生分第八

8-1

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti? Irgendwelcher edle Sohn oder edle Tochter, welche dieses dreitausendmalvieltausendfache Weltelement mit den sieben Kostbarkeiten angefüllt hätte und es den Sogegangenen, Würdigen, vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, würde da dieser edle Sohn oder diese edle Tochter einen großen Schatz, einen Verdienstesvorrat sich erzeugen?"

8-2

Subhūti sprach: "Erhabener, jener edle Sohn oder edle Tochter würde einen gar großen Schatz, einen Verdienstesvorrat sich erzeugen.

8-3

Aus welchem Grunde? Was, o Erhabener, als Verdienstesvorrat von dem Sogegangenen verkündet wurde, das ist vom Sogegangenen als Nicht-Vorrat verkündet worden. Deshalb verkündet der Sogegangene: "Verdienstesvorrat, Verdienstesvorrat"."

8-4

Der Erhabene sprach:" Und wenn ferner, Subhūti, ein edler Sohn oder eine edle Tochte dieses dreitausendmalvieltausend-

fache Weltelement mit den sieben Kostbarkeiten anfüllte und es den Sogegangenen, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten als Gabe gäbe, und wenn einer aus dem Lehrbuche hier von dem Ende weg nur eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe und sie anderen ausführlich darlegte, erklärte, der würde einen größeren Verdienstesvorrat als jener erzeugen, einen unermeßlichen, unzähligen.

8-5

Aus welchem Grunde? Von hier aus entstanden nämlich, Subhūti, ist der Sogegangenen, der Würdigen, der vollkommen Erleuchteten unübertroffene vollkommene Erleuchtung, von hier aus entstanden sind die erhabenen Buddhas.

8-6

Aus welchem Grunde? "Buddha-Eigenschaften (dharma), Buddha-Eigenschaften" sind eben, Subhūti, durch den Vollendeten als Nicht-Buddha-Eigenschaften verkündet worden.

一相無相分第九

9-1

"Wie meinst du, Subhūti, denkt ein Śrota-āpanna also: "Durch mich ist die Frucht des Erreichens des Stromes erlangt worden"?"

9-2

Subhūti, erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht denkt ein zum Strome Gelangter: "Durch mich ist die Frucht des Erreichens des Stromes erlangt worden." Aus welchem Grunde? Denn nicht hat er, Erhabener, irgendwelchen Zustand (dharma) erreicht. Deshalb wird er ein "zum Strome Gelangter" genannt. Nicht hat er Erscheinung (rūpa) erreicht, nicht hat er Töne, Gerüche, Geschmäcke, nicht Tastbares, nicht gedankliche Objekte erreicht. Deshalb wird er ein "zur Strömung Gelangter" genannt.

9-3

Wenn, Erhabener, ein zur Strömung Gelangter so dächte: "Durch mich ist die Frucht des Erreichens der Strömung erreicht", so wäre das bei ihm ein Erfassen des Selbstes, ein Erfassen von Lebendem, das Erfassen einer Person."

9-4

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, denkt ferner

ein Einmal-Wiederkehrender (sakṛd-āgāmin) also: "Durch mich ist die Frucht des Einmal-Wiederkehrenden erreicht"?"

9-5

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht denkt ein Einmal-Wiederkehrender also: "Durch mich ist die Frucht des Einmal-Wiederkehrenden erreicht." Aus welchem Grunde? Nicht nämlich existiert irgendwelcher Zustand (dharma), der zur Eigenschaft des Einmal-Wiederkehrenden gelangtwäre. Deshalb wird er "Einmal-Wiederkehrender" genannt."

9-6

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti? Denkt ferner ein Nicht-Wiederkehrender also: "Durch mich ist die Frucht des Nicht-Wiederkehrenden erreicht"?"

9-7

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht denkt ein Nicht-Wiederkehrender also: "Durch mich ist die Frucht des Nicht-Wiederkehrenden erreicht." Aus welchem Grunde? Nicht nämlich existiert, Erhabener, irgendwelcher Zustand (dharma), der zur Eigenschaft des Nicht-Wiederkehrenden gelangt wäre. Deshalb wir der "Nicht-Wiederkehrender" genannt."

9-8

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, denkt ein Würdiger (arhant) also: "Durch mich ist die Würdigkeit erreicht"?"

9-9

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht denkt ein Würdiger also: "Durch mich ist die Würdigkeit erreicht." Aus welchem Grunde? Nicht nämlich, Erhabener, existiert irgendwelches Ding (dharma), das "Würdiger" genannt würde. Deshalb wird er "Würdiger" genannt.

9-10

Wenn, o Erhabener, ein Würdiger also dächte: "Durch mich ist die Würdigkeit erreicht", so wäre bei ihm Erfassen eines Selbstes, Erfassen eines Lebewesens, Erfassen eines Lebenden, Erfassen einer Person.

9-11

Aus welchem Grunde? Ich bin, o Erhabener, durch den Sogegangenen (tathāgata), den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten als der Vorderste unter den in der Streitlosigkeit Wohnenden bezeichnet worden.

9-12

Ich bin, o Erhabener, ein Würdiger, der Leidenschaften Lediger. Und nicht denke ich, Erhabener, also: "Ich bin ein Würdiger, der Leidenschaften Lediger." Wenn ich, o Erhabener, so dächte: "Durch mich ist die Würdigkeit erreicht", so hätte mich nicht ein Sogegangener (tathāgata) ausersehen: "Unter den in Streitlosigkeit Wohnenden ist der Vorderste Subhūti, der edle Sohn; nicht wohnt er irgendwo, deshalb wird er "in der Streitlosigkeit wohnend, in der Streitlosigkeit wohnend" genannt."

莊嚴淨土分第十

10-1

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, existiert irgendwelcher dharma (Zustand), der durch den Tathāgata (Sogegangenen) von Dīpaṅkara, dem Sogegangenen (tathāgata), dem Würdigen, dem vollkommen Erleuchteten, angenommen worden ist?"

10-2

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht existiert irgend welcher dharma (Zustand), der durch den Tathāgata von Dīpaṅkara, dem Sogegangenen, dem Würdigen, dem vollkommen Erleuchteten angenommen worden ist."

10-3

Der Erhabene sprach: "Irgendein Bodhisattva, Subhūti, der so spräche: "Ich werde Weltsysteme von (Buddha-) Gefilden bewerkstelligen", der würde Unwahres sprechen. Aus welchem Grunde? Als "Massen von Gefilden, Massen von Gefilden" sind, o Subhūti, durch den Tathāgata Nicht-Gefilde verkündet worden. Deshalb werden sie "Massen von Gefilden" genannt.

10-4

"Deshalb denn, Subhūti, ist durch einen Bodhisattva

Mahāsattva ein nichtgestützter (d. h. unabhängiger) Gedanke zu erwecken, der ein nicht irgendworauf beruhendes Denken ist; nicht auf Erscheinung (rūpa) beruhendes Denken ist zu erzeugen, nicht auf Tönen, Gerüchen, Geschmäcken, Tastbarem, gedanklichen Zuständen (dharma) beruhendes Denken ist zu erzeugen.

10-5

Wie wenn zum Beispiel, o Subhūti, ein Mann wäre, mit außerordentlich großem Körper, dessen Umfang so groß wäre, wie der des Sumeru, des Bergfürsten: wie meinst du, Subhūti, wäre sein Umfang groß?"

10-6

Subhūti erwiderte: "Gar groß, Erhabener! Groß, Sugata! wäre jenes Selbstsein. Aus welchem Grunde? Als "Selbstsein, Selbstsein", Erhabener, ist jenes Nichtsein vom Vollendeten verkündet worden. Deshalb heißt es "Selbstsein"."

無為福勝分第十一

11-1

Der Erhabene sprach: " Wie meinst du, Subhūti? soviele Sandkörner in dem großen Gangesstrome sind, wenn soviele Gangesströme wären, so wären wohl der Sandkörner, die in diesen wären, viele?"

11-2

Subhūti erwiderte: "Jener Gangesströme, o Erhabener, wären es schon viele, um wieviel mehr der Sandkörner, die in jenen Gangesströmen wären."

11-3

Der Erhabene sprach: "Ich lasse dich gutheißen, ich lasse dich wissen, Subhūti, soviele Sandkörner in jenen Gangesströmen wären, soviele Weltelemente mit den vier Kostbarkeiten gefüllt, möchte jemand, ein Weib oder ein Mann, den Tathāgatas, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten, als Gabe spenden: wie meinst du, Subhūti, würde jenes Weib oder jener Mann einen Schatz, einen großen Verdienstesvorrat sich erzeugen?"

11-4

Subhūti erwiderte: "Erhabener, gar vielen, Sugata, einen großen Schatz, Verdienstesvorrat würde sich jenes Weib oder

jener Mann erzeugen, unermeßlichen, unzähligen."

11-5

Der Erhabene sprach: "Und wer ferner, ein Weib oder ein Mann, soviele Weltelemente mit den sieben Kostbarkeiten füllte und sie den Vollendeten, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, und wer, ein edler Sohn oder eine edle Tochter, hier aus dem Lehrbuch am Ende auch nur eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe und sie anderen darlegte und erklärte, der würde einen größeren Schatz, mehr Verdienstesvorrat sich erzeugen, unermeßlichen, unzähligen.

尊重正教分第十二

12-1

"Und ferner wahrlich, Subhūti, an welchem Ort der Erde jemand hier aus dem Lehrbuche am Ende auch nur eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe, sie verkündigte oder erklärte, dieser Ort der Erde würde ein Heiligtum sein für die Welt der Götter, Menschen und Asuras. Um wie viel mehr, wenn jemand dieses Lehrbuch vollständig bewältigt, es behalten, es wiederholen, völlig verstehen, es anderen ausführlich erklären wird. Mit höchst Wunderbarem, Subhūti, werden jene versehen sein.

12-2

Und an diesem Orte wohnt ein Lehrer oder der Reihe nach derjenige, welcher die Stelle des verständigen Meisters einnimmt."

如法受持分第十三

13-1
Nach diesen Worten sprach der ehrwürdige Subhūti zum Erhabenen also: "Welches ist denn, Erhabener, jenes Lehrbuch, und wie soll ich es erfassen?"

13-2
Nach solchen Worten erwiderte der Erhabene dem ehrwürdigen Subhūti dieses: "Die" Vollkommenheit der Erkenntnis" nämlich ist, o Subhūti, dieses Lehrbuch. Und so erfasse es!

13-3
Aus welchem Grunde? Die Vollkommenheit der Erkenntnis nämlich, die von dem Erhabenen verkündet worden ist, ist eben als Nicht-Vollkommenheit der Erkenntnis durch deng Erhabenen verkündigt worden. Deshalb heißt sie "Vollkommenheit der Erkenntnis".

13-4
Wie meinst du nun, Subhūti, existiert nun irgendwelches Din (dharma), das durch den Erhabenen verkündet wäre?"

13-5
Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht existiert irgend

welches Ding, das durch den Erhabenen verkündet wäre."

13-6
Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, was in dem dreitausendmalvieltausendfachen Weltelement Erdenstaub ist, das ist wohl viel?"

13-7
Subhūti erwiderte: "Viel, Erhabener! Viel, Sugata, wäre wohl jener Erdstaub. Aus welchem Grunde? Was, o Erhabener, von dem Erhabenen als Erdstaub verkündet wurde, das ist durch den Erhabenen als Nicht-Staub verkündet worden. Deshalb wird es "Erdstaub" genannt.

13-8
Und was da als "Weltelement" durch den Erhabenen verkündet ist, das ist durch den Erhabenen als "Nicht-Element" verkündet. Deshalb wird es "Weltelement" genannt."

13-9
Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, ist durch die zweiunddreißig Merkmale eines großen Mannes ein Sogegangener (tathāgata), Würdiger, vollkommen Erleuchteter zu erschauen?"

13-10
Subhūti sprach: "Nicht so, Erhabener! Nicht durch die zweiunddreißig Merkmale eines großen Mannes ist ein Sogegangener (tathāgata), Würdiger, vollkommen Erleuchteter

zu erschauen.

13-11
Aus welchem Grunde? Die zweiunddreißig Merkmale eines großen Mannes nämlich, die von dem Tathāgata verkündet worden sind, die sind, o Erhabener, als Nicht-Merkmale durch den Erhabenen verkündet. Deshalb werden sie die "zweiunddreißig Merkmale eines großen Mannes" genannt."

13-12
Der Erhabene sprach: "Und wer wahrlich, ein Weib oder ein Mann, Tag für Tag an Zahl den Sandkörnern des Ganges-stromes gleiche eigene Existenzen aufopferte und so aufopf-ernd während Äonen (kalpa), die den Sandkörnern des Gangesstromes gleich wären, seine eigene Existenz aufopf-erte, und wer andererseits hier aus dem Lehrbuch am Ende auch nur eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe und sie anderen darlegte, der würde einen reichlicheren Schatz, Verdienstesvorrat erzeugen, unermeßlichen, unzähligen."

離相寂滅分第十四

14-1

Da vergoß denn der ehrwürdige Subhūti, von der Macht der Lehre (dharma) (ergriffen), Tränen, und, nachdem er Tränen vergossen, sprach er zum Erhabenen also:

14-2

"Wunderbar ist, Erhabener, höchst wunderbar, Sugata, daß dieses Lehrbuch durch den Tathāgata verkündet wurde, zum Wohle der Lebewesen, die sich im vordersten Fahrzeug befinden, zum Wohle derer, die sich im besten Fahrzeug befinden, von wo mir, o Erhabener, Erkenntnis aufgegangen ist.

14-3

Nicht ist durch mich, o Erhabener, je zuvor ein derartiges Lehrbuch gehört worden. Mit höchst Wunderbarem begabt, o Erhabener, werden die Bodhisattvas sein, welche hier, wenn das Sūtra verkündigt wird, es hören und einen richigen Begriff bilden werden.

14-4

Aus welchem Grunde? Was hier, o Erhabener, richtiger Begriff ist, das eben ist nicht-richtiger Begriff. Deshalb verkündigt der Erhabene "richtiger Begriff, richtiger Begriff".

14-5

"Nicht ist mir, o Erhabener, wunderbar, daß ich dieses Lehrbuch, wie es verkündet wird, erwäge und mich dazu hingezogen fühle.

14-6

Jene Lebewesen aber, o Erhabener, die in zukünftiger Zeit sein werden, in dem letzten Zeitabschnitt, in den letzten fünfhundert Jahren, zur Zeit des Verfalles der Lehre, welche dieses Lehrbuch, o Erhabener, erfassen werden, es behalten, es verkünden, es völlig verstehen und anderen ausführlich erklären werden, die werden mit höchstem Wunder begabt sein.

14-7

Aber es wird wahrlich nicht, o Erhabener, in ihnen der Begriff des Selbstes wirksam sein, nicht der Begriff des Lebewesens, nicht der Begriff des Lebenden, nicht der Begriff der Person wirksam, auch wird bei ihnen nicht irgendwelcher Begriff oder Nicht-Begriff wirksam sein.

14-8

Aus welchem Grunde? Was da, Erhabener, Begriff des Selbstes ist, das eben ist Nicht-Begriff. Was Begriff des Lebewesens, Begriff des Lebenden, Begriff der Person ist, das eben ist Nicht-Begriff.

14-9

Aus welchem Grunde? Von allem Begriffe befreit nämlich

sind die Buddhas, die Erhabenen."

14-10

Nach diesen Worten sprach der Erhabene zu dem ehrwürdigen Subhūti also: "So ist es, Subhūti, so ist es! Mit höchstem Wunder begabt werden jene Lebewesen sein, welche, wenn hier, o Subhūti, das Sūtra verkündet wird, nicht erschrecken, sich nicht fürchten, sich nicht ängstigen werden. Aus welchem Grunde? Als höchste Vollkommenheit, Subhūti, ist nämlich durch den Tathāgata diese Nicht-Vollkommenheit verkündet worden. Und die höchste Vollkommenheit, die der Vollendete (tathāgata) verkündet, die verkünden auch unermeßliche Buddhas, Erhabene. Deshalb heißt sie "höchste Vollkommenheit".

14-11

"Und ferner, Subhūti, was des Tathāgata Vollkommenheit der Geduld ist, das ist eben Nicht-Vollkommenheit.

14-12

Aus welchem Grunde? Als, Subhūti, der Kalinga-Fürst Glied um Glied mir das Fleisch abschnitt, da ist bei mir nicht der Begriff des Selbstes, oder der Begriff des Lebewesens, oder der Begriff der Person, nicht ist bei mir überhaupt irgendwelcher Begriff oder Nicht-Begriff vorhanden gewesen.

14-13

Aus welchem Grunde? Wenn, o Subhūti, zu dieser Zeit der Begriff des Selbstes bei mir vorhanden gewesen wäre, so

wäre zu dieser Zeit auch der Begriff des Tötens gewesen. Wenn der Begriff des Lebewesens, der Begriff des Lebenden, der Begriff der Person vorhanden gewesen wäre, so wäre zu dieser Zeit auch der Begriff des Tötens vorhanden gewesen.

14-14

Aus welchem Grunde? Ich erinnere mich, Subhūti, in vergangener Zeit an fünfhundert Geburten, als ich der Ṛṣi (Weise) Kṣāntivādin war. Da auch hatte ich nicht den Begriff des Selbstes, nicht den Begriff des Lebewesens, nicht den Begriff des Lebenden, nicht den Begriff der Person. Deshalb denn, o Subhūti, soll ein Bodhisattva Mahāsattva allen Begriff fernhalten und zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung den Gedanken erwecken. Nicht auf Erscheinug (rūpa) begründeten Gedanken soll er hervorrufen, nicht auf Töne, Gerüche, Geschmäcke, Tastbares, gedankliche Objekte (dharma) begründete Gedanken soll er hervorrufen, nicht auf Objekte(dharma) begründete Gedanken soll er hervorrufen.

14-15

Aus welchem Grunde? Was begründet ist, das ist eben nicht-begründet. Deshalb denn verkündet der Tathāgata: "Ohne sich zu stützen soll der Bodhisattva Gabe spenden, nicht auf Erscheinung, Töne, Gerüche, Geschmäcke, Tastbares, gedankliche Objekte (dharma) sich stützend soll er Gabe spenden.

14-16

"Und ferner, Subhūti, hat durch einen Bodhisattva derartiges Aufopfern von Gaben zu geschehen, zum Heil aller Lebe-

wesen. Aus welchem Grunde? Was hier, Subhūti, Begriff von Lebewesen ist, das ist eben Nicht-Begriff. Die, welche eben von dem Tathāgata "alle Lebewesen" genannt werden, sind eben Nicht-Lebewesen.

14-17

Aus welchem Grunde? Das Wirkliche redet, o Subhūti, der Tathāgata; das Wahre redet, so redet, nicht anders redet der Tathāgata; nicht Falsches redet der Tathāgata.

14-18

"Und ferner, Subhūti, welcher Zustand (dharma) immer durch den Sogegangenen zur Erleuchtung gebracht, dargelegt, erwogen wurde, da ist nicht Wahres, nicht Falsches.

14-19

Wie nämlich zum Beispiel, Subhūti, ein mit Augen versehener Mensch bei hellwerdender Nacht, nach Aufgang der Sonne, vielgestaltige Dinge sehen würde, so ist ein in die Nicht-Dinglichkeit versunkener Bodhisattva zu betrachten, der, in die Nicht-Dinglichkeit versunken, Gabe spendet.

14-20

Wie nämlich zum Beispiel, Subhūti, ein Mann, der in Dunkelheit eingetreten ist, nicht irgendetwas sehen würde, so ist der in die Dinglichkeit (vastu) versunkene Bodhisattva zu betrachten, der, in die Dinglichkeit versunken, Gabe spendet. "Und ferner, Subhūti, wenn irgendwelche edlen Söhne oder edlen Töchter dieses Lehrbuch lernen, es behalten, es her-sagen, es völlig durchdringen

und es anderen ausführlich erklären werden, so sind diese, o Subhūti, von dem Tathā-gata durch Buddha-Erkenntnis gekannt, sind, o Subhūti, durch den Tathāgata durch Buddha-Auge geschaut. Alle diese Lebewesen, o Subhūti, werden unermeßlichen, unzähligen Verdienstesvorrat erzeugen und erwerben.

持經功德分第十五

15-1

"Und wenn ferner, o Subhūti, ein Weib oder ein Mann, zur Zeit des Vormittages den Sandkörnern des Gangesstromes (an Zahl) gleiche eigene Existenzen hingäbe, so auch zur Zeit des Mittags den Sandkörnern des Gangesstromes (an Zahl) gleiche eigene Existenzen hingäbe und auf diese Weise während vieler hunderttausend Millionen Koṭis von Kalpas (Weltaltern) eigene Existenzen dahingäbe, und wenn andererseits jemand dieses Lehrbuch, nachdem er es gehört, nicht verwürfe, so würde dieser (letztere) von den beiden reichlicheren Schatz und Verdienstesvorrat erzeugen, unermeßlichen, unzähligen."Was soll man erst sagen von dem, der, nachdem er es geschrieben, es lernt, es behält, es hersagt, völlig versteht und es ausführlich anderen erklärt?

15-2

"Und ferner, Subhūti, ist dieses Lehrbuch unbegreiflich, unvergleichbar. Auch ist dieses Lehrbuch, Subhūti, durch den Tathāgata verkündet zum Wohle der im vordersten Fahrzeug befindlichen Lebewesen, der im besten Fahrzeug befindlichen Lebewesen. Wer dieses Lehrbuch lernen, behalten, hersagen, völlig verstehen und anderen ausführlich erklären wird, der ist, o Subhūti, von dem Tathāgata durch Buddhaerkenntnis gekannt, der ist von dem Tathāgata durch Buddha-Auge

geschaut. Alle diese Lebewesen, Subhūti, werden mit unermeßlichem Verdienstesvorrat versehen sein, werden mit undenkbarem, unvergleichbarem, unermeßlichem und unmeßbarem Verdienstesvorrat versehen sein.

15-3

Alle diese Lebewesen, Subhūti, werden in gleicher Weise die Erleuchtung (bodhi) behalten, werden sie hersagen, werden sie völlig verstehen. Aus welchem Grunde? Weil es nicht möglich ist, Subhūti, daß dieses Lehrbuch durch Lebewesen von geringer Hingabe gehört wird, durch solche, die in der Ansicht eines Selbstes, in der Ansicht eines Lebewesens, in der Ansicht eines Lebenden, in der Ansicht einer Person befangen sind. Nicht ist es möglich, daß dieses Lehrbuch durch Lebewesen gehört wird, die nicht das Verständnis der Bodhisattvas haben, daß es von ihnen gelernt, behalten, hergesagt oder völlig verstanden wird: nicht ist diese Möglichkeit (eig. "Stätte") vorhanden.

15-4

"Und ferner, Subhūti, der Ort, an welchem dieses Lehrbuch verkündet werden wird, dieser Ort wird zu ehren sein von der ganzen Welt von Göttern, Menschen und Dämonen (asura), dieser Ort wird nach rechts zu umwandeln sein, wie ein Caitya wird dieser Ort sein.

能淨業障分第十六

16-1

"Und ferner, Subhūti, die edlen Söhne oder edlen Töchter, welche diese dergestaltigen Sutrāntas lernen, behalten, hersagen, völlig verstehen und von Grund aus beherzigen und sie anderen ausführlich erklären werden, die werden überwunden haben, wohl überwunden haben.

16-2

Aus welchem Grunde? Die unreinen Werke nämlich, die von diesen Lebewesen in früherer Geburt getan wurden, zum Niedergange führend, diese in früherer Geburt gewirkten unreinen Werke werden, nachdem das Gesetz (dharma) erschaut, durch das Überwundenhaben dahinschwinden und werden zur Buddhaerleuchtung gelangen.

16-3

"Ich erinnere mich, Subhūti, in vergangener Zeit, vor unzähligen kalpas (Weltaltern) waren vierundachtzig mal hunderttausend Milliarden von Buddhas, die dem Dīpaṅkara, dem Tathāgata, Würdigen, vollkommen Erleuchteten nachfolgten, denen ich Freude bereitete, und die, nachdem sie erfreut waren, nicht Unwillen über mich empfanden.

16-4

Und wenn, Subhūti, jene erhabenen Buddhas durch mich erfreut und, nachdem erfreut, nicht abgeneigt waren, und wenn in der letzten Zeit, im letzten Zeitabschnitt, in den letzten fünfhundert Jahren, zur Zeit des Verfalles der Lehre, andere diese derartigen Sutrāntas lernen, behalten, hersagen, völlig verstehen und anderen ausführlich mitteilen werden, so reicht gegenüber diesem Verdienstesvorrat, Subhūti, der frühere Verdienstesvorrat auch nicht an den hundertsten Teil heran, auch nicht an den tausendsten, den hunderttausendsten, an den millionsten, an den hundertmillionsten, an den hunderttausendmillionsten, an den hunderttausendmillionen mal zehnmillionsten Teil. Es erträgt keine Zahl, keinen Teil, keine Rechnung, keinen Vergleich, keine Gleich-setzung, keine Analogie.

16-5

"Und wenn ferner, Subhūti, ich den Verdienstesvorrat jener edlen Söhne oder edlen Töchter sagen wollte, wie sehr jene edlen Söhne oder edlen Töchter zu jener Zeit Verdienstesvorrat erzeugen werden, erwerben werden, so würden die Lebewesen außer Verstand geraten oder von Sinnen werden.

16-6

Und ferner, Subhūti, als unbegreiflich, unvergleichlichbar ist dieses Lehrbuch durch den Tathāgata verkündet worden, als unbegreiflich muß auch seine Wirkung erwartet werden."

究竟無我分第十七

17-1

Da sprach denn der ehrwürdige Subhūti zu dem Erhabenen also: "Wie soll ein auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas Befindlicher sich verhalten, wie soll er herankommen, wie soll er die Gedanken richten?"

17-2

Der Erhabene sprach: "Ein auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas Befindlicher soll diesen Gedanken erwecken: "Alle Lebewesen sind durch mich in dem restlosen Nirvāṇa-Elemente zur Erlöschung zu bringen":

17-3

und wenn er so die Lebewesen zum völligen Erlöschen gebracht hätte, ist nicht irgend welches Lebewesen zum völligen Erlöschen gebracht.

17-4

Aus welchem Grunde? Wenn, o Subhūti, bei einem Bodhisattva der Begriff "Lebewesen" wirksam ist, so ist er nicht als Bodhisattva zu bezeichnen. Oder wenn der Begriff der Lebenden und so fort bis zum Begriff der Person wirksam wäre, so wäre er nicht als Bodhisattva zu bezeichnen.

17-5

Aus welchem Grunde? Es ist nicht, o Subhūti, irgendwelches Ding (dharma), das als auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas befindlich bezeichnet werden könnte.

17-6

"Wie meinst du, Subhūti, existiert irgendwelcher dharma (Objekt),der durch den Tathāgata von dem Tathāgata Dīpaṅkara her zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung gebracht worden wäre?"

17-7

Nach diesen Worten sprach der ehrwürdige Subhūti zu dem Erhabenen also: "Wie ich den Sinn des von dem Erhabenen Gesprochenen verstehe, so existiert nicht, o Erhabener, irgendwelcher dharma, der durch den Tathāgata von dem Tathāgata Dīpaṅkara her zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung gebracht worden wäre."

17-8

Nach diesen Worten sprach der Erhabene zu dem ehrwürdigen Subhūti also: "So ist es, Subhūti, so ist es. Nicht existiert, Subhūti, irgend welcher dharma, der durch den Tathāgata von dem Tathāgata Dīpaṅkara her, dem Würdigen, vollkommen Er-leuchteten, zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung gebracht worden wäre.

17-9

Wenn ferner, Subhūti, irgendwelcher dharma durch den Tathā-

gata zur vollkommenen Erleuchtung gebracht worden wäre, so hätte mich nicht der Tathāgata Dīpaṅkara vorherbestimmt: "Du wirst, o Sohn des Manu, in künftiger Zeit der "Śākya-muni" genannte Tathāgata, Würdige, vollkommen Erleuchtete werden".

17-10

Weil daher, Subhūti, nicht irgendwelcher dharma existiert, welcher durch den Tathāgata, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung erweckt wäre, deshalb wurde ich durch den Tathāgata Dīpaṅkara vorherbestimmt: "Du wirst, Sohn des Manu, in künftiger Zeit der "Śākyamuni" genannte Tathāgata, Würdige, vollkommen Erleuchtete werden."

17-11

Aus welchem Grunde "Tathāgata", Subhūti? Die Bezeichnung der wahren Soheit ist "Tathāgata", Subhūti, dies ist die Bezeichnung des Nichtentstandenseins. "Tathāgata", Subhūti, dies ist die Bezeichnung der Vernichtung der dharmas (Objekte). "Tathāgata", Subhūti, dies ist die Bezeichnung des durchaus Unentstandenen. Aus welchem Grunde? Dieses Nicht-enstandensein, Subhūti, ist der höchste Sinn.

17-12

"Wer immer, Subhūti, sagen würde, daß durch den Tathāgata, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten, die unübertroffene vollkommene Erleuchtung erweckt worden wäre, der würde Unwahres reden, der würde, Subhūti, mit Unwahrem,

das er gelernt, über mich reden.

17-13
Aus welchem Grunde? Nicht existiert, o Subhūti, irgendwelcher dharma (Objekt), der durch den Tathāgata zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung erweckt worden wäre.

17-14
Und in dem dharma, Subhūti, der durch den Tathāgata erweckt oder gezeigt wurde, da ist nicht Wahres, nicht Falsches. Deshalb sagt der Tathāgata: "Alle dharmas sind Buddha-dharma".

17-15
Aus welchem Grunde? Alle dharmas, Subhūti, sind durch den Tathāgata als Nicht-dharmas verkündet. Deshalb heißen alle dharmas (Dinge) Buddha-dharmas.

17-16
"Wie wenn zum Beispiel, Subhūti, ein Mann wäre mit gar großem Körper."

17-17
Der ehrwürdige Subhūti sprach: "Wer, o Erhabener, von dem Tathāgata als Mann mit gar großem Körper bezeichnet worden ist, der ist, o Erhabener, als körperlos durch den Tathāgata bezeichnet worden. Deshaib heißt er "mit starkem Körper, mit großem Körper"."

17-18

Der Erhabene sprach: "So ist es, Subhūti! Ein Bodhisattva, der so spräche: "Ich werde die Lebewesen zum völligen Erlöschen bringen", der ist nicht als "Bodhisattva" zu bezeichnen. Aus welchem Grunde? Existiert, Subhūti, irgendwelcher dharma (Ding), der "Bodhisattva" hieße?"

17-19

Subhūti sprach: "Nicht so, Erhabener! Es existiert nicht irgendwelcher dharma (Ding), der "Bodhisattva" genannt würde."

17-20

Der Erhabene sprach: "Die "Lebewesen, Lebewesen", Subhūti, sind durch den Tathāgata als Nicht-Lebewesen verkündet worden, deshal werdenb sie "Lebewesen" genannt. Deshalb verkündet der Erhabene: "Ohne Selbst sind alle dharmas (Dinge), ohne Lebendes, ohne Menschliches, ohne Person sind alle dharmas."

17-21

Ein Bodhisattva, o Subhūti, der so spräche: "Ich werde Welten von (Buddha-) Gefilden schaffen", der spräche Unwahres. Aus welchem Grunde? "Als Welten von Gefilden, Welten von Gefilden", o Subhūti, sind durch den Erhabenen Nicht-Gefilde verkündet worden. Deshalb werden sie "Welten von Gefilden" genannt.

17-22

Ein Bodhisattva, o Subhūti, der sich dem Gedanken hingäbe: "Ohne Selbst sind die dharmas (Dinge), ohne Selbst sind die dharmas", der ist durch den Tathāgata, den Würdigen, den vollkommen Erleuchteten als Bodhisattva Mahāsattva bezeichnet worden."

一體同觀分第十八

18-1
Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, ist des Tathāgata fleischliches Auge vorhanden?"

18-2
Subhūti erwiderte: "So ist es, Erhabener! Des Tathāgata fleischliches Auge ist vorhanden."

18-3
Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, existiert des Tathāgata göttliches Auge?"

18-4
Subhūti erwiderte: "So ist es, Erhabener! Des Tathāgata göttliches Auge existiert!"

18-5
Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, existiert des Tathāgata Erkenntnis-Auge?"

18-6
Subhūti erwiderte: "So ist es, Erhabener! Des Tathāgata Erkenntnis-Auge existiert."

18-7

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, existiert des Tathāgata Dharma-Auge (Gesetzesauge)?"

18-8

Subhūti sprach: "So ist es, Erhabener! Des Tathāgata Dharma-Auge existiert."

18-9

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, existiert des Tathāgata Buddha-Auge?"

18-10

Subhūti erwiderte: "So ist es, Erhabener! Des Tathāgata Buddha-Auge existiert."

18-11

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, soviele Sandkörner in dem großen Gangesstrome sind, sind diese Sandkörner durch den Tathāgata verkündet?"

18-12

Subhūti erwiderte: "So ist es, Erhabener, so ist es, Sugata. Verkündet sind durch den Tathāgata die Sandkörner."

18-13

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, wenn ebensoviele Gangesströme wären, als in dem großen Gangesströme Sandkörner sind, und ebensoviele Weltelemente

wären, als in jenen Sandkörner, so wären wohl jener Weltelemente viele?“

18-14
Subhūti erwiderte: ”So ist es, Erhabener! So ist es, Sugata! Der Weltelemente wären viele.“

18-15
Der Erhabene sprach: ”Soviele Lebewesen in diesen Weltelementen sind, ich kenne deren verschiedenartigen Gedankenstrom.

18-16
Aus welchem Grunde? Als ”Gedankenstrom, Gedankenstrom“, o Subhūti, ist durch den Tathāgata ein Nichtstrom verkündet worden. Deshalb wird er ”Gedankenstrom“ genannt.

18-17
Aus welchem Grunde? Ein vergangener Gedanke, Subhūti, wird nicht wahrgenommen, ein zukünftiger Gedanke wird nicht wahrgenommen, ein gegenwärtiger Gedanke wird nicht wahrgenommen.

法界通化分第十九

19-1

"Wie meinst du, Subhūti, wenn irgendein edler Sohn oder eine edle Tochter dieses dreitausendmalvieltausendfache Weltelement mit den sieben Kostbarkeiten anfüllte, und es den Tathāgatas, Würdigen, vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, würde hieraus jener edle Sohn oder jene edle Tochter einen Schatz, einen großen Verdienstesvorrat erzeugen?"

19-2

Subhūti erwiderte: "Vielen, Erhabener! Vielen, Sugata!"

19-3

Der Erhabene sprach: "So ist es, Subhūti! So ist es! Jener edle Sohn oder jene edle Tochter würde sich einen großen Schatz, einen Verdienstesvorrat erzeugen, unermeßlichen, unzähligen.

19-4

Aus welchem Grunde? Als "Verdienstesvorrat, Verdienstesvorrat", Subhūti, ist ein Nicht-Vorrat von dem Tathāgata verkündet. Deshalb heißt es "Verdienstesvorrat".

19-5

Wenn, o Subhūti, ein Verdienstesvorrat existierte, dann würde der Tathāgata nicht sagen: "Verdienstesvorrat, Verdienstesvorrat"."

離色離相分第二十

20-1

"Wie meinst du, Subhūti, ist ein Tathāgata in der Vollendung des Erscheinungsleibes (rūpa-kāya) zu erschauen?"

20-2

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht in der Vollendung des Erscheinungsleibes ist der Tathāgata zu schauen.

20-3

Aus welchem Grunde? Als "Vollendung des Erscheinungsleibes, Vollendung des Erscheinungsleibes", o Erhabener, ist Nicht-Vollendung durch den Tathāgata verkündet. Deshalb wird sie "Vollendung des Erscheinungsleibes" genannt."

20-4

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, ist in der Vollkommenheit der Merkmale der Tathāgata zu erblicken?"

20-5

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener, nicht in der Vollkommenheit der Merkmale ist der Tathāgata zu schauen.

20-6

Aus welchem Grunde? Die Vollkommenheit der Merkmale, die von dem Erhabenen verkündet wurde, die ist als Nicht-Merkmalvollkommenheit vom Tathāgata verkündet. Deshalb wird gesagt: "Vollkommenheit der Merkmale"."

非說所說分第二十一

21-1

Der Erhabene sprach: "Wie meinst du, Subhūti, denkt ein Tathāgata also: "Durch mich ist das Gesetz (dharma) dargelegt"?"

21-2

Subhūti erwiderte: "Nicht denkt, o Erhabener, ein Tathāgata also: "Durch mich ist das Gesetz gelehrt"."

21-3

Der Erhabene sprach: "Wer so sagte, Subhūti: "Durch den Tathāgata ist das Gesetz gelehrt", der würde Unwahres sagen, der würde mit Unwahrem, das er gelernt, um mich herumreden.

21-4

Aus welchem Grunde? "Gesetzeslehre, Gesetzeslehre", Subhūti, nicht existiert irgendwelches Ding (dharma), das als Gesetzeslehre wahrgenommen würde."

21-5

Nach diesen Worten sprach der ehrwürdige Subhūti zu dem Erhabenen also: "Werden etwa, Erhabener, in künftiger Zeit, im letzten Zeitabschnitt, in den letzten fünfhundert Jahren,

zur Zeit des Verfalles der Lehre Lebewesen existieren, welche, nachdem sie diese derartigen Lehren (dharma) gehört, glauben werden?“

21-6

Der Erhabene sprach: ”Nicht sind sie, Subhūti, Lebewesen, nicht Nicht-Lebewesen.

21-7

Aus welchem Grunde? Als ”Lebewesen, Lebewesen“, Subhūti, sind durch den Tathāgata alle diese Nicht-Lebewesen verkündet worden. Deshalb heißen sie ”Lebewesen“.

無法可得分第二十二

22-1

"Wie meinst du, Subhūti, existiert irgendwelches Ding (dharma), das durch den Tathāgata zur unübertrefflichen vollkommenen Erleuchtung erweckt worden ist?"

22-2

Der ehrwürdige Subhūti sagte: "Nicht so, Erhabener! Nicht existiert, o Erhabener, irgendwelches Ding (dharma), das durch den Erhabenen zur unübertroffenen vollkommenen Erleuchtung erweckt worden ist."

22-3

Der Erhabene sprach: "So ist es, Subhūti! So ist es! Auch ein winzig kleines Ding (dharma) existiert nicht, wird nicht wahrgenommen. Deshalb wird gesagt: " Unübertroffene vollkommene Erleuchtung"."

淨心行善分第二十三

23-1

"Und ferner, Subhūti, gleich ist sich jenes Ding (dharma), nicht ist da irgendetwas verschieden. Deshalb wird gesagt: "Unübertroffene, vollkommene Erleuchtung".

23-2

Infolge des Nichtseins eines Selbstes, des Nichtseins eines Lebewesens, des Nichtseins eines Lebenden, des Nichtseins einer Person ist jene unübertroffene vollkommene Erleuchtung (sich) gleich (und wird) durch alle guten Dinge (dharma) erweckt.

23-3

Aus welchem Grunde? Als "gute Dinge (dharma), gute Dinge", Subhūti, sind alle Nicht-Dinge (adharma) durch den Tathāgata verkündet worden. Deshalb werden sie "gute Dinge" genannt."

福智無比分第二十四

24-1

"Und wenn ferner, Subhūti, ein Weib oder ein Mann ebensoviele Haufen der sieben Kostbarkeiten anhäufte, als in dem dreitausendmalvieltausendfachen Weltelement Sumerus, Bergesfürten, sind, und sie den Tathāgatas, Würdigen, vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, und wenn ein edler Sohn oder ein edle Tochter hier aus der Vollkommenheit der Erkenntnis, dem Lehrbuche, am Ende auch nur eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe und anderen lehrte, so würde an diesen Verdienstesvorrat jener frühere Verdienstesvorrat auch nicht zum hundertsten Teil heranreichen usw. bis "würde keine Gleichsetzung ertragen"."

化無所化分第二十五

25-1

"Wie meinst du, Subhūti, denkt ein Tathāgata also: "Durch mich sind Lebewesen erlöst worden"?

25-2

Nicht fürwahr, Subhūti, soll man so sehen. Aus welchem Grunde? Nicht existiert, Subhūti, irgendwelches Lebewesen, das durch den Tathāgata erlöst worden wäre.

25-3

Wenn ferner, Subhūti, irgendwelches durch den Tathāgata erlöste Lebewesen existierte, so wäre das eben bei dem Tathāgata Erfassen eines Selbstes, Erfassen eines Lebewesens, Erfassen eines Lebenden, Erfassen einer Person.

25-4

Als "Erfassen eines Selbstes", Subhūti, ist durch den Tathāgata Nicht-Erfassen bezeichnet worden. Und das wird von Kindern und gewöhnlichen Leuten gelernt.

25-5

Als "Kinder und gewöhnliche Leute", Subhūti, sind eben durch den Tathāgata Nicht-Leute bezeichnet. Deshalb werden sie "Kinder und gewöhnliche Leute" genannt."

法身非相分第二十六

26-1
"Wie meinst du, Subhūti, ist der Tathāgata durch die Vollkommenheit der Merkmale zu schauen?"

26-2
Subhūti sagte: "Nicht so Erhabener! Wie ich den Sinn des von dem Erhabene Gesagten verstehe, ist der Tathāgata nicht durch die Vollkommenheit der Merkmale zu schauen."

26-3
Der Erhabene sprach: "Gut, gut! Subhūti! So ist es, Subhūti, so ist es, wie du sagst. Nicht durch die Vollkommenheit der Merkmale ist der Tathāgata zu schauen.

26-4
Aus welchem Grunde? Wenn, o Subhūti, der Tathāgata durch die Vollkommenheit der Merkmale zu schauen wäre, so würde auch ein das Rad (der Weltherrschaft) drehender Fürst ein Tathāgata sein. Deshalb ist ein Tathāgata nicht durch die Vollkommenheit der Merkmale zu schauen."

26-5
Der ehrwürdige Subhūti sprach zum Erhabenen also: "Wie ich den Sinn des vom Erhabenen Gesagten verstehe, ist der

Tathāgata nicht durch die Vollkommenheit der Merkmale zu schauen."

26-6

Da sagte wahrlich der Erhabene zu dieser Zeit diese zwei Liedstrophen:

"Die mich durch die Erscheinung (rūpa) sahen,
die mich durch Geräusch hörten,
In falsches Bestreben sind sie geraten,
nicht werden mich jene Leute schauen.

Vom Gesetze (dharma) aus ist der Buddha zu sehen (erkennen),
denn die Meister (eig. "Leiter") haben den Gesetzesleib (dharmakāya),
Und das Wesen des Gesetzes (dharma) ist nicht zu verstehen,
und man kann es auch nicht verständlich machen."

無斷無滅分第二十七

27-1

"Wie meinst du, Subhūti, ist durch die Vollkommenheit der Merkmale von dem Erhabenen die unübertroffene vollkommene Erleuchtung erweckt worden?

27-2

Nicht wahrlich, Subhūti, ist so zu sehen. Aus welchem Grunde? Nicht nämlich, Subhūti, könnte durch Vollkommenheit de Merkmale von dem Tathāgata die unübertroffene vollkommene Erleuchtung erweckt worden sein.

27-3

Auch möchte nicht irgendwer, Subhūti, dir so sagen: "Durch die auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas Befindlichen ist irgendwelchen Dinges (dharma) Vernichtung oder Zerstörung mitgeteilt worden."

27-4

(缺)

不受不貪分第二十八

28-1

"Und ferner wahrlich, Subhūti, wenn ein edler Sohn oder eine edle Tochter den Sandkörnern des Gangesstromes (an Zahl) gleiche Weltelemente mit den sieben Kostbarkeiten anfüllte, und den Tathāgatas, Würdigen, vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, und wenn ein Bodhisattva in den selbstlosen und entstehungslosen Dingen (dharma) Geduld erwürbe, so würde dieser (letztere) einen größeren Schatz, einen Verdienstesvorrat erzeugen, unermeßlichen, unzähligen. Aber nicht wahrlich, Subhūti, soll ein Bodbisattva Mahāsattva Verdienstesvorrat an sich nehmen."

28-2

Der ehrwürdige Subhūti sprach: "Soll nicht, o Erhabener, ein Bodhisattva Verdienstesvorrat an sich nehmen?"

28-3

Der Erhabene sprach: "Er soll ihn an sich nehmen, Subhūti, er soll ihn nicht an sich nehmen. Deshalb wird gesagt: "Er soll ihn an sich nehmen".

威儀寂靜分第二十九

29-1

"Und wahrlich, Subhūti, wenn jemand sagte: "Der Tathāgata geht, oder er kommt, oder er steht, oder er sitzt, oder er liegt", so versteht er nicht, o Subhūti, den Sinn des von mir Gesagten.

29-2

Aus welchem Grunde? "Tathāgata", Subhūti, wird von einem gesagt, der nicht irgendwohin gegangen, der nicht von irgendwoher gekommen ist. Deshalb sagt man: "Tathāgata ("Soggegangener"), Würdiger, vollkommen Erleuchteter".

一合離相分第三十

30-1

"Und ferner, Subhūti, wenn ein edler Sohn oder eine edle Tochter, wieviele Erdstäubchen es in dem dreitausendmalvieltausendfachen Weltelement gibt, von ebensovielen Weltelementen Staub machte, wie es durch unermeßliche Stärke möglich wäre, zu dem, was "Anhäufung kleinster Atome" genannt wird, wie meinst du, Subhūti, wäre diese Anhäufung kleinster Atome groß?"

30-2

Subhūti sprach: "So ist es, Erhabener! So ist es, Sugata! Groß wäre jene Anhäufung kleinster Atome. Aus welchem Grunde? Wenn, o Erhabener, es eine große Anhäufung kleinster Atome gäbe, so würde der Erhabene nicht sagen: "Anhäufung kleinster Atome".

30-3

Aus welchem Grunde? Was, o Erhabener, von dem Tathāgata als "Anhäufung kleinster Atome" verkündet wurde, das ist als Nicht-Anhäufung durch den Tathāgata verkündet. Deshalb wird gesagt: "Anhäufung kleinster Atome".

30-4

Und was durch den Tathāgata als "dreitausendmalvieltausend-

faches Weltelement“ verkündet wurde, das ist als Nicht-Element durch den Tathāgata verkündet. Deshalb wird gesagt: ”dreitausendmalvieltausendfaches Welt-Element“.

30-5

Aus welchem Grunde? Wenn, o Erhabener, ein Weltelement bestände, so wäre das eben ein Erfassen von Stoff, und was eben als ”Erfassen von Stoff“ durch den Erhabenen verkündet wurde, das ist eben als Nicht-Erfassen durch den Tathāgata verkündet. Deshalb wird gesagt: ”Erfassen von Stoff“.“

30-6

Der Erhabene sprach: ”Und ein Erfassen von Stoff, o Subhūti, ist nicht gemeinhin möglich, ist nicht anzugeben. Es ist nicht Ding (dharma), nicht Nicht-Ding. Und es wird nur von Kindern und unerfahrenen Leuten so aufgefaßt.

知見不生分第三十一

31-1

"Aus welchem Grunde? Wer nämlich, Subhūti, so spräche: "Die Ansicht eines Selbstes ist durch den Tathāgata verkündet", würde der, o Subhūti, die Wahrheit sprechen?"

31-2

Subhūti erwiderte: "Nicht so, Erhabener! Nicht so, Sugata! Nicht würde er die Wahrheit sprechen. Aus welchem Grunde? Was, o Erhabener, als "Glaube an ein Selbst" von dem Erhabenen verkündet worden ist, das ist als Nicht-Glaube durch den Tathāgata verkündet. Deshalb wird gesagt: "Glaube an ein Selbst"."

31-3

Der Erhabene sprach: "So nämlich sind durch einen auf dem Fahrzeug der Bodhisattvas Stehenden, o Subhūti, alle Dinge (dharma) zu erkennen, zu sehen, zu glauben.

31-4

Und so sind sie zu erkennen, zu sehen, zu glauben, wie durch einen, der sich weder im Begriff eines Dinges (dharma), noch im Begriff eines Nicht-Dinges (adharma) befindet. Aus welchem Grunde? Als "Begriff des Dinges (dharma), Begriff des Dinges" ist durch den Tathāgata ein

Nicht-Begriff verkündet. Deshalb wird gesagt: "Begriff des Dinges (dharma)".

應化非眞分第三十二

32-1

"Und wenn ferner, o Subhūti, ein Bodhisattva Mahāsattva unermeßliche, unzählige Weltelemente mit den sieben Kostbarkeiten anfüllte und sie den Tathāgatas, Würdigen, vollkommen Erleuchteten als Gabe spendete, und wenn ein edler Sohn oder eine edle Tochter hier aus der Vollkommenheit der Erkenntnis, dem Lehrbuche, am Ende eine vierfüßige Liedstrophe herausgriffe, behielte, darlegte, hersagte, völlig verstände und anderen ausführlich erklärte, so würde dieser (letztere) reichlicheren Schatz,Verdienstesvorrat erzeugen, unermeßlichen, unzähligen.

32-2

Und wie sollte er erklären? Wie zum Beispiel am Himmel:

"Die Sterne, Finsternis, ein Licht,
ein Trug, Tau, eine Wasserblase,
Ein Traum, ein Blitzstrahl und eine Wolke —
so soll man das Gewirkte (saṃskṛta) betrachten."

"So sollte er erklären. Deshalb wird gesagt: "Er sollte erklären"."

32-3

Dies sprach der Erhabene erhobenen Sinnes. Der Sthavira

Subhūti und die Bettelmönche, die Nonnen, die Laienbrüder und Laienschwestern, die Bodhisattvas und die ganze Welt von Göttern, Menschen, Asuras und Gandharvas erfreute sich an dem, was der Erhabene gesprochen.

32-4
(缺)

國立中央圖書館出版品預行編目資料

金剛般若波羅蜜經／如實佛學研究室編著．--
一版．-- 臺北市：如實，民 84
冊；　公分．--（新譯梵文佛典）
ISBN　957-99454-0-3（一套：精裝）--
ISBN　957-99454-2-X（第四冊：精裝）

1. 般若部

221.44　84006782

新譯梵文佛典 4

金剛般若波羅蜜經（四）

出版者／如實出版社
編著者／如實佛學研究室
地址／台北市金門街 44 巷 6 弄 10-1 號 4 樓
電話／(02) 368-2022
郵撥／18308279・許洋主
定價／全五冊新台幣 6000 元
印刷／永美美術印刷製版有限公司
新聞局登記局版臺業字第六二九九號
中華民國八十四年八月一版

ISBN　957-99454-0-3（一套：精裝）--
ISBN　957-99454-2-X（第四冊：精裝）